

特別史跡

一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告VI

第29・30次 第57・58次 第83次調査

1997

福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館



第30次調査 中規模屋敷全景（東から）



第30次調査 越前焼大甕埋設遺構 SX1224（北から）



第57次調査 出土した茶器類



第83次調査 土蔵 SB4341 (南から)

正 誤 表

ページ・行(図表)	訂 正 内 容
3・7	『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告VI』を刊行（平成9年3月）」を追加
5・16	削除
6・30	「第29次」を「第29・30次」に訂正
18・表1	欄内の％をとる
P L. 16・240	下の円筒部分削除
P L. 27・最下段図	「◀SE3420（東から）」を追加
P L. 32・383	削除
63	別刷に差し替え

序

特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡の発掘調査はまもなく30周年をむかえます。昭和42年8月、湯殿跡・諏訪館跡・南陽寺跡の庭園群が発掘され、以後この遺跡全体を対象とする発掘調査、環境整備、保存処理、調査研究が続けられております。

この報告書は福井県が国庫補助事業として実施した一乗谷朝倉氏遺跡の発掘調査報告の6冊目です。対象とした地域は町並み立体復元地区の南側付近にあたります。これまで刊行した報告書Ⅱ・Ⅳ・Ⅴとあわせて、一乗谷川をはさんで朝倉館と相対するこの地区の全面的な発掘の成果がまとめられております。約17m四方の中規模の屋敷や、29個体を超す越前焼の大甕を埋めた遺構、ひとまとまりの庭園、石敷の蔵など注目すべき遺構が出土しました。遺物は大量の陶磁器、金属・石製品などを中心として多様でかつ特異なものが出土しており、当時の一乗谷の住人の生活の様子をよくうかがうことができます。特に井戸の中から出土した大量の銅銭や陶磁器は同時期の一括資料として貴重な事例を提供しています。

このような戦国大名の城下町の町並みがこれだけの大面積で発掘され、整備され、立体復元された遺跡は全国でも一乗谷朝倉氏遺跡だけです。調査研究の課題は多く残されておりますが、この報告書がその一助になれば幸いです。

最後になりましたが、事業の実施にあたり、懇切なるご指導とご高配をいただきました文化庁をはじめ関係各位の皆様、ならびに終始かわらぬご支援をいただきました城戸ノ内をはじめとする地元の皆様に対し、心から感謝申し上げます。

平成9年3月

福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館

館長 貴志 真人

目 次

口絵	
序	
目次	5
凶版目次	7
I 事業概要	
1. 調査の目的	1
2. 調査の経過	1
3. 調査の方法と調査組織	3
4. 経費	6
5. 報告書について	6
II 第29・30次調査	
1. 調査の経過と概要	9
2. 遺構	11
3. 遺物	18
4. 小結	28
III 第57・58次調査	
1. 調査の経過と概要	31
2. 第57次調査遺構	35
3. 第57次調査遺物	41
4. 第57次調査小結	48
5. 第58次調査遺構	51
6. 第58次調査遺物	55
7. 第58次調査小結	58

IV 第83次調査

1. 調査の経過と概要	61
2. 遺構	64
3. 遺物	69
4. 小結	73

V 考 察

平井地区の空間構造	75
-----------------	----

図 版 目 次

口 絵 (カラー)

口絵 1 第30次調査 中規模屋敷全景・越前焼大甕埋設遺構SX1224

口絵 2 第57次調査 出土した茶器類 第83次調査 土蔵SB4341

図 面

第29・30次調査

- | | | | |
|-------|--------------------|-------|--------------------|
| 第 1 図 | 第30次調査土層図 | 第 2 図 | 第29・30次調査遺構詳細図 (1) |
| 第 3 図 | 第29・30次調査遺構詳細図 (2) | 第 4 図 | 第29・30次調査遺構詳細図 (3) |
| 第 5 図 | 第29・30次調査遺構詳細図 (4) | 第 6 図 | 第29・30次調査遺構詳細図 (5) |
| 第 7 図 | 第29・30次調査遺構詳細図 (6) | 第 8 図 | 第29・30次調査出土遺物 (1) |
| 第 9 図 | 第29・30次調査出土遺物 (2) | 第10図 | 第29・30次調査出土遺物 (3) |
| 第11図 | 第29・30次調査出土遺物 (4) | 第12図 | 第29・30次調査出土遺物 (5) |
| 第13図 | 第29・30次調査出土遺物 (6) | 第14図 | 第29・30次調査出土遺物 (7) |
| 第15図 | 第29・30次調査出土遺物 (8) | | |

第57・58次調査

- | | | | |
|------|------------------|------|------------------|
| 第16図 | 第57次調査土層図 (1) | 第17図 | 第57次調査土層図 (2) |
| 第18図 | 第57次調査遺構詳細図 (1) | 第19図 | 第57次調査遺構詳細図 (2) |
| 第20図 | 第57次調査遺構詳細図 (3) | 第21図 | 第57次調査遺構詳細図 (4) |
| 第22図 | 第57次調査遺構詳細図 (5) | 第23図 | 第57次調査遺構詳細図 (6) |
| 第24図 | 第57次調査遺構詳細図 (7) | 第25図 | 第57次調査遺構詳細図 (8) |
| 第26図 | 第57次調査遺構詳細図 (9) | 第27図 | 第57次調査出土遺物 (1) |
| 第28図 | 第57次調査出土遺物 (2) | 第29図 | 第57次調査出土遺物 (3) |
| 第30図 | 第57次調査出土遺物 (4) | 第31図 | 第57次調査出土遺物 (5) |
| 第32図 | 第57次調査出土遺物 (6) | 第33図 | 第57次調査出土遺物 (7) |
| 第34図 | 第57次調査出土遺物 (8) | 第35図 | 第57次調査出土遺物 (9) |
| 第36図 | 第57次調査出土遺物 (10) | 第37図 | 第57次調査出土遺物 (11) |
| 第38図 | 第57次調査出土遺物 (12) | 第39図 | 第57次調査出土遺物 (13) |
| 第40図 | 第57次調査出土遺物 (14) | 第41図 | 第57次調査出土遺物 (15) |
| 第42図 | 第57次調査出土遺物 (16) | 第43図 | 第57次調査出土遺物 (17) |
| 第44図 | 第57次調査出土遺物 (18) | 第45図 | 第57次調査出土遺物 (19) |
| 第46図 | 第57次調査出土遺物 (20) | 第47図 | 第57次調査出土遺物 (21) |
| 第48図 | 第57次調査出土遺物 (22) | 第49図 | 第58次調査土層図 |
| 第50図 | 第58次調査遺構詳細図 (10) | 第51図 | 第58次調査遺構詳細図 (11) |

第52図 第58次調査遺構詳細図 (12)
第54図 第58次調査出土遺物 (1)
第56図 第58次調査出土遺物 (3)

第53図 第58次調査遺構詳細図 (13)
第55図 第58次調査出土遺物 (2)
第57図 第58次調査出土遺物 (4)

第83次調査

第58図 第83次調査遺構詳細図 (1)
第60図 第83次調査遺構詳細図 (3)
第62図 第83次調査遺構詳細図 (5)
第64図 第83次調査出土遺物 (2)
第66図 第83次調査出土遺物 (4)

第59図 第83次調査遺構詳細図 (2)
第61図 第83次調査遺構詳細図 (4)
第63図 第83次調査出土遺物 (1)
第65図 第83次調査出土遺物 (3)
第67図 第83次調査出土遺物 (5)

写真図版

第29・30次調査

PL. 1 調査区全景
PL. 3 区画A-2・A-1遺構
PL. 5 区画B遺構
PL. 7 区画D・E全景、区画E遺構
PL. 9 井戸・石積遺構
PL. 11 区画A-2出土遺物
PL. 13 区画C出土遺物 (1)
PL. 15 区画D出土遺物
PL. 17 区画E出土遺物 (2)

PL. 2 区画A-1・A-2遺構
PL. 4 区画B・C・D全景、区画B遺構
PL. 6 区画C・B上層全景、区画C全景・遺構
PL. 8 道路・溝・石積遺構等
PL. 10 区画A-1・A-2出土遺物
PL. 12 区画B・区画C出土遺物
PL. 14 区画C出土遺物 (2)
PL. 16 区画E出土遺物 (1)

第57・58次調査

PL. 18 第57次調査・調査区全景
PL. 20 第57次調査・調査区中景
PL. 22 第57次調査・主要遺構
PL. 24 第57次調査・南西隅建物群
PL. 26 第57次調査・石積施設
PL. 28 第57次調査出土遺物 (1)
PL. 30 第57次調査出土遺物 (3)
PL. 32 第57次調査出土遺物 (5)
PL. 34 第57次調査出土遺物 (7)
PL. 36 第57次調査出土遺物 (9)
PL. 38 第58次調査・調査区全景

PL. 19 第57次調査・調査区中景
PL. 21 第57次調査・調査区中景
PL. 23 第57次調査・主要遺構
PL. 25 第57次調査・各遺構
PL. 27 第57次調査・井戸
PL. 29 第57次調査出土遺物 (2)
PL. 31 第57次調査出土遺物 (4)
PL. 33 第57次調査出土遺物 (6)
PL. 35 第57次調査出土遺物 (8)
PL. 37 第57次調査出土遺物 (10)
PL. 39 第58次調査・調査区中景

- PL. 40 第58次調査・調査区中景
- PL. 42 第58次調査・主要遺構
- PL. 44 第58次調査出土遺物（1）
- PL. 46 第58次調査出土遺物（3）

- PL. 41 第58次調査・主要遺構
- PL. 43 第58次調査・石積施設及び井戸
- PL. 45 第58次調査出土遺物（2）
- PL. 47 第58次調査出土遺物（4）

第83次調査

- PL. 48 第83次調査・調査区全景
- PL. 50 第83次調査・主要遺構
- PL. 52 第83次調査・主要遺構
- PL. 54 第83次調査・出土遺物（1）
- PL. 56 第83次調査・出土遺物（3）
- PL. 58 第83次調査・出土遺物（5）

- PL. 49 第83次調査・中景
- PL. 51 第83次調査・主要遺構
- PL. 53 第83次調査・石積施設・井戸、その他
- PL. 55 第83次調査・出土遺物（2）
- PL. 57 第83次調査・出土遺物（4）

挿 図

- 挿図1 第29・30次調査区周辺地形図
- 挿図3 区画割図
- 挿図5 第29・30次調査出土銅銭
- 挿図7 第57・58次調査区周辺地形図
- 挿図9 SE3419出土遺物
- 挿図11 第83次調査区グリッド設定図
- 挿図13 平井・川合殿地区町割寸法図
- 挿図15 復元模型（部分）

- 挿図2 第29・30次調査区グリッド設定図
- 挿図4 大甕理設遺構SX1224出土
- 挿図6 灰釉四耳壺（240）
- 挿図8 第57・58次グリッド設定図
- 挿図10 第83次調査区周辺地形図
- 挿図12 礎石建物（蔵）SB4341平面図
- 挿図14 復元模型 全景

表

- 表1 第29・30次調査出土遺物一覧表
- 表3 SE3419出土銅銭一覧表
- 表5 第83次調査出土遺物一覧表

- 表2 第57次調査出土遺物一覧表
- 表4 第58次調査出土遺物一覧表

付 図

- 付図1 一乗谷朝倉氏遺跡地形図
- 付図3 第57・58次調査全測図

- 付図2 第29・30次調査全測図
- 付図4 第83次調査全測図

I 事業概要

I 事業概要

1. 調査の目的

一乗谷朝倉氏遺跡は、戦国大名越前朝倉氏の城下町として広く知られている。一乗谷には当主の居館である朝倉館を中心として山城、上下の城戸、家臣団の武家屋敷や寺院・町屋群などが、極めて良好に残っている。この遺跡を国民共有の文化遺産として保護するため、昭和46年、278haという広大な地域を特別史跡に指定し、その中心部にあたる平地部の24haが公有地化された。

遺跡保護の目的は、単に遺構を保存するだけにとどまらず、遺跡を調査研究し、その成果を広く公表して、人々の歴史認識に資することも非常に大切なことと考える。こうした認識に立って一乗谷朝倉氏遺跡を「遺跡をして自ら語らせる」史跡公園とする計画を立案、着手した。この事業は昭和47年3月に策定された「朝倉氏史跡公園基本構想」と、それに基づいて立案された「一乗谷朝倉氏遺跡整備基本計画」により、計画的かつ継続的に実施され、遺跡を究明する発掘調査とそれに基づく環境整備が両輪となって進められている。

2. 調査の経過

一乗谷が朝倉氏の居城跡であることは古くからよく知られており、近世の地誌類にもその記述がみられる。昭和5年7月には朝倉館と湯殿跡・諏訪館跡・南陽寺跡の3庭園1.4haが国の史跡と名勝に、西山光照寺跡が史跡に指定され、その保護が図られることとなった。戦後、管理団体である足羽町は朝倉館唐門の修理（昭和38年）、英林塚の覆屋建設（昭和40年）の事業を実施すると共に、昭和42年には史跡の保存と活用を計るために朝倉氏遺跡整備事業委員会を設け、環境整備事業3カ年計画を立案して、まず湯殿跡・諏訪館跡・南陽寺跡の3庭園の整備を実施した。その間、昭和42年12月には山城跡、上下の城戸跡が史跡に追加指定され、指定面積は合計6.8haとなった。翌43年には、朝倉館の発掘調査が実施され、その結果極めて良好に遺構が残っていることが判明し、遺跡の重要性が改めて確認された。

一方昭和44年には一乗谷地区の農業構造改善事業が始まり、上城戸以南の場所から工事が着手された。その結果、多量の遺物や遺構が露出し、遺跡は破壊の危機に直面した。この重大性に気づいた文化財関係者は、この事業の中止を求め地元ならびに関係機関と協議した結果、城戸の内と山城を含む周囲の山林の278haを国の特別史跡に格上げ指定し、城戸ノ内の住宅地を除く農地の大半を一括全面買収して遺跡を保護することとなった。以前から公有地化された分も合わせて公有地面積は約25haとなった。

広大な遺跡であることから足羽町が実施してきた発掘調査と環境整備を福井県が分担し、福井市（足羽町は昭和46年福井市に合併され、福井市が管理団体となった）はその保護と管理を分担して共同で保存と活用を計ることとなった。そこで県はこの事業の実施機関として昭和47年4月教育庁に朝倉氏遺跡調査研究所を設置、先の計画に基づき、朝倉氏遺跡研究協議会の指導のもとに事業を進めることとなった。

○第1次5カ年計画（昭和42～46年 発掘調査面積 6,780㎡）

概要 当初は足羽町が3カ年計画として開始したが、特別史跡に昇格指定されたこととともない、4、3カ年次から福井県が引き継ぎ実施した。南陽寺跡庭園・湯殿跡庭園・諏訪館跡庭園・朝倉館の発掘調査とその環境整備を主な内容とする。一乗谷の1/1,000の基本図も作成した。

○第2次5カ年計画（昭和47～51年 発掘調査面積 18,989㎡）

概要 朝倉館とその濠のほか武家屋敷、寺院、町屋跡など性格の異なる屋敷跡の発掘調査を通じて一乗谷の概要をつかむことに主眼をおいた。環境整備はその地区の平面復元を行った。

『一乗谷石造遺物調査報告書Ⅰ』を刊行（昭和50年3月）

「特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘整備事業10周年記念展」を開催（於岡島美術記念館 昭和51年10月）

○第3次5カ年計画（昭和52～56年 発掘調査面積 29,310㎡）

概要 第2次5カ年計画で明らかとなった平井地区の武家屋敷群や道路、赤淵・奥間野地区の町屋群や寺院群を広く面的に調査し、一乗谷の都市計画を解明することに主眼をおいた。環境整備はその面的な整備を行った。また、昭和56年には懸案となっていた出土遺物の展示等を目的とする福井県立朝倉氏遺跡資料館が開館した。

『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡環境整備事業報告書Ⅰ』を刊行（昭和53年3月）

開館記念展示図録『一乗谷』を刊行（昭和56年8月）

○第4次5カ年計画（昭和57～61年 発掘調査面積 16,513㎡）

概要 赤淵・奥間野地区の調査を面的に拡大して中小の武家屋敷や多数の町屋群を発掘して戦国城下町の基本的な性格をつかむことを目的とした。これらの地区を面的に平面復元するとともに、平井地区の武家屋敷を立体復元整備した。

『県道鯖江・美山線改良工事に伴う発掘調査報告書』を刊行（昭和58年3月）

『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告Ⅰ』を刊行（昭和59年3月）

開館5周年記念特別展「一乗谷と中世都市 まちなみとくらしの復元」開催（昭和61年8月）

同図録『一乗谷と中世都市』を刊行

同シンポジウム「一乗谷と中世都市 都市の構造と生活の復元」開催（昭和61年8月）

○第5次5カ年計画（昭和62年～平成3年 発掘調査面積 21,553㎡）

概要 上下の城戸など谷内の要所の調査と庭園跡の再調査を行う。また、平井地区の町並み立体復原事業に先だって未調査の山裾側の武家屋敷群を調査する。これらの調査を通して史跡公園としての整備を充実させる。

『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告Ⅱ』を刊行（昭和63年3月）

『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告Ⅲ』を刊行（平成2年3月）

『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡環境整備事業報告Ⅱ』を刊行（平成4年3月）

第1回企画展「朝倉文化と茶の湯」開催（昭和62年8月）

第2回企画展「石の鬼——一乗谷の笏谷石」開催（昭和63年8月）同図録刊行

第3回企画展「一乗谷のくらしと木」開催（平成元年8月）同図録刊行

第4回企画展「一乗谷と越前焼」開催（平成2年8月）同図録刊行

開館10周年記念特別展「朝倉の遺宝」開催（平成3年8月）同図録刊行

○第6次5カ年計画（平成4～8年 発掘調査面積12,800㎡）

内容 西山光照寺や御所・安養寺跡など城戸の外、山裾部の調査を行い、城戸の外を含めた一乗谷全体の理解を目的とする。

『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告Ⅳ』を刊行（平成5年3月）

『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告Ⅴ』を刊行（平成7年3月）

第5回企画展「戦国大名越前朝倉氏の誕生」開催（平成4年8月）同図録刊行

第6回企画展「一乗谷と職人」開催（平成5年8月）同図録刊行

第7回企画展「海を越えて来たやきもの」（平成6年8月）同図録刊行

第8回企画展「朝倉氏と織田信長」（平成7年8月）同図録刊行

第9回企画展「日本海交易と一乗谷」（平成8年8月）同図録刊行

3. 調査の方法と調査組織

調査は、国の補助事業として福井県が直接実施している。その実施機関として、福井県教育庁朝倉氏遺跡調査研究所（昭和47年4月1日～昭和56年8月19日）とこれを改組した福井県立朝倉氏遺跡資料館が設置され、発掘調査および環境整備を行っている。また、その指導のため朝倉氏遺跡調査研究協議会が設置されている。なお平成4年4月館名を福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館と一部改称した。

本報告書に関係する年度の組織を以下に記す。

○昭和53年度（第29・30次調査）

朝倉氏遺跡調査研究協議会

委員	青園謙三郎	（福井テレビ社長）
〃	石田 昇	（城戸ノ内町町内会長）
〃	大久保道舟	（県文化財専門委員会委員長）
〃	黒板 昌夫	（国士館大学教授）
〃	田治 六郎	（大阪公園協会理事長）
〃	戸塚 文子	（作家）
〃	松下 圭一	（法政大学教授）
〃	水上 勉	（作家）
専門委員	伊藤 滋	（東京大学助教授）
〃	岸谷 孝一	（東京大学教授）
〃	木原 啓吉	（朝日新聞編集委員）
〃	近藤 公夫	（奈良女子大学教授）
〃	重松 明久	（福井大学教授）
〃	田畑 貞寿	（千葉大学助教授）
〃	坪井 清足	（奈良国立文化財研究所所長）

朝倉氏遺跡調査研究所

所 長	藤原 武二	(造園)
	水藤 真	(文献)
	水野 和雄	(考古)
	小野 正敏	(考古)
	岩田 隆	(考古)
	吉岡 泰英	(建築)
	南 洋一郎	(考古)
事務補助員	吉越 強	

○昭和62年度（第57・58次調査）

朝倉氏遺跡調査研究協議会

会 長	青園謙三郎	(福井テレビ社長)
副 会 長	近藤 公夫	(奈良女子大学教授)
	石井 進	(東京大学教授)
	木原 啓吉	(千葉大学教授)
	小林健太郎	(滋賀大学教授)
	重松 明久	(扇城学園中津女子短期大学学長)
	田畑 貞寿	(千葉大学教授)
	玉置 伸倍	(福井大学教授)
	坪井 清足	(大阪文化財センター理事長)
	平井 聖	(昭和女子大学教授)
	木村竹次郎	(朝倉氏遺跡保存協会会長)
	上坂 義雄	(城戸ノ内自治会会長)

朝倉氏遺跡資料館

館 長	藤原 武二	(造園)
次 長	木澤 山榮	(事務)
主 査	水野 和雄	(考古)
〃	岩田 隆	(考古)
〃	吉岡 泰英	(建築)
〃	南 洋一郎	(考古)
〃	佐藤 圭	(文献)
文化財調査員	月輪 泰	(考古)
嘱 託	山田 武男	(学芸)

○平成5年度（第83次調査）

朝倉氏遺跡調査研究協議会

副 会 長	近藤 公夫	(神戸芸術工科大学教授)
	石井 進	(国立歴史民俗博物館館長)

木原 啓吉 (千葉大学教授)
 小林健太郎 (滋賀大学教授)
 田畑 貞寿 (千葉大学教授)
 玉置 伸悟 (福井大学教授)
 坪井 清足 (大阪文化財センター理事長)
 平井 聖 (昭和女子大学教授)
 松浦 義則 (福井大学教授)
 吉田 伸之 (東京大学助教授)
 石井 昇 (朝倉氏遺跡保存協会会長)
 木村 行雄 (城戸ノ内自治会会長)

一乗谷朝倉氏遺跡資料館

館 長 貴志 真人
 次 長 大塚セツ子 (事務)
 主任文化財調査員 岩田 隆 (考古)
 “ 吉岡 泰英 (建築)
 主 査 南 洋一郎 (考古)
 “ 佐藤 圭 (文献)
 “ 月輪 泰 (考古)
 文化財調査員 水村 伸行 (考古)
 嘱 託 舟澤 茂樹 (学芸)
 高野 正春 (事務)

○平成8年度(本報告作成年度)

朝倉氏遺跡調査研究協議会

会 長 近藤 公夫 (神戸芸術工科大学教授)
 副 会 長 平井 聖 (昭和女子大学教授)
 委 員 河原 純之 (千葉大学教授)
 木原 啓吉 (千葉大学教授)
 小林健太郎 (滋賀大学教授)
 田畑 貞寿 (千葉大学教授)
 玉置 伸悟 (福井大学教授)
 坪井 清足 (大阪文化財センター理事長)
 松浦 義則 (福井大学教授)
 吉田 伸之 (東京大学教授)
 石田 昇 (朝倉氏遺跡保存協会会長)
 奥田 道雄 (城戸ノ内自治会会長)

一乗谷朝倉氏遺跡資料館

館 長 貴志 真人
 次 長 山田 利秀 (事務)

主任文化調査員	岩田 隆	(考古)
”	吉岡 泰英	(建築)
”	佐藤 圭	(文献)
文化財調査員	水村 伸行	(考古)
学芸員	宮永 一美	(歴史)
嘱託	舟澤 茂樹	(学芸)
”	竹澤 輝治	(事務)

また、発掘調査・遺物整理は多くの作業員の協力により進めることができた。以下にその名を記す。

(発掘作業) 伊与道太、加藤義雄、木村正志、斎藤喜代松、島 計作、岸上 勉、谷口惣次郎、谷口仁作、土田徳栄、西川末松、西田 忠、林 滋、平井茂左衛門、平鍋与津治、神岡遊蔵、福岡義信、藤田武志、藤田 忠、細田弥三郎、山口 堅、山根木茂麿、吉川 斉、吉川宗男、石田カズゐ、石田艶枝、石田はまを、石田ミヨ子、今吉ハギ、伊与フジ子、上坂和子、梅田みさを、奥田恵美子、奥田末子、奥田まつえ、奥田ユリ、岸田あや子、小林澄子、小林末子、小林ヒサヲ、田中和子、田中トシヲ、戸田起世子、福岡敏子、三崎チエ子、山口さだを、山下すみ子、山下喜美子、吉川サダ子

(遺物整理) 朝倉八重子、上田優子、梅田由里、上都由利子、川中三恵子、佐飛康子、高木愛子、辻岡幸子、長谷川佐弥子、平井悦子、藤田恵美子、安田春代

4. 経 費

本報告書に係る発掘調査費および印刷製本費は以下の通りである。

○昭和53年度（第29・30次調査）

発掘調査経費 20,000千円 {発掘調査面積4,500㎡}

○昭和62年度（第57・58次調査）

発掘調査経費 32,020千円 {発掘調査面積3,700㎡}

○平成5年度（第82・83次調査）

発掘調査経費 33,083千円 {内83次発掘調査面積1,070㎡}

○平成8年度（報告書作成年度）

印刷製本費 2,000千円

5. 本報告書について

内 容 本報告書は、国庫補助事業として福井県が昭和53年度および昭和62年度並びに平成5年度に実施した第29次調査、第57・58次調査、第83次調査の報告である。各年度ごとに概要を報告しているが、内容については本報告書が優先する。また第29次調査地区については、SS977以南の町屋群に限った。

本書の構成は5章からなり、Ⅰは全体の事業概要、Ⅱは第29・30次調査、Ⅲは第57・58次調査、Ⅳは

第83次調査について記す。Vは平井地区の調査の考察を記した。

執筆 本報告書は、各調査次の諸記録を基に、館長貴志真人の指導の下に以下の分担により執筆し、編集は佐藤圭があたった。

I 佐藤圭、II 岩田隆、III - 1・2・4・5・7 吉岡泰英、III - 3・6 水村伸行、IV - 1・2・4 吉岡泰英、IV - 3 宮永一美、V 吉岡泰英

図面 遺構平面図はアジア航測㈱に委託した航空写真測量により作成したものである。遺物実測図については、担当者とともに遺物整理作業員もこれを助けた。また、挿図として使用した地形図は、昭和44年に足羽町がパシフィック航業㈱に委託して作成した基本図（1/1000）およびその集成図である。

その他 本報告書の遺構図に用いた座標は「第IV系」である。

また、遺構番号の頭に付した記号は以下の分類による。

SA：土塁・塀・柵、SB：建物、SD：溝、SE：井戸、SF：石積施設、SG：庭園 SI：門、
SK：土壙、SS：道路・通路、SV：石垣、SZ：暗渠、SX：その他

Ⅱ 第 29・30 次 調 査

Ⅱ 第29・30次調査

1. 調査の経過と概要

今回報告する第29・30次調査地区は、福井市城戸ノ内町字川合殿地係に位置する。この地区は朝倉館の南西、一乗谷川の西岸にあって、有力武将の屋敷が並んでいたと伝えられるところである。有力武将の屋敷名はその一部が「斉藤」「平井」「川合殿」のように小字名として残り、畦畔にもその屋敷跡の規模が見て取れる。

これまでこの地区の調査については、昭和48・49年に第10・11次調査で「新馬場」と伝承されてきた武家屋敷の調査を実施した結果、屋敷前に幅4.5mの砂利敷の道路が見つかった。そのことから畦畔の調査を進めた結果、この道路を中心として計画的に屋敷割りとなされていることが想定された。そこで他の地区の調査と並行しながら「平井」「川合殿」地区の町割りを解明する調査を実施することにした。昭和50年に第15次調査、昭和52年に24・25次調査を行ってきた。その結果、中央の幅4.5m前後の道路を挟んで山側と川側に武家屋敷群が並んでいることがわかった。山側の屋敷跡は間口30mを基準にし奥行きは山裾まで50～60mあり、川側の屋敷跡は30m×60mもしくはその半分の30m四方を基準としていることがわかった。これらの屋敷群を大きく区画する東西方向の道路の間隔は60mもしくは90mあって、30mの整数倍になっている。さらに、第29次地区では、武家屋敷から小区画の町屋に変わっていること



挿図1 第29・30次調査区周辺地形図(1/2000)

がわかり、城下町の変遷も明らかにすることができた。

このように有力武將の屋敷跡が並び都市計画がはっきりした地区ではあるが、朝倉氏滅亡後一乗谷が田畑に変わるとき、山側の高い部分が削られて低地である川側に盛られたため、意外に山側の有力武將の屋敷内の構成が判然としない。さらに今回報告する地区から南については一乗谷川がやや西によって流れているため、中央の道路がなくなって屋敷割りの基準も少し変則的になる。

今回報告する第30次調査は、「平井」「川合殿」地区の町割りの実体を解明するとともに、城下町の変遷もその視点にいて調査を進めることとした。なお今回の報告書には、道路S S977より南の第29次調査分と県道鯖江・美山線改良工事に伴う事前調査も含まれる。調査面積は、第29次調査分が640㎡、第30次調査地区が1,100㎡で併せて約1,740㎡である。

調査は第29次調査が終了したのに引き続いて、昭和53年8月24日から耕土除去作業を始め、9月1日から本格的な発掘作業に入った。9月29日に上面の遺構撮影を行い、下層の遺構の調査に入った。10月4日には下層建物の調査を終え、翌5日に第29次調査と併せて航空写真撮影を行った。その後確認調査と土層図、遺構写真撮影を行って15日に終了した。遺物取り上げのためのグリッドの基準ならびに方向は、第29次調査と同じとした。すなわち第10・11次調査と同じである。そのため、遺構の方向とは10°ほどずれる。

第29・30次調査日誌抄

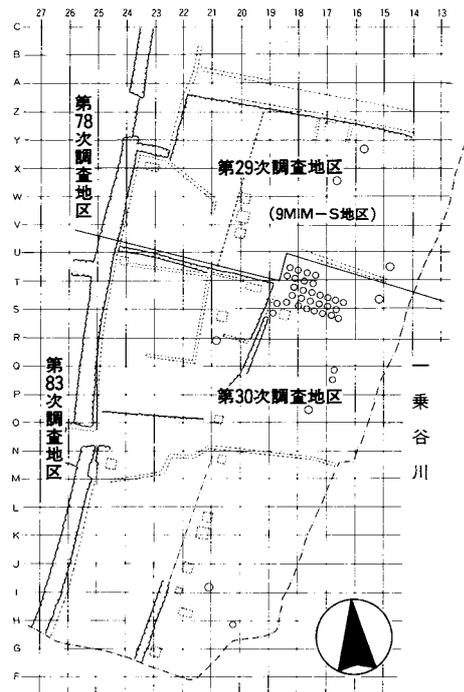
第29次調査（昭和53年5月11日～8月23日）

- 7月28日 井戸S E1047、溝S D992等を検出。
- 8月1日 井戸S E1046、石列S X1152等を検出。
 - 3日 石積遺構S F1078等を発掘。
 - 6日 石積遺構S F1077等を発掘。
 - 7日 道路S S976がS A983で行き止まりであることを確認。
 - 8日 井戸S E1047を発掘。錠前、釘等が出土。
 - 10日 川寄りで井戸S E1048を検出。
 - 13日 S D991を検出。この付近は焼土で覆われていた。
 - 17日 大甕埋設遺構S X1224を検出。
 - 19日 下層の確認調査。S E1045を検出。
 - 20日 礎石建物S B1029等を検出。

第30次調査（昭和53年8月24日～10月15日）

- 8月24日 発掘開始。耕土を除去。
 - 31日 耕土除去終了。
- 9月1日 遺物取り上げのためのグリッド設定。
 - 2日 床土除去。一部土塁が現われる。
 - 4日 井戸S E1197と石積S F1201を検出
 - 6日 床土除去終了。本格的に遺構検出にかかる。
 - 7日 29次調査地区に隣接するところで石積S F1202を検出。
 - 8日 調査地区西南の最上段は遺構が残っていないことが確認できたので掘り下げる。この部分の整地はガラ石。
 - 11日 中央の道路S S1180の側溝S D1186、石積S F1205を検出。
 - 18日 最上段に沿って下段から石積施設S F1206～1211が並ぶ。
 - 19日 29次調査で一部検出していた大甕埋設遺構の続きを調査。
 - 20日 西側の土塁付近を調査。側溝S D1185を検出。
 - 22日 一乗谷川に沿った部分を調査。一乗谷川の流れて遺構なし。
 - 29日 上層遺構面の写真撮影
- 10月2日 上層遺構面の掘り下げ。
 - 4日 建物遺構S B1192とそれを取り巻く雨落ち溝を検出。

- 5日 29・30次調査地区の航空写真撮影。
- 7日 下層確認調査。
- 9日 土層図作成。
- 11日 甕取り上げ。
- 13日 土層観察用の畦を除去。
- 14日 写真撮影。
- 15日 確認調査。後かたづけ終了。



挿図2 第29・30次調査区グリッド設定図

2. 遺 構 (第1~7図, PL.1~9)

発掘された主な遺構は、土塀基礎5、礎石建物2、溝5、石積施設15、井戸4、大甕埋設遺構2などである。この地区は道路SS1180によって南北に2分され、さらに溝・土塀などから挿図3のように区分できる。すなわち土塀SA1193と溝SD1008以北(区画A)、道路SS1180以北で土塀SA1193に囲まれた部分(区画B)、大甕埋設遺構の部分(区画C)、道路SS1180以南は土塀SA1183によって西(区画D)東(区画E)に区分できる。区画AはさらにSX1160で東西に区分でき、それぞれA-1、A-2と枝番で示した。

遺構の時期については、道路SS1180以北の遺構群は、同時に存在していた可能性も含めて、大きくは2時期に分かれる。新しい時期の遺構群は区画Bにある井戸SE1197と石積み施設SF1199、SF1201等で、これらの遺構があった遺構面をⅡ期とする。この遺構面の下にSB1192を中心とする遺構群があり、大甕埋設遺構が存在していた遺構面とほぼ同じレベルにある。区画CについてもⅡ期の遺構面がわずかに残っているが、大甕埋設遺構の上にⅡ期の遺構面が存在していない。道路SS1180以南についても、区画Dでは一段高いⅡ期の遺構面の存在を想定できるが、遺構はまったくなく、遺構面は下層の一面しか確認していないので、Ⅰ期につくられⅡ期まで存続した土塀SA1183や溝SD1185等以外はⅠ期の遺構群である。

記述については、町割りに関する道路・溝を記述した後、各区画ごとにⅠ期の遺構、Ⅱ期の遺構と記述する。またメートル法と尺との換算については1尺=30.3cmとした。

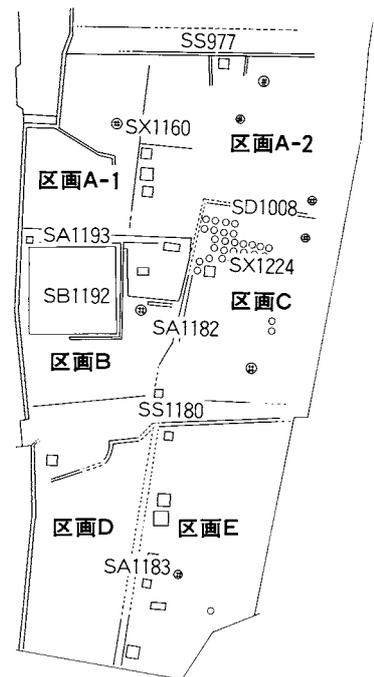
〔町割りに関する遺構〕

SS977 幅が2.5m程の東西方向の砂利敷道路で、両側にSD1004とSD993の側溝がつく。道路の北側は削平されて砂利敷や側溝が失われているところがある。道路の中央付近で溝SD1007が斜めに横切る。この道路の南側は0.3m程高くなっている。この道路はおそらく第15次調査・第25次調査で発掘した一乗谷川に沿って走る道路SS945に取り付くのであろう。また道路SS975からの距離は60mある(『報告書V』参照)。

SD993 道路SS977の南側の側溝で、南側のA区の排水溝を兼ねる。ただし西半分が明確ではなく、西半分はもともと存在しなかった可能性がある。

SD991 調査地区西端の土塀基礎SA981の東を北に流れる溝で、SA983で東に曲がってさらに北に曲がってSD986につながる。幅0.3mと狭い。区画A-1付近では東側の側石が後世に一部失われている。またこの付近では溝の中には焼土が詰まっていた。区画B付近(SD1184)はⅡ期の整地が行われたため0.4mと深くなっている。

SS1180 第30次調査地区のほぼ中央に位置する東西方向の道路で



挿図3 区画割図

ある。道路幅は、西半分については北の境は石列S X1244がある。南側は境がはっきりしないけれども約4mと推定される。中程から東は側溝や石列があってはっきりしており、約2mと狭くなる。長さについては26m分確認された。東寄りでは南側にS D1186がつく。また東端近くには暗渠S Z1222が横切る。暗渠の幅は0.4m程あり、南端の蓋石は笏谷石が使用されている。この道路は西側の山裾の武家屋敷(第83次調査分)の取り付け道路ともなっている。

区画A-1

S A1193・S D1008以北のA地区の内、石列S X1160より西の区画である。I期からII期まで存続していたと推定される。

S X1160 A-1区とA-2区を区画する石列で、石の面はA-1側にある。0.15m程の石が一行に並ぶ。この石列に接するように礎石状の石が9mにわたって4石並ぶ(S X1161)が、間隔は不揃いである。

S A983 道路S S976の南端に位置し、長さ3.5m、幅0.9mの土塀基礎と推定される。0.3～0.4m程の石を並べ高さが足りないところは小振りの石を下に据えて高さをそろえている。道路面より0.4mほど高くなっている。この土塀は西隣屋敷の土塀に直接つながっていたと考えられるが、このA-1区画側にあたる東側の土塀の存在は明確ではない。この土塀基礎S A983の南側には溝S D990が流れている。

S V1088 S S977の南A地区全体を高くするための石垣である。西端では0.4m、東端では0.5m程高くなっている。A-1の部分については0.4m前後の石を1石だけで高くし、上面がそろっている。溝S D986がA地区にかかる部分についても同様で、元々あった溝石の上に石を置いて、A地区を嵩上げたようである。S V1088と石列S X1165の間が1.2mあり、この間が土塀になっていたとも推定される。なお東側半分は小振りの石を積み上げて石垣としている。

S D992 A-1区の中央付近からS A983の内側でS D990につながる溝である。幅は0.2m深さは0.3m長さは7.5m程あり、側石が2段になっていて割合深い溝となっている。先端付近で南に屈曲している。

S E1047 A-1区の中央付近にある石組井戸で、直径約0.9m、深さ2.7mを計る。錠前、銅製の仏餉器や未使用の釘多数等が出土した。現在残っている石が井戸の天端で、近くにある石が、井戸周辺の石敷の跡であろう。

S F1081 A-1区の西端、土塀基礎S A983の南にある石積施設で縦1.6m、横0.7m、深さ約1mを計る。中には焼土が詰まっていた。

下層の遺構 A-1区の西の溝S D986の側石が道路S S977の高さで揃っているので、下層確認のためトレンチを入れた。溝S D1261と石列S X1262を検出した。レベル的には道路S S976と同じである。

区画A-2

A-1の東側で、大甕埋設遺構S X1224の北にある溝S D1008以北の区画である。I期からII期まで存続していたと推定される。

S X1159 A-1区とA-2区を区画する石列S X1160にほぼ直交して東に延びる石列で面は南側が揃っている。4.5m分検出した。この石列の延長線上にいくつかの石が飛び飛びに存在しているところから、さらに東に延びていた可能性もある。

S D1008 大甕埋設遺構S X1224の北に位置する溝で、幅0.2m深さ0.15mあり6.5m分検出した。おそらくS X1157とも関連してS D1189に繋がっていたのであろう。

SB1030 A-2区の南端に位置する2.7m四方の礎石建物で、隣屋敷のB地区に接している。規模が小さいため礎石は周囲に存在するだけである。北側にある砂利敷が入り口にあたるのであろう。

SD1006 A-2区の北端にあって北に流れる溝で、溝SD993につながる。幅は0.3m深さは0.15mで3m分検出した。その先は削平されて不明。

SD1005 同じくA-2区の北端にあって北に流れる溝で、溝SD993につながる。幅は0.3m深さは0.15mで2m分検出した。その先は削平されて不明。使われている溝石が、SD1006に比べてやや大きい。この溝の延長線上に井戸SE1046があるので、井戸SE1046の排水用の溝と推定される。

SE1046 A-2区のほぼ中央にある石組の井戸である。直径0.6m、深さは底まで掘れなかったので不明である。上面に平らな大きい石があるので、天端まで残っていると考えられる。

SF1077 A-2区の北端溝SD1006のすぐ東にある石組施設である。規模は0.9m×1.2m、深さは0.85mある。四隅はきちんと直角になっていて丁寧につくられている。内部には人頭大の石と焼土が詰まっていた。

SF1078~1080 A-2区の西端に位置し、SX1160に沿って3基並ぶ石組施設である。北端のSF1078はSX1159にも接する。規模は1.0m×1.0m、深さは1.0mある。小さい河原石を使用していて、東側の壁面はかなり崩れていた。中央のSF1079は、3基の中ではもっとも大きく規模は1.5m×1.2m、深さは0.9mある。西側の壁すなわちSX1160側は他の壁に比べてやや大きい石が使用されている。このSF1079からは金箔をはった土師質皿が出土している。南端のSF1080はSX1160とは0.8m程離れている。規模は1.0m×1.0m、深さは1.0mある。

下層遺構 上記の遺構面との差は0.1mほどしかなく、下層の遺構の礎石などがわずかに見えているような状態だった。

SB1029 A-2区の南東隅に位置し、上層のSX1151とほぼ並行で、SD1008とは方位が少しずれる。直角に曲がって並ぶ5石の礎石が検出された。礎石はしっかりしているが建物の規模は不明。

SB1031 A-2区の西端近くに位置する礎石建物で、礎石2個と抜き取り穴3基を確認した。礎石は3尺間隔にあり、一直線に並ぶだけで規模は不明。

SE1045 A-2区の北東寄りに位置する石組の井戸である。直径0.6m、深さは底まで掘れなかったので不明である。周辺より0.1mほど掘り下げて検出したので、あるいは一時期古くて、最終段階では使用されていなかった可能性もある。しかし、周辺に井戸の排水に使用されていたと考えられる笏谷石があることなどから単に天端石が失われただけかもしれない。

SX1263 SE1045の南に約3m四方の土壌があり、中には焼土が混じった土が詰まっていた。底には越前焼の大甕6個体を据えた跡があったが、甕の底は残っていなかった。また、ここから越前焼の甕の破片が多数出土したが、他の甕埋設遺構ほど多く出土しなかった。

区画B

SA1193・SA1182・SA1181とSS1180に囲まれた屋敷である。もっともSA1181は西側の屋敷の土塀で、東側のSA1182はⅢ期の可能性が高く、南側は道路に面しているのに土塀や柵がない。北側だけがこの屋敷の土塀である。規模は東西方向・南北方向とも約17mであるが、東側が14mとやや狭くなっている。面積は東南隅の位置がやや不明確ではあるが、205㎡ある。屋敷内は礎石建物SB1192とその雨落ち溝が確認された。井戸SE1197は上層で見付かっているが、この建物に伴っていたのを高上して使用していたのであろう。

I 期

SA1193 屋敷の北を限る土塀基礎で16mある。基礎の幅は場所によってやや異なるが0.45m～0.5mある。

SA1182 屋敷の東を限る土塀基礎であるが、この土塀を斜めに溝SD1189が横切っているのと後世に削平されているため、残存状況はあまり良くない。幅は0.5m程で長さは15mほど残っている。北側の土塀SA1193が基礎石1石だけなのに対して、この土塀基礎SA1182は2石ないし3石程積み上げているところから、あるいはⅡ期に属する遺構の可能性も考えられる。ただ、いずれにしてもこの位置に屋敷の東を限る何らかの塀があったことはまちがいない。

SD1189 屋敷内の水を外に排出する溝で、SA1182を斜めに横切っている。深さは0.4m、溝として残っている部分は約7mである。おそらく大甕埋設遺構の北側を流れる溝SD1008に繋がっていたのであろう。なおこの溝はSA1182と一体になっているのでⅡ期に属する可能性もある。

SB1192 敷地の北西に建てられている礎石建物で、規模は東西8.5m、南北8.7mである。北側と東側、南の中程まで雨落ち溝SD1191が巡る。この雨落ち溝は西側の武家屋敷との境の溝SD1184に流れ込む。礎石配置については、一部不明な点もあるが、外周はほぼ揃っており、礎石の間には狭間石がみられる。西側と北側の礎石は溝石を兼ねているが、南と東の礎石は溝から1石分離れており、特に東は礎石列と溝が平行ではなく北でわずかに開く。建物の西側は礎石が1間分とんでいて、広い間取りの部屋があったものと考えられる。建物の東側は半間内側に入ったところに狭間石列があって、東半分はさらに外側にも建物境の石列がある。ここがこの建物の入り口であろう。さらに中に入ると2間×1間程の石敷SX1237があり、石敷は黄色の粘質土で固められていた。その奥にあたる北側にも1間×2間の石敷部分があり、その一部は平らに石を敷き詰めているSX1238がある。これらから、この建物は南北方向の棟を持ち、南面に3.5尺の庇が付くと考えられる。内部の部屋割りについては、東半分は庇の部分が入り口で、おそらく土間であろう。次の石敷SX1237の部分は東を受ける石も見られるところから土間ではないことは確かである。さらに奥の石敷の部分は台所と考えられる。西半分は縁を除くと南から8畳間・8畳間・6畳間の3室が想定できる。雨落ち溝がないところは2間四方ほどは豆砂利敷になっている。その周囲に直径0.1mほどの柱穴が2.5尺～3.5尺間隔でめぐっているところから竹垣のような遺構が考えられ、表坪の内のような庭(SG1260)になっていたと推定される。なお、庇の軒先にあたる所は、雨垂れのため少し窪み、砂利が薄くなっていた。

SF1203 この屋敷の北西隅にある石積遺構で、規模は、0.6m×0.9m、深さ0.5mある。石は丁寧に積まれている。屋敷の隅にあるが、これを便所と推定すると汚物の運び出しようがないのでおそらく水溜のような施設であろう。

SD1190 建物SB1192の東に位置する溝である。雨落ち溝SD1191の背面にある石列が直角に曲がってこの溝の側石の背面の石列となるが、SD1191とは2m程はなれ、さらに外に流れ出るSD1189にもつながらない。

SE1197 区画Bの東よりに位置する井戸で、積み石はしっかりしていた。下層からあった井戸をそのまま嵩上げたものと思われる。SD1190はこの井戸の排水溝であろう。

Ⅱ期

SF1202 区画Bの北西隅にある石積遺構で、規模は1.2m×0.6m、深さ0.4mである。内部は焼土が詰まっていた。なお、SF1203はこのSF1202の真下にあった。

S F 1199 B区の北東隅にある積石遺構で、規模は1.0m×1.7m、深さ0.3mである。かなり崩れている。内部は焼土が詰まっていた。

S F 1201 B区の北東よりにある積石遺構で、規模は1.2m×0.7m、深さ0.6mである。この石積み遺構の南に溝状の遺構があり、内部は焼土で埋まっていた。

S F 1204 B区南東隅にある積石遺構で、規模は0.9m×0.6m、深さ0.7mである。四隅もきちんとしており、残存状態も良好であった。内部は焼土が詰まっていた。この石積み遺構は、道路S S 1180の北端を限る石列S X 1244の延長線上にあって、微妙な位置にある。

区画C

区画Bの東に位置する区画で、西は区画Bの土堀基礎S A 1182、南は道路S S 1180、北は溝S D 1008で限られる。東は一乗谷川に面するが、当時は道路に面していたのであろう。Ⅱ期の遺構面はB区との境になるS A 1182の東に少し残っているが、ほとんど削平されて溝らしき遺構S X 1240以外には残っていない。またこのⅡ期の遺構面がどこまで広がっていたのかについては不明というほかない。Ⅰ期の遺構面とは高低差が0.5mほどあり、大甕埋設遺構S X 1224の上にはⅡ期の遺構面が広がっていた痕跡はなかった。Ⅰ期の遺構面も全体に削平されて不明な点がほとんどであるが、越前焼の大甕が29個体もまとめて埋設されていた。

S X 1224 B区画の北端にあって、越前焼の大甕が29個体も埋設されていた遺構である。これらの甕の内底部が残っていたのは10個体で、他はほとんど甕がなく抜き取り穴だけだったり、いくつかの個体が一緒に入っていた穴もあった。したがって、遺物の説明で甕ピットの番号があっても、底部が出土した番号以外は、その抜き取り穴から出土したことを示すのであって、本来そこに埋設されていた甕とは限らない。

甕は東西方向に5列あるが、北側2列(21~29)と中央の2列(8~13、14~20)南端の1列(1~6)は少しずつれており、並んでいる個数も異なる。このことからどちらか先かはわからないが、埋設された時期が前後する可能性も考えられる。なお西端のNo. 7はいずれの列からもずれる。甕の埋設の仕方は、土壌を掘って隣の甕と少し接するくらいに並べ、隙間に焼土を詰めていったものと思われる。深さは0.6mほどすなわち甕の肩あたりまで埋められていた。なお東端近くでは少し攪乱されていて、甕1個体1個体の抜き取り穴は確認できなかったところがある。

埋設されていた大甕についてはかなり時期差があり、もっとも古い甕はNo. 11で、口縁の形態から15世紀前半まで遡る。もっとも新しい甕は16世紀中頃のものである。大まかに時期別に見てみると15世紀前半が1個体、後半が3個体、16世紀前葉が10個体、中葉が19個体である。先の各列にそれぞれの時期のものが混じっており、また攪乱もうけているので、遺物からそれぞれの列の前後関係を推定することは困難である。ただ、同一遺構面にあることや遺構全体から考えると、甕の設置された時期は多少の前後はあってもあまり時間幅を考えることはできない。古い甕も同時に設置されていることは、越前焼甕も中古の甕が流通していたことを示していると推定される。この甕の一部に黒い付着物が認められるが、これが何であるかを調べることは困難であり、ひいてはこの大甕埋設遺構がどのような性格の遺構なのかは不明というほかない。

この大甕遺構を覆う建物があったと考えられるが、その建物跡は確認できない。大甕埋設遺構の東に石が3個(S X 1229)並んでいるが、あるいはこれが大甕埋設遺構に伴う建物の礎石かもしれない。さ

らにその北に直角に曲がった石列S X1228があり、これも大甕埋設遺構を覆う建物に関連した遺構と推定される。

S X1225 大甕埋設遺構S X1224の南西に2個体の越前焼き大甕が設置されていた。その位置から直接S X1224に関連する遺構と考えられる。1個体は底部が残っていたが、もう1個体は甕がほとんど残っていなかった。甕を埋設した周囲は焼土が詰められている。

S F1200 大甕埋設遺構S X1224の南に隣接する石積遺構である。規模は1.4m×1.1m、深さ0.6mである。中には焼土混じりの土が入っていた。位置からしてS X1224に関連する遺構と考えられる。

S E1195 大甕埋設遺構S X1224の東3mの所に位置する井戸である。直径は0.7m、深さは2.7mある。北西側の大きい3石がこの井戸の天端石であろう。この上に笏谷石製の井戸枠が乗る。おそらくこの井戸も大甕埋設遺構に関連していたのであろうが、S X1229までが大甕埋設遺構を覆う建物とすればこの井戸は建物の外にあったことになる。

S X1226 C区のほぼ中央に位置する大甕埋設遺構である。2個対で南北方向に並んで設置されていた。

S E1196 C区の南端近くに位置する石組の井戸である。直径0.9m、深さは2.6mある、上端の石が小さいことから、井戸の天端石は削平されていると考えられる。C区南半分の遺構面は、何らかの事情で大甕埋設遺構S X1224付近より少し高くなっていたらしく、削平されて遺構がほとんど残っていない。

区画D

北は道路S S1180、西は隣の武家屋敷の土塀S A1252、東は土塀S A1183で限られる。Ⅱ期の遺構は西隣屋敷の土塀に付属する溝S D1185、土塀基礎S A1252以外に残っていない。これらふたつの遺構はⅠ期からの遺構である。

S D1185 西隣屋敷の土塀裾を南北方向に流れる溝である。かなり崩れているので正確ではないが、幅は0.4m、深さは北端近くで0.4mある。遺構の残存状態が悪く南半分の側石がかなり失われている。また、北端では、溝の底の高さと道路S S1180の高さがほとんど変わらない状況である。溝S D1188との接合状況もはっきりしない。

S D1188・1187 D区の西端から屈折しながら道路S S1180の側溝S D1186につながる溝である。西よりのS D1188は南側の側石しか残っていない。幅は0.2m、深さ0.15mである。溝内は茶褐色の粘りのある土で埋まっていた。

S F1214 溝S D1188の北に位置する石積遺構である。規模は縦横1m四方で深さは約0.5mある。中には礫混じりの土が詰まっていて、焼土はほとんどなかった。道路S S1180の西半分の南端は明確ではないが、この石積遺構までであろう。このS F1214付近にはいくつかの石があって元々は何らかの遺構であったと思われるが、攪乱されていて遺構としてまとめることは困難である。

S X1254 D区の南端に位置する石敷遺構である。扁平な石を1m×1.5mの範囲に敷き詰めている。上面は平らに良く揃っている。

区画E

土塀S A1183の東、道路S S1180の南に位置する区画である。この区画は全体に削平されていて石積遺構や井戸・土塀など掘り込まれた遺構しか残っていない。

S A1183 区画Dとの境界の土塀基礎で、幅0.9m、高さ0.3m程である。9mしか残っていなかったが、

土塀基礎の延長線の東に積み石遺構が並んでいたことから、本来は道路S S 1180まで延びていたものと思われる。道路側溝S D 1187は土塀基礎の延長線上のところ、ちょうど屈折して溝石も攪乱を受けている。

S F 1211 土塀S A 1183の東に並ぶ石積遺構の内南端に位置する。大きさは約1 m四方で深さは0.8 mである。人頭大の石がしっかりと積まれ内部は焼土が大量に混じった褐色の土で埋まっていたが、所々に焼土を含まない黄褐色の土がブロック状に混じる。なお、このS F 1211の南の壁を壊してS F 1212が作られている。

S F 1209 土塀S A 1183の東に並ぶ石積遺構である。大きさは約0.6 m×0.7 mで、深さは1.1 mある。平面の大きさの割に深い。やや小さめの石が丁寧に積まれているが、西側の壁が崩れている。

S F 1208 土塀S A 1183の東に並ぶ石積遺構である。大きさは約1.2 m四方で、深さは0.5 mある。北側の壁が少し崩れている。中は炭が大量に混じった土で埋められていた。

S F 1207 土塀S A 1183の東に並ぶ石積遺構である。大きさは約1.5 m×1.2 mで、深さは0.3 mと浅い。北西隅から北の壁が円く築かれている。

S F 1206 土塀S A 1183の東に並ぶ石積遺構でS F 1207の北隣にある。大きさはひとまわり小さく約1.1 m×1.0 mで、深さは0.5 mと浅い。これは東の壁が円く築かれている。内部の土に骨片が多く含まれた部分があったが、あまりにも小片だったため何の骨か不明である。

S F 1205 土塀S A 1183の東に並ぶ石積遺構のうちもっとも北に位置する。道路側溝S D 1186とは隣接する。大きさは約1.0 m×0.9 mで、深さは0.5 mである。

S F 1210 土塀S A 1183からは約2.5 m離れた位置にある石積遺構である。大きさは約1.4 m×0.8 mで、東西方向に長い。深さは0.5 mである。

S F 1213 E区の東南に位置する石積遺構である。大きさは1.0 m四方で、深さは0.2 mしかない。北壁しか残っていなかったことからしてもおそらく削平されて浅くなったのであろう。この石積遺構の南西に越前焼きの甕の底部S X 1227が据わっていた。この甕の時期については口縁部が確認できなかったので正確なことはわからないが、底部の成形跡から16世紀以後のものと推定される。

S E 1198 E区のほぼ中央に位置する井戸である。直径は0.7 m、深さは底まで発掘していないので不明。

S K 1218 E区の中央よりやや東に位置する土壇である。大きさは長さ2.0 m×幅1.5 m、深さ0.6 mある。もともとひとつの土壇ではなく3基の土壇が重なったものらしい。平面形が瓢形をしているのはそのためであろう。この土壇の西端上面には笏谷石製の盤が置かれていたが、土壇との関連は薄いと思われる。すぐ東にも直径1.0 m深さ0.6 mの土壇S K 1217、石壁の土壇S K 1216もある。このほか周辺にはいくつかの土壇があるが、いずれも直径0.5 m、深0.3 m前後と浅い。内部には焼土や炭混じりの土が詰まっていることが多い。

S X 1249 E区の北寄りに位置する溝状の遺構である。幅は0.4 m、長さは2.5 m、深さ0.2 mほどで南側に石が張り付くように並んでいる。

区画Eについては、遺構面が削平されていて不明な点が多いが、土塀基礎S A 1183に沿って石積遺構が並ぶことが特徴で、これをS F 1205とS F 1206・1207とS F 1208・1209とS F 1211の4グループに分けることができそうである。とすればこれに対応する井戸がないが、敷地の裏に石積遺構が並ぶ町屋の構造と相通じるところがある。一乗谷川に沿っては第25次調査で検出した道路S S 945が延びてきていて、区画Eはこの道路に沿った町屋地区と想定される。

3. 遺物 (第8~15図, PL.10~17)

今回報告する遺物は、道路SS977以南の第29次調査で出土した遺物群と、第30次調査で出土した遺物群である。整理の方法はこれまでと同じく土塀や道路溝などで区画された屋敷地、もしくはまとまりのある遺構群によって分けた。屋敷地の分け方については遺構の記述の通りである。各区画ごとに遺構面とそれを覆う整地層を一つの遺物群として捉え、さらに井戸や溝、石積遺構などから出土した遺物のように遺構単位で扱えるものについては、その遺構ごとにまとめた。図や写真もその意図に従って作成したが、溝などの遺構から出土していても、まとめて図化できなかったものについては整地面として載せ、どこから出土したか記述するに止めた。なお時期の異なる遺構面や整地層から出土してそれが接合した場合は、原則として破片が多く出土している方にいった。今回報告する遺構面は2面確認されているが、すべて町割り以降のものと判断される。これまで町割り以前をⅠ期、町割り形成期をⅡ期、滅亡時をⅢ期として記述してきたので、今回もそれに合わせて記述する。

遺物の分類については、これまでの報告書を踏襲する。すなわち越前焼大甕・播鉢は『県道鯖江・美山線改良工事に伴う発掘調査報告書』1983、土師質皿は『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告Ⅰ』1979、染付は小野正敏「15、16世紀染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究2』1982日本貿易陶磁

器種			破片数	%	器種			破片数	%	器種			破片数	%
日本製陶器	越前	甕	7,593	45.79%	中国製陶磁器	青磁	碗	146	0.88%	金属製品	銅銭	172	1.04%	
		壺	1,063	6.41%			皿	96	0.58%		飾り金具	1	0.01%	
		鉢	171	1.03%			鉢・盤	11	0.07%		銅製品	13	0.08%	
		播鉢	696	4.20%			香炉	7	0.04%		釘	285	1.72%	
		その他	38	0.23%			花生	1	0.01%		鋸	32	0.19%	
	小計	9,561	57.66%	その他		17	0.10%	包丁	1		0.01%			
	土師質	皿	4,899	29.55%		小計	278	1.68%	錠前		3	0.02%		
		土釜	29	0.17%		陶磁器	白磁	碗	3		0.02%	鉄製品	42	0.25%
		土鈴	6	0.04%				皿	268		1.62%	その他	28	0.17%
		その他	5	0.03%				坏	27		0.16%	小計	577	3.48%
	小計	4,939	29.79%	その他	11			0.07%	バンドコ	101	0.61%			
	鉄釉	碗	9	0.55%	小計			309	1.86%	白	6	0.04%		
		皿	1	0.01%	磁器	染付	碗	80	0.48%	鉢	24	0.14%		
		壺	42	0.25%			皿	194	1.17%	盤	10	0.06%		
		その他	9	0.05%			坏	2	0.01%	風炉	15	0.09%		
	小計	143	0.86%	その他			9	0.05%	井戸棹	1	0.01%			
	灰釉	碗	21	0.13%			小計	285	1.72%	砥石	4	0.02%		
		皿	155	0.93%	中国製計	872	5.26%	硯	27	0.16%				
		鉢・卸皿	8	0.05%	朝鮮製陶磁器	碗	1	0.01%	茶臼	1	0.01%			
		香炉	3	0.02%		皿	0	0.00%	その他	68	0.41%			
その他		9	0.05%	鉢		0	0.00%	小計	257	1.55%				
小計	196	1.18%	壺	1		0.01%	総合計	16,851	100.00%					
瀬戸・美濃計	339	2.04%	その他	0		0.00%								
瓦質土器	火鉢	1	0.01%	小計	2	0.01%								
	香炉	1	0.01%	タイ南蛮	0	0.00%								
	風炉	1	0.01%	輸入陶磁器	合計	874	5.27%							
	その他	12	0.07%	陶磁器合計	15,747	94.97%								
小計	15	0.09%												
国産陶器	信楽	8	0.05%											
	その他	11	0.07%											
小計	19	0.11%												
合計		14,873	89.70%											

表1 第29・30次調査出土遺物一覧表

研究会による。その他の遺物については、一乗谷朝倉氏遺跡資料館としてははっきりとした根拠を示した分類はなされていないが、これまでの報告書等で使用してきた分類による。

今回出土した遺物の総破片数は16,851点で、その割合は表1のとおりである。出土陶磁器の組成の特徴は、越前焼大甕の割合が高いことである。これはS X1224に26個体も越前焼大甕が据えられていたので当然であるが、土師質皿の出土量も多いとはいえない。その他の陶磁器の割合は、多少のばらつきはあるがこれまでの発掘調査の割合の範囲内に収まっているといえる。

区画A-1出土遺物 (第8図, P L.10)

Ⅲ遺構面出土遺物

Ⅲ期とは、床土除去後に認められた遺構面で、井戸S E1047や溝S D992等からなる。この遺構面の土は整地層はほとんどなく、すぐ床土のような状態であった。従って出土遺物もあまり多くないが、井戸S E1047から特徴ある遺物がまとまって出土した。

越前焼 甕・壺も出土しているが、胴部の破片がほとんどで図化できるような口縁部の破片はなかった。(1)は口縁直下に凹線があって、凹線の下で止まる播目が全面に施されている播鉢でIV群と見て良い。(2)は口縁部下の凹線が失われ、播目が口縁部先端まで延びておりV群に属する。一乗谷ではIV群のものももっとも多く、V群にかかる播鉢は少ない。

土師質 (3)は土師質皿C類である。直径は9cmあり、口縁部の一部に灯明皿として使用した痕跡を示すタールが付着している。(4)は土師質の羽釜で、口径は20cmある。胴体下部には煤が付着している。この土師質羽釜は出土地点にばらつきがあり、武家屋敷には一定量見られるが、町屋では少ないようである。

瀬戸美濃製品 (5)は灰釉碗で口縁部に細かい刻みがあるが、これは青磁碗の蓮弁文写しの変形である。(6・7)は口径10.5cmの端反の灰釉皿で、(7)は火を受けて釉が白く変色して少し縮れたために、この種の端反皿が付け高台であることが良くわかる。(8)は内外面の口縁部だけに灰釉を施した縁釉皿である。底部には回転糸切りの跡が残る。

中国製陶磁器 (9)は端反の染付碗である。小片のため文様はほとんど欠失しているが、他の例からフクロウと思われる。端反の碗は一乗谷では少ない。(10)は染付のB₁群の皿であるが、口径(14.5cm)の割に高さが3.5cmと高い。外側の唐草文も蔓が細く普通の唐草文とは少し異なっている。高台がややしっかりしているところから、古い様相をとどめているのであろうか。(11)も染付のB₁群の皿で外面は唐草文、見込みは羯磨文である。この種の文様構成をもつ皿は、口径が10cmのものが多いが、これは口径が16.5cmと大きく、高台や作りもしっかりしている。(12)もB₁群の皿で外面は宝相華唐草文である。(13)の見込みの文様は雲があり人物文の可能性もある。内面にも唐草文様が描かれている。(14)は内湾する皿で外面に蔓草文が描かれている。(13・14)はいずれもE群の皿である。

S E1047出土遺物

瀬戸美濃焼 (15)は渋鉄を塗った一輪挿しで、口径5.6cm、最大径10.5cm、高さ7.2cmを計る。ロクロで成形した後、一面の $\frac{1}{4}$ を切り取り波形の粘土板を張り付けて一方を平らにしたもので、この平らな面側の頸部に花瓶を吊すための穴が開けてある。

錠前 錠前が3点出土した。(17)がもっとも大きく長さ15cm、高さ4.3cm、幅は1.7cmある。錠前は鞘の部分と本体が錆でくっついてしまっている。(18)も鉄製の錠前で、長さ7cmと(17)の半分近くしかない。

この錠前は箱かなにかに鍵がしまったままの状態です。井戸の中に廃棄されたらしく、環付金具がついたままの状態です。出土した。(19)も錠前であるが、材質は真鍮である。長さが8cmと(18)よりわずかに大きい。出土したときは鍵がかかった状態であったが、真鍮製なので錆びていなくて開くことができた。本体を鞘に押し込むと、本体の先が4枚のバネになっていて鞘の中にある突起に引っかかり開かない構造になっている。(18・19)は小形なので、建物の戸ではなく箱のようなものの錠前であろう。

仏餉器 (16)は銅製の仏餉器である。出土した時は坏の部分と脚の部分が少しゆがんでいた。坏の口径は13.8cm、高さは9.5cmあり、坏と脚は鑿付けされている。脚の中央に2本の突線があり、この形式は現在でも踏襲されている。

鉄釘 約300本の釘がまとまって出土した。その中に全長15cmの釘(20~22)が17本、全長10.3cmの釘(23)が5本、全長7.2cmの釘(24)が8本、5.2cmの釘(25)が10本、4.6cmの釘(26)が37本、3.6cmの釘(27)が15本あり、これらはまっすぐで未使用のものと思われる。特に15cmの釘は頭が扁平なままで未使用であることは疑いを入れない。この他は曲がっていたり折れていたりして長さが計測できないものが大半であった。15cmの釘は5寸、10.3cmの釘は3寸5分、7.2cmは2寸4分、5.2cmは1寸7分、4.6cmは1寸5分に相当するが、これらの他の長さのものもあり、必ずしもいくつかは切りの良い数字に換算できない。またこれらの釘はすべて鍛造である。

区画A-1 II 遺構面出土遺物

今回調査した下層は確認的な意味で掘り下げたので面積的にも狭く、深さも浅かった。したがって先に述べたように町割りによる城下町建設以後になる。

瀬戸・美濃製品 (28)は天目茶碗で、口縁部下のくびれが少なく全体に丸みを帯びている。(29)は鉄釉の水滴で、体部の直径は肩の所で5.2cmを計る。底部は露胎回転糸切りの跡が残る。(30)は灰釉碗で、形態的には天目茶碗の形をしている。(32・33)は灰釉の端反皿で、口縁端部は大きく外反している。釉は半透明で薄く施されている。

中国製陶磁器 (34)は線刻の青磁蓮弁文碗で、(35)は白磁皿である。

須恵器 (36・37)は須恵器の壺である。口径部が直立し、体部は叩きが施されている。6世紀中頃から7世紀のものとして推定される。なお、一乗谷では南陽寺跡から縄掛け突起付きの石棺の一部が出土している。

区画A-2出土の遺物 (第9図, P L. 10・11)

III 遺構面出土遺物

越前焼 (38)は口縁部が角張った播鉢で、口縁下は沈線というより小さな段になっている。播目の間隔はやや大きい。(39)は口縁部が三角になるIV群の播鉢で、口縁下は沈線となりここまで播目が施され、見込みにも播目がある。

瀬戸・美濃製品 (40)は天目茶碗で、形態は全体に丸みがあり、釉は黒く艶がある。(41)は灰釉の端反皿で、高台からはみ出すほどの輪トチが付着したままになっている。

中国製陶磁器 (43)は青磁碗の高台部で全面施釉後釉着を防止するため高台裏の釉を輪状に拭き取っている。(44)は碁笥底のC群染付皿で、見込みはねじ花、外面は芭蕉文が描かれている。

石製品 (45)は幅10cm程の硯で、海の部分が直に彫り込まれているのが普通の硯と異なる。

II 遺構面出土遺物

越前焼 甕・壺・播鉢が出土した。(46)は高さ23.5cm、最大径20.5cmの壺で、よく焼き締まり、なだら

かな肩から口頸部がやや外反して立ち上がる。腰部から下にへら削り調整の跡が見られる。(47)は口頸部がわずかに立ち上がる壺であるが、甕の部類に入れた方がよいのかもしれない。(48)は口径30.0cmの播鉢である。口縁部断面は三角で上面はやや内傾する。口縁部下に沈線があり、ここまで全面に播目が施されている。(49・50)も口縁がほぼ同じ形態をしており、いずれも第IV群に属する。(51)は口縁の断面が四角く口縁下の段までやや離れていることや播目の間隔が広いことから第III群に属する。(52・53)は播鉢と同じ形をした鉢で、(53)には外面に花押のような刻みがある。

土師質土器 土師質はそのほとんどが皿である。(54・55)はC類の土師質皿である。口縁部に灯明皿として使用した痕跡を示すタールがあり、さらに全面に黄白色の油のような異物が付着している。(56)はD類の、(57)はC類の土師質皿であるが、成形時に粘土紐を接着させた跡が良く残っている。これからすると平らな粘土板から皿を作るのではなく、粘土紐で皿状の原型を作り作り、成形で兼ねたナデで形を整えたとも考えられる。一乗谷の土師質皿はこうした成形跡が残っているのは珍しい。

瀬戸美濃製品 天目茶碗、灰釉皿等が出土した。(58)は口径9.5cm程の小形の天目茶碗で、全体に直線的になり、釉は黒く艶がある。(59)も天目茶碗であるが、茶色の釉がかせているところから、いわゆる鉄釉ではなく灰釉を混ぜた鉄釉が施されているのであろうか。(60)は灰釉の縁釉皿で、(61)は端反の灰釉皿で、見込みにスタンプによるかたばみの文様がある。(62・63)は灰釉のひだ皿で、(64)は内面に刻みのある丸皿である。こうした皿は瀬戸・美濃の編年によれば第IV期に位置づけられているので、この第II遺構面も16世紀半ば頃と推定される。

中国製陶磁器 青磁碗・皿、白磁皿、染付碗・皿が多く出土した。(65)は大振りな無文の青磁碗で、見込みが饅頭心状になっている。高台の直径は小さく厚い。高台裏の釉は蛇の目状に拭き取られている。(66)は端反の青磁皿で釉は厚く艶がある。15世紀前半の遺跡に多く見られる。(67・68)は青磁香炉で、(69)は全体に丸みがある点に香炉かどうか判断しかねるが、内面は口縁から2cm程下は露胎になっている。(70)は白磁の端反皿である。一乗谷で多く出土する端反皿に比べて反り方がやや弱く、腰の膨らみも深い。(72)はC類の染付碗で外面口縁部には波頭文、腰部には唐草文が巡り、見込みは貝の文様がある。この文様構成の碗は形態的にはD類のものもある。(73・74)は底部が碁笥底になるC類皿である。(73)は腰部に芭蕉文が巡り、見込みは吉祥字と思われるが、崩した字は少ない。(74)は梵字の変形による文様であるが、これも一乗谷ではあまり出土しない文様である。

確認トレンチ出土遺物

SX1263付近でやや深く掘り下げたときに出土した遺物群であるが、遺構の状況から町割り以後であることは確かである。

瀬戸美濃製品 (75)はやや直線的な形をした天目茶碗で、口径は12cmある。(76~79)は灰釉の端反皿で、(76)は直径が9.3cmあり、見込みにはカタバミの印花文がある。(77・78)は直径が11.5cm、12.0cmあり、(76)より一回り大きい。これらはいずれも付け高台で高台裏には輪トチの跡が残る。(80)は灰釉ひだ皿で、端反皿の口縁部をひだ状にしたものである。(81)は削出し高台を持つ灰釉の端反皿で、釉は内外面とも体部だけに施され、見込みと高台及び底部は露胎である。この皿は、瀬戸・美濃では大窯以前に位置づけられ、形態的には青磁稜花皿を模したものである。(82)は口縁部は失われているが、銅緑釉の丸皿である。見込みには菊花の印花文があるなど、つくりは灰釉の丸皿と変わらない。美濃の妙土窯で銅緑釉の皿が出土しており、(82)も妙土窯の製品の可能性が高い。

中国製陶磁器 (83)は青磁碗で、外面にへら描の蓮弁文がある。(84)は青磁皿で、口縁部が大きく外反

している。体部に鋭さを欠く蓮弁文が巡るところから、14世紀後半を中心とした製品とみられる。(85)は白磁の端反皿である。(86・87)は染付のC群碗である。

区画B出土遺物 (第10図, P L.12)

この地区は遺構の残りは良かったが、遺物の出土量は少ない。図示した遺物群は、下層のS B 1192の遺構面とそれを覆う整地層から出土したものである。

越前焼 甕・壺・播鉢・鉢等が出土している。(88~90)は壺で、(88)は小さい口頸部に大きく肩が張る胴部がつく。(89)は外反して立ち上がる小さい口頸部にやや撫肩の胴部がつく。(90)はいわゆる無頸壺で器型は撫肩からそのまま体部に続く。(91)は口縁端部が丸く口縁下の沈線までの距離が長く、播目の間隔が広いⅢ群の播鉢で、(92)は非常に焼きの甘い播鉢である。(93)は体部上半で大きく内湾する鉢である。口縁端部は内傾する。

瀬戸・美濃製品 天目茶碗・灰釉皿等が出土している。(94)は灰釉の端反皿であるが、あまり外反しない時期のものである。(95・96)は灰釉折縁の鉢で口縁部だけに釉が施されるが、他は露胎である。口縁部は内側に蓋を受ける返りがつく。

中国製陶磁器 青磁碗・皿、白磁皿、染付碗・皿・坏等が出土している。(97)はへら描の青磁蓮弁文碗で、(98)は無文の青磁碗で、高台裏の釉が拭き取られている。(99)は青磁稜花皿で、腰部が張り口縁部が大きく外反する。(100)はその底部で高台裏の釉が拭き取られている。(101)は内湾する小形の白磁皿で厚みがあり、釉は乳白色である。(103)は端反の染付B₁群皿で、外面は唐草文、見込みは玉取獅子。(104)も同じく端反の染付B₁群皿で、外面は密に展開する唐草文、見込みは羯磨文である。高台がしっかりしているところから15世紀末から16世紀はじめのものと思われる。(105)は染付の坏で、器壁は非常に薄い。文様は外面と見込みが蓮池文である。

区画C出土遺物 (第10~12図, P L.12~14)

越前焼大甕が据わっていた面がほとんどであるが、一部上層にかかる面もあってそこから出土した遺物群を分けた。

大甕埋設遺構S X 1224出土の越前焼 ほとんど大甕であるが、小形の甕や壺も出土した。(106)は口頸部が軽く外反し、卵形の体部に平らなやや大きい底部がつく。胎土には白いが小さくて黒いゴマ状の斑点がある。表面ではこの黒い斑点が焼成時に熔けている。口頸部の形から15世紀半ばのものと思われる。(107・108)は口頸部が立ち上がり、丸い肩から直線的に底部へ続く甕で、この種の甕は口縁の形が少し異なるが、(124)とほぼ同じ形をしており、数種類のサイズがある。(107)はよく焼締まっているが、(108)は焼きが甘い。(109)は大きく開いた口頸部がいわゆる二重口縁のような形態をし、肩に耳がつく甕で、出土例としては少ない。底部を欠くが、口径の割に高さの低い甕のようである。

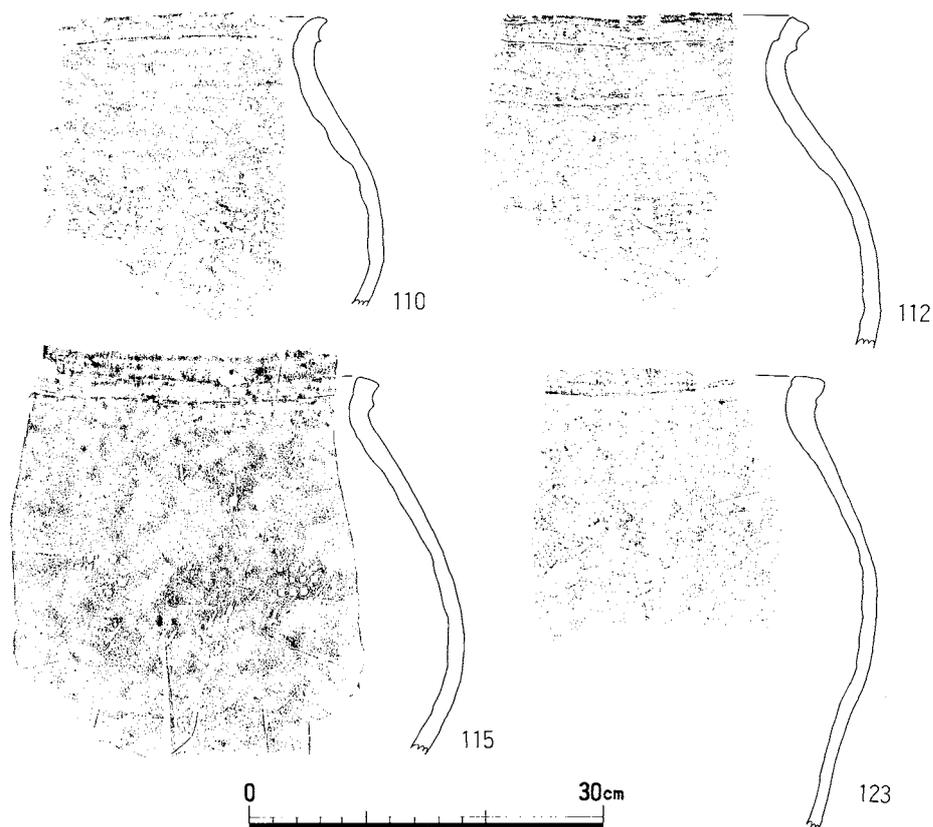
据わっていた甕はⅣ群がほとんどであるが、Ⅱ群の甕やⅢ群の甕も据えられている。(110)は退化した口縁帯がわずかに残るⅡ群の甕で、スタンプは大きい格子と凹の「本」である。(111)は口縁帯が失われ稜に変化したⅢ群aの甕で、スタンプは凸の「本」である。(112)はⅢ群aの甕で、わずかに口縁部が肥厚しつつある。肩のスタンプは凸の「本」である。(113・114)はⅢ群bの甕でスタンプは凹の「本」である。(115・116)はⅢ群bの甕で厚くなりつつある。肩に凸の「本」と格子のスタンプがめぐり、へら記号がある。この時期の大甕は高さの割に腰部が膨らみ、ずんぐりしている。(117)はⅣ群aの甕で口縁

部は幾分肥厚している。器形は腰部の膨らみが少なくなり肩部から底部へ直線的におりていく。スタンプは凹の「本」が巡り、ヘラ記号がある。(118・119)はIV群bの甕で、スタンプは凹の「本」である。IV群になると凸の「本」のスタンプはない。(118)は肩から下の表面が小さい円状に多数剥がれている。(120～122)はIV群cで口縁部が肥厚し、スタンプは凹の「本」が巡り、ヘラ記号がある。(122)は腰部の膨らみがなく肩から直線的に底部に繋がり、中ではもっとも後出の形態をしている。(123)はIV群dの甕で、口縁部がもっとも厚くなり、口縁に稜が無くなって丸みを帯びる。スタンプは凹の「本」である。(124)は口頸部が立ち上がるタイプの甕である。最大径は64cm、高さ75cmで容積は大甕よりひとまわり少ない。

土師質土器 (125・126)はいずれもD類の土師質皿で、口縁部が内側にかえっている。これはナデ成形時に人差し指の内側で押されたためである。

瀬戸・美濃製品 天目茶碗や灰釉皿が多い。(127・128)は口縁部のくびれの少ない天目茶碗で、(129)は鉄釉茶入れである。(130)は口縁下の外側にくびれがある鉄釉の水指である。腰部から下は露胎で足が3足つく。(131)は灰釉の端反皿で、見込みには橘の印花文がある。(132)は内側に刻みのある灰釉丸皿である。(133)は灰釉の香炉で、(134・135)は灰釉の折縁鉢である。口縁部の内側には返りがつく。

中国製陶磁器 青磁では線刻の蓮弁文碗(136・137)が多い。(138)は青磁の鉢で、見込みには印花文があり、高台内は釉が拭き取られている。今回の調査地区ではこうした大型の青磁は少ない。(139)は竹の節型の青磁香炉で脚部が長く装飾がある。白磁は(141)のような端反皿がほとんどである。高台の内側に砂が付着している。(142)は同じ端反皿であるが、やや灰色がかっている。(140)は白磁の端反碗で、一乗谷では白磁碗はごく少数である。染付碗は(143・144)のように口縁部に波頭文が巡り腰部には芭蕉文が



挿図4 大甕埋設遺構SX1224出土

巡るC群が目立つ。染付皿では(145)のような端反で外面は唐草文、見込みは玉取り獅子文のB₂群の皿が多い。

金属製品 (146)は桿秤の分銅で、一乗谷では棗型のものが多いが、これは六角形で中央部がくびれている。重さは113.7gある。

石製品 (147・148)は硯の海の部分で、いずれも脚を削りだした形式である。

区画C 整地層

この地区では南西部で田圃が高くなっていてS X 1240などがある。遺構面の広がりにはよくわからないが、S X 1240を形成する整地層から出土した遺物群である。

越前焼 (150)は無頸壺で、この種の壺は焼きが甘いことが多い。(151)は外反する口縁部からならかな肩を持つ壺である。(152)は大きくはった肩部に短く直立する口頸部がつく。高さの低いずんぐりとした形で、この種の器形は越前焼では少ない。口縁部の形から15世紀代のものであろうか。(153)はいわゆるお歯黒壺でならかな肩をもつ。波鉄を塗っているようにも見えるが、焼きが甘いので水洗時に表面がはげ落ちたのであろうか。(154)は播目が全面に施され、(155)は見込みにも播目がある。いずれもIV群の播鉢である。

土師質皿 土師質皿(156～160)が割合多く出土した。C類の皿のうち(156)は直径6.3cm、(157)は9.1cmある。C類の皿はこの2種類のサイズに集約される。D類の皿のうち(158)は直径10.5cm、(159)は13.0cm、(160)は16.0cmある。D類も10cm前後と12.5cm前後のサイズのものが多い。(160)は胎土の色調が赤く底部が平らな割に器壁が厚いなど作りにも特徴があり、同じ作りの皿が数枚まとまって出土している。

瀬戸・美濃製品 量的にはやはり天目茶碗(161)と灰釉皿が多い。(162)は鉄釉の小壺で、光沢のある茶褐色の釉が施されている。おそらく茶入れであろう。(163)は鉄釉徳利の口縁部である。(164)は灰釉碗である。

中国製陶磁器 (165)は青磁碗、(166)は青磁の菊皿で、釉色は半透明な釉がかかっている。(167)は乳白色で桜高台の小さい白磁皿である。(168)は外面に唐草文が描かれた染付のC群碗である。

区画D 出土遺物 (第13図, P L. 15)

上層のⅢ遺構面からも少量の遺物が出土したが、(174)の播鉢がⅢ遺構面出土である以外は、その下層のⅡ遺構面とそれを覆うガラ土の整地層出土遺物である。

越前焼 (169)は胴体に突帯が巡る無頸壺である。(170)は口縁端部1.5cm程下に浅い段があり、播目はこの段で止まるⅢ群bの播鉢である。(171・172)は、IV群に属し、ほぼ同じ口縁形態をしている。(173)はV群直前の形態を持つ播鉢である。(174)は口縁下の沈線がなく、播目が口縁端部まで延びているV群の播鉢で、上層の遺構面から出土した。(175・176)は播鉢と同じ形態をした鉢で、(175)は口縁部の形態からⅢ群b、(176)はIV群であろう。(177)は内湾する小形の鉢である。

瀬戸美濃製品 天目茶碗や灰釉碗・皿が多い。(178)は直線的な形態をしており、(179～180)は肩部から体部にかけて丸い。(182)は天目茶碗の底部である。シブ鉄が塗られている。(183)は小形の水注で、(184)は徳利である。(185)は水鳥型の硯滴である。灰釉は碗や端反皿が多い。(186)はスタンプ蓮弁文のある灰釉碗で直径12.5cmあり、青磁蓮弁文碗を写したものである。付高台で高台裏には輪トチの跡が残る。(187)は大きく開く碗で、これは無文であるが、幅の広い蓮弁文を巡らすものもある。(188～190)は灰釉の端反皿で、(188)は直径9.8cmあり見込みにカタバミの印花文がある。(191)は灰釉の折縁鉢の口縁

部である。

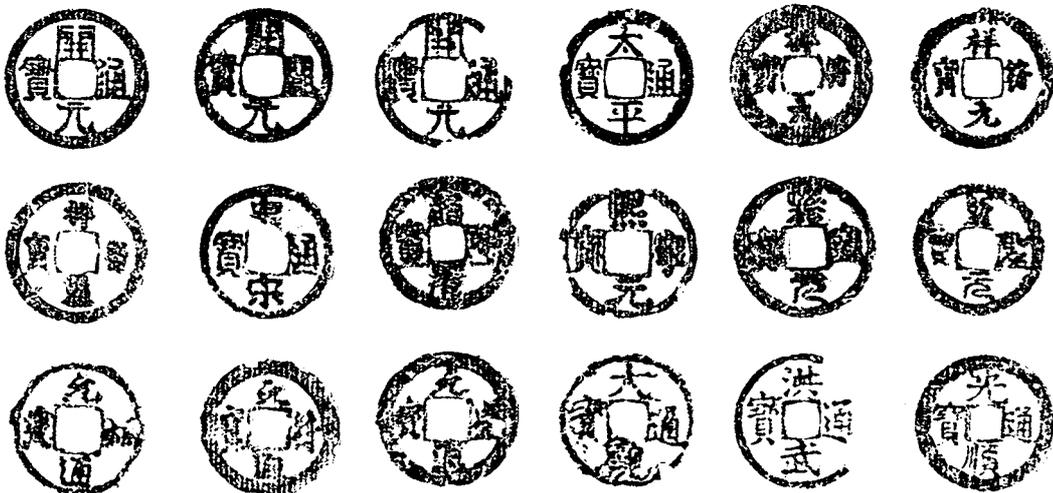
中国製陶磁器 (192)は青磁碗で、高台部の径が大きくて高台裏が露胎になっている。(193)も青磁碗で、釉が濁った緑白色をしている。同じく高台裏は露胎である。(194)も高台裏が露胎の青磁碗であるが、釉色は青白色をしている。(195・196)は青磁の輪花皿で、(196)は高台裏が白磁となっている。白磁は端反皿がほとんどで少量の坏等が混じる。(197～199)は端反皿でサイズが少しづつ異なり、(197)は直径が15.0cm、(198)は直径9.3cmである。後者は器壁がやや厚くて底部が平らである点に古い様相をとどめられていると考えられる。(200)は六角の坏で乳白色の釉がかかる。(201)は直径が9.4cmもある大型の坏で、口縁部は端反になっている。釉は失透感のある白色を呈する。(202)は平たい染付碗で、呉須の色が薄く白磁の部分も青みが強い。文様もいわゆる景德鎮の製品とは異なる。(203)はC類の染付碗で、見込みと外面にアラビア文字の文様が描かれる。この種の文様を持つ染付碗は一乗谷では少ない。(204・205)は口縁部が内湾し外面に雷文帯が巡る染付碗である。この種の染付碗も少ない。(206・207)は染付B₁群の皿で前者は体部に唐草文、後者は密に展開する唐草文が巡る。(208)はラマ蓮弁文が巡る染付の壺である。(209)は中国製の天目茶碗で、直径は12.5cmある。釉は禾目天目で口縁部には覆輪の跡がある。胎土は明るい褐色である。口縁部の形状が国産の天目茶碗とは異なる。(210)は中国製の茶入れの底部で、器壁は薄く胎土は非常に細かい。

銅銭 第29・30次調査では、銅銭が172点出土しているが、まとめて出土していない。区画Dから比較的まとめて出土したので、床土出土も含めてそれらを示す(挿図5)。全体としては北宋銭が多いが、「大観通宝」は北宋銭の中では少ない種類である。「光順通宝」はベトナムの銅銭で、南蛮との取引の反映と考えることもできよう。

石製品 (211)は硯で海の部分を欠く。脚のない一乗谷では最も新しいタイプである。陸の表面に墨を擦った擦痕がある。(212)はD型の行火(バンドコ)で、(213)はO型の行火である。いずれも凝灰岩(笏谷石)製である。

区画E出土の遺物 (第14・15図, P L. 16・17)

越前焼 (214)は口縁に折り返しがあって肩が大きく張った古いタイプの壺で、高さは28cmある。肩にへら書きの窯印がある。14世紀半ばと考えられる。なお口縁部の折り返しは人為的に打ち欠かれている。



挿図5 第29・30次調査出土銅銭

(215)は口縁が丸くて軽く外反する。肩が丸く全体にずんぐりしており、高さは38.5cmある。15世紀半ばに位置づけられる。(216)は鳶口のついた口頸部を持ち、肩は丸くなだらかである。高さは23.5cmある。16世紀に位置づけられる。(217)はいわゆるお歯黒壺で、口頸部を欠くが肩が丸いタイプで、内側に鉄漿が付着している。肩が張りずんぐりしたものもある。(218～221)は口縁下の沈線までで播目が止まるIV群の播鉢である。(223)は大きく開く直径が24cmの鉢で内側に扇状の櫛目がある。内側の底部から $\frac{1}{3}$ は磨滅しており播鉢としても使用したようである。(224)は星状の形をした花生けと思われる。差し渡しは17.0cmあり、高さは11.0cmを計る。越前焼は茶道具や花生など文化面の道具は少ない。

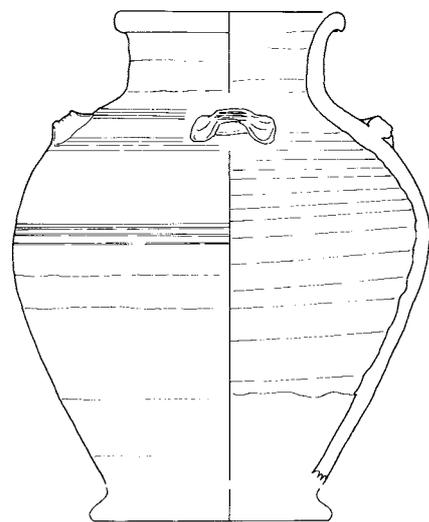
土師質土器 いずれもC・D類の土師質皿で、一乗谷では最も多いタイプである。(225)は底部が丸くやや厚い。(226)は見込みと立ち上がり間にナデの跡がよく残る。

瀬戸・美濃製品 (227～229)は天目茶碗で、(228)は直径が7.7cm程の小形の天目茶碗で、(229)は釉が茶色でかせかかっている。(230・231)は鉄釉の小壺で、体部に鎬と花文を貼り付けている。おそらく茶入れとして使用したのもので、14世紀後半から15世紀初めにかけてのものと推定される。(232～237)は灰釉皿で(233)は端反で見込みに菊の印花がある。釉が薄く口縁部が大きく外反しているところから16世紀初めと想定した。(232)は直径が16cmを超える大型の皿である。(235・236)は小形の灰釉丸皿で、後者は直径は9.7cmを計る。(237)は同じく灰釉丸皿であるが、内面にノミによる縦方向の削りが施されている。青磁菊皿を意識したものと思われる。(238)は皿というより小形の内湾する坏である。(239)は灰釉卸皿である。(240)は灰釉四耳壺で口頸部が直立し、丸い肩に耳が付く。肩と胴部に沈線が入る。15世紀頃の所産と思われる(挿図6)。

中国製陶磁器 出土した破片数は多いとはいえないが、種類のにはバラエティーに富む。(241～250)は青磁碗で、(242)は直径が17.0cmもあり碗というより鉢にちかい。無文で口縁端部がわずかに外反する。(243)は浅いタイプの碗である。(244～248)は線刻の蓮弁文碗で、(245)は口縁部がやや開いた形をしており、高台の形や釉も半透明で龍泉窯系とは異なっている。(250)の高台も低く露胎となって鉄分が浮き出している点が龍泉窯系とは異なる。(246)は細かい線刻の蓮弁が巡り、(247)の蓮弁はやや幅が広い。(248・249)は全面施釉後、高台裏だけ釉を削り取っている。(251)は青磁稜花皿で見込みには浮き彫りの双魚文がある。釉もやや厚く15世紀前半の所産であろう。

(252・253)は青磁菊皿で高台裏が白磁となっている。(256)は木瓜型の青磁坏である。(257)は花瓶の底部でおそらく鶴首が付くのであろう。

白磁は端反の皿がほとんどで、(258・259)はやや灰色がかっており、(260～263)は白い。(254)は高台部からそのまま外反するタイプである。(265)は木瓜型の小坏である。(266・267)は浅く内湾する体部にいわゆる桜高台が付く。やや古いタイプで15世紀と考えられている。(268・269)は直径3.8cm、高さ1.5cm程の浅い白磁坏で、見込みは蛇の目状に釉を掻き取っている。(270)は厚い高台の付く灰色の小坏である。量付けは露胎で鉄が浮き出ている。(271)は白磁の竹の節香炉で、釉色は灰色がかり全体に貫入がはいる。白磁の香炉は少ない。



挿図6 灰釉四耳壺 (240)

染付碗では見込みが蓮子型のC類が多い。(272)は唐草文が退化した文様の碗である。直径は16cmあるが、高さは5.2cmしかなく、浅くて大きく開く。(273)は同じくC類の碗で腰部に芭蕉文が巡る。(274)は外面に唐草文が描かれ、見込みには草花文が描かれる。(275)はD類の碗で、見込みには捻花が描かれる。高台が高くてしっかりしていることから15世紀代の所産と推定される。(277・278)の文様は「花」と思われるが、一乗谷ではあまり類例がない。(278)は呉須の発色が薄く、地の色も青みが強い。この2点は文様構成からも景德鎮系ではない可能性がある。(279)は見込みが広いD類の碗で、見込みはやや異なった十字花文が描かれている。地の部分も青みが強く、これも景德鎮系ではない可能性がある。(282)は端反皿であるが地の部分が純白に近く、呉須も青く発色している。文様構成、釉の発色が景德鎮系の染付とは異なる。(280)は碁笥底で口縁部が外反する染付皿である。外面は唐草文が退化した文様が、見込みには草花文が描かれる。この種は一乗谷では数少ないタイプである。(281～283)はB₁群の皿で外面は唐草文、見込みには玉取り獅子が描かれる。(283)は同じくB₁群の皿で外面は唐草文であるが、見込みの文様はC群に共通するものがある。(284)は外面は密に連続する唐草文で、見込みは草花文が大きく描かれている。(285)の見込みは羯磨文である。(286)はおそらく端反皿で外面は無文の可能性があり、口縁部の内側は四方禪が巡り、見込みのまわりには波状文が巡る。(287)は内湾する皿で口縁内側に四方禪がまわる。地の色や呉須の発色状態は(286)と同じである。これらはE群やB₂群に共通する点もあるが、ほとんど出土していない文様構成をもっている。(288)は染付の香炉で、これも出土例は非常に少ない。(289)は瑠璃釉の碗である。

金属 半分熔けた状態の銅(290)がまとまって出土した。量は合わせて500gほどである。元は仏具と思われるが詳細は不明。ただ火事でのような状態になったのではなく、何らかの人為的な手が加わって半分熔けたような状態になったと推定される。

石製品 (291・292)は硯で、(292)は全長5.0cm、幅2.0cm程の小形である。

4. 小 結

今回の調査では、約17m四方の屋敷に関すること、および29個体を超す越前焼の大甕埋設遺構に関して私見を述べてまとめとしたい。

中規模屋敷について

約17m四方の屋敷が非常に良好な状態で見つかった。この屋敷のあり方は、幹線道路ではなく、奥にある有力武将の武家屋敷のための路地に面している。屋敷の規模としては、これまで町屋と推定した小区画の屋敷のほぼ倍の面積を有する。小規模ながらも南を除く3方向に土塀が巡っていること（西側は隣屋敷の土塀であるが）。屋敷内は8.5m×8.7mの建物1棟だけで、建物の規模としては町屋の建物とあまり変わらない。しかし、表坪の内のような庭を有するなど、あきらかに町屋とは異なっている。

これまで調査してきた中で、この屋敷とほぼ同規模の屋敷はあまり多くない。赤淵地区の第44次調査で見つかった屋敷（44-10と44-11）が、ほぼ同じ規模である。これら2屋敷の規模は約23m四方とやや大きい。屋敷内の建物は44次の両方ともやや小さいようである。土塀を巡らしていない点も少し異なっている。屋敷の位置としては奥にある大規模屋敷の路地に面している点は共通している。なお44-11から大工道具のさげふりや茶の湯で使用する茶笥が出土しており、44-10からは火縄銃の部品と弾丸大50発・小200発、弾丸の地金（鉛）3.75kg=1貫目出土している。このことからこれら44次地区の屋敷は、職人頭のような人物の屋敷と推定されている。これに対して第49次調査の推定武屋敷は、東西方向の大通りに面し、規模が20m四方で表通りに面して土塀がある。屋敷内の建物は11.4m×6.7mの主屋と2棟ほどの付属屋からなる。規模がやや大きい点や、表通りに面している点などが第30次調査の屋敷とは異なっている。西隣の第50次調査の屋敷は30m×20mともう一回り屋敷の規模が大きい。なおこれらの屋敷は、倍の規模の屋敷であったのを2つに分割している可能性がある。第52次調査の推定武家屋敷52-7は幅2.7mの裏通りに面し、規模は20m四方ある。表通りに面した所だけ土塀があった。建物の規模ははっきりしないが、建物内の地下に備蓄銭3784枚が埋納されていた。この屋敷も北側の東西道路までの規模の屋敷だったのを北側半分を小区画の町屋に分割している。

このようにいくつか同規模の屋敷が見つかるが、その性格はいずれも中級クラスの武家屋敷もしくは職人頭の屋敷と推定されており、第30次調査の屋敷は中級クラスの武家屋敷だったと考えられる。屋敷のあり方として、奥の大規模屋敷の路地に面するという点では44次調査の2屋敷と共通しており、あるいは奥の屋敷と何らかの身分的な関係を有していたことも考えられる。これに対して他の屋敷は、大通りに面していたりして比較的独立性が高いように思われる。なお第51次調査の「医師の家」の規模は、地口14m×奥行き30mでほぼ倍の大きさがある。このため表の主屋だけでなく、裏手にあたるところにいくつかの付属屋がある。また表通りに面しては土塀があり、薬医門がつく。土塀と主屋の間は露地庭となっている。

越前焼大甕埋設遺構について

今回の調査では、29個体の越前焼大甕が埋設されていた。これは1カ所に埋設されていた甕としてはもっとも多い部類にはいる。これまで一乗谷ではいくつかの所で数個体以上の越前焼の大甕が埋設され

ていたが、埋設の仕方や埋設位置によっていくつかに分類できる。

武家屋敷に埋設されている例としては、第24次調査のS X 855がある。台所など雑舎が建っている近くに6個体ほど3個体が2列に埋設されていたが、列と列の間は少し開く。武家屋敷にまとまった数の越前焼大甕が埋設されることは少なく、この第24次の例以外にはない。

町屋に越前焼大甕が埋設されている例は多い。

a. 大きい土壌の中にいくつかの甕を並べて設置し焼土で埋める例。

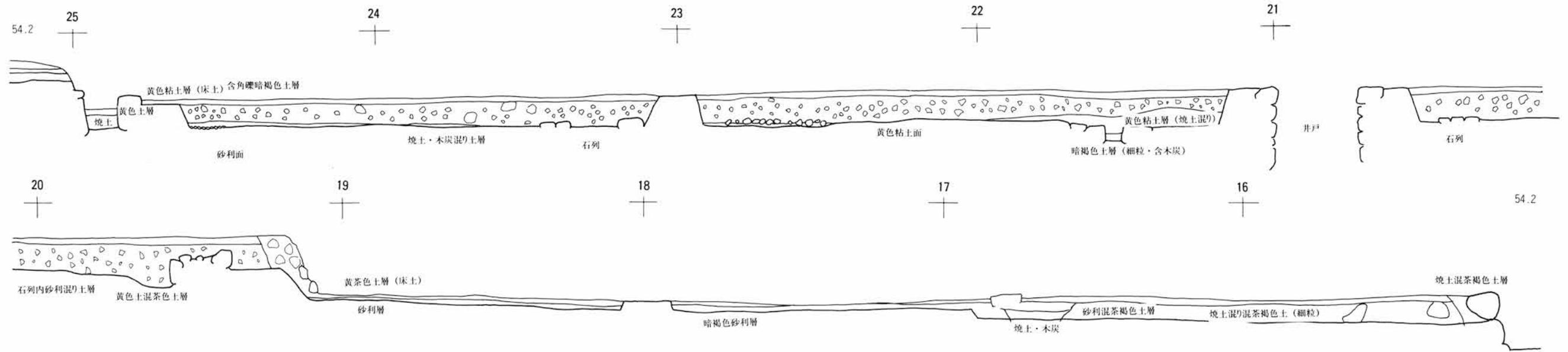
第15次調査のS K 452で深さ0.6m程の不成形な土壌に14個体ほどの甕が設置され、個々の甕の周囲は焼土が詰まっていた。この土壌には覆屋S B 412があった。第35次調査のS X 1388の場合はよく似ているが甕を設置していた土壌が方形で、甕は1隅を欠くが27個体を5個×6列にきちんと並べられていた。第29次調査の例では町屋の中に12個体の甕が8個体S X 1098と4個体S X 1097にわけて設置されていた。これらはいずれも深さ0.6m程の土壌の中に設置され焼土で埋められていた。同様な例としては第35次調査のS X 1386がある。

b. 土壌をあまり掘らずに設置している例で甕を固定するのに焼土を使っていない。この場合きちんと並べる例といくつかまとまっているがあまりきちんと並べない例などがある。

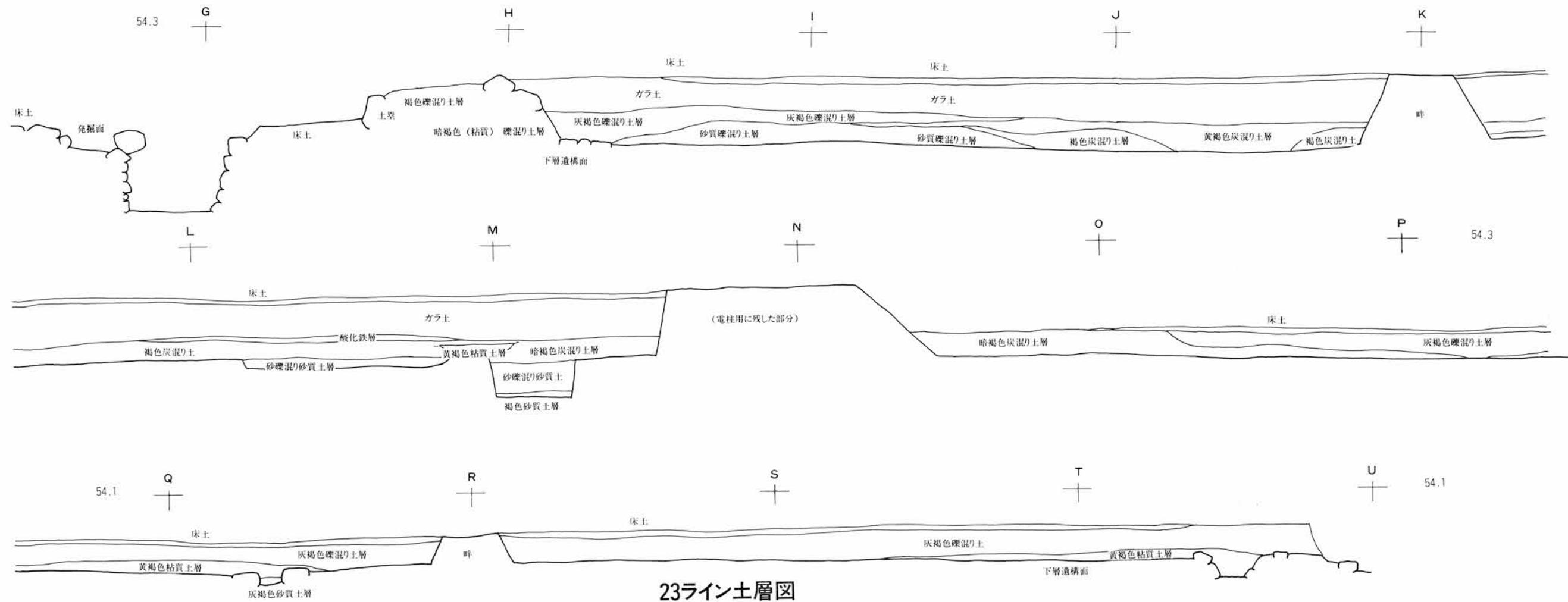
第36次のS X 2127は前者の例で、17個体の甕が方形に並んではいないが列としては整っている。第36次のS X 2128は8個体の甕が5個体と3個体の2列に並んでいる。これに対して第44次のS X 2576の場合は13個体の甕が設置されているが、設置の仕方にまとまりを欠いている。このほか4～5個体並べて設置されている例は多い。

こうした違いは大甕が並んで設置されていてもその使い方や用途の違いがあることを示している。今回の第30次のS X 1224の場合は、きちんとした方形土壌ではないが、焼土を使って甕を固定しており、そうした点ではaの例に近い。甕に黒い付着物もみられるが、これが何であるかは現在のところ不明である。なお、第29次調査の町屋で甕が設置されているS X 1097・1098は染め物に関する甕でないかと推定している。

第1図 第30次調査土層図



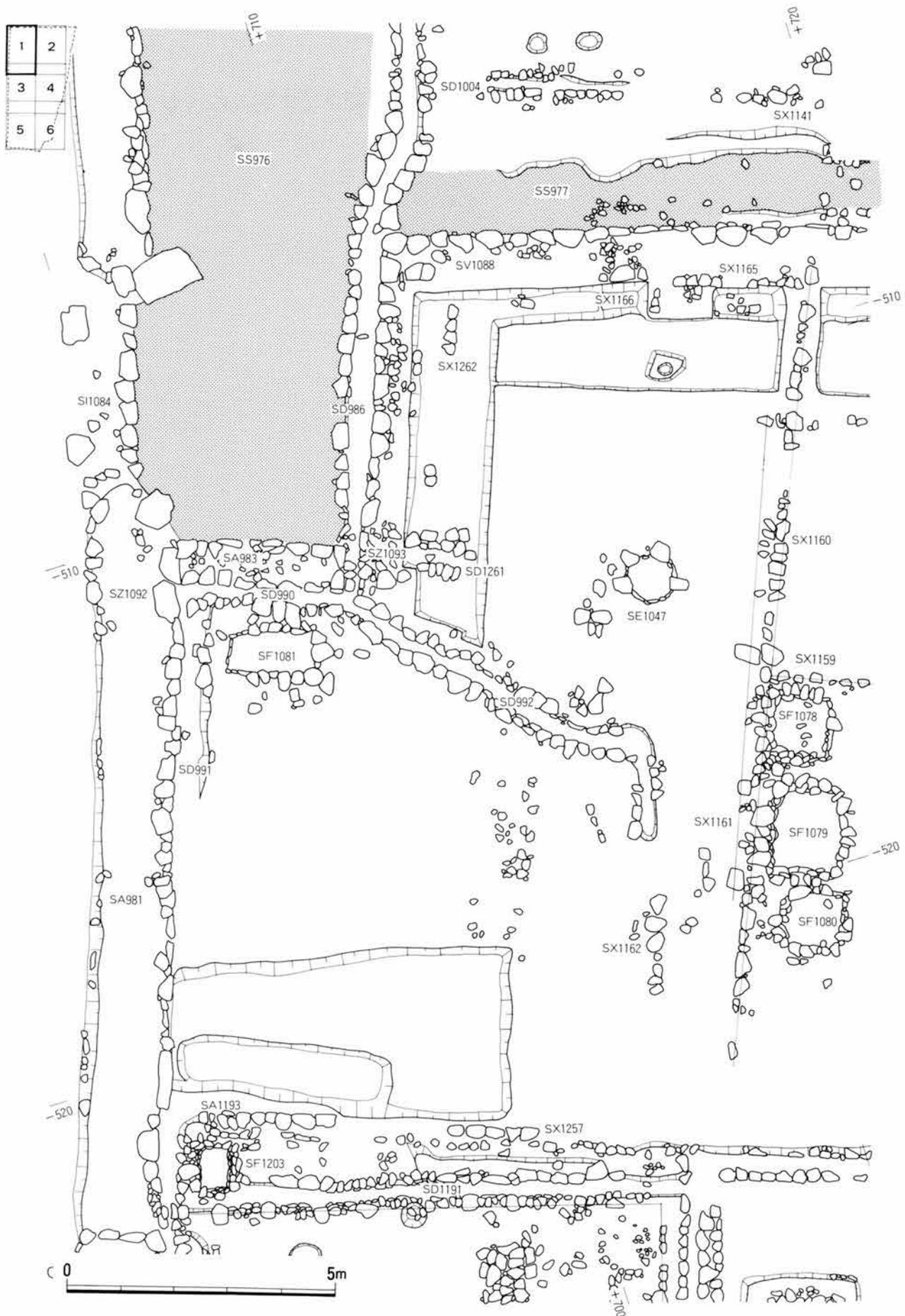
Rライン土層図



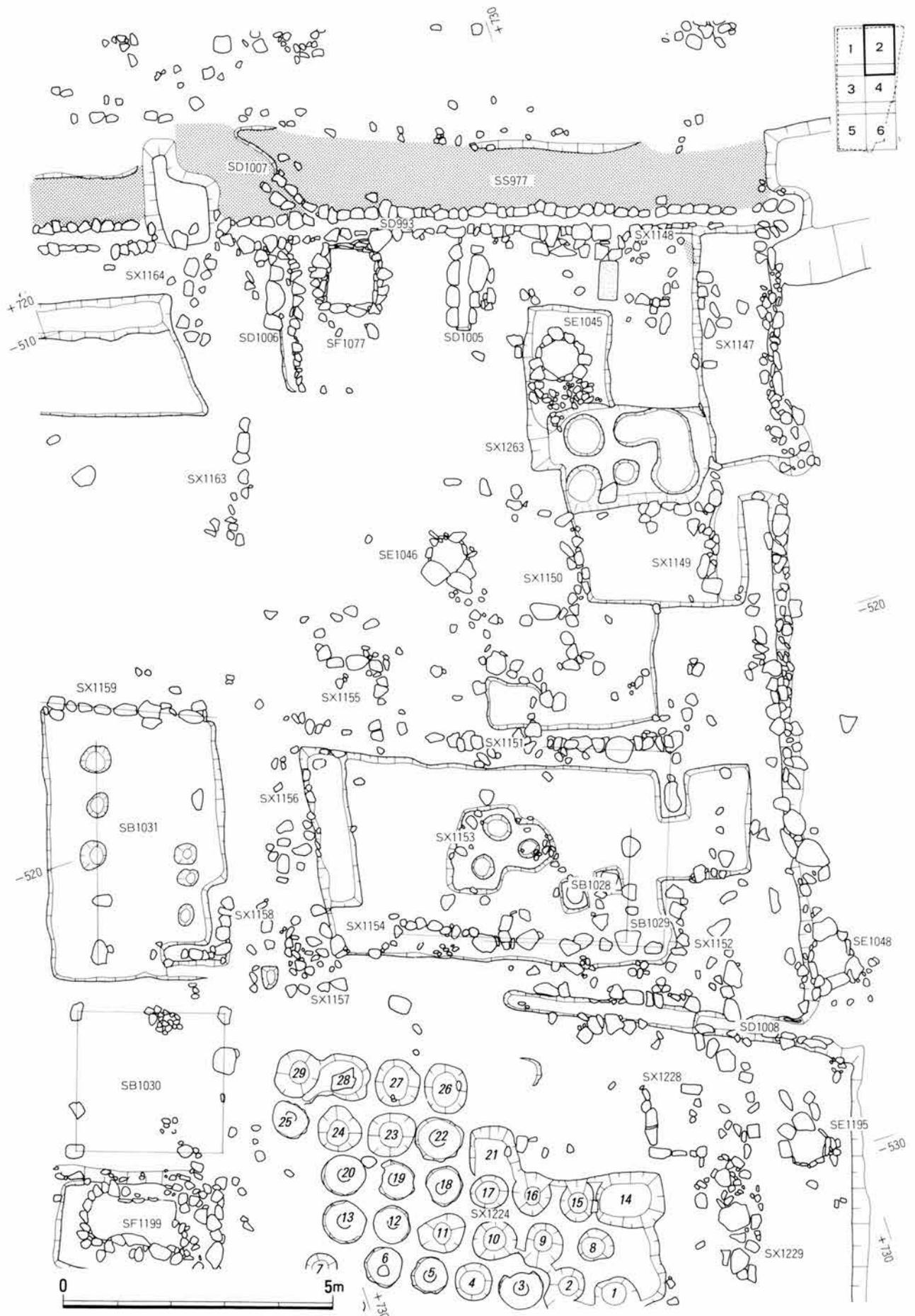
23ライン土層図



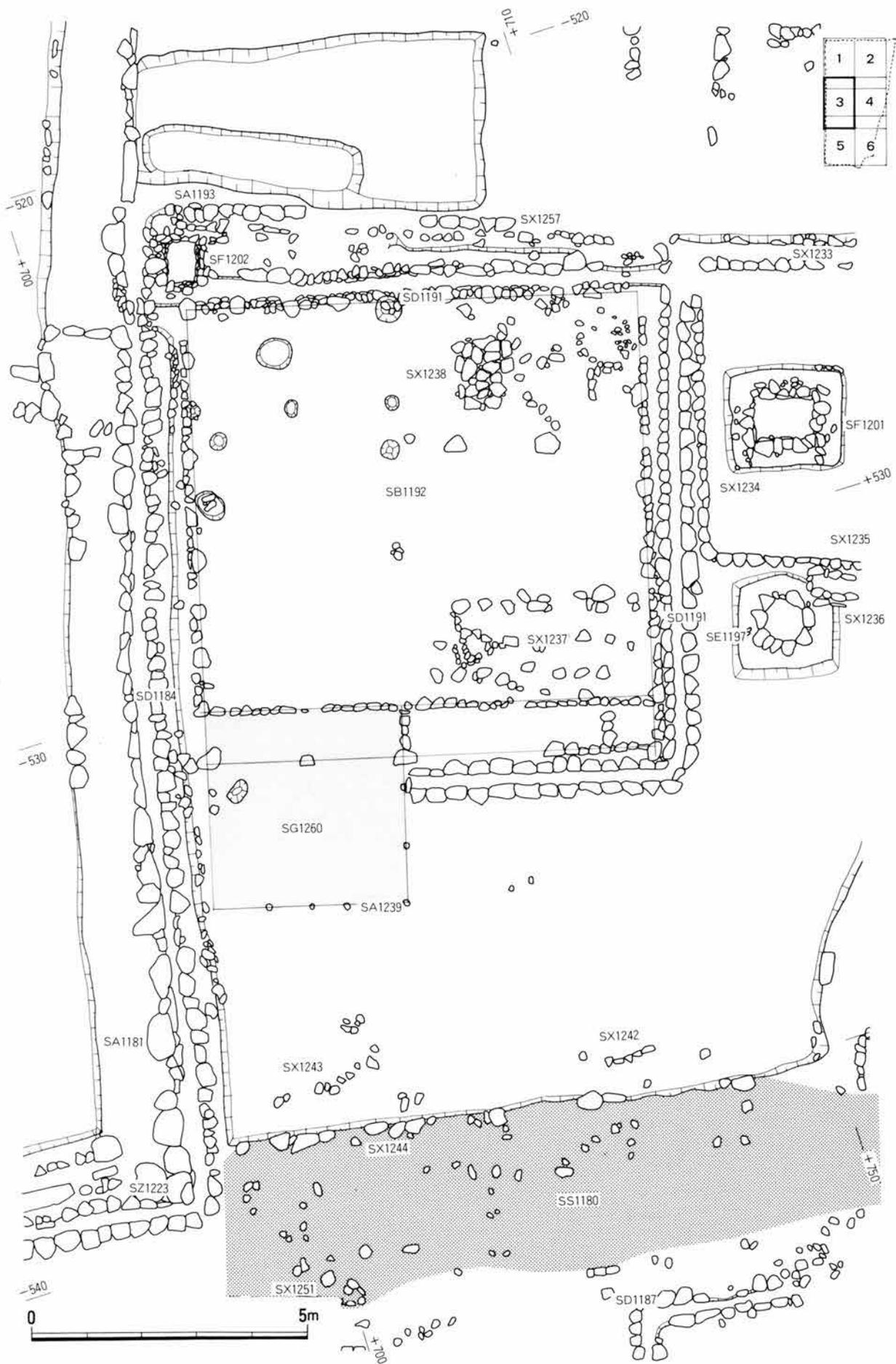
第 2 図 第29・30次調査遺構詳細図(1)



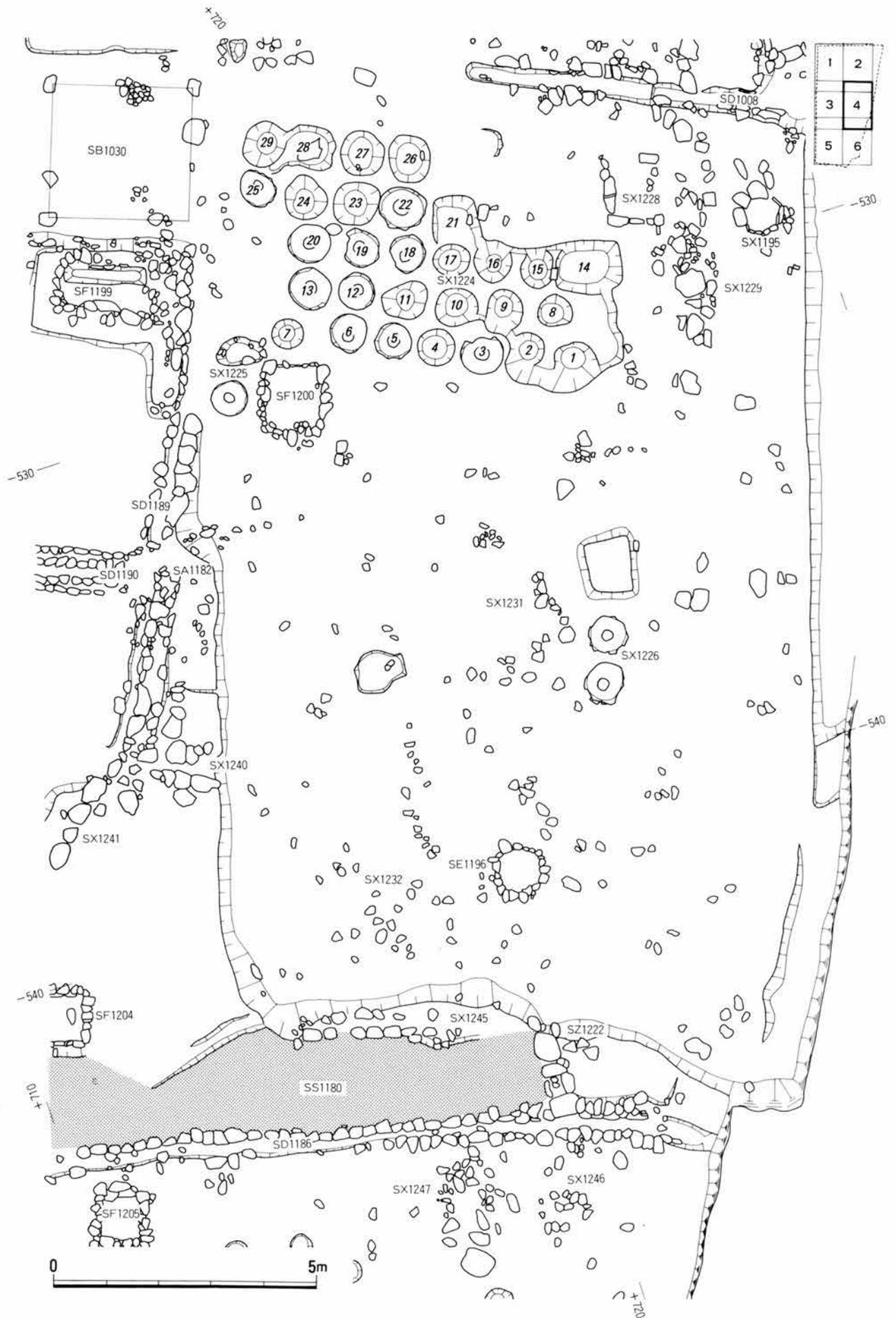
第3図 第29・30次調査遺構詳細図(2)



第4図 第29・30次調査遺構詳細図(3)



第5図 第29・30次調査遺構詳細図(4)



第 6 図 第29・30次調査遺構詳細図(5)



第7図 第29・30次調査遺構詳細図(6)





(北から)



(南から)



区画A-1

(北から)



区画A-2

(北から)



区画A-2

石積遺構
SF1078~1080
石列SX1159
建物SB1031
(西から)

第29・30次調査

区画A-2

溝SD933
SD1005
井戸SE1045
(北から)



区画A-2

建物SB1028
SX1151
(西から)



区画A-1

土塚SA983
石積遺構SF1081
溝SD990・SD986
SD991・SD992
(南から)

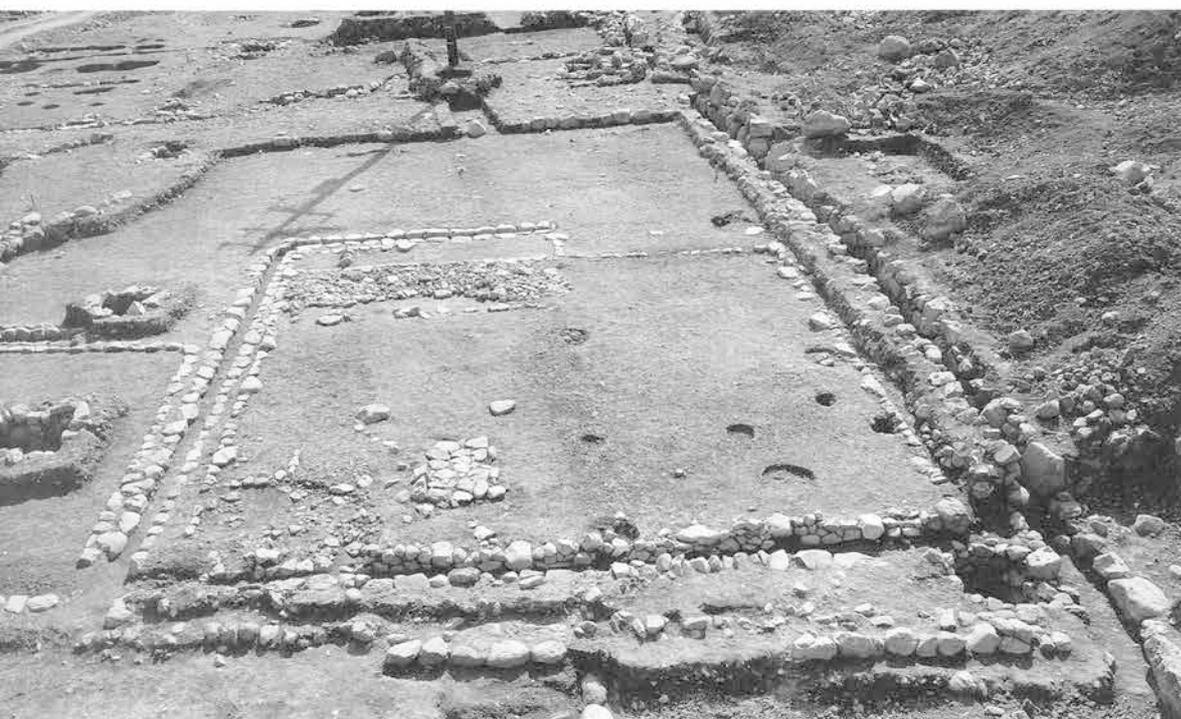




第29・30次調査

区画B・C・D
(30次地区全景)

上層
(北西から)



区画B

建物SB1192
溝SD1191・1194
土塀SA1193
(北から)



区画B

土塀SA1182
建物SB1192
溝SD1190
SX1235・1236
SX1233
SE1197・SF120
(東から)

第29・30次調査

区画B

溝SD1191
建物SB1192
石敷SX1237
庭SG1260
(南から)



区画B

石敷SX1238
溝SD1191
(北から)



区画B

柵列SA1239
庭SG1260
(東から)





第29・30次調査

区画C・B
(上層)

(東から)



区画C
全景

大甕埋設遺構
SX1224
(北から)



区画C

大甕埋設遺構
SX1124
石積遺構
SF1200
(南から)

第29・30次調査

区画D・E
全景



(北東から)

区画E



溝SD1186
石積遺構SF1205
(北から)

区画E



土塚SA1183
石積遺構SF1211
SF1210・1209
(南から)



第29・30次調査

- ◀ 道路SS977
(東から)
- ▶ 道路SS1180
(西から)



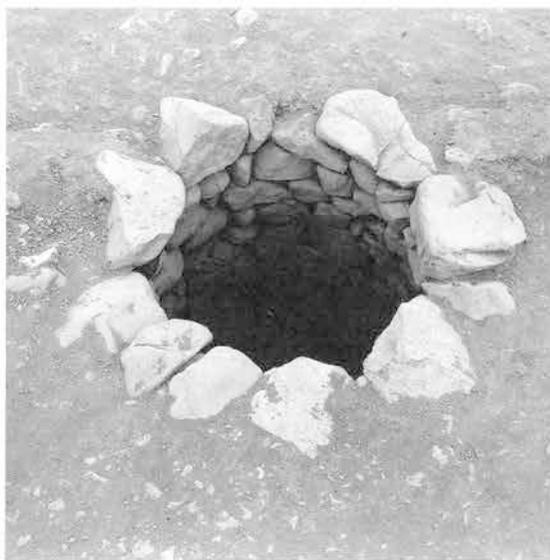
- ◀ 溝SD1184
石積遺構SF1203
(北から)
- ▶ 溝SD1185
石積遺構SF1214
(北から)



- ◀ 暗渠SZ1222
(北から)
- ▶ 石積遺構SF1078~80
(北西から)

第29・30次調査

◀ SE 1197
▶ SE 1196



◀ SE 1198
▶ SF 1201



◀ SF 1204
▶ SF 1211

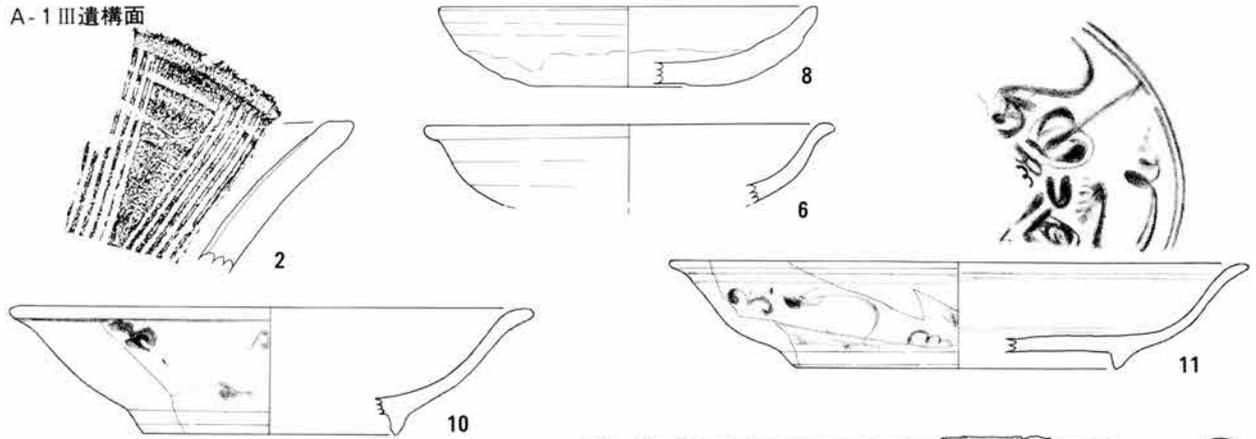


◀ SF 1199
▶ SF 1200
SX 1225

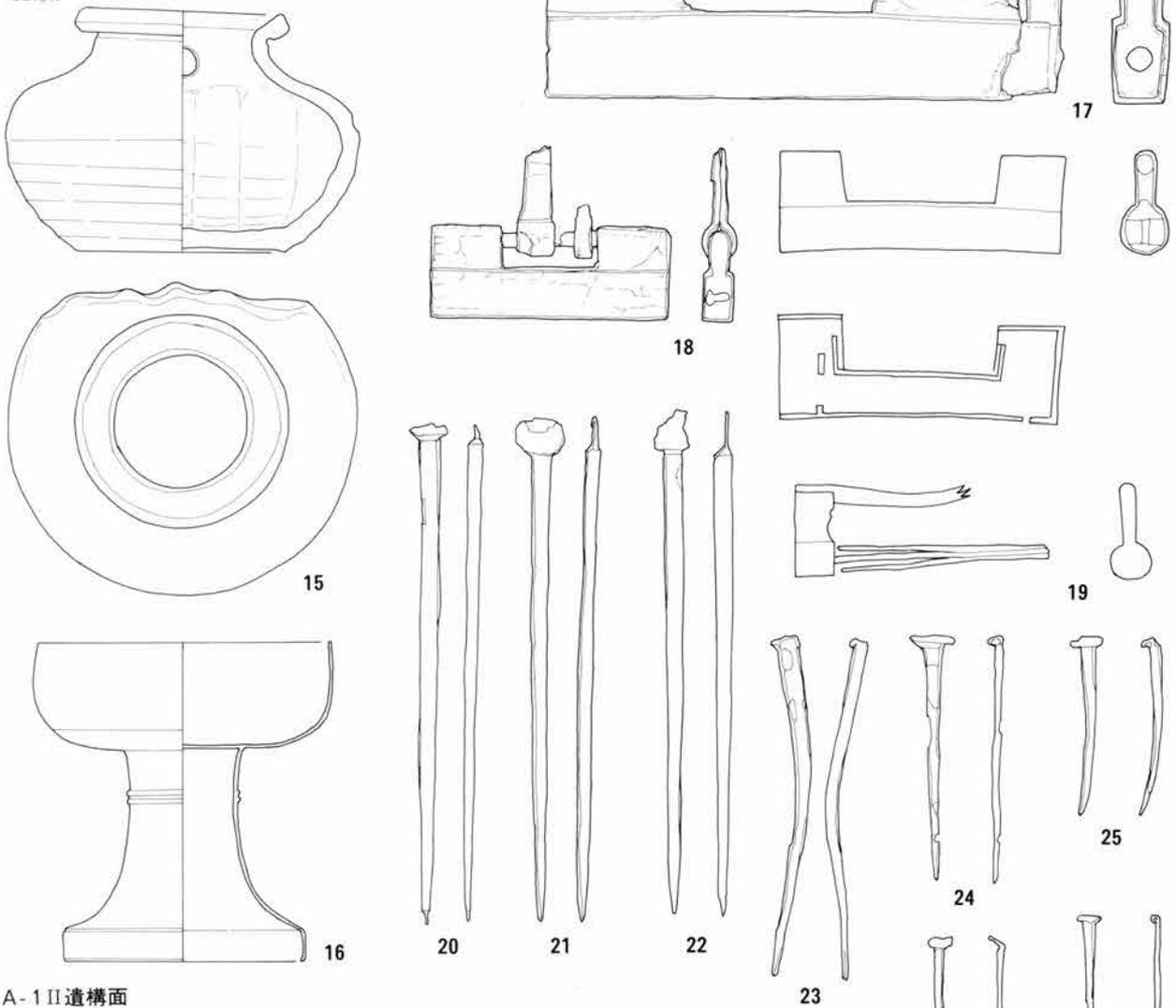


第8図 第29・30次調査出土遺物(1)

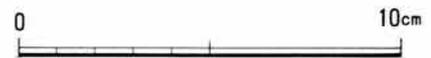
A-1 III遺構面



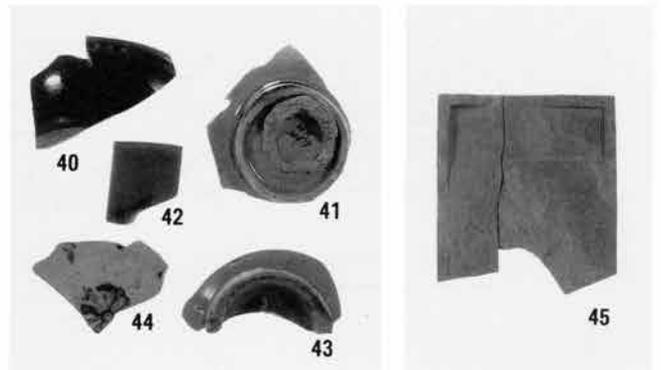
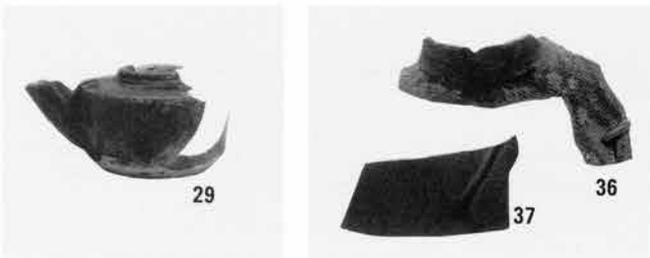
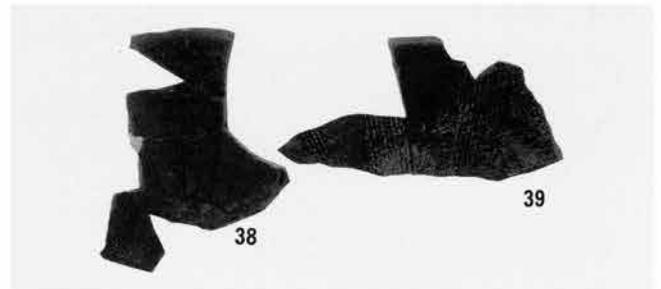
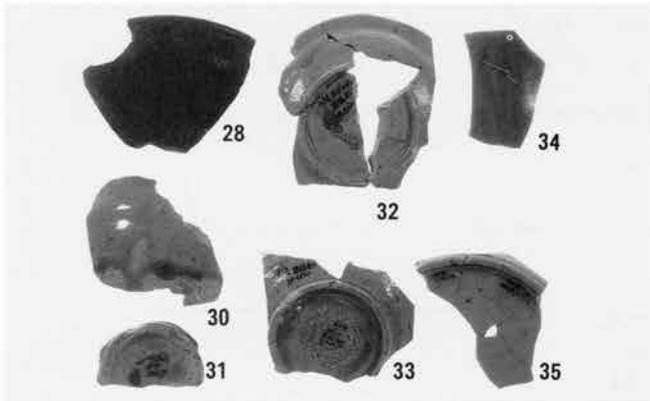
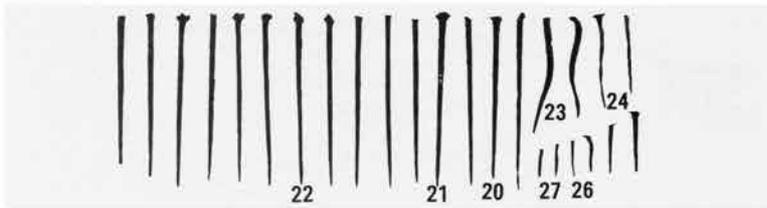
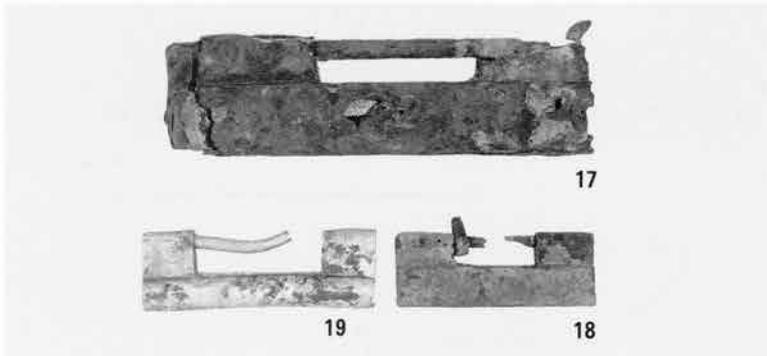
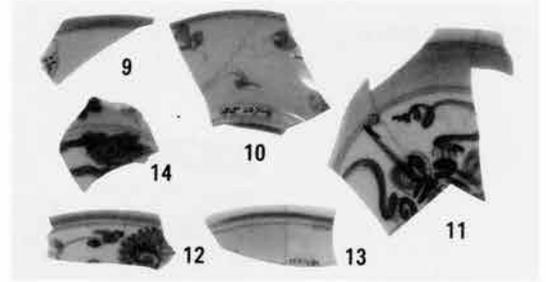
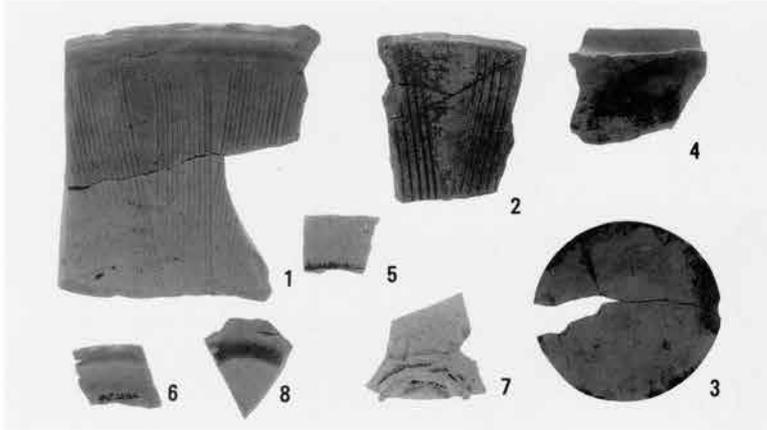
SE1047



A-1 II遺構面



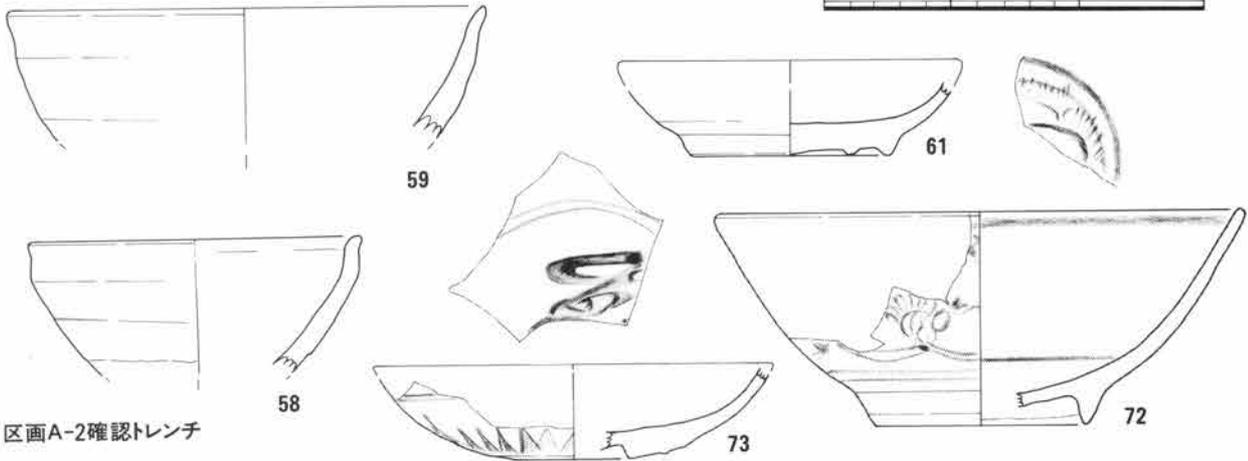
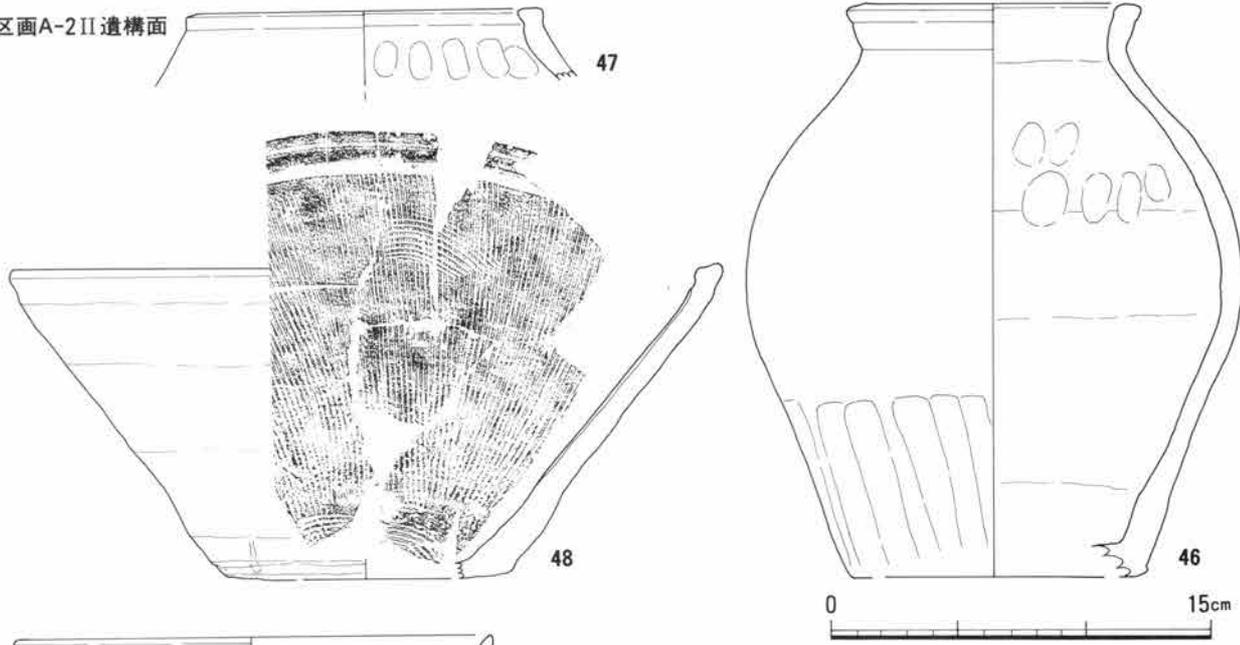
越前焼播鉢2 灰釉皿6・8 染付皿10・11 鉄釉一輪挿15 金属製品仏餉器16 錠前17~19 釘20~27 鉄釉水滴29 灰釉碗30



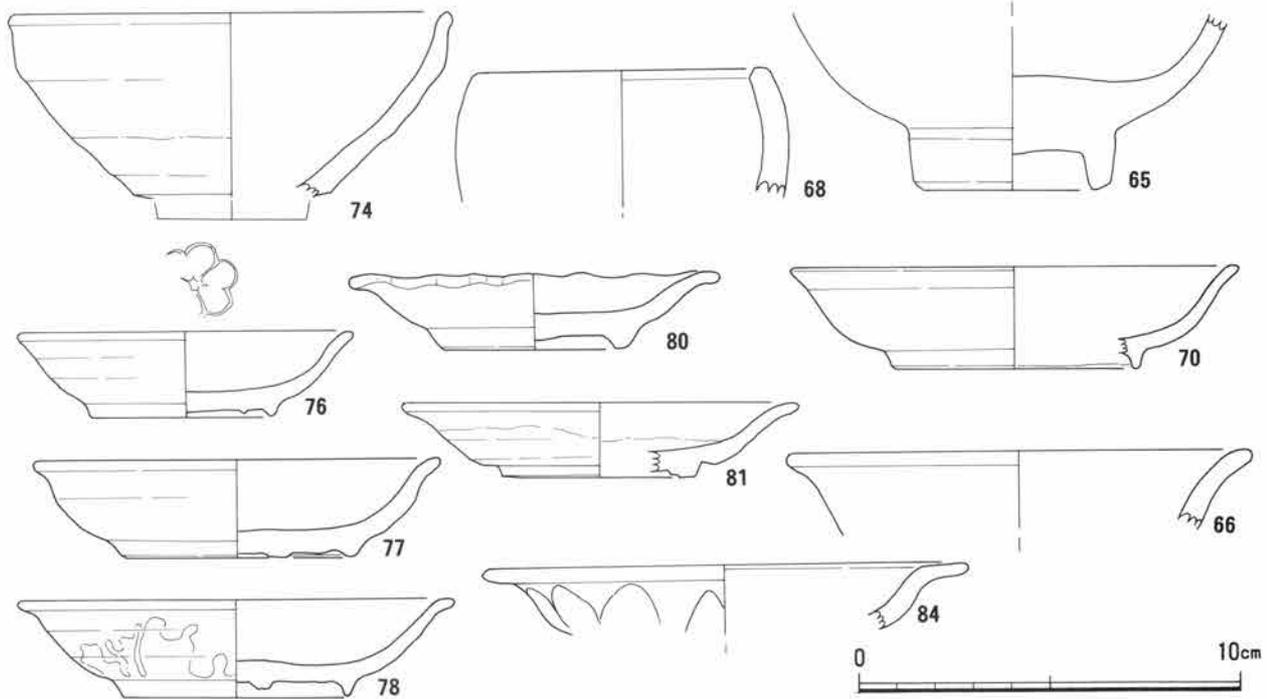
区画A-1Ⅲ遺構面 越前焼播鉢1・2 土師質皿3 羽釜4 灰釉碗5 皿6~8 染付碗9 皿10~14 SE1047 鉄釉一輪挿15
 金属製品仏餉器16 錠前17~19 鉄釘20~27 区画A-1Ⅱ遺構面 鉄釉碗28 水滴29 灰釉碗30・31 皿32・33 青磁碗34
 白磁皿35 区画A-2Ⅲ遺構面 越前焼播鉢38・39 鉄釉碗40 灰釉碗42 皿41 青磁碗43 染付皿44 石製品硯45

第9図 第29・30次調査出土遺物(2)

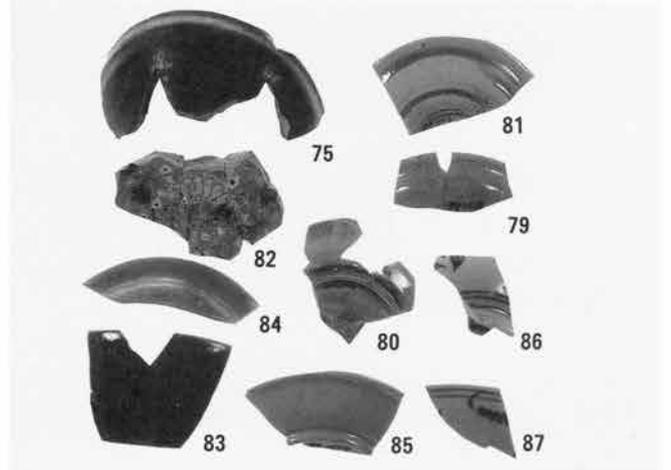
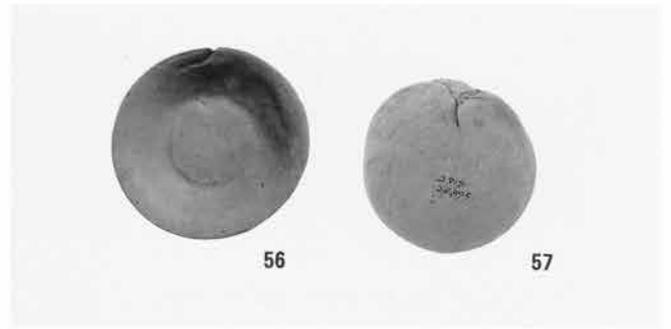
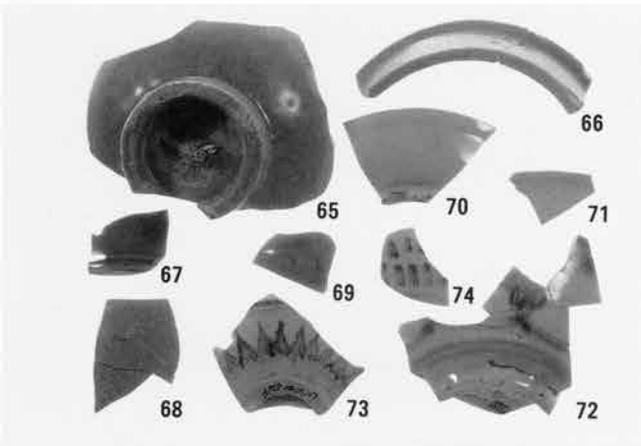
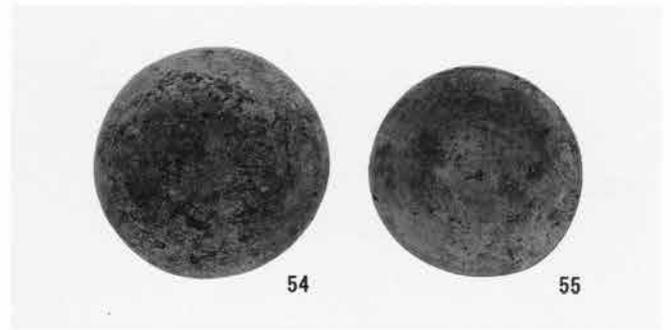
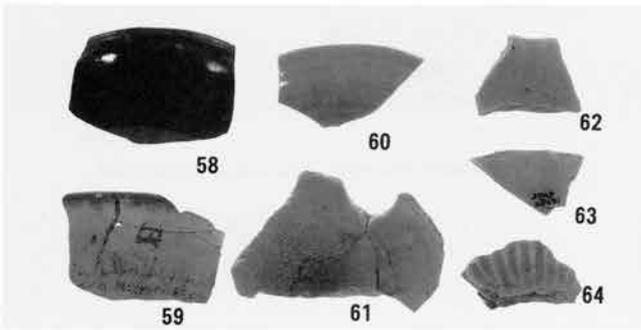
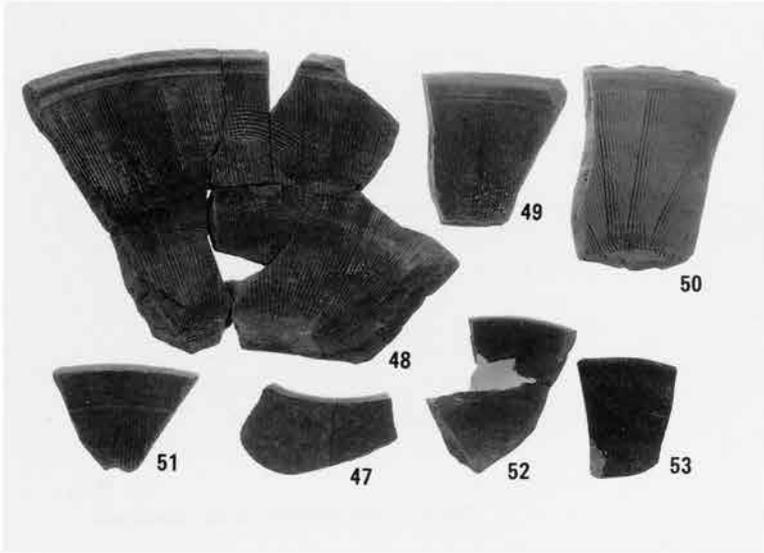
区画A-2II遺構面



区画A-2確認トレンチ



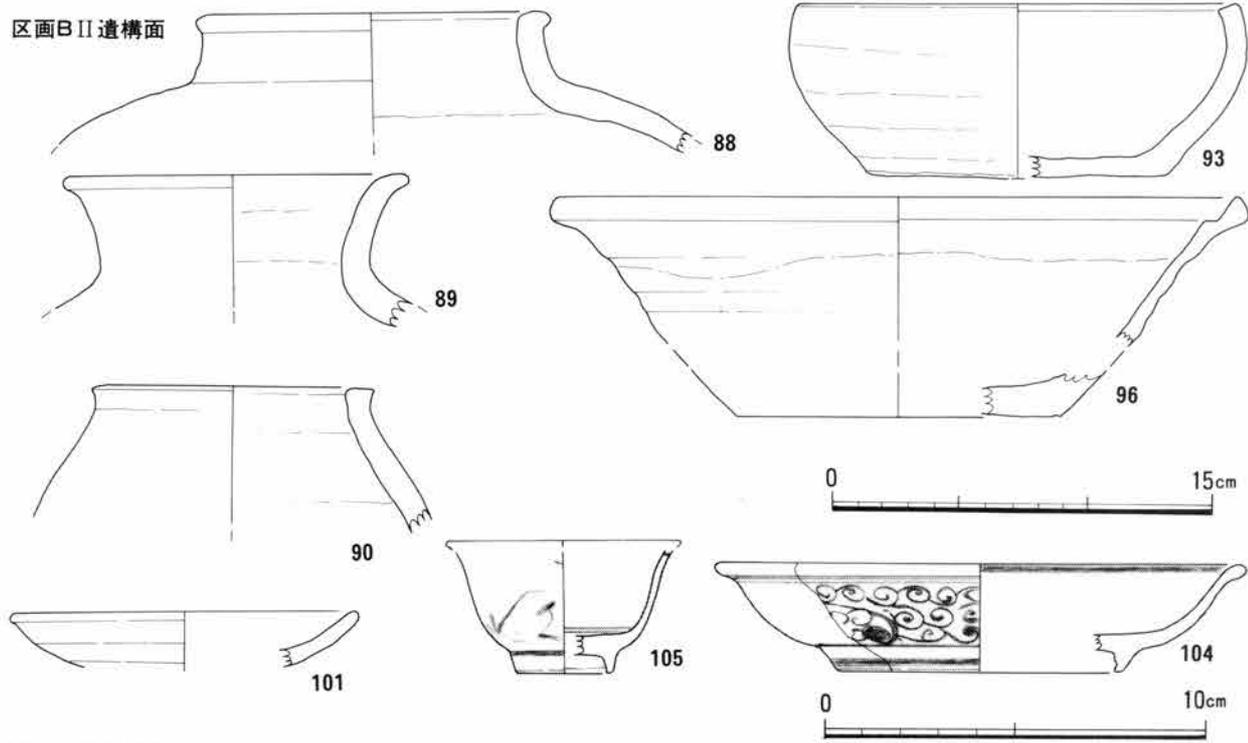
越前焼壺46・47 播鉢48 鉄釉碗58・59 灰釉皿61 青磁碗65 皿66 白磁皿70 灰釉皿76~78、80・81 青磁皿84 香炉68



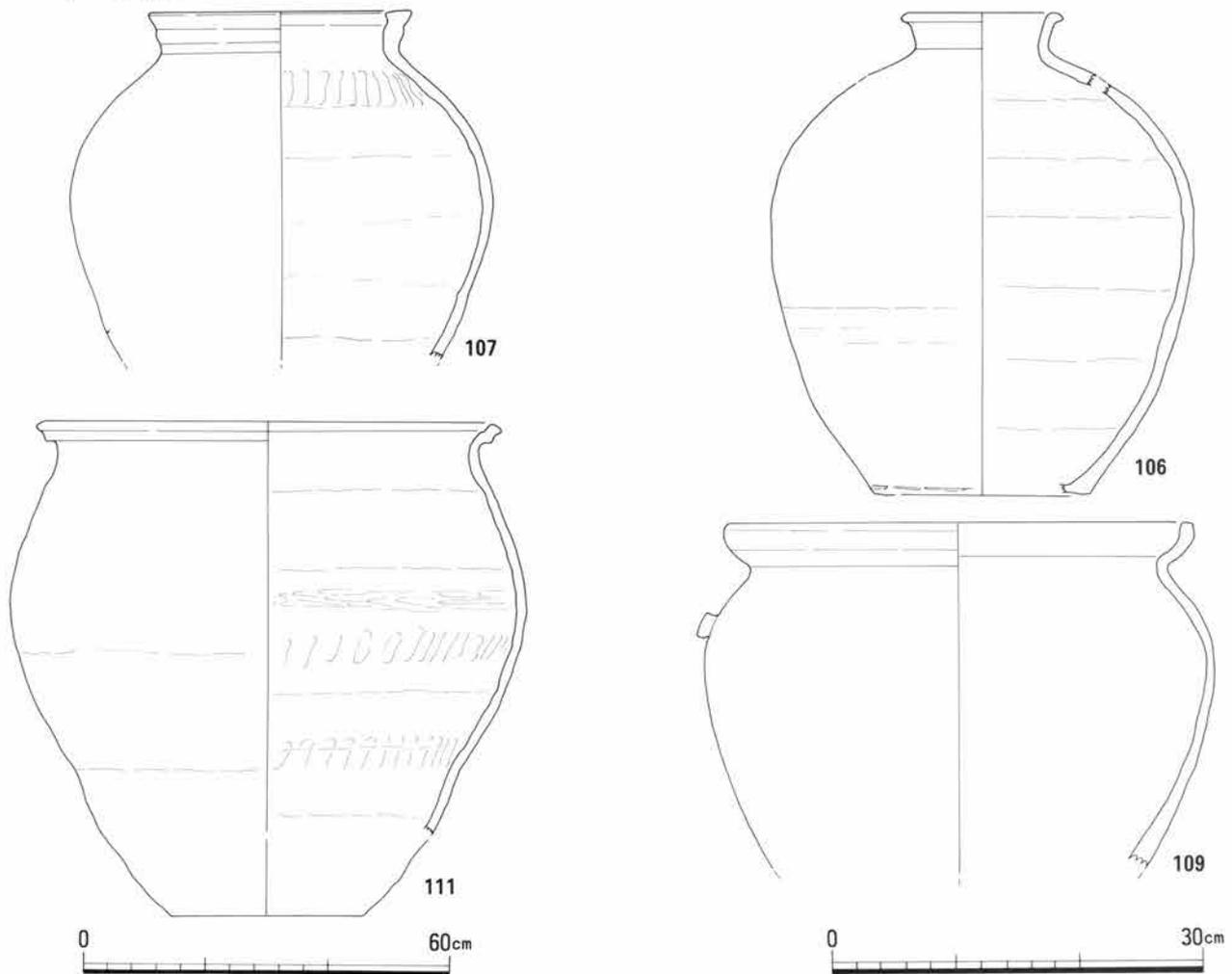
区画A-2 II遺構面 越前焼壺46・47 擂鉢48～51 鉢52・53 土師質土器皿54～57 鉄釉碗58・59 灰釉皿60～64
 青磁碗65 皿66 香炉67～69 白磁皿70・71 染付碗72 皿73・74 区画A-2確認トレンチ 鉄釉碗75 灰釉皿76・78～81
 銅緑釉皿82 青磁碗83 皿84 白磁皿85 染付碗86・87

第10図 第29・30次調査出土遺物(3)

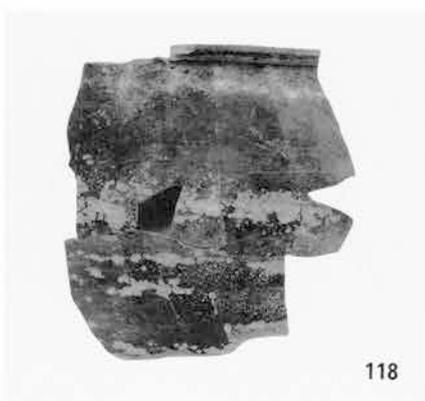
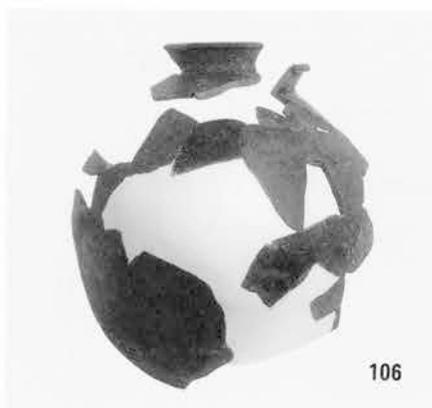
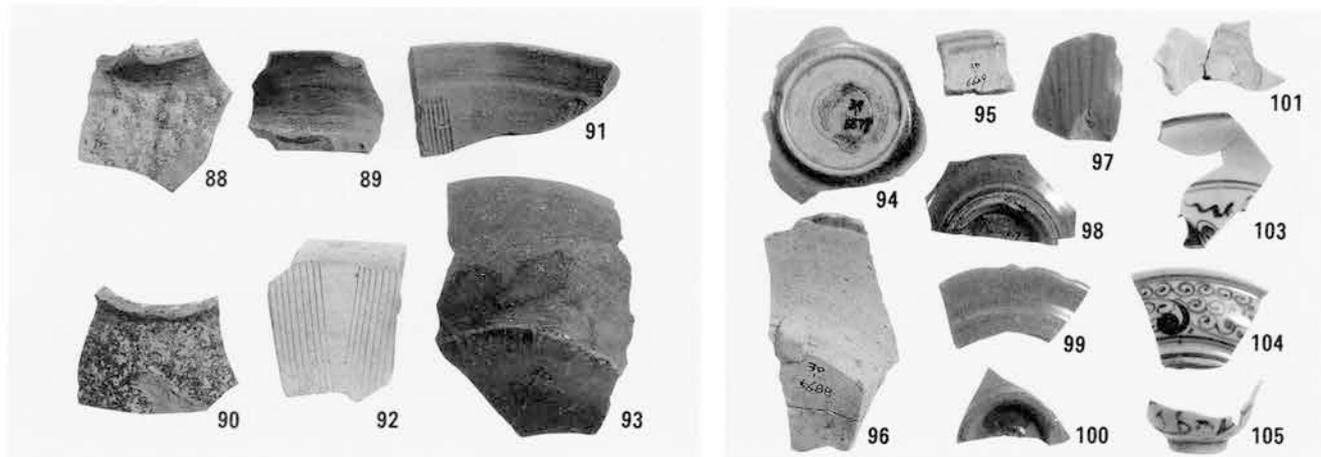
区画B II 遺構面



区画C III 遺構面

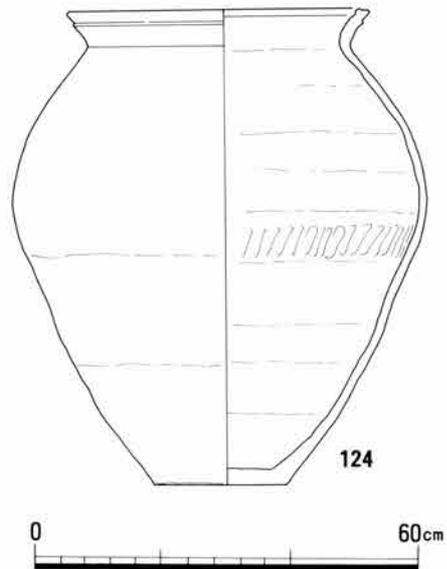
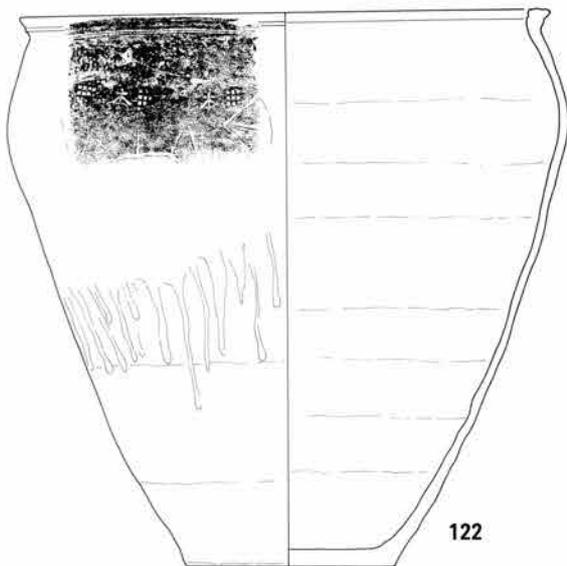
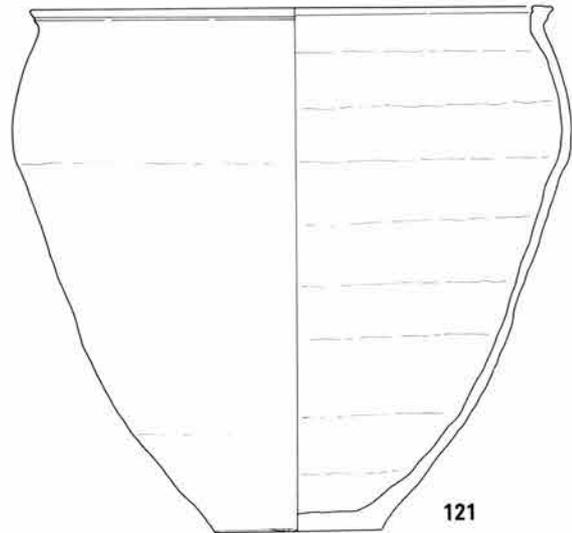
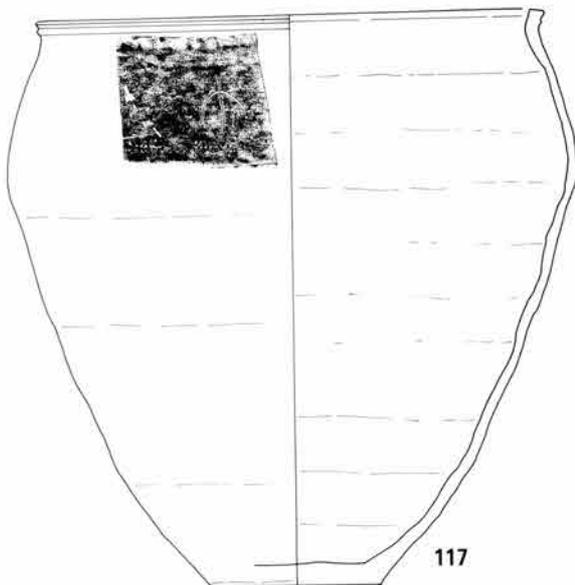
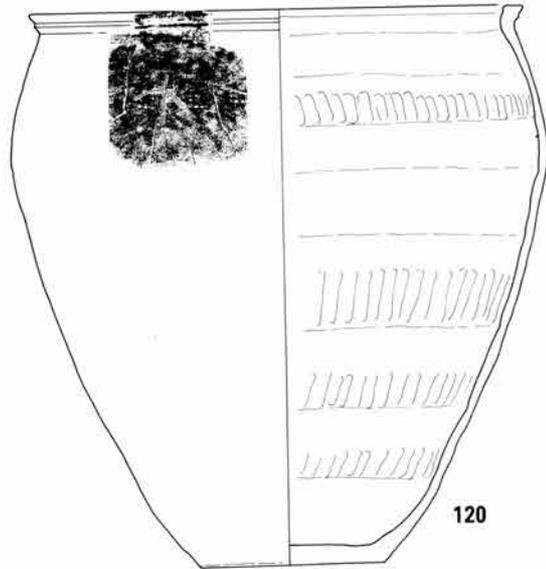
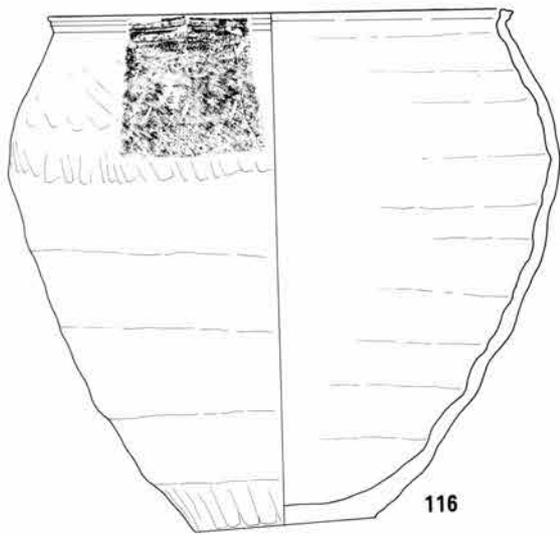


越前焼壺88~90 鉢93 灰釉折縁鉢96 白磁皿101 染付皿104 坏105 越前焼壺106 甕107・109・111

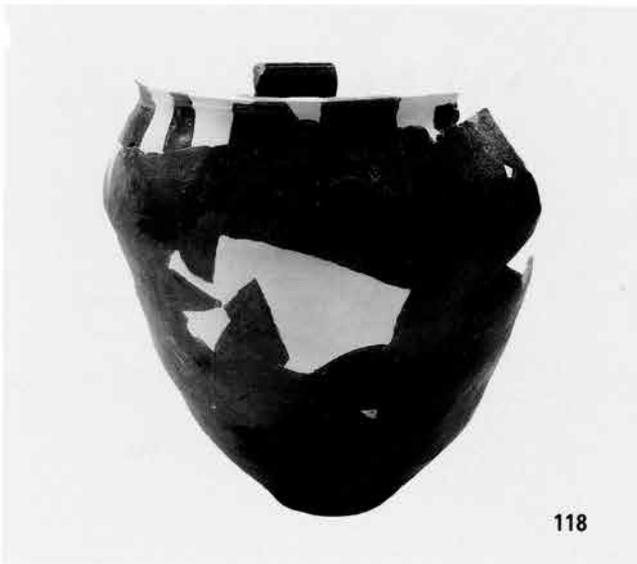


区画BⅡ遺構面 越前焼壺88~90 搦鉢91・92 鉢93 灰釉皿94 鈿皿95
折縁鉢96 青磁碗97・98 皿99・100 染付皿103・104 坏105
区画CⅢ遺構面 越前焼壺106 甕107・108・110・112・113・115・118・119

第11図 第29・30次調査出土遺物(4)

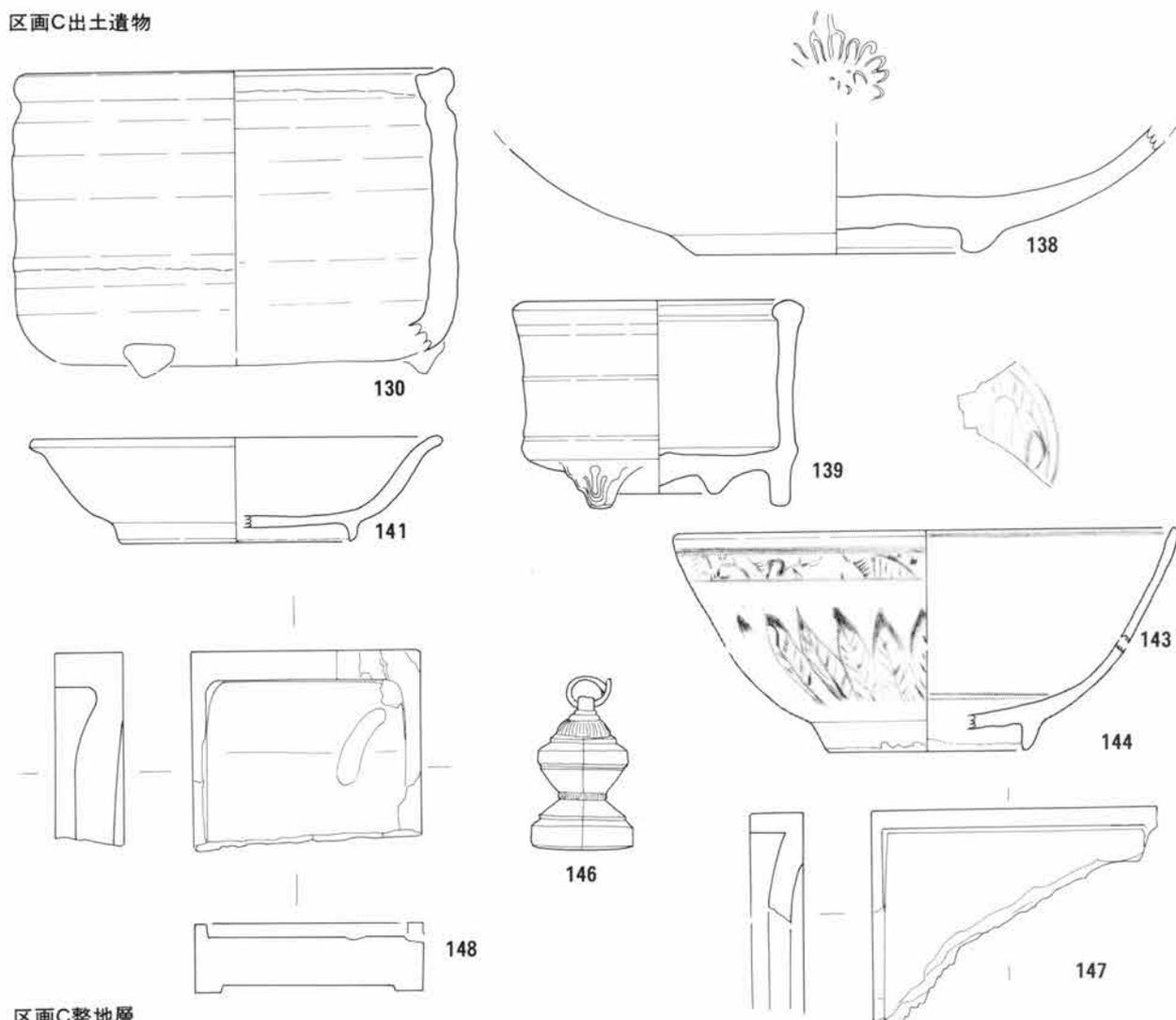


0 60cm

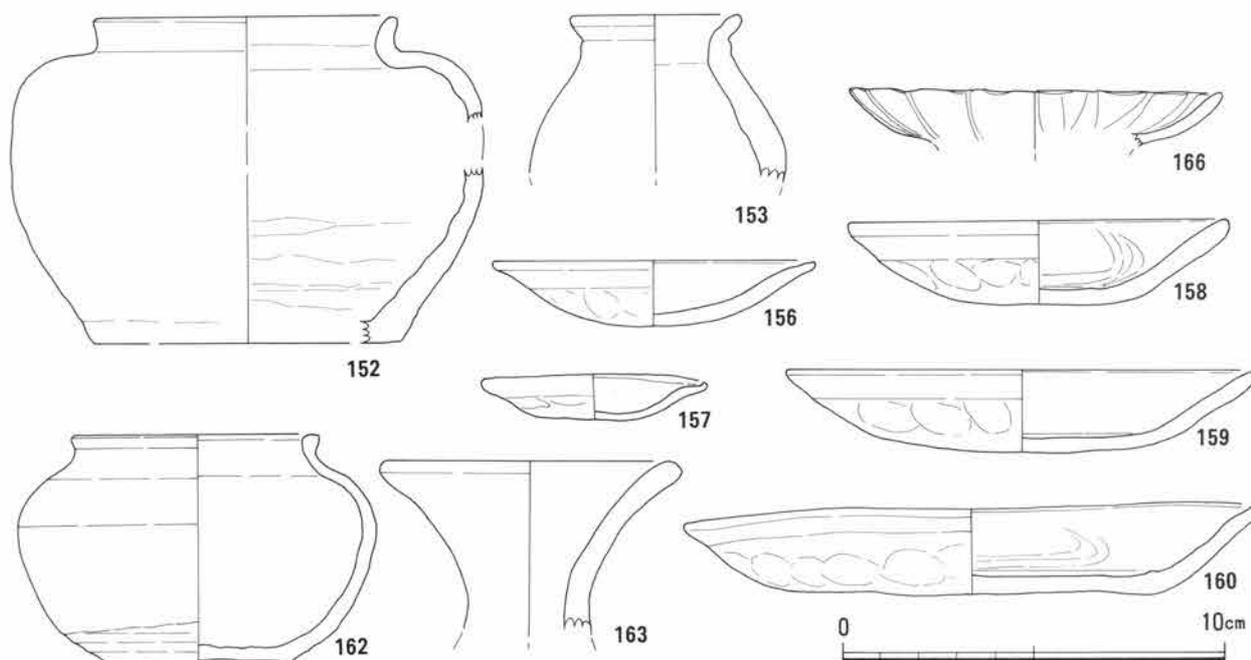


第12図 第29・30次調査出土遺物(5)

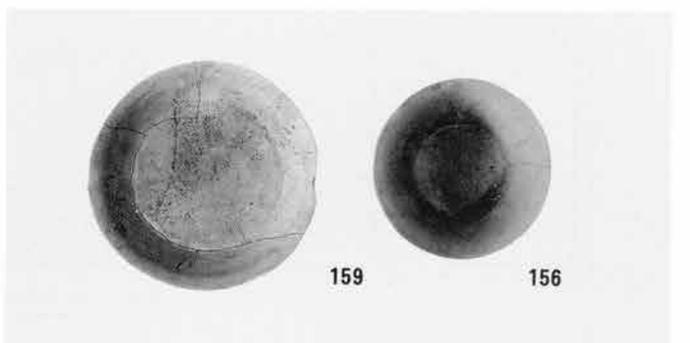
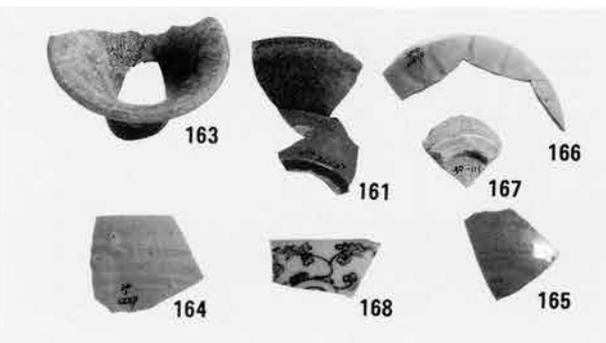
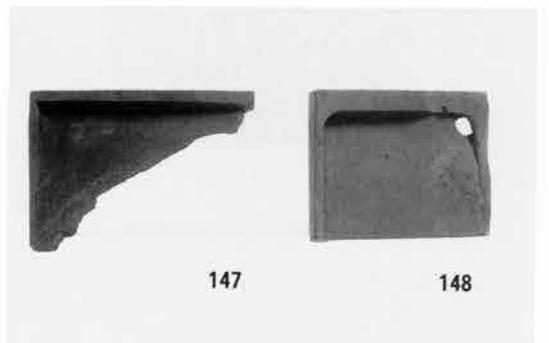
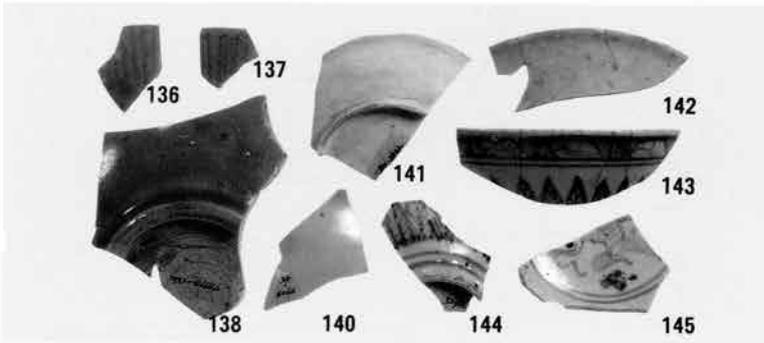
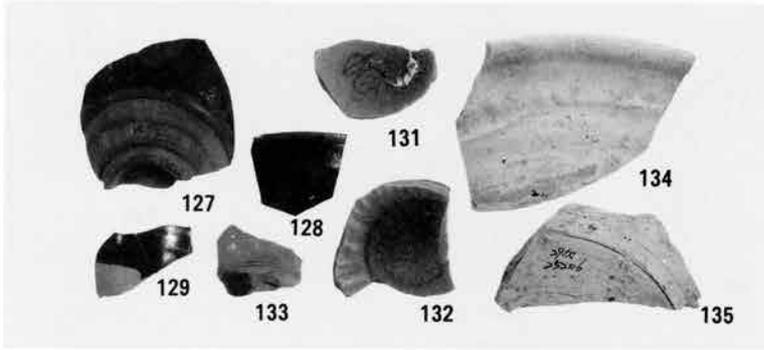
区画C出土遺物



区画C整地層

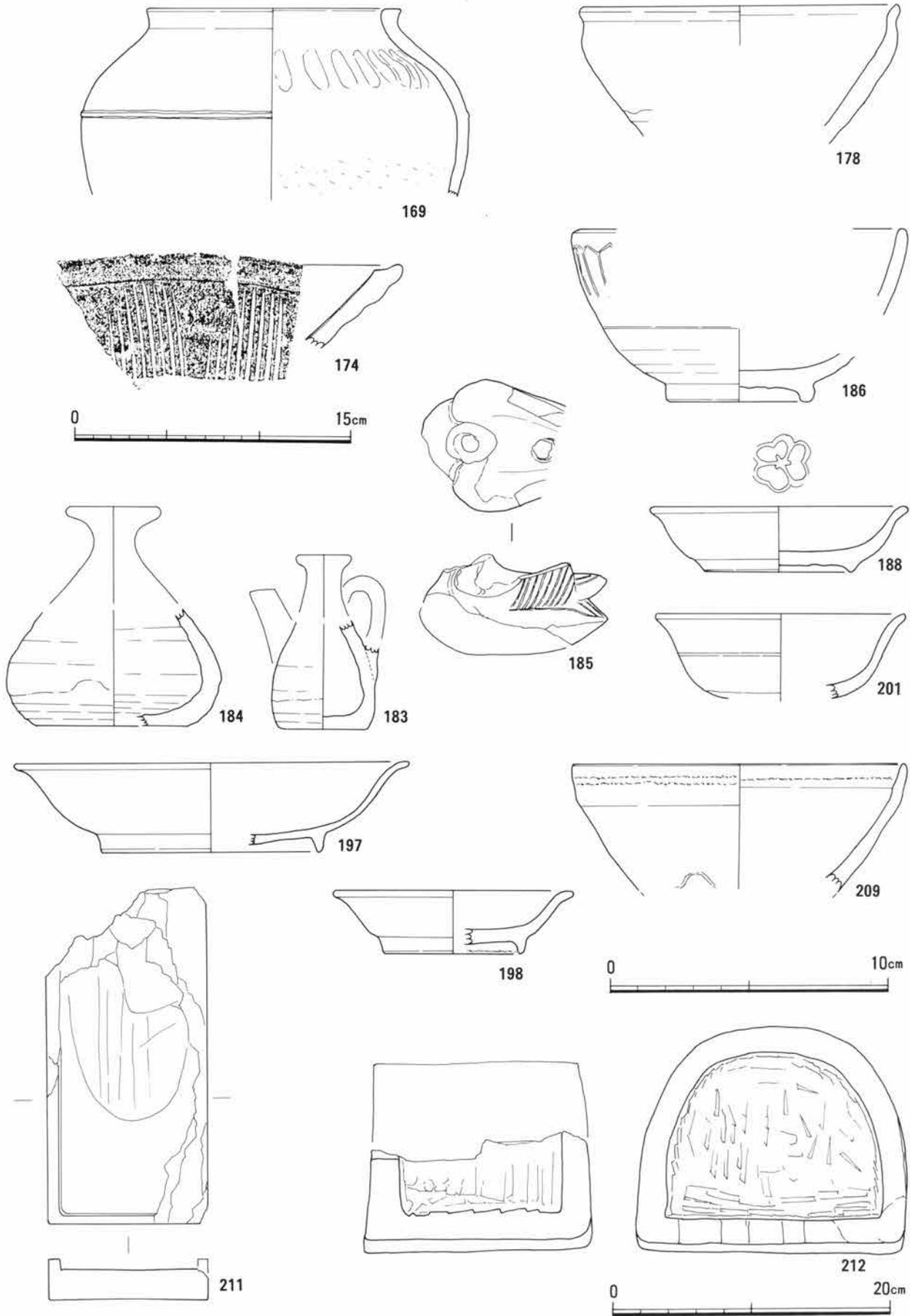


鉄釉水指130 青磁鉢138 香炉139 白磁皿140 染付碗143・144 金属分銅146 石製品硯147・148 越前焼壺152・153
土師質皿156～160 鉄釉德利163 小壺162 青磁皿166

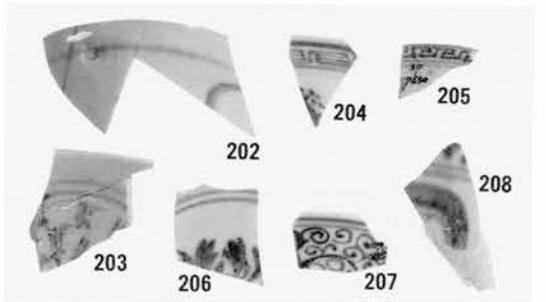
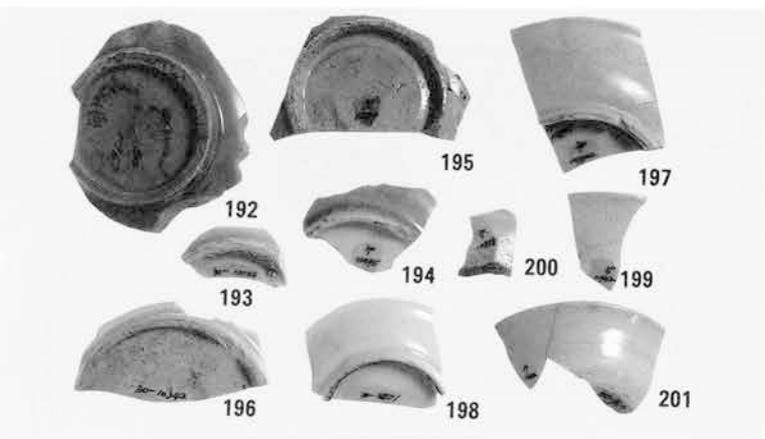
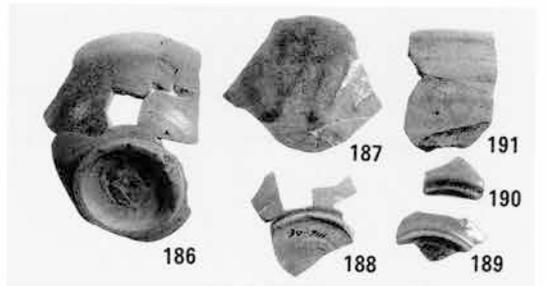
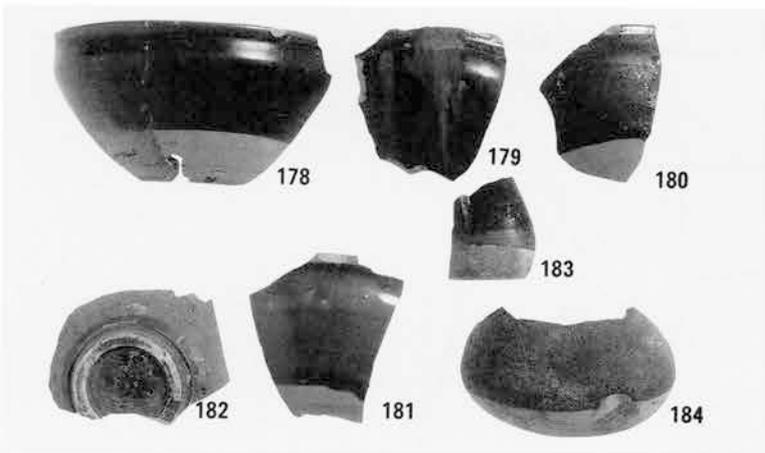
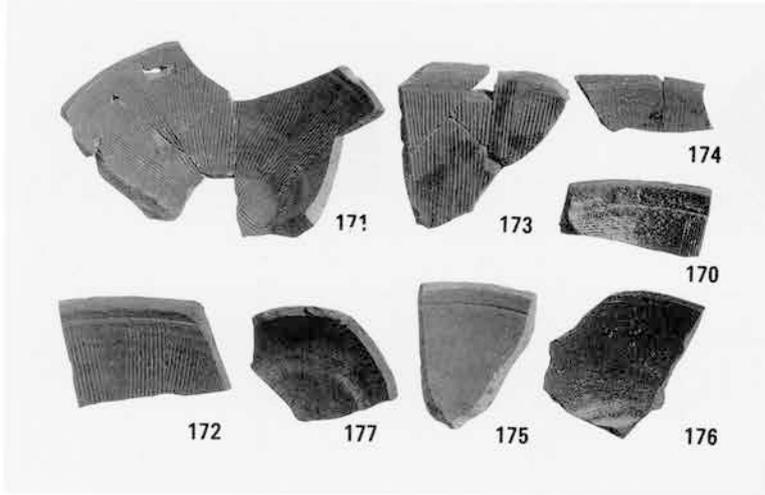


区画CⅢ遺構面 鉄釉碗127・128 茶入129 灰釉皿131・132 香炉133 折縁鉢134・135 青磁碗136・137 鉢138 香炉139
 白磁碗140 皿141・142 染付碗143・144 皿145 金属製品分銅146 石製品硯147・148
 区画C整地層 越前焼壺150・151・153 擂鉢154・155 土師質皿156・159 鉄釉碗161 小壺162 德利163 灰釉碗164 青磁碗165
 皿166 白磁皿167 染付碗168

第13図 第29・30次調査出土遺物(6)



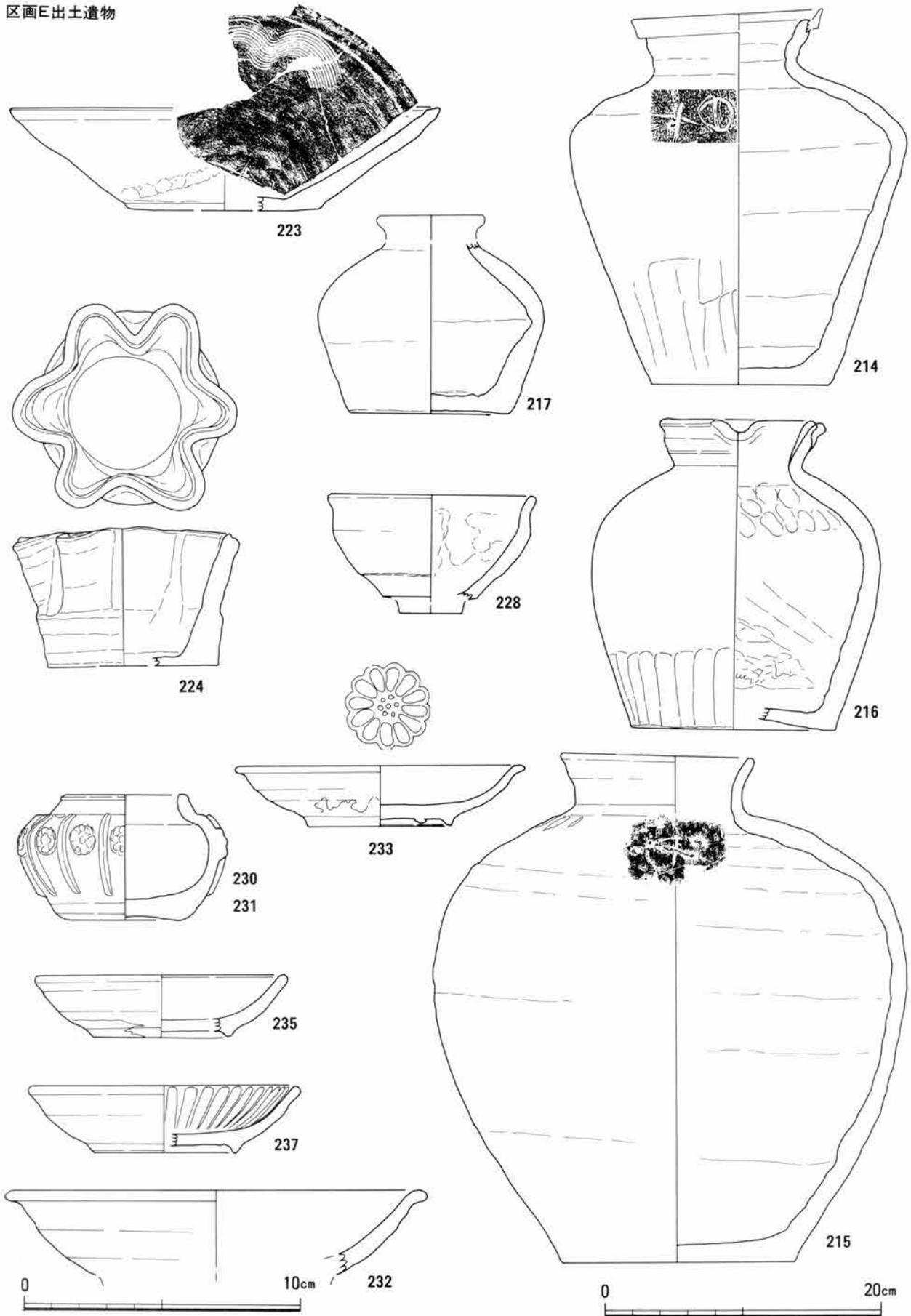
越前焼壺169 播鉢174 鉄釉碗178 水注183 德利184 水滴185 灰釉碗186 皿188 白磁皿197・198 坏201 鉄釉碗209
石製品硯211 バンドコ(行火)212



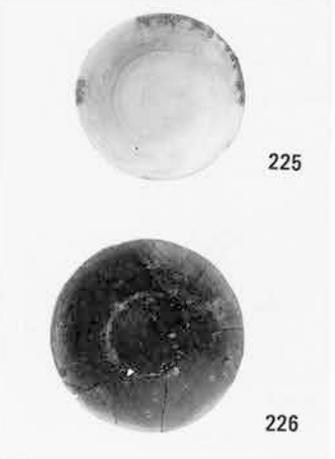
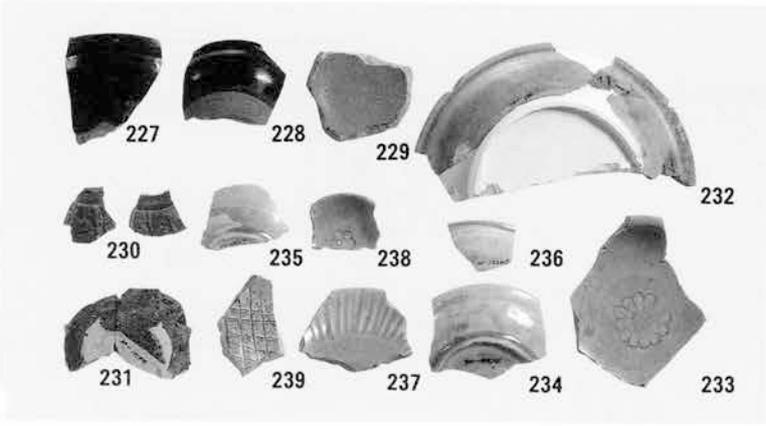
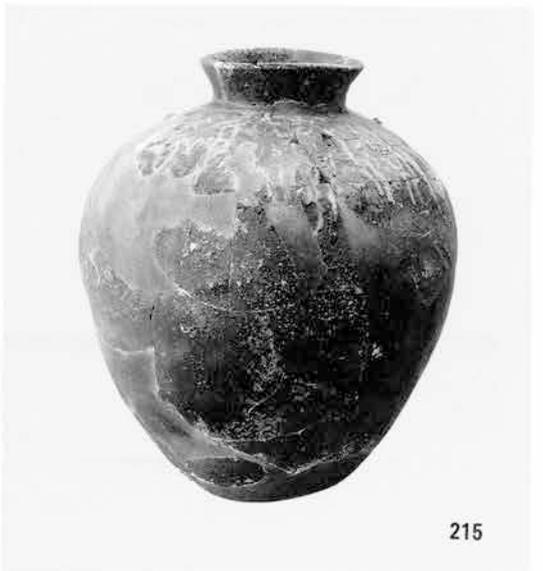
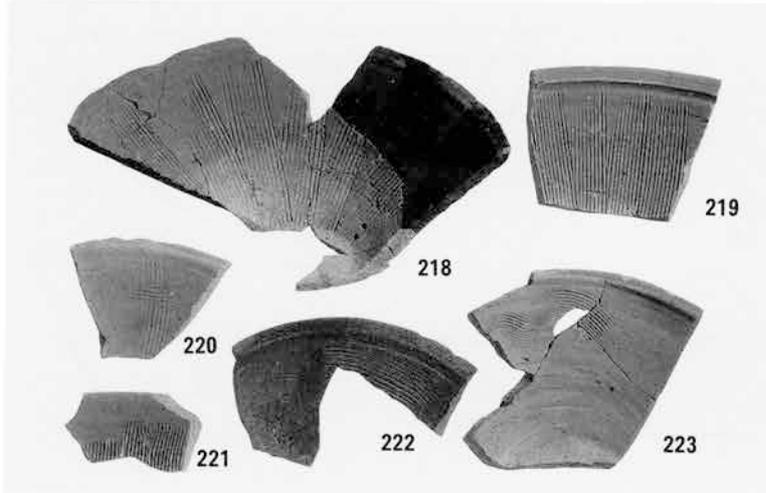
区画D II 遺構面 越前焼壺169 搦鉢170~174 鉢175~177 鉄釉碗178~182 水注183 徳利184 水滴185 灰釉碗186・187 皿188~190 折縁鉢191 青磁碗192 皿193~196 白磁皿197・198 坏199~201 染付碗202~205 皿206・207 壺208 鉄釉碗209 茶入210 石製品硯211 バンドコ(行火)212・213

第14図 第29・30次調査出土遺物(7)

区画E出土遺物

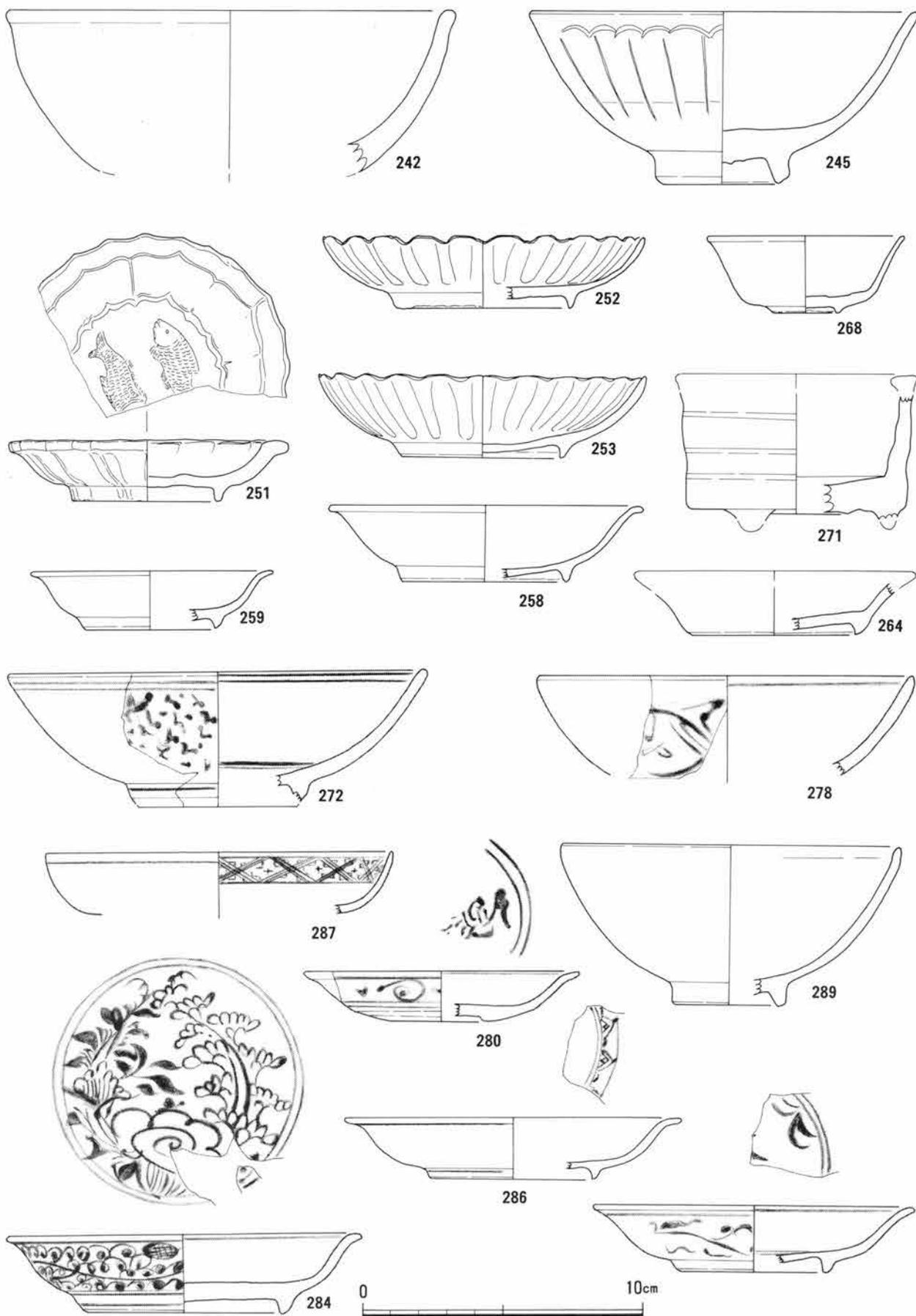


越前焼壺214～217 鉢223 花生224 鉄釉碗228 茶入230・231 灰釉皿232・233・235・237

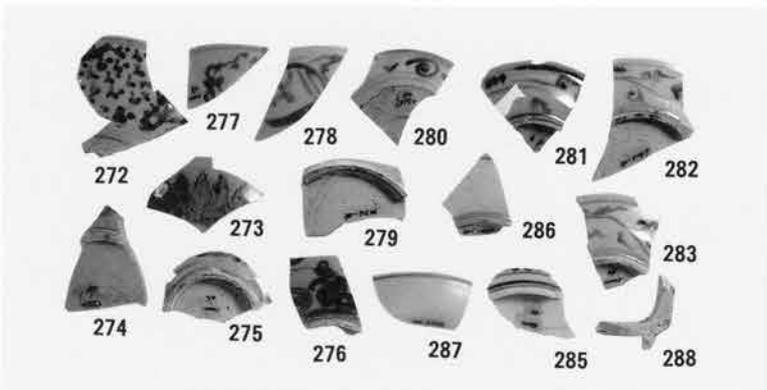
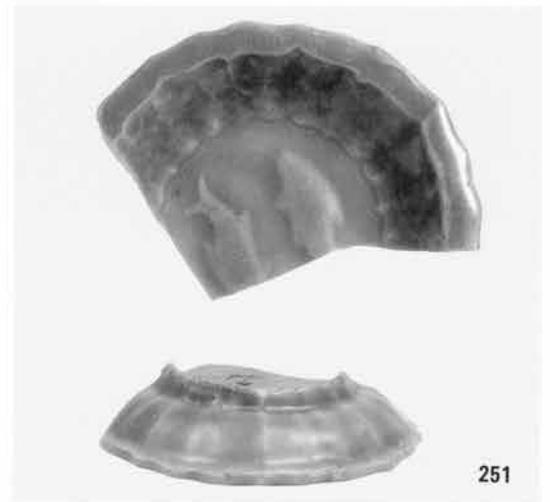
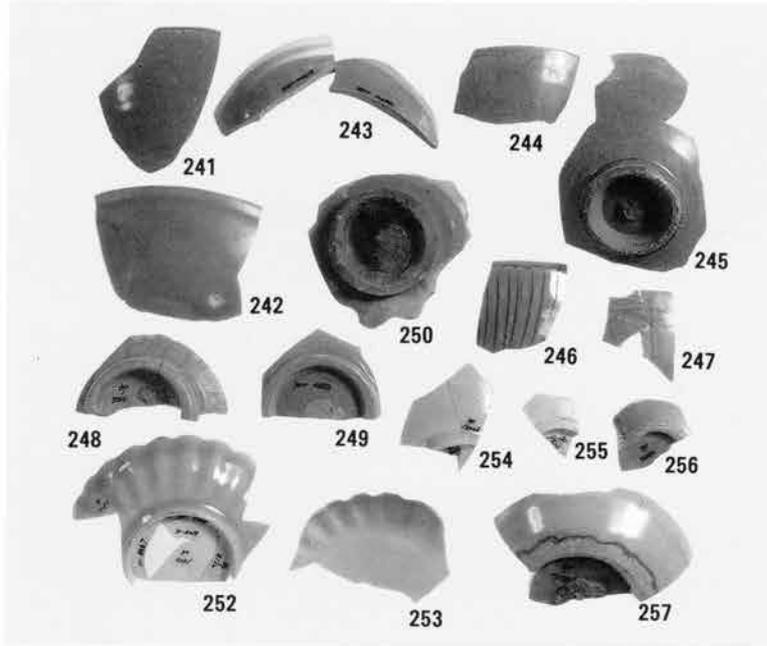


区画E 越前焼壺214~216、217 播鉢218~221 鉢222・223 花生224 土師質皿225・226 鉄釉碗227~229
 茶入230・231 灰釉皿232~237 小坏238 卸皿239 壺240

第15図 第29・30次調査出土遺物(8)



青磁碗242・245 皿251～253 白磁皿258・259・264 香炉271 染付碗272・278 皿280・283・284・286 瑠璃釉碗289



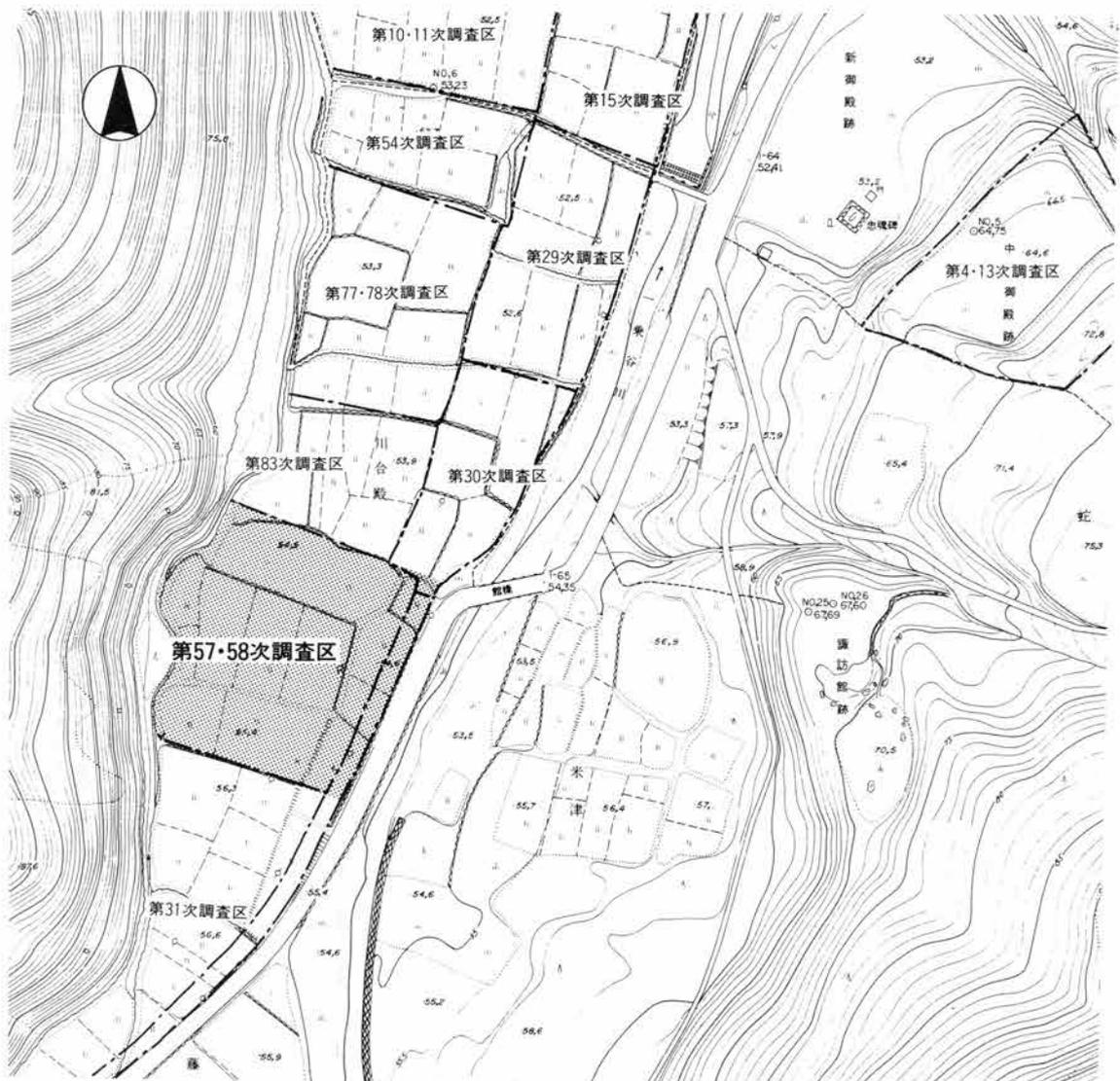
区画E 青磁碗241~250 皿251~255 坏256 壺257 白磁皿258~267 坏268~270 香炉271 染付碗272~279
 皿280~287 香炉288 金属銅片290 石製品硯291・292

Ⅲ 第 57・58 次 調 査

Ⅲ 第57・58次調査

1. 調査の経過と概要

本調査の対象とした地区は、都市「一乗谷」の中核部として昭和46年に特別史跡の指定を受けた、上下城戸に区画された「城戸ノ内」のやや南寄りにあって、朝倉氏五代義景が居住したことが判明している朝倉館の一乗谷川を隔てた対岸、南西約300mに位置している。この地区一帯には、江戸時代末期に描かれた「一乗谷古絵図」に「斎藤兵部大輔」・「新馬場」・「平井」・「鰐淵将監」・「河合安芸守」等多くの有力家臣名がみられ、また水田畦畔等からも比較的整然とした大きな区画が読み取られる。こうしたことから、朝倉氏の重臣の屋敷群が配置されていた可能性が想定されていた。この地区の様子を解明するため、昭和48・49年度に地区のほぼ中央にあって水田の小字名から「新馬場」に比定される区画3,665㎡の発掘調査（第10・11次調査）を実施した。この結果、西の山裾を除く三方に塀の基礎部となる土塁



挿図7 第57・58次調査区周辺地形図 (1/2000)

を廻らず敷地間口約45m、奥行きは70mを越す大規模な屋敷跡とその前に南北方向の幅約4.5mの道路跡が検出され、計画的な屋敷割りが行われていたことが判明した。引き続き、第15次調査（2,400㎡、昭和50年度）、第24・25次調査（4,800㎡、昭和52年度）、第29・30次調査（4,400㎡、昭和53年度）、第54次調査（1,800㎡、昭和61年度）が実施され、広範囲の面的な遺構の確認を通じて、計画的な町造りの様子が明らかになってきた（『報告書Ⅱ』1988、『報告書Ⅳ』1993、『報告書Ⅴ』1995等参照）。これらの調査地は、順次遺構の保存と見学者への公開を目的として保存整備され、また、昭和57・58年度には第15・25次調査で検出され極めて良好に遺構が残存する屋敷の立体復元整備事業も実施された。こうした調査整備事業の進展により遺跡見学者も増加した。また昭和59年には、当初からの懸案であった集落を通過し朝倉館の濠の一部を切って存在した県道が、新たに一乗谷川の西岸に移され、この道路に面して仮設されていた駐車スペースの移転の必要も生じた。こうした状況を受けて、この新しい道路に伴う駐車スペースを確保することが急務となった。設置場所を検討した結果、朝倉館や諏訪館跡庭園等へのアクセスもスムーズであるとして、この面的な整備地の南隣接地が選ばれた。これを受けて計画されたのがこの調査である。

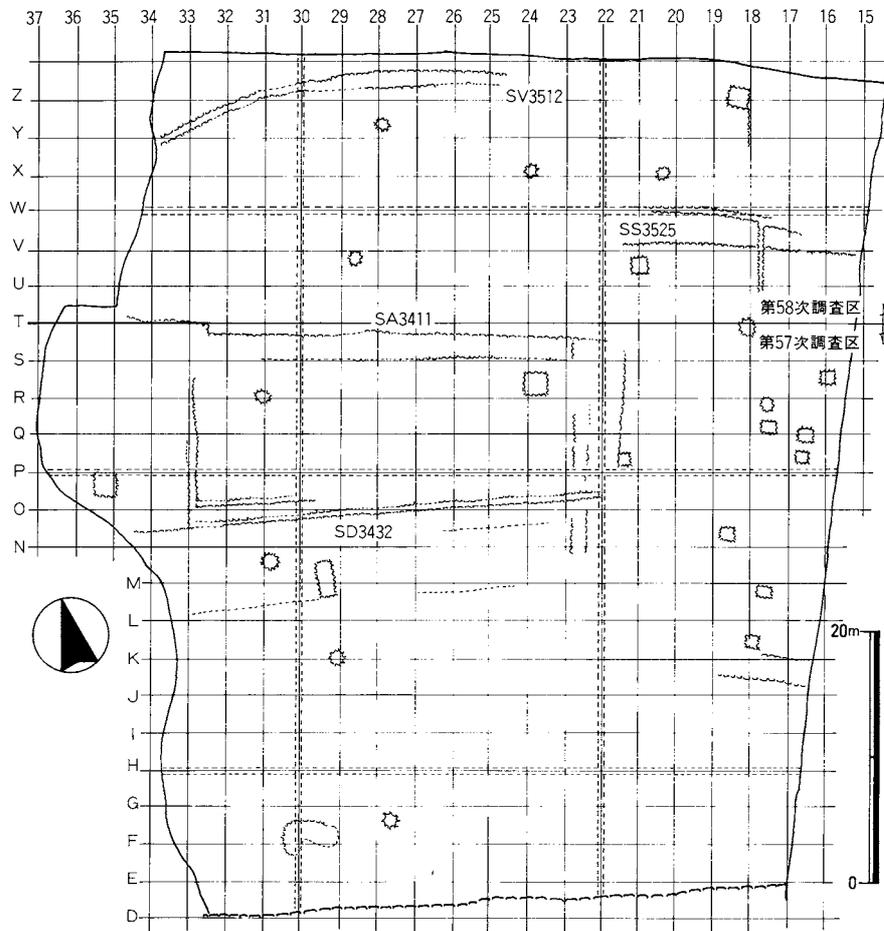
第57・58次調査区は、福井市城戸ノ内町字川合殿地係に、南北約65m、東西約60m、面積3,870㎡として設定した。水田区画等により、この調査区の南半42m幅、2,560㎡を第57次調査、北の23m幅、1,310㎡を第58次調査とした。第57次調査は、昭和62年4月1日に開始し、6月30日に基本的な遺構検出作業を終え、引き続き隣接する第58次調査に移り、9月28日に現場作業をほぼ終えた。そして同年11月10日に両調査区を併せて、ヘリコプターによる航空写真測量を実施し、遺構平面実測図を作成した。

調査地周辺の地形をみると、一乗谷川は、約300m南の上城戸が存在する所で西の山裾にぶつかり東へ大きく振れ、200mほど進み、北上しており、調査区あたりではほぼ中央を南からやや東に振れながら北へ流れる。なお、こうした蛇行は後世の変化であって、当時は緩やかに弧を描きながら北上していたことが判明している。このあたりの谷幅は200mほどであり、上城戸が設けられた約130mと最も狭い地点に比べれば少し広がりを見せる。東岸山裾には山城近くに水源を發した沢が發達した扇状地形を造り、この先端の段丘上に庭園遺構で知られる諏訪館跡等の屋敷跡が見られる。調査区は畦畔によって大小12の水田に区画されているが、基本的には山裾となる西、川上となる南が高い。この水田の畦畔や高さから大きく三つに区分され、第57次調査区の主要部を占めるのが西南にみられる7区画の水田に分けられた南北約48m、東西約54mの部分で、海拔高は55.3～55.4mである。なおこの部分の中ほどやや南寄りの東西方向の畦畔で大きく二分される。そして北の第58次調査区となる水田との境には高さ0.8mほどの石垣が存在し、その水田は海拔高は54.5mほどである。また東の川側の四つの水田からなる東西幅12～15mの部分も同様で海拔高は54.6m前後であり、0.6～0.7m低い。調査区外となる南の水田との境にも高さ0.9mほどの石垣が築かれており、海拔高は約56.3mと高くなる。

第57次調査は、まず西南部の大きな区画を対象にベルトコンベアーを用いて厚さ0.15mほどの耕作土を除去することから始め、約2週間でこれを終了した。第58次調査区との境となる水田石垣を基準として3mグリットに調査用地区杭を打った後、東西方向の水田畦畔の北半から厚さ0.05mほどの水田床土を除去した。この作業により、遺物や一部の遺構も現われ始めた。引き続き西から順次遺構検出を進めた。南半についても同様の手順により遺構検出をおこなった。6月23日発掘作業を終え、写真撮影、土層図作成を行った。こうした作業全体では約3か月間を要した。なお、検出された井戸の掘り下げを実施した際、北西部の井戸から16,000枚を越す多量の銅銭が出土し、マスコミ等に大きく取り上げられ

た。次いで第58次調査に着手した。調査用地区杭は第57次調査区に合わせて設定した。西山裾より床土を除去し、遺構の検出を行った。9月1日にはこうした作業を終え、土層図を作成した。次いで、清掃を行った後、28日に写真撮影を実施した。また、遺構平面図の作成は航空写真測量とし、第57次調査区と併せ、同年11月10日にヘリコプターにより撮影を行った。

調査区全体を通してみると、水田化等により削平を受けた所もあり、検出された主な遺構は、溝や井戸、石積施設等下方へ掘り込んだ遺構群であって、建物礎石等の一部である。しかし、第57次調査区とした主要部は、まとまりのある大きな屋敷であること、東の一段低い所は両調査区とも規則的に石積施設が並び、町屋的な小規模屋敷が連続すること等の地区の屋敷構成のあり方や、こうした遺構群に大きくは3回の改造があったことなどが判明した。こうした状況は、この北部で実施してきた各調査の結果と合致しており、町割り解明の貴重な資料となった。



挿図8 第57・58次調査区グリッド設定図

第57・58次調査日誌抄

第57次調査

(昭和62年4月1日～6月30日)

4. 1 調査開始。発掘器材搬入。
 - 6 ベルトコンベアーを用いて本格的に耕作土除去作業開始。
 - 13 耕作土除去作業終了。
 - 14 地区設定。グリッド杭打。北半部床土除去作業を東から開始。
 - 17 北西山寄りで井戸S E3418検出。
 - 20 北半部床土除去作業終了。西山裾から遺構検出作業開始。新たに井戸S E3419等を検出。調査区北を限る東西方向石垣の約3m南で平行する石垣を検出。この間は石、礫等で埋められている。
 - 21 昨日検出した石垣裾近くで礎石列S B3437検出。
 - 23 東西方向溝S D3432検出。
 - 25 日本テレビ遺跡番組製作のため調査現場等を取材。遺跡見学会実施。
 - 27 北半部第1回遺構検出作業終了。
 - 28 南半部のグリッド杭打。床土除去作業を東から開始。
5. 1 井戸S E3420検出。
 - 2 井戸S E3419の掘り下げ作業実施。焼土で埋められており多くの遺物を含む。
 - 6 ほぼ井戸S E3419の掘り下げ終了。底近くで大量の銅銭が出土。後に1万6千枚を超すことが判明。深さは3.8m程。南半部床土除去作業終了。引き続き西山裾から遺構検出作業を進める。白河砂利を敷く庭園S G3443検出。
 - 7 井戸S E3418の掘り下げ実施。深さ3m。井桁に組んだ丸太を基礎として石を積み上げていることが判明。
 - 11 読売新聞、朝日新聞が井戸S E3419の大量の銅銭出土状況を取材。
 - 12 読売新聞、朝日新聞が井戸S E3419の大量の銅銭出土記事を大きく取上げ報道。マスコミ各社の取材が殺到。
 - 19 調査区の東部県道脇の若干低い水田区画の調査を開始。東の川側にかけて比較的大きな石を多く埋め込んで水田床面を造成していることが判明。なお、この県道に沿う約3m幅は第31次調査として遺構を検出後、埋め戻した部分である。
 - 20 連続する石積施設群を検出。掘り下げ実施。
 - 21 水田化のため設けられたことが判明した調査区北境界石垣の除去作業を進める。また、調査区東

部で検出された井戸S E3417を掘り下げ実施。深さ2.7m、底に板を組んだ水溜部あり。

- 22 井戸S E3416の掘り下げ実施。深さ3.2m。ほぼ完形の笏谷石製井戸枠1セット4枚等出土。
- 25 井戸S E3420の掘り下げ実施。深さ2.9m。銅銭250枚ほど出土。
- 28 朝倉氏遺跡整備事業に関して、1987年度日本建築学会賞(業績)受賞(東京建築会館にて)。
- 29 本日夜、朝倉館前広場にて薪能開催。
6. 1 調査区南半部第2回目の遺構検出作業開始。
 - 2 下層チェックのため、土層観察用畔に沿って東西方向トレンチを設定。東海テレビ「ふるさと紀行」取材。
 - 12 ほぼ遺構検出を終了する。ダメ押し作業等実施。
 - 18 庭園S G3443で径0.1～0.15mの扁平な玉石を敷き詰めたつくばい状遺構、粘土を貼付た池跡等を検出。
 - 23 発掘作業終了。清掃実施。
 - 25・26 写真撮影。
 - 29 土層図、セクション図作成作業。
 - 30 現場作業終了。

第58次調査

(昭和62年7月1日～9月28日)

7. 1 調査開始。耕作土除去作業開始。
 - 10 耕作土除去作業終了。地区設定、グリッド杭打。
 - 13 西山裾部から床土除去し、遺構検出作業開始。
 - 21 東の低い水田部の耕作土を除去。
 - 25 建物礎石S B3524、井戸S E3516検出。
 - 27 第1回目の遺構検出作業を終了し、下層遺構の検出に着手。
 - 29～31 企画展準備作業。
8. 1 第1回企画展「朝倉文化と茶の湯」開会式。
(～8月31日まで)
 - 4 井戸S E3514検出。
 - 11 下層チェックのため、土層観察用畔に沿って東西方向トレンチを設定。井戸、石積施設の掘り下げ実施。石積施設S F3517から銅製燭台出土。
 - 31 遺構検出終了。
9. 1 土層図作成(～7日まで)。
 - 24～27 清掃作業。
 - 28 写真撮影。現場作業終了。

2. 第57次調査遺構（第16～26図, PL.18～27）

ここで取り扱うのは、概要で述べた通り、主として第57次調査により検出された東西方向の土塁を境とした南北幅約45m、東西(奥行き)約45mの屋敷とその前面(東)の屋敷であるが、東端部の遺構の一部に昭和53年に道路改良工事に伴う事前調査として実施した第31次調査により検出されたものも含んでいる。主な遺構としては、土塁1、石列及び石垣4、溝6、庭園1、礎石建物5、井戸6、石積施設11等があげられる。水田化に際して削平された部分も多く、明確さを欠く点もあるが、遺構は大きく3期に分類できると考えられる。その中心となるのは水田床土直下で検出された遺構群であって、これをⅢ期とする。この遺構群は朝倉氏滅亡時に存在したと考えられるものである。その0.15mほど下層にあって、先行する遺構群も比較的広範囲に検出されており、これをⅡ期とする。そして、一部深掘トレンチで検出されたさらに下層の遺構をⅠ期とする。Ⅱ・Ⅲ期は北の土塁石垣等の関係から、基本的には屋敷割りの変更はないと考えられるが、Ⅰ期については部分的な検出でもあり、こうした屋敷割りととの関係は明確でない。このⅠ期の遺構とⅢ期の遺構とのレベル差は0.6mほどである。

なお、この記述で用いる方位は、おおよそのものであって、谷の中ほどを流れる一乗谷川を基準としており、これを南北軸とし、南から北へ流れるものとする。この調査区では一乗谷川側が東、山側が西となる。国土座標第Ⅵ系方位に基づけば、この調査区を大きく規定する屋敷の北境界となる東西方向土塁の北面石垣線はE20°Sである。また遺構平面図等に記した数値は国土座標第Ⅵ系に基づく位置を示している。

SA3411 調査区の北端で検出された東西方向の土塁。Ⅱ・Ⅲ期に存在したと考えられる。検出された長さは30mほどである。第58次調査区となる屋敷との境となる北面には石垣が見られ、径0.3～0.5mほどの自然石を約0.5mの高さに2段前後積み上げた基礎部が比較的良く残存する。これに対し、南面の基準面となる屋敷内面は北面石垣基部に比べ0.5mほど高く、この面から石列等は設けられたと考えられ、一部で石列が検出されているにとどまる。幅は1.8mと推定される。西の山寄りで鋸形に折れて1mほど北へずれている。なお、水田畦畔としての石垣は、この土塁の北面石垣と約1.8m北に平行して設けられており、この間はこの土塁石垣を壊した石等と考えられる径0.3～0.5mの石を多く含むガラ石で埋められていた。

SV3412 調査区中ほど東北部で検出された東西方向土塁SA3411の東端から南に延びる南北方向の石垣。基本的にはⅡ期の遺構と考えられる。検出された長さは10mほどである。東に面があり、径0.3mほどとやや小振りな自然石を用いている。これを境に東西の遺構面の間には0.2～0.3mの段差があったものと推定される。また、この裾に石積施設SF3424が存在すること等をあわせ考えると、屋敷の南端までは検出されていないものの、屋敷を区画する基本的な遺構と考えられる。

SV3413 調査区中ほど東北部で検出された前述の南北方向石垣SV3412と4mほどの間隔を持って西に平行する南北方向の石列で、基本的にはⅡ期の遺構と考えられるがⅢ期にも存続した可能性も考えられる。径0.3～0.5mの自然石を用い、西に面を持つ。検出された長さは7mほどであるが、北の東西方向土塁SA3411の東端付近にも南北の石の並びが見られ、これとつながっていた可能性も考えられる。この石列に沿って若干の落ち込みが見られるが、これが溝であった可能性も考えられる。また、溝を越

えて南に存在するS X3447とした遺構の西面の石列と方向が一致している。このS X3447は東に面を持つ石列もあって、この間は1.5mほどである。そしてこの北への延長線上にも一部石の並びが見受けられる。こうした点から、この1.5m幅部分が土塁であったことも考えられる。この場合は、東の南北方向石垣S V3412との間は北へ向かって傾斜していることもあって、通路となると考えられる。

SV3414 調査区中ほどで検出された東西方向の石列。基本的にはⅡ期の遺構と考えられるがⅢ期にも存続した可能性も考えられる。検出された長さは10mほどである。径0.2mほどの小振りな自然石を用い、面は南北どちらにあるのか明確でない。溝S D3432の南に平行しており、この間は1.8mほどである。この間が通路であった可能性も考えられる。

SV3415 調査区中ほどで検出された東西方向の石列。基本的にはⅡ期の遺構と考えられるが、Ⅲ期にも存続した可能性も残されている。山裾部までの30mにわたり検出されているが一部失われた部分も見られる。S V3414と形態は良く似ており、面は南北どちらにあるのか明確でない。溝S D3432との間隔は7m弱である。なお、東半にはこの石列に平行して2mほど北にも石列と思われる石の並びが見られ、この間には比較的礫石が多く存在しており、この部分も通路であった可能性が考えられる。

SD3431 東西方向土塁S A3411の東端部で検出された石組溝。Ⅱ期の遺構と考えられる。検出された長さは3.5mほどで、内法幅約0.3m、深さ約0.2mの規模と推定されるが詳細は明らかでない。

SD3432 調査区中ほどで検出された東西方向の石組溝。基本的にはⅡ期の遺構と考えられるがⅢ期においても存続した可能性が強い。検出された長さは32mほどで、内法幅約0.3m、深さ約0.2mの規模であるが、西で若干規模が小さくなっているようである。側石は径0.2~0.3mの自然石を用いている。西で南北方向の溝S D3434とつながるが、南側石はそのまま西に延長されS X3457となる。屋敷内を大きく南北に分ける遺構である。

SD3433 調査区西半部やや北寄り検出された前述の溝S D3432と平行し、その北1.5mに位置する東西方向の石組溝。基本的にはⅢ期の遺構と考えられるが、天端は溝S D3432より0.1mほど低く、若干先行する可能性も残されている。検出された長さは9mほどで、内法幅約0.2~0.3m、深さ約0.15mの規模である。側石は径0.2~0.3mの自然石を用いている。削平のため礎石等は検出されていないが、この北に建物が存在したものと考えられ、その周囲に設けられた雨落ち溝と推定される。

SD3434 調査区西半部北寄り検出された南北方向の石組溝。Ⅲ期の遺構と考えられる。検出された長さは7mほどで、内法幅約0.4mとやや広く、深さ約0.2mの規模である。南端で東西方向の溝S D3432とつながっていたと考えられるほか、溝はなくなるものの東の側石列は北へ延びS X3455とつながる。東側石には径0.3~0.4mの若干大振りな自然石を用いている。また、高さもこの東側石が西側石に比べ0.05~0.1m低い。前述した溝S D3433同様建物の周囲に設けられた雨落ち溝と推定される。

SD3435 調査区東半部中ほどで検出された東西方向の石組溝。Ⅲ期の遺構と考えられる。検出された長さは2.5mほどで、内法幅約0.3m、深さ約0.2mの規模である。

SD3436 調査区東半部中ほど東寄り検出された東西方向の石組溝。Ⅲ期の遺構と考えられる。検出された長さは7mほどであるが一部南側石を欠いている。内法幅約0.3m、深さ約0.25mの規模である。北に平行する石列S V1427との間1.8mが通路と推定される。

SG3443 調査区西南隅近くで検出された庭園遺構。Ⅱ期に築かれ、Ⅲ期にも存続した遺構と考えられる。水田化に際し石の上部が割り取られたようで、本来の高さは不明であるが、東西2m×南北1mのやや大きな石を中心に据え、その前方左右に東西1.2m×南北0.6mほどの扁平な石を低く据え、左手石

の前に径1.2mほどの範囲に径0.1m程度の扁平な玉石を敷き詰めた蹲踞状の遺構S X 3492を設け、これらの前に深さ0.3m、東西4.5m、南北は東で1.8m、西で2.7m、面積にして9㎡ほどのL字形の池を配置する構成を持っている。池の汀線S X 3491には径0.2mほどの小振りな自然石が立て並べられ、この目地と底には粘土が貼付られていることから水路等は存在しないが、水をたくわえたものと考えられる。なお、底の粘土上には拳大の石と砂利が認められた。しかし、この池は後に埋められ、径3～4mmの白い小砂利を敷き詰める平庭の構成に改変されており、池部も含めた周囲一面から白い小砂利面が検出されている。この改変後の庭園と対応するのが建物S B 3442である。また、この西部においても玉砂利の散布が認められることから、庭園は西へ広がりを持っていたことも想定される。

S B 3438 調査区北西隅部で検出された東西に並ぶ2個の礎石。間隔は1m弱である。最上層に位置し、Ⅲ期の遺構。断片的なものであり詳細は明らかでない。

S B 3439 調査区中ほどで検出された礎石群。Ⅲ期の遺構であるが、断片的なものであり詳細は明らかでない。この東で検出された敷石的な遺構S X 3466・3467と一体であることも考えられる。

S B 3440 調査区西端部やや南寄りで検出された建物。Ⅲ期の遺構。南北3.6m、東西1.5mの鍵形に連続して礎石等の石列が見られることから、土台を持つ構造の建物であった可能性が高い。

S B 3441 調査区西端近く南寄りで検出された南北方向に4個並ぶ礎石列を主とする。Ⅲ期の遺構。基準柱間寸法は1.9mほどと推定される。

S B 3442 調査区西半部南寄りで検出された東西方向の礎石列。Ⅲ期の遺構。基準柱間寸法を1.9mとする可能性が考えられ、前述した南北方向の礎石列S B 3441とほぼ直角となること、レベルもほぼ等しいことから一つの建物となる可能性も残されている。

S E 3416 調査区東北隅近くで検出された石積の井戸。天端石は1石のみ残るようであり基本的にはⅡ期の遺構と考えられるが、Ⅰ期の可能性も残されている。口径は1.2mと少し大きく、深さは3.2mで、礫石層から自然石玉石を積み上げている。ほぼ完形で笏谷石製の井戸枠が出土している。

S E 3417 調査区東半部北寄りで検出された石積の井戸。天端石が明瞭でないこともあり、若干不明な点も残されているものの基本的にはⅡ期の遺構と考えられる。口径は0.8m、深さは2.7mで、底に厚さ0.02mの杉板4枚を方形に組んで水の溜り部を設け、礫石層から自然石玉石を積み上げている。

S E 3418 調査区西半部北寄りで検出された石積の井戸。Ⅲ期の遺構と考えられる。天端石は残存していないように見受けられる。口径は1.0m、深さは3mほどで、礫石層に径0.1～0.15mの松丸太4本を井桁に組み、自然石玉石を積み上げている。

S E 3419 調査区西半部中ほどで検出された石積の井戸。Ⅲ期の遺構。天端石は残存していない。口径は1.15m、深さは3.8mとやや規模が大きい。礫石層から自然石玉石を積み上げている。周囲を覆う焼土等でほぼ全体が埋められており、最終時まで使用されていたことが明白である。なお、この井戸からは、1万6千枚を超す多量の銅銭を始め、多くの遺物が出土している。

S E 3420 調査区西半部中ほどで検出された石積の井戸。天端石は残存しない。全体が整地土で覆われているように判断されることからⅡ期の遺構と考えられる。口径は0.9m、深さは2.3m。礫石層から自然石玉石を積み上げている。

S E 3421 調査区西半部南寄りで検出された石積の井戸。天端石が比較的良く残る。この天端石も含め全体が整地土でしっかりと覆われており、Ⅱ期の遺構であることは明白である。口径は0.9m、深さは2.9m。礫石層から自然石玉石を積み上げている。

S F 3422 調査区東半部東北寄りで検出された石積施設。基本的にはⅡ期の遺構と推定されるがⅠ期の可能性も残されている。方形に石を4段ほど積み上げており、東西1.1m、南北0.9m、深さ0.8mの規模を有している。ほぼ天端まで残されていると考えられる。

S F 3423 調査区東半部東北寄りで検出された石積施設。基本的にはⅡ期の遺構と推定されるがⅠ期の可能性も残されている。方形に石を4段ほど積み上げており、東西1.0m、南北0.9m、深さ0.9mの規模を有し、天端石の一部も残されている。北に隣接する石積施設S F 1467との間隔は0.9mである。

S F 3424 調査区東半部中ほど、南北方向の石垣S V 3412の裾で検出された石積施設。石垣S V 3412との関係から基本的にはⅡ期の遺構と考えられる。やや小振りな石を方形に4～5段積み上げており、東西0.8m、南北0.8m、深さは0.6mほどの規模を有している。

S F 3425 調査区東半部中ほどで検出された石積施設。方形に石を1～2段に組んでおり、東西1.1m、南北0.9m、深さ0.3mの規模である。上部が削平されていると考えられることもあって若干不明な点も残されているが基本的にはⅡ期の遺構とみられる。

S F 3426 調査区東半部中ほどで検出された石積施設。方形に石を積み上げており、東西1.0m、南北0.9m、深さ0.5mの規模を有している。天端石については明瞭でないが、2～3段の石が残されている。基本的にはⅡ期の遺構と考えられる。

S F 3427 調査区東半部中ほどで検出された石積施設。方形に石を積み上げており、残存状況の良い南・西面では小振りな石が4段ほど見られる。東西0.8m、南北0.9m、深さ0.6mの規模を有している。天端石は残らない。基本的にはⅢ期の遺構と考えられる。

S F 3428 調査区中ほど北端近く、屋敷の北境界となる東西方向土塁S A 3411の脇で検出された石積施設。Ⅲ期の遺構。東西1.6m、南北1.6mの規模を有し、大きいのが、深さは0.3mと浅い。残されている石は1段のみであり、また南北2面はほとんどの石を欠いている。

S F 3429 調査区中ほどで検出された石積施設。西面のみ1段高かった可能性も考えられ、基本的にはⅢ期の遺構と考えられるがⅡ期から存続した可能性も残されている。方形で、残存状況の良い南・西面では石を2～4段積み上げており、東西1.2m、南北2.7m、深さ0.5mの大規模なものである。

S F 3430 調査区西端中ほどで検出された石積施設。整地土で覆われているようであり、Ⅱ期の遺構と考えられる。南・東の2面のみ比較的大振りな石が1段残る。規模は東西、南北ともに1.8mほどと推定され、大規模である。上部を欠くことから本来の深さは不明であるが、1段の石の高さ0.3mほどが残されている。

S F 1466 調査区東半部東北寄りで検出された石積施設。Ⅱ期の遺構と考えられる。方形に石を2段積み上げており、東西1.0m、南北1.0m、深さ0.4mの規模を有する。天端石は残されていない。すでに第31次調査で検出されていた遺構である。

S F 1467 調査区東半部東北寄りで検出された石積施設。Ⅱ期の遺構と考えられる。方形に石を3～4段積み上げており、東西1.0m、南北0.9m、深さ0.8mの規模を有する。天端石も一部残されている。すでに第31次調査で検出されていた遺構である。

S X 3444 調査区東北部で検出された東西方向に石が溝状に並ぶように見受けられる遺構。基本的にはⅠ期の遺構と考えられるが、Ⅱ期の可能性も残されている。長さは約2m、南北の石列の幅は0.4mほどで、東は明確に止まっているようである。

S X 3445・3447 S X 3447は調査区中ほどで検出された南北方向の土塁状の遺構。基本的にはⅡ期の遺

構と考えられる。南北方向に2.7mほどにわたりそれぞれ外側に面を持つ東西2列の石列が約1.5mの間隔で存在し、内部は礫石が集中する。この北に位置し、東側の石列のラインにほぼのっている南北方向の石列状の遺構がS X3445。東に面を持つように見受けられる。前述したように西の石列S V3413との間が土塁となる可能性も考えられる。

S X3446 調査区中ほどで検出された石の集まり。Ⅱ期の遺構と考えられる。その範囲は東西4.5m、南北2.5mほど。性格は不明。

S X3448 調査区中ほどで検出された東西方向に並ぶようにも見受けられる石列状遺構。Ⅲ期の遺構と考えられる。南の石列S V3415との間隔は1.5mほど。この間が通路となる可能性も考えられる。

S X3449 調査区中ほどで検出された南北方向の石列状遺構とピット。Ⅲ期の遺構と考えられる。2.7mほどの長さで、中ほどにピットが存在することから塀もしくは柵の可能性が考えられる。

S X3450 調査区中ほどで検出された南北方向の石列状遺構。Ⅲ期の遺構と考えられる。長さは3.3mほど。方形石積施設S F3429の西に平行するように存在する。

S X3452 調査区中ほど北寄りで検出された、1.2mの間隔を持って南北方向に並ぶ2列の石列。基本的にはⅡ期の遺構と考えられるがⅢ期の可能性も残されている。長さは4.2mほど。

S X3453・3454 ともに調査区中ほど北寄りで検出された石の集まり。Ⅱ期の遺構と考えられる。S X3453は扁平な石を敷き詰めているように見受けられる。ともに性格等は不明。

S X3455 調査区西半部北寄り、南北方向の溝S D3434の北への延長線上に位置する石列状遺構。Ⅲ期の遺構と考えられる。長さは6mほど。

S X3456 調査区西半部北寄りで検出された石の集まり。Ⅱ期の遺構と考えられる。性格等は不明。

S X3457 調査区西半部中ほど、溝S D3432の西への延長線上に位置する石列。Ⅲ期の遺構と考えられる。長さは3.2mほど。

S X3458 調査区西北隅部、東西方向土塁S A3411の西に位置し、少し北にずれる土塁状遺構。Ⅲ期の遺構と考えられる。

S X3460 調査区西半部北寄りで検出された礎石的な石群。Ⅲ期の遺構で、溝S D3433・3434に区画された建物礎石の一部の可能性が高い。

S X3461 調査区西端部中ほどで検出された南北方向の石の並び。Ⅲ期の建物の一部である可能性も考えられる遺構。

S X3463 調査区東半部中ほどで検出された南北方向の石列状遺構。Ⅲ期の遺構と考えられる。長さは3.5mほど。

S X3464・3465 ともに調査区東半部中ほどで検出された、石列状遺構S X3463の西に位置する建物礎石の一部となる可能性も考えられる扁平な石群。Ⅲ期の遺構と考えられる。

S X3466・3467 ともに調査区中ほど東寄りで検出された扁平な石の集まり。S X3466は敷き石状である。これらの一部は西の建物S B3439もしくは前述した東のS X3464・3465と一体となる建物礎石の一部となる可能性も考えられる。Ⅲ期の遺構と考えられる。

S X3468 調査区中ほど東寄りで検出された南北方向に並ぶ柱穴列。Ⅲ期の遺構と考えられる。北から2.7m、2.7m、2.5mの間隔で4個存在する。柱穴の径は0.15mと小さい。屋敷の東を区画する土塁の可能性も考えられるS X3447等の南北ライン上の上のっており、屋敷境界の塀である可能性が強い。

S X3469・3470 ともに調査区東半部中ほどで検出された石列状遺構。Ⅲ期の遺構と考えられる。S X

3470はL字形を呈しており、南北部2.7m、東西部1.5mほど。東と北に面があるように見受けられる。

S X 3469は南北方向で4 m程度である。ともに上部が削平された可能性も考えられる。

S X 3471 調査区東半部中ほどで検出された東西方向の石列状遺構。Ⅱ期の遺構と考えられる。長さは3 mほど。東西方向溝S D 3432の延長線上に近い。

S X 3472 調査区東半部北寄りで検出された土壌。Ⅱ期の遺構と考えられる。長径1.0m、短径0.8m、深さ0.3m。

S X 3473 調査区東端中ほどで検出された南に面を持つ長さ1 mほどの東西方向の石列状の遺構。Ⅱ期の遺構と考えられる。

S X 1500 調査区東端中ほどで検出された土壌。Ⅱ期の遺構と考えられる。深さは0.1mほどと浅い。径は1 mほど。

S X 3474・S K 1488 ともに調査区東端中ほどで検出されたピット。Ⅱ期の遺構と考えられる。S X 3474は、径0.7mほどで小規模。S K 1488は径1.5mほど。ともに浅く、石が落ち込んでいる。

S X 3475・3476 S X 3475は調査区東半部中ほどで検出された南北方向の石列状遺構。Ⅲ期の遺構と考えられる。長さは3 m。両端に礎石の可能性も考えられる石が存在し、この東には通路の可能性も考えられる遺構も見られることから、簡易な門であったことも考えられる。S X 3476はこの西の礫石の集まり。整地の可能性が強い。

S X 3478 調査区東半部中ほどやや南寄りで検出された南北方向に並ぶ柱穴列。Ⅲ期の遺構と考えられる。1.2mの間隔で2個並ぶ。柱穴の径は0.15mと小さい。塀もしくは柵の一部と考えられる。

S X 3480・3482 調査区東半部南寄りで検出されたピット。ともにⅢ期の遺構と考えられる。S X 3480は径0.9m、深さ0.25mほど。一部に石が落ち込む。S X 3482は東西1.3m、南北1.8mで、深さ0.1mと浅い。北と西の一部に石を並べている。

S X 3484・3504 ともに調査区中ほど南寄りで検出された東西に並ぶ柱穴列。Ⅲ期の遺構と考えられる。S X 3484は間隔が約1 m。ピット径は0.15mと小さい。S X 3504は土層観測用畔で確認されたもの。間隔は約4 m。柱跡の径は0.15m、深さは1 mほど。掘り形は漏斗状で上面で0.9mほど。

S X 3485 調査区中ほど南寄りで検出された砂利敷整地面。Ⅱ期に属するものと考えられる。

S X 3486・3487・3505 ともに調査区中ほど南寄りで検出されたピット。S X 3486は径0.6mほどで一部に石もみられる。深さ0.25m。S X 3487は径0.5m、深さ0.5m。S X 3505は0.6m角の方形で浅く、石も多い。ともにⅡ期の遺構と考えられる。

S X 3489・3490 ともに調査区中ほど南寄りで検出された南北方向の石列状遺構。Ⅱ期の遺構と考えられる。S X 3489は一部を欠くが検出長は2.4mほど。その約2 m西に平行するのがS X 3490で、検出長は1.8m。ともに東に面を持つ。

S X 3493 調査区中ほど南端近くで検出された土壌。径0.9m、深さ0.8m。Ⅲ期の整地土で埋められていることからⅡ期の遺構と考えられる。

S X 3494 調査区西半部南寄りで検出された深さ0.1mの浅いピット。建物礎石の抜取り跡の可能性も考えられる。Ⅲ期に属する。

S X 3495・3496 調査区中ほどに点在する柱穴。径は0.15mと小さい。Ⅲ期の遺構と考えられる。

S X 3499・3500・3502・3503 調査区東半部中ほどから北寄りにかけて検出されたピット。径0.6～1.0 m、深さは0.3mほど。Ⅱ期もしくはⅠ期の遺構と考えられるが詳細は不明。

3. 第57次調査遺物 (第27~48図, PL.28~37)

本調査で出土した遺物の総点数は表2に示すように76,775点を数え、これから調査面積2,560㎡に対する1㎡あたりの平均出土点数を求めると29.99点となる。本遺跡における既往の調査の各平均値は1.38~2.6点とバラつきが大きい、これらの中にあって今回報告する29.99点は1㎡あたり平均値の最多地点である。

今回の調査による最大の特徴は、銅銭が17,095点を数え出土品中の22%を占めるという高占有率を確保していることであるが、これは後述するように特にSE3419において一括遺物として16,594点が出土していることに起因している。このことを除けば他の遺物群の出土傾向は従来の調査地で示されているものと大きく変わることはない。

本稿における遺物についての分類は、越前焼大甕・播鉢は『県道鯖江・美山線改良工事に伴う発掘調査報告書』1983、土師質皿は『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告Ⅰ』1979、染付は小野正敏「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究2』1982日本貿易陶磁研究会、硯は水野和雄「日本石硯考」『考古学雑誌』第70巻4号 1985日本考古学会によった。

器種		点数	%	器種		点数	%	器種		点数	%					
日本製陶磁器	越前焼	甕	1,263	4.32	中国製陶磁器	青磁	碗	337	金	銅銭	17,095	22.76				
		壺	1,063				皿	441		釘	253					
		鉢	144				鉢	44		刀子	4					
		播鉢	835				香炉	35		猿繫	5					
		火桶	11				盤	160		小札	3					
		他	3				花生	6		銅碗	2					
	計	3,319	他	14		鉢	3									
	土師質	皿	51,678	67.47		白磁	計	1,037		1.35	属		覆輪	2	17,474	22.76
		羽釜	84				碗	23		鉄鍬			3			
		土鈴	34				皿	885		鉄鍋			1			
小壺		23	坏		39		蓋	1								
灯芯押え	2	壺	4	茶釜	1	計	17,474	22.76								
他	5	他	2	取手	1											
計	51,826	計	953	針金	2											
鉄釉	碗	136	0.33	染付	碗				129	0.54	石	裝飾金具	5	818	1.07	
	皿	9			皿	275	硯	硯	51							
	鉢	20			坏	7		バンドコ	291							
	壺	73			他	5		0.01	風炉			19				
茶入	2	計	416	0.54	臼	8										
他	14	赤絵	5	0.01	盤	36	製	品	井戸杵	7						
計	254	黒釉	碗	2	0.03	砥石			7							
灰釉	碗		27	計		20			0.03	玉石	142					
	皿		117	褐釉		壺			12	0.02	板石	1				
	卸皿		3			茶入	1	他	他		256					
	鉢	62	計		13	0.02	計		818							
壺	35	華南彩釉陶器	華南彩釉陶器		29	0.04	木製		漆皿		1					
他	237		計	2,473	3.23	櫛			3							
計	251		朝鮮	碗	1	0.03		曲物	1							
瓦質	香炉			4	他			壺	3	0.05	他	他	36			
	瓦燈	11		計			26	0.03	計			41				
	火鉢	25		近世・その他			小計	近世・その他	153			0.2	その他	その他	39	
	風炉	14	3.45			0.05		0.05	合計			合計		76,775		
他	23	72.62			100											
計	77									0.1						
国内陶器	24			0.03												
小計	55,751		72.62													

表2 第57次調査出土遺物一覧表

表土層出土遺物 (第27・28図, PL.28・29)

調査区全体を覆う表土層出土品であり、狭義の表土とその下に認められる旧水田面のいわゆる床土をも表土層として扱っている。極めて移動性の高い遺物群である。これらの除去をおこなうとⅢ期の遺構面を確認することができる。

越前焼 甕・壺・鉢・播鉢が認められ全体量としては播鉢がもっとも多い。(300)はなで肩タイプの壺である。(301・302)は大甕の口縁部であり、(301)はⅣc群、(302)はⅣb群である。(303・304)は火桶であり、(303)はやや内湾気味に口縁部へ至り、(304)は直線的に伸びる。(305)は鉢である。(306～315)は播鉢であり、Ⅲa群のもの(307・310)、Ⅲb群のもの(309・311)、Ⅳ群のもの(306・308・312・313)が認められ、(314)も底部片ではあるもののⅣ群に属するものと想定される。

土師質土器 (316～318)はD類であるが、大型で口径16.3～17cmを測るもの(316・317)と、小型で口径10.4cmを測るもの(318)の2者が認められる。ともに体部下半の指頭圧痕は明瞭である。

瓦質土器 (319)は風炉である。体部外面下半は丁寧な縦方向のヘラ磨きをおこない、破片のため判然としないが屈曲した肩部に認められる窓は2窓を有するものと想定される。直立する頸部外面には菱形の3連1組のスタンプ文を有する。復元口径25.4cm、器高19.4cmを測る。

中国製陶磁器 (320～324)は青磁碗である。(320)は無文であり、(321～324)は線描蓮弁文を有する。また、(324)の底部内面にはスタンプ文が認められる。(325・326)は染付皿であり、共にB₁群に属するものであり、(325)は底部内面に十字花文を描いている。

暗褐色土層出土遺物 (第28～30図, PL.29～31)

Ⅱ期遺構面を埋める層であり、Ⅲ期遺構面は本層の上に形成される。

越前焼 甕・壺・鉢・播鉢・卸皿が認められる。(332・333)は壺であり、(333)は肩部外面には2条の沈線を有する。(330)は復元口径33.8cm、器高7.9cmを測る鉢である。(327～329、334～348)は播鉢である。(327)はⅢ群bであり、体部と底部の境には接合時に生じた凹線が認められる。(328)はⅢ群aである。(329)は底部片であり播目は摩耗している。(334)はⅢ群aである。(335)はⅣ群である。よく使い込まれており上半のみに播目が認められのみで下半は摩耗している。播鉢全体を考えたばあい、底部もしくは腰部あたりまで摩耗している例は割り合い多く確認されるが、本例のように体部上方まで摩耗した例は少ないようである。(336)もⅣ群であり、(337)はⅢ群bである。(338～341)はⅣ群に分類される。(342)はⅢ群bであり、(343)はⅣ群である。(344～348)は底部片であり、(344～346)は体部のみに播目を有するが、(347・348)は底部内面にも播目を施している。また、(344)は摩耗が進んでいる。(331)は復元口径13.9cm、器高3cmを測る卸皿である。

土師質土器 (349・350)は口径14cm前後を測るD類であり、(351～356)はC類である。(356)は最も小型で口径7.5cm、器高3cmを測る。(351～353)は口縁部にタールが付着する。

瀬戸・美濃焼 鉄釉碗(357)が出土している。復元口径12.1cmを測り、釉の厚さはやや薄く一部素地が露出している。

中国製陶磁器 (358)は袂り高台を有する白磁皿であり、胎土はやや軟質であり乳白色の釉を施す。本遺跡において出土する白磁群の中では比較的古相に属するものである。(359)は染付碗であり蓮子碗C群に属し、体部外面には芭蕉葉文を描く。(360～362)は端反の器形を呈する染付皿B₁群であり、(360)は底部内面に玉取獅子を描き、(361・362)は体部外面に唐草文を描く。

金属製品 (363)は板状の金製品でコの字状に加工しており、更にその両端を折り返している。また、

外面には縞状横方向の文様を有する。用途不明ではあるが、飾り金具の一種と想定される。(364)は靴である。

礫混土層出土遺物 (第30・31図, PL.31・32)

暗褐色土層と共にⅡ期遺構面を埋める層である。

越前焼 甕・壺・播鉢が認められる。(365・366)はなで肩タイプの壺である。(367・368)はⅣ群aに属する大甕片であり、(369)はⅢ群cの大甕片である。本層においても越前焼の主流をなすものは播鉢であり、11点を図示した。(370)はⅣ群のものであり、播目の摩耗が進んでいる。(371・373・375)はⅢ群bに属し、(372・374・376)はⅣ群に属する。(377)は復元口径31.2cm、器高10cmを測るⅣ群のものである。(378～380)は底部から体部にかけての破片であり、このうち(378・379)の両者は体部のみでなく、底部内面にも播目を有するタイプである。(378)はよく使い込んであり播目の摩耗が進んでいる。

中国製陶磁器 (381)は染付皿B₁群であり、底部内面には十字花文を描いている。

礫炭混暗褐色土層出土遺物 (第31図, PL.32)

I期遺構面を埋める層であり、Ⅱ期遺構面は本層の上に形成される。

土師質土器 (382)はD類であり、口縁部の回転ナデ調整は強い。(383・384)はC類である。(382・383)には口縁部にタールを付着させている。

中国製陶磁器 青磁碗2点を図示することができた。(385)は復元口径12.6cmを測り、体部外面には線描蓮弁文を有する。(386)は復元口径11.7cmを測り、口縁端部に面を作る特徴を持つ。

産地不明陶器 (387)は鉢形の器形を呈する。肩部には円形の粘土帯を縦方向に接着することにより区画を設け、その区画内には三角形のスタンプ文を有する。頸部には粘土帯を波状に接着し、その下方および上方には刺突文を所々に配している。また、口唇部も波状を呈する。胎土は荒く、砂粒、小石を多く含む。一見、越前焼風の色調を呈する。

炭混暗褐色土層出土遺物 (第32図, PL.33)

礫炭混暗褐色土層と同じく、I期遺構面を埋める層である。Ⅱ期遺構面は本層の上に形成される。

土師質土器 (388～393)はD類であり、口径12～14cm前後、器高2cm前後を各々測る。(394～401)はC類であり、これらは口径9cm前後のもの(394～396、400・401)と、口径7cm前後のもの(397～399)の2種が認められる。

瀬戸・美濃焼 (402)は復元口径10.2cmを測る鉄釉碗である。釉は比較的厚く施されている。

中国製陶磁器 (403・404)は青磁碗であり、(403)は復元口径10.6cmを測り、体部外面には丸彫蓮弁文を有する。(404)は復元口径14cmを測り、腰部で弱く屈曲するタイプである。体部外面には丸彫蓮弁文を有する。(405・406)は染付であり、(405)は皿B₁群である。底部内面には十字花文を描いている。(406)は端反りの碗Bであり、体部外面には唐草文を口縁部内面には四方禪文を描く。

SE3416出土遺物 (第32・33図, PL.33・34)

越前焼 (407・408)は播鉢であり共にⅣ群に属する。(407)は復元口径22.4cm、器高8cmを測る小型のタイプである。播鉢の中で主流となるものは大型タイプのものであり、本例のような小型タイプのものは少数である。(408)は復元口径35cm、器高16.6cmを測る。(409)は鉢である。

土師質土器 (411)はC類のものである。

瀬戸・美濃焼 (412・413)ともに鉄釉碗であり、(412)は復元口径11cmを測る。(413)は口径8.5cm、器高4.4cmを測り、釉は厚く施されている。

金属製品 (410)は茶釜の蓋であり、口径8.2cm、器高1.9cmを測る。遺存状態は極めて良好である。(414)は茶釜の身であるが、(410)とのセット関係については不明である。遺存状態は悪く錆が進行している。

石製品 (415)は石硯であり長方硯 I B c 類に属する。使用痕は全面に平均的に認められる。

SE3417出土遺物 (第33図, PL.34)

越前焼 (416・417)共に播鉢でありIV群に属する。

土師質土器 (418・419)共にC類であるが、(418)は口径11.4cm、(419)は口径7.3cmを測る。

木製品 (420)は櫛である。

SE3418出土遺物 (第33図, PL.34)

越前焼 (421)はIV群に属する播鉢である。

中国製陶磁器 (422)は青磁刻花文盤である。(423)は染付であり、碁笥底の皿C群であるが、口縁部が端反りであるところが通有のものと異なる。

SE3419出土遺物 (第34～48図, PL.35～37)

SE3419は遺構編で述べているように、天正元年の朝倉氏滅亡時まで機能していたものと考えられることから、井戸内下層よりまとまって出土した本遺物群は何らかの事情により、滅亡時に一括廃棄されたものと想定される。このことは、下層出土の遺物群が火事場整理のような形で井戸内において焼土混土により密閉されたような状態であったことから保証されるものである。すなわち、本報告資料は天正元年時における一乗谷の遺物組成の一端を示すものである。本遺構出土の遺物点数は19,454点を数えるが、そのうち16,594点は銅銭が占めており、この他の2,860点の中では土師質土器が最も多く2,008点を数えている。

越前焼 越前焼は甕・壺・播鉢などが認められ、破片点数では35点を数える。(425)は壺であり、口径15cm、器高47.4cm、胴部最大径42.4cmを測る。肩部には十字とT字形のヘラ記号を有する。

土師質土器 皿・小壺・灯芯押え・羽釜が出土したが、多くは小片である。(448)は直径2.2cmを測り、皿の体部を円形に打欠き中央を穿孔した灯芯押えである。

瀬戸・美濃焼 (426)は復元口径13.4cmを測る鉄釉碗であり、底部より体部が大きく開くタイプである。(428・429)は灰釉碗であり、口径は各々17.5cm前後を測るもの(429)のほうがやや器高が高い。(427)は口径9cm、器高2.6cmを測る灰釉皿である。

中国製陶磁器 青磁では碗・皿・盤・鉢が出土しているものの良好な資料は認められない。白磁は皿・坏が出土している。(430)は口径16.4cm、器高2.9cmを測る。底部外面外周に潰れた三角形の僅かな高台を有し、体部は直線的に外上方へ伸び口縁部へ至るといった特徴的な形態を呈する。白濁した乳白色の釉がかかるが、口唇部ではこれを拭き取り口禿げとしている。朝倉氏遺跡では少数ではあるものの定量存在するタイプである。(431)は口径11.8cm、器高2.8cmを測る。体部は強く外湾しながら伸び口縁部へ至る。(432)は口径11.2cm、器高2.5cmを測る端反りの皿である。染付は碗・皿が出土している。(433)は蓮子碗のC群である。体部外面には唐草文、底部内面には花卉文を描いている。(434)は饅頭心碗のE群であり、口径12cm、器高6.2cmを測る。体部外面には唐草文、底部内面には草花文を描く。(435)はE群の碗であり、体部外面には牡丹唐草文、底部内面には人物文を描いている。その他図示していないが、同じE群の碗と考えられる底部内面に人物文を有する破片が出土している。(436)は黒釉陶器碗であり、口径11.7cm、器高6.7cmを測る。胎土は緻密であり黒灰色を呈し、釉は厚く光沢のある深い黒色を呈する。(437・438)は華南彩釉陶器皿である。(437)は復元口径13cm、器高3.4cm、(438)は復元口径14.6cm、器高3.2cmを

各々測る。両者ともに二次的な火を受けたためか釉色が若干変化しており器面も荒れている。褐釉陶器はまとめて4点出土している。(439)は口径10cm、器高21.8cm、胴部最大径22cmを測る四耳壺である。器壁は薄く3mm程に仕上げられている。胎土は灰色を呈しており、砂粒を若干含むが堅く焼き締まっている。(440)は口径8cm、器高22.1cm、胴部最大径20cmを測る。器壁は薄く、胎土は緻密で堅く焼き締まる。口縁部から肩部にかけては茶褐色の釉が薄く施釉されている。(441・442)の両者は同タイプの四耳壺である。(441)は口径10cm、器高40.2cm、胴部最大径35cmを測り、(442)は口径11cm、器高41.2cm、胴部最大径34cmを測る。共に器壁は薄く0.5cm程に仕上げられている。この他に図示していないが赤絵皿の小破片が2点出土している。

銭貨名	初鑄造年	枚数	図版番号	タイプ数	銭貨名	初鑄造年	枚数	図版番号	タイプ数
中国					慶元通宝	1201 南宋	38	813~818	6
開元通宝	621 唐	1,808	466~476	11	嘉泰通宝	1205 "	20	819~822	4
乾元通宝	758 "	74	477~485	9	開禧通宝	1208 "	23	823~825	3
乾徳元宝	919 前蜀	6	486	1	嘉定通宝	1208 "	83	826~838	13
漢元通宝	948 後漢	3	487・488	2	大宋元宝	1225 "	8	839~841	3
周元通宝	955 後周	1	489	1	紹定通宝	1228 "	37	842~847	6
唐国通宝	959 南唐	8	490・491	2	端平元宝	1234 "	3	848	1
宋通元宝	968 宋	61	492~502	11	嘉熙通宝	1237 "	14	849~852	4
太平通宝	976 "	137	503~512	10	淳祐元宝	1241 "	36	853~859	7
淳化元宝	990 "	142	513~520	8	皇宋元宝	1253 "	24	860~865	6
至道元宝	995 "	268	521~534	14	開慶通宝	1259 "	1	866・867	2
咸平元宝	998 "	366	538	1	景定元宝	1260 "	26	868~872	5
景德元宝	1004 "	413	535~537	3	咸淳元宝	1265 "	30	873~877	5
祥符元宝	1008 "	775	539~544	6	至大通宝	1310 元	3	878・879	2
祥符通宝	1008 "	586	545~550	6	至正通宝	1341 "	3	880・881	2
天禧通宝	1017 "	553	551~554	4	天定通宝	1359~60 "	1	882	1
天聖元宝	1023 "	780	555~569	15	大中通宝	1360 明	13	883~887	5
明道元宝	1032 "	69	570~578	9	洪武通宝	1368 "	305	888~904	17
景祐元宝	1034 "	274	579~591	13	永樂通宝	1408 "	48	905~907	3
皇宋通宝	1039 "	1,689	592~610	19	宣徳通宝	1426~33 "	5	908	1
至和元宝	1054~55 "	158	611~616	6	弘治通宝	1488~1503	15	909	1
至和通宝	1054~55 "	35	617~619	3	嘉靖通宝	1527 "	1	910	1
嘉祐通宝	1056 "	309	620~630	11	小計		16,480		445
嘉祐元宝	1056 "	137	631~637	7	安南				
治平元宝	1064 "	244	638~650	13	大治通宝	1360	1	911	1
治平通宝	1064 "	35	651~654	4	紹豊通宝	1341	1	912	1
咸雍通宝	1065 "	1	655	1	順天元宝	1428	2	913・914	2
熙寧元宝	1068 "	1,402	656~675	20	紹平通宝	1434	7	915~918	4
元豊通宝	1078 "	1,633	676~698	23	大和通宝	1443~53	6	919~923	5
元祐通宝	1086 "	1,162	699~717	19	延寧通宝	1453~65	7	924~928	5
紹聖元宝	1094 "	524	718~727	10	光順通宝	1470	11	929~932	4
元符通宝	1098 "	186	728~733	6	洪徳通宝	1470	21	933~935	3
聖宋元宝	1101 "	565	734~750	17	洪順通宝	1509~15	1	936	1
大観通宝	1107 "	248	751	1	玄聰尊宝		1	937	1
政和通宝	1111 "	768	752・773	22	小計		58		27
宣和通宝	1119 "	91	774~782	9	朝鮮				
建炎通宝	1127 南宋	3	783~785	3	朝鮮通宝	1423 李朝	22	938	1
紹興通宝	1131 "	2	786・787	2	小計		22		1
紹興元宝	1131 "	5	788・789	2	琉球				
天盛元宝	1158 西夏	2	790	1	大世通宝	1454~60	1	939	1
正隆元宝	1167~78金	54	791	1	世高通宝	1461~69	2	940・941	2
乾道元宝	1165 南宋	1	792	1	小計		3		3
大定通宝	1174 "	34	793~797	5	不明		31		
淳熙元宝	1174 "	97	798~807	10	合計		16,594		
紹熙元宝	1190 "	34	808~812	5					

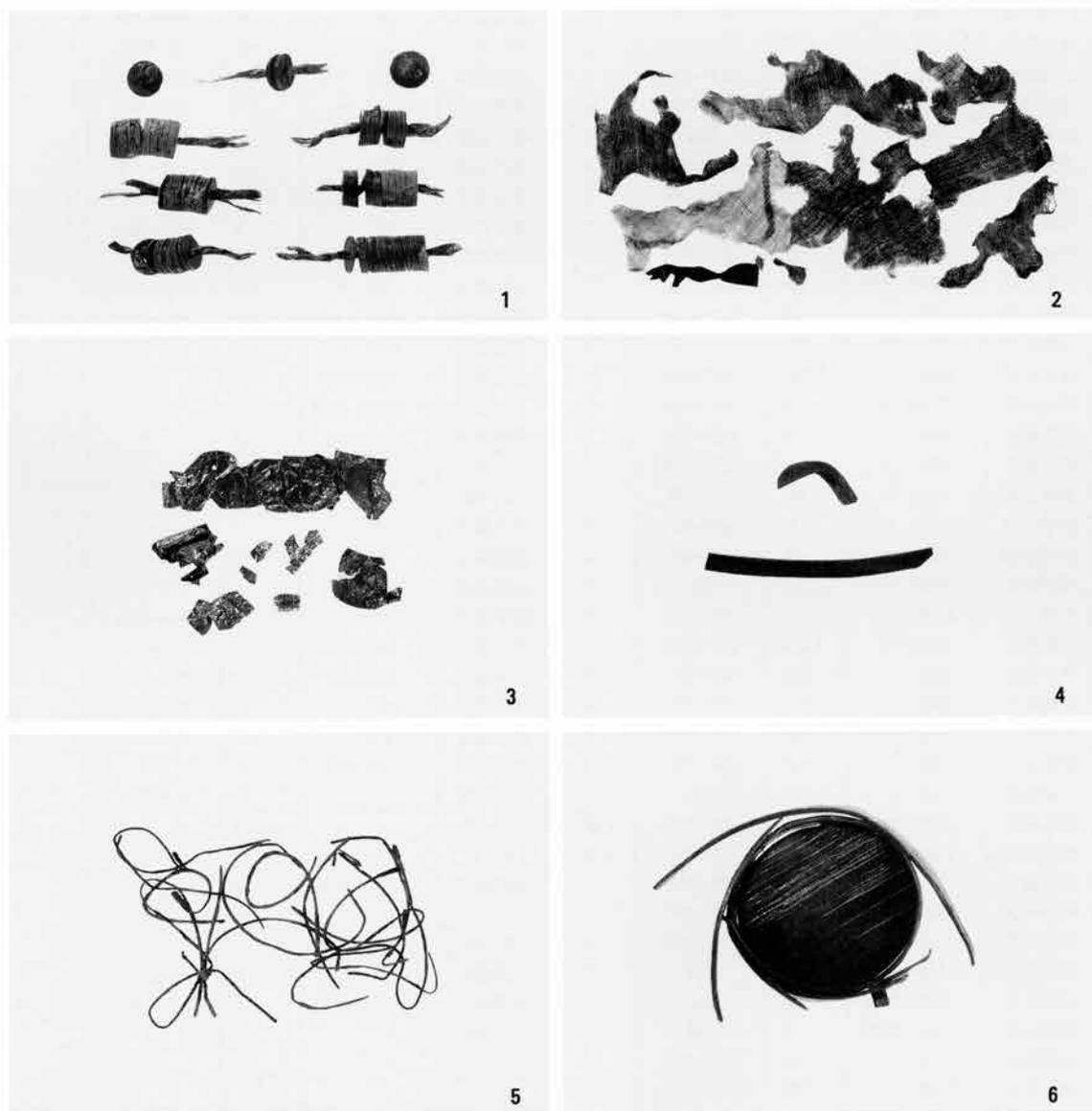
表3 SE3419出土銅銭一覧表

金属製品 先にも述べたようにS E3419からは16,594枚の銅銭が井戸底から一括出土しており、これらの中には、挿図9の1に見られるように藁紐に通された状態のものも認められた。これらの銭種と枚数の内訳は表3(45ページ)に示すとおりであり、各銭種ごとの字体によるバラエティについては(466~941)に拓本により示した。全体的な遺存状態は良好であったが、中には銭種の判読すら困難なまでに摩耗したのも若干認められた。(445)は太刀の柄頭に取り付く冑金であり、全長4.4cm、最大幅3.5cmを測る。また猿手(446)も本体に付着するかたちで出土している。この他、金箔(挿図9の3)、覆輪(挿図9の4)、針金(挿図9の5)が出土している。

木製品 (挿図9の6)小型の曲物であり、直径4.2cmを測る。この他、漆皿片、板材が出土している。

石製品 (443)は上臼であり、播目は13条単位の8分割である。下臼の破片も出土しているものの石材が異なるためセット関係は持たないものと考えられる。(444)は石硯であり、長方硯I B a類に分類される。この他、バンドコ、井戸杵が出土している。

その他の製品 (447・449・450)は骨加工製品である。(447)は表面に6ヶ所の刺突文を持つ駒である。(449)は材の一部を残して削り込んでいるが、用途については不明である。(450)は材の片側に長方形の



挿図9 S E3419出土遺物(1銅銭 2布 3金箔 4覆輪 5針金 6曲物)

穿孔をおこなっているが、用途不明である。(挿図9の2)は布片である。材質は麻と考えられ、生地には藍染が施されている。皮紐が取り付けられている。

S E 3420出土遺物 (第33図)

越前焼 (424)は播鉢でありIV群に属する。口径34.8cm、器高14.4cmを測り、播目は底部内面にも施している。

S E 3421出土遺物 (第36図, PL.37)

瀬戸・美濃焼 (451)は鉄釉壺である。

中国製陶磁器 (452)は染付碗であり、底部を欠失するものの蓮子碗のC群であると考えられる。体部外面には唐草文を描いている。

S F 1466出土遺物 (第36図)

土師質土器 (453・454)共にC類である。(453)には底部内外面共にタールが付着する。

S F 3422出土遺物 (第36図, PL.37)

土師質土器 (455～457)共にC類であり、(456)は口縁部にタールを付着させている。(458)は土鈴である。

瀬戸・美濃焼 (459)は口径5.6cm、器高1.9cmを測る鉄釉小皿である。

朝鮮製陶磁器 (460)は口径16.6cm、器高5.7cmを測る蕎麦茶碗である。

S F 3427出土遺物 (第36図, PL.37)

土師質土器 (461)は土釜である。

瀬戸・美濃焼 (462)は復元口径11.5cm、器高5.8cmを測る鉄釉碗である。厚めの釉を施している。

S F 3429出土遺物 (第36図, PL.37)

中国製陶磁器 (463)は復元口径14.3cmを測る青磁碗である。

S F 3430出土遺物 (第36図)

土師質土器 (464・465)共にC類であり、(464)は口縁部にタールが付着する。

4. 第57次調査小結

遺 構

検出された各遺構について前項において主として個別の解説と検討を行った。それを受けて、ここではある程度全体的な検討が可能であるⅡ・Ⅲ期の遺構を中心に若干の考察を加え、まとめとする。

遺構の年代

前述したように各遺構は基本的にⅠ・Ⅱ・Ⅲの3期に区分した。そのうち水田直下に存在するのがⅢ期の遺構群で、これは都市一乗谷が織田信長軍の攻撃を受けて滅亡した天正元年(1573)の時点に存在したと判断されるものである。このことを如実に示すと考えられるのが井戸S E3419の状況である。この井戸の底からは16,000枚を超す多量の銅銭が出土し、上部は水田化に際して周辺を整理、整地した焼土を主とする土で埋められていた。この井戸の埋土中の遺物と周辺の整地土中の遺物に接合する個体が存在することから、この井戸が滅亡時まで機能を果たしていたことは確実である。また多量の銅銭はこうした埋土の下、底で一括して出土しており、滅亡寸前に意識的にまとめて投げ入れられたと判断される。この時期として考えられるのは、朝倉氏と運命を共にして一乗谷の町が焼き討ちされる非常時とするのが妥当であろう。こうしたⅢ期の遺構の0.1mほど下層に位置するのがⅡ期とした遺構群である。このⅡ期とした遺構群は主として西南部で顕著であるが黄色土や山土で覆われている。この年代差は明らかでないが、後述するように屋敷の基本的枠組みとなる北境界の土塁S A3411や屋敷内の構成の主要な要素である庭園S G3443がⅢ期にも継続しており、またレベル差も比較的少ないことなどから考えると、大きな年代差はないのではなかろうか。これに対しⅠ期とした遺構は断片的な検出にとどまるが、さらに0.4m程度下層に位置するようで、Ⅰ期とⅡ期の間には比較的規模の大きな整地があったものと思われる。なお、Ⅱ・Ⅲ期とした遺構群は基本的には後述する屋敷割りにのるものと判断されるが、Ⅰ期とした遺構については明確ではない。従来より一乗谷内の計画的な町造りが実施されるのは、初代孝景が越前の実質的な支配者となる文明3年(1471)以降、16世紀初頭頃と推定されている。これを覆すような新たな事例は認められない。こうした点から、今回検出した遺構は、所見についての明確な判断材料は欠くが、文明3年(1471)以降、滅亡する天正元年(1573)まで、基本的には16世紀の前半から中期と考えられる。

地区計画と屋敷

調査区はⅡ・Ⅲ期においては北の土塁S A3411が基準となる。南の境界は未検出であるが調査区の南端に高さ1m弱の水田境界の石垣が存在すること、また庭園S G3443も築かれていること等からほぼこの石垣付近が屋敷境界と考えて良いものと思われる。とすれば、その屋敷間口は45m強となる。

また、東西方向土塁S A3411の東端から南へ延びる南北方向石垣S V3412等が検出された付近を境にして東西で様相が異なっている。西は東西方向の溝S D3432や石列S V3414等に代表されるような比較的整然とした遺構が存在するのに対し東には多くの石積施設群が南北に点在している。これまでの調査成果と合わせ考えると、西は基本的には間口は45mを超し、奥行きは山裾までの50~60mとなる大規模な屋敷、東は小規模な屋敷が連続すると考えて良いものと思われる。しかしこの地区の北部の西山裾に展開する大規模な屋敷群に見られたように、直接道路に接し、これに沿う前面を明確に区画する土塁や

門は検出されていない。この間口45mほどとした西の屋敷への導入路としては第58次調査で検出された東西方向道路S S 3525及び本調査区東端近く中ほどで検出されている道路の可能性のある石列S V 1427及び溝S D 3436に挟まれた幅2.4mほどの部分が想定されよう。ちなみにこの間隔は33mほどである。なお、Ⅲ期においては石垣S V 3412等は埋められ、これに代わって、南北方向の柱穴列S X 3468等が東西を区分する境界遺構であった可能性が強いものと思われる。東半については石積施設群が南北に点在していることや第31次調査の状況を合わせ考えると、基本的には南北に南から北に流れる一乗谷川に沿って道路が設けられ、これに面する小規模な屋敷が存在したものと考えられよう。だが全体的には敷地においては東西の部分の大きなレベル差はなかったようであり、明確な境界も検出されておらず、何らかの連続性も想定されよう。

屋敷の構成

Ⅱ・Ⅲ期においては基本構成に大きな変化はないものと思われる。西の大規模屋敷への出入り口となる道路としては第58次調査で検出された東西方向道路S S 3525及び本調査区東端近く中ほどで検出されている道路の可能性のある石列S V 1427及び溝S D 3436に挟まれた幅2.4mほどの部分であることは前述した通りである。残念ながら建物礎石の多くは失われているため、詳細な建物の配置や平面構成は判明しないが、屋敷内は中ほどやや北寄りに東西方向の溝S D 3432及び石列S V 3414・3415等によって南北に2分されることがうかがわれる。そして南半部には庭園S G 3443が存在し、石積施設は北半に集中していることも指摘される。またこの時期の大規模な上層階級の屋敷は一般的には大きく接客と主人の常住の場である「ハレ」の空間(表向)と日常生活においてこれを支える裏方の場としての「ケ」(内向)に2分されることが明らかにされている。こうした点からこの屋敷においても、南半を「ハレ」の空間(表向)、北半を「ケ」(内向)と考えて良いものと思われる。こうした想定が許されるならば、南半部の中心となるのは中ほどの建物S B 3439ではなかろうか。そして庭園の北に位置する建物S B 3441・3442はこれに続く会所的な機能を有する建物と考えられよう。また、ここで検出された庭園S G 3443はこうした上層階級の屋敷における庭園の実例として貴重なものといえる。なお山裾部、この建物の西に位置する建物S B 3440は連続的に礎石を配しており、こうした例は蔵と推定される場合が多いことがこれまでの調査で指摘されている。北半の中心となるのは溝S D 3433・3434で囲まれた所に存在したと想定される建物(S X 3460はその一部か)であろう。台所等の機能が想定される。また、出入り口については指摘した2つが存在したとすれば、当然南半に取り付くのが表(門)であり、北半に北から取り付くのが裏(門)となろう。Ⅱ期においてS V 3413及びS X 3445・3447が南北方向の土塁となっていた時は北から中央付近まで南下し、溝S D 3432と石列S V 3414の間に1個所の門が設けられていた可能性が強いものと思われる。

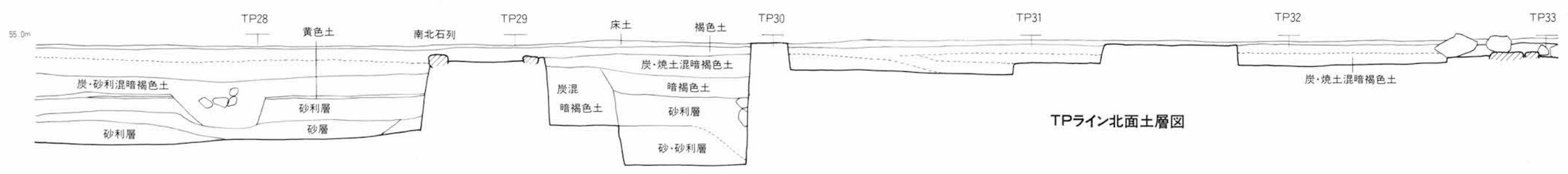
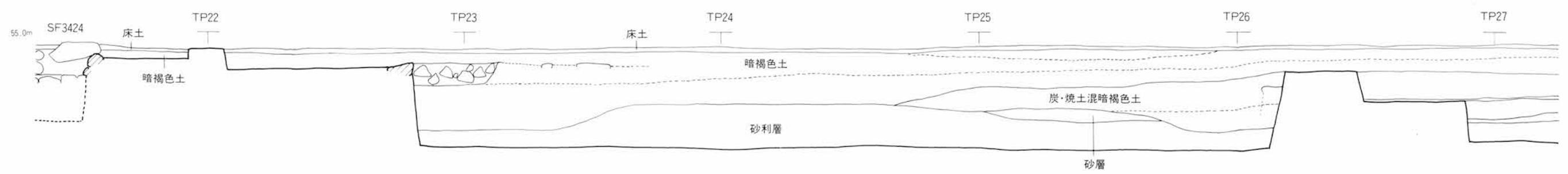
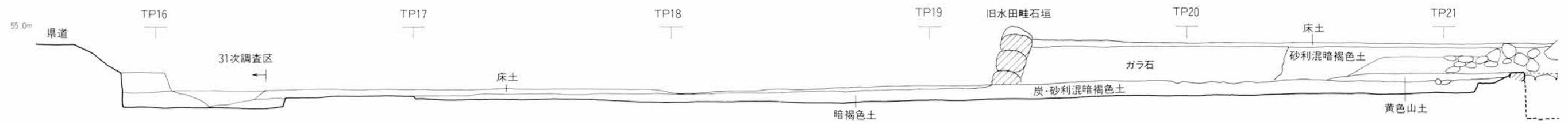
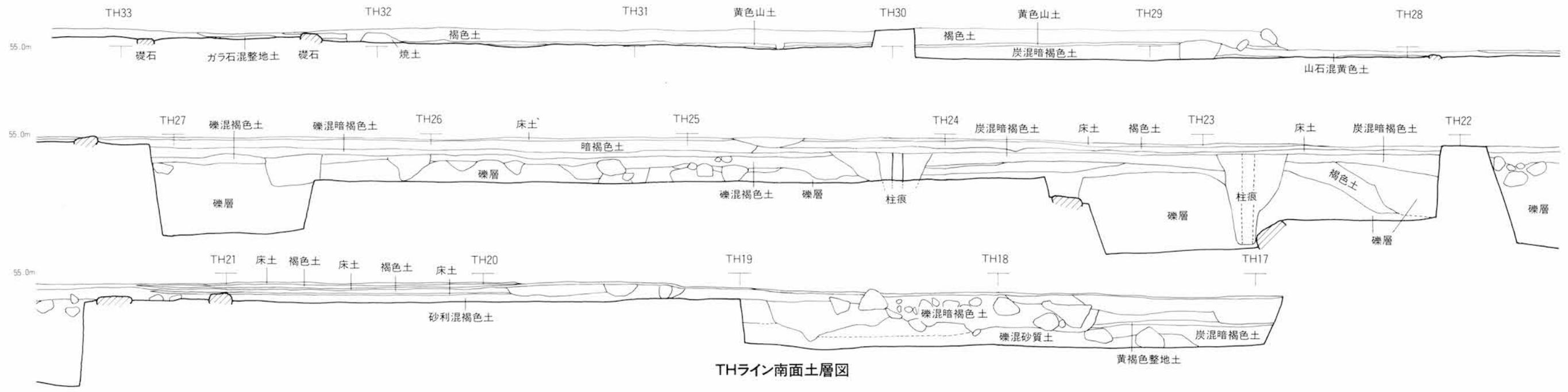
東半部については、第31次調査区で検出されている東西方向の溝や井戸そして多くの石積施設等と合わせて考えると、東西方向道路S S 3525及び本調査区東端近く中ほどで検出されている道路の可能性のある石列S V 1427の間は南から12、9、12mの幅に3分割できるように思われる。しかし、第29・35・36次調査区等で見られたようなこうした区画を明確に区分する溝等の遺構は顕著でない。石列S V 1427及び溝S D 3436の南部については大きく削平されており、判断材料を欠くが更に南の状況等と照らし合わせて考えると、大きな変化はないものと判断される。なお、小区画の中心建物はこれらの区画が面したと考えられる東の道路側に存在したものと想定されよう。

まとめ

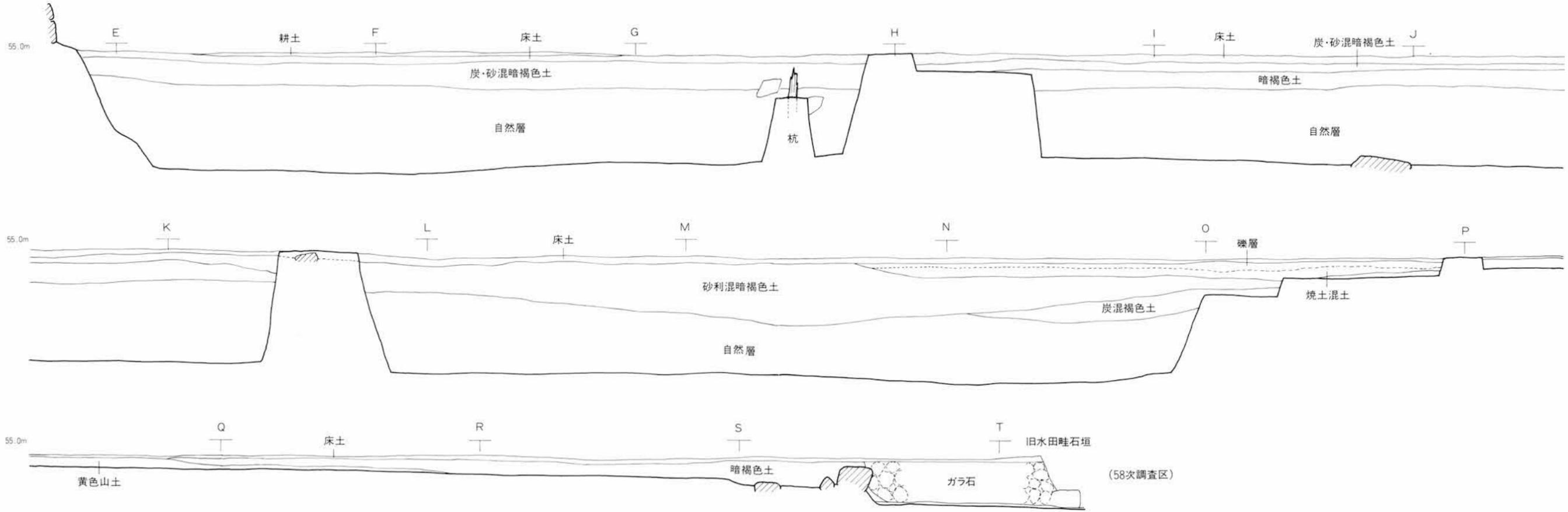
以上の諸点をふまえ、本調査で判明したことをまとめると、次のようになる。

遺構群は基本的には16世紀に位置付けられ、最終は一乗谷の滅亡する天正元年の時点に存在したと判断されるものであって、これらは大きく3期に分けられる。そして全体的な考察の可能な後半の2時期においては区画割りの大きな変化は認められない。また、屋敷割りの骨格を示す道路は検出されなかったものの、山裾側には、東を正面とした間口が45mを超し奥行きが50～60mの大規模な屋敷が存在する。この屋敷内は中ほどの東西方向の溝や通路で南北に2分され、「ハレ」すなわち表向の空間となる南半にはこうした屋敷の空間構成を考える上で貴重な庭園遺構SG3443が存在する。「ケ」すなわち内向の空間である北半には石積施設等が配置されている。この大規模屋敷の東には明確な境界遺構は見られないうが、間口を9～12mほどとする小規模な屋敷が配置されていたと予想される。だが、これらの小区画と奥の大規模屋敷との間の境界についてはあいまいな点もあり、なんらかの関係があった可能性を指摘するに止どめる。

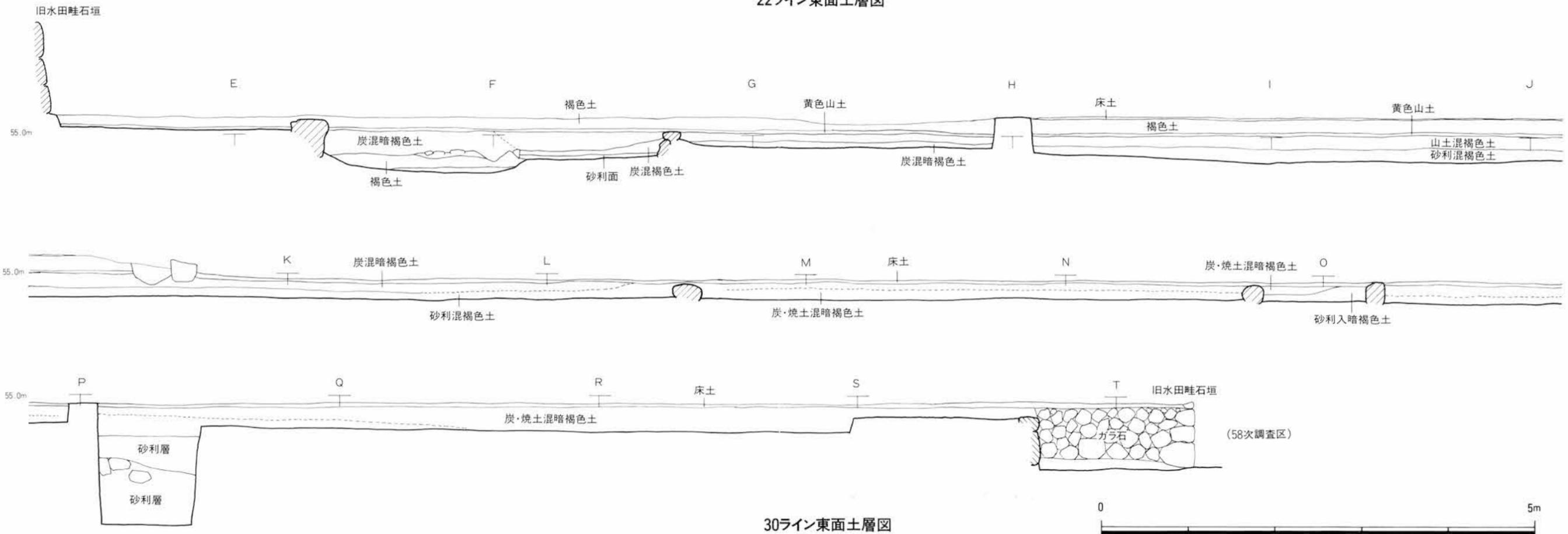
第16図 第57次調査土層図 (1)



第17図 第57次調査土層図 (2)

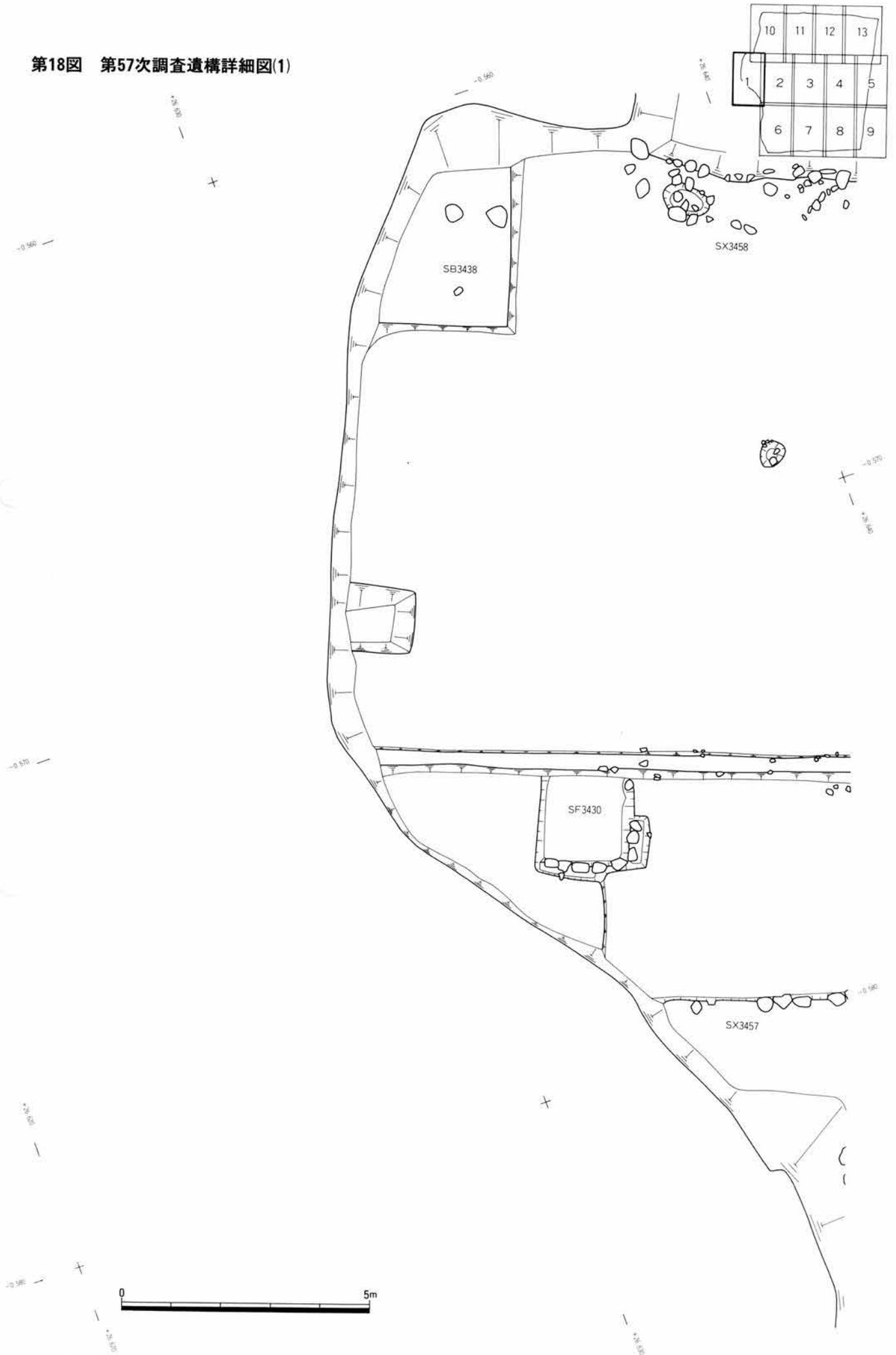


22ライン東面土層図



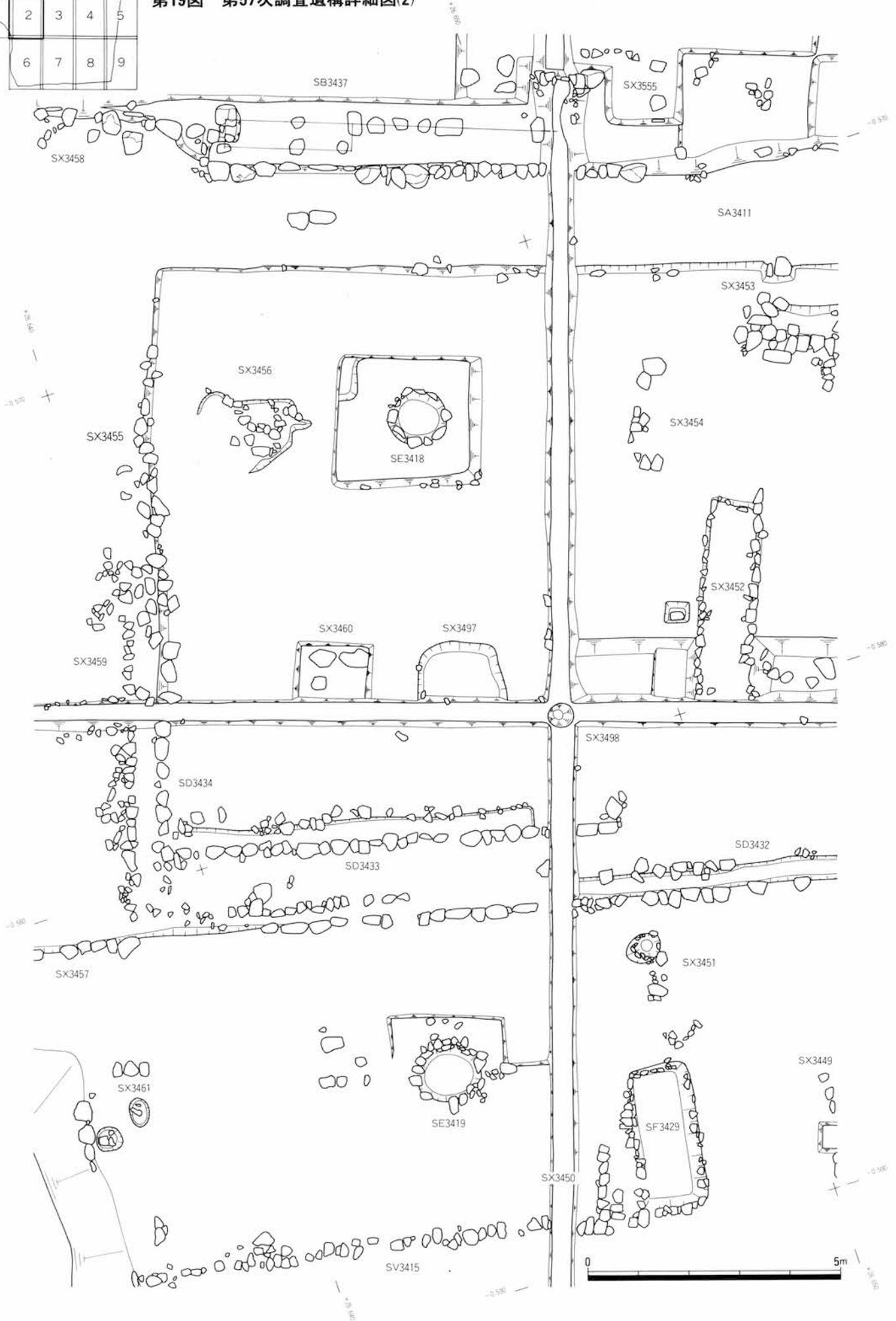
30ライン東面土層図

第18図 第57次調査遺構詳細図(1)

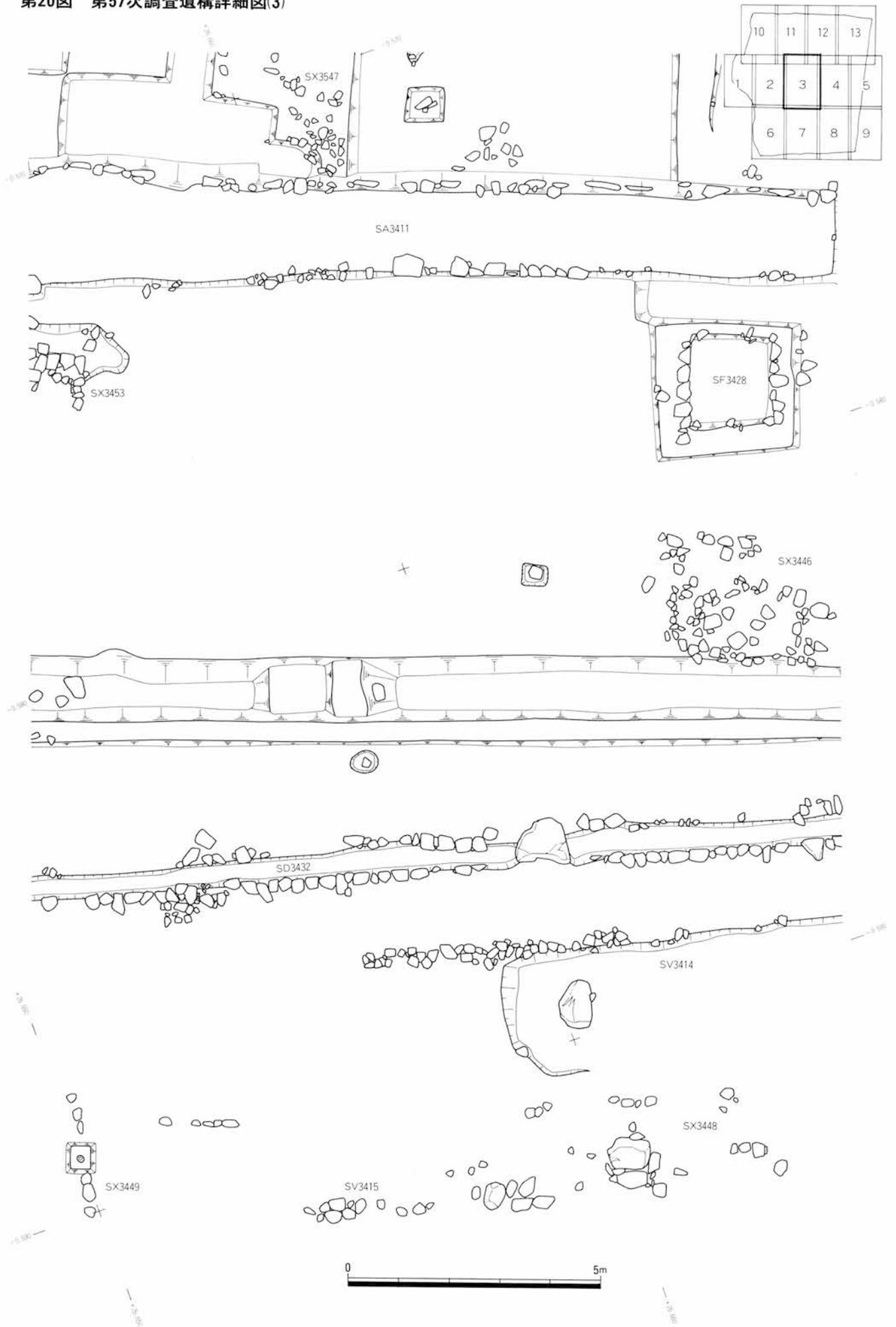


	10	11	12	13
1	2	3	4	5
6	7	8	9	

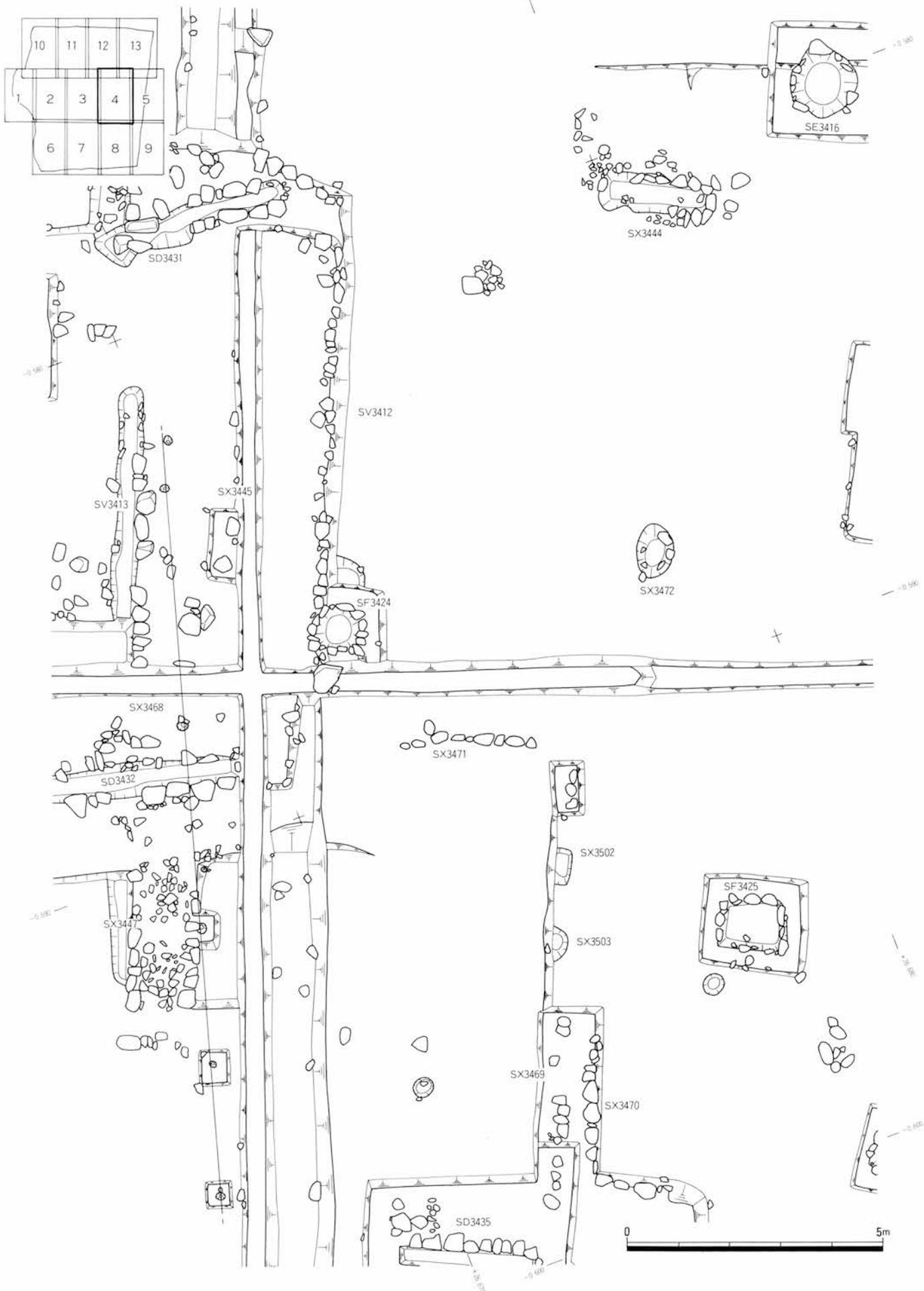
第19図 第57次調査遺構詳細図(2)



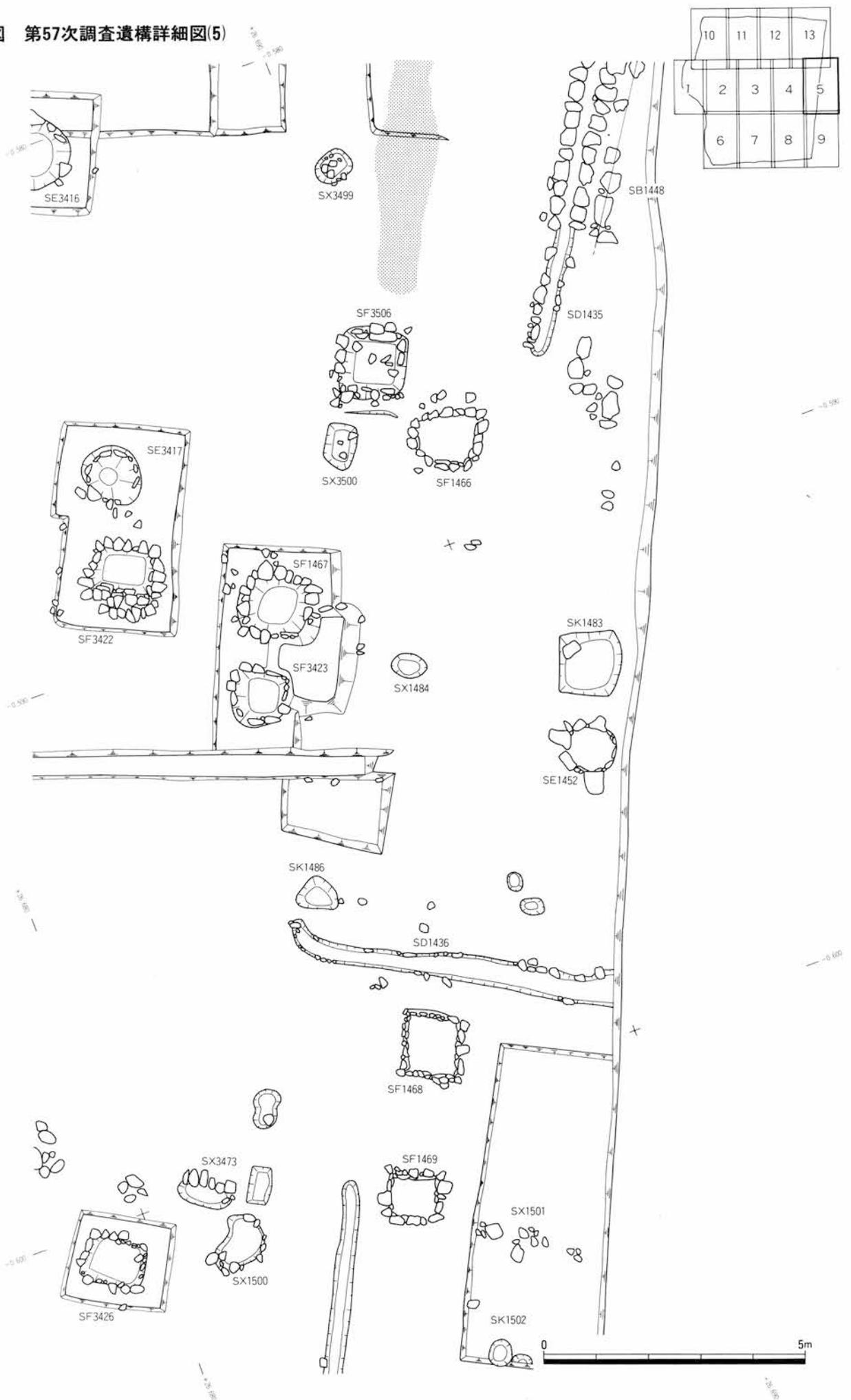
第20図 第57次調査遺構詳細図(3)



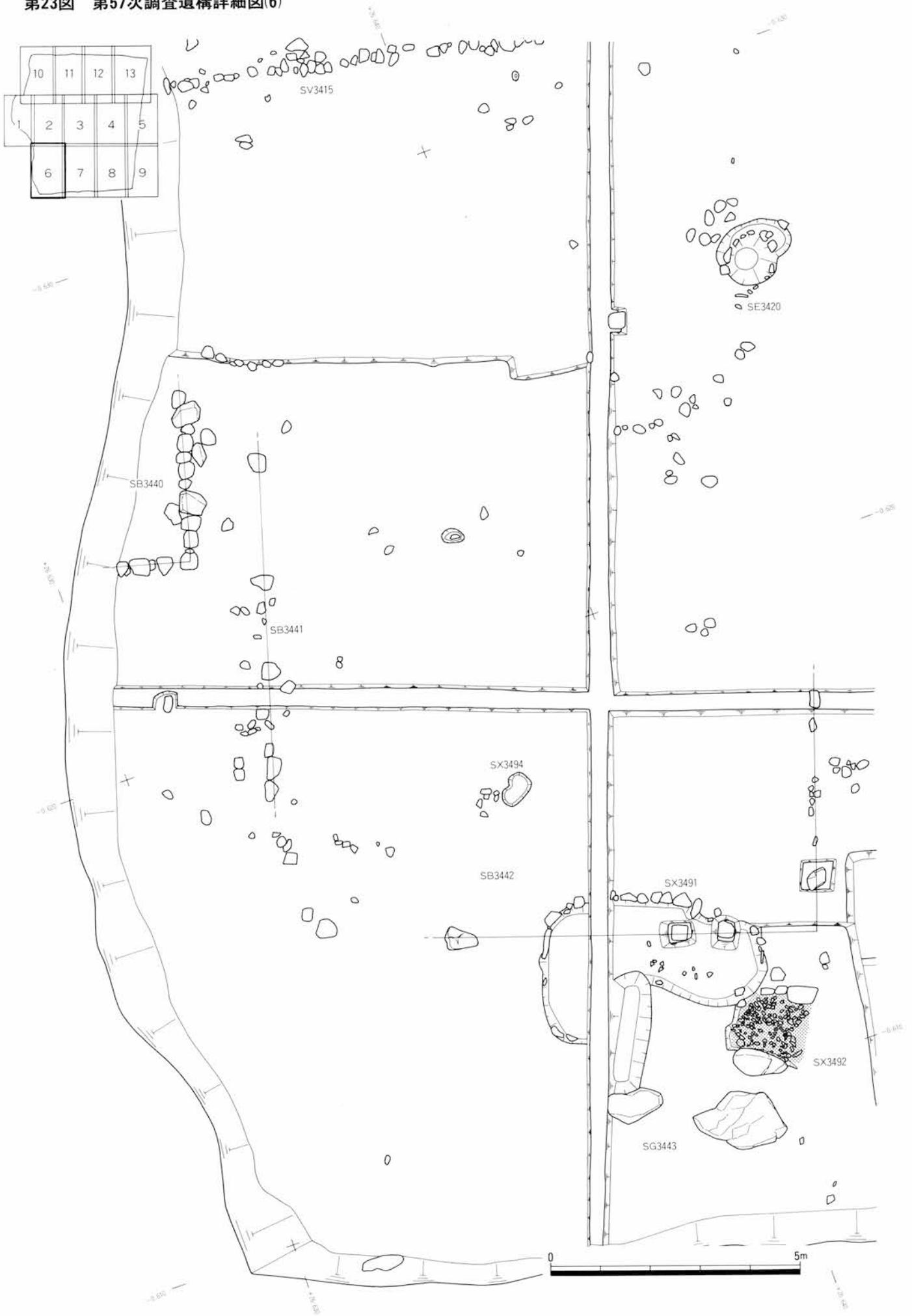
第21図 第57次調査遺構詳細図(4)



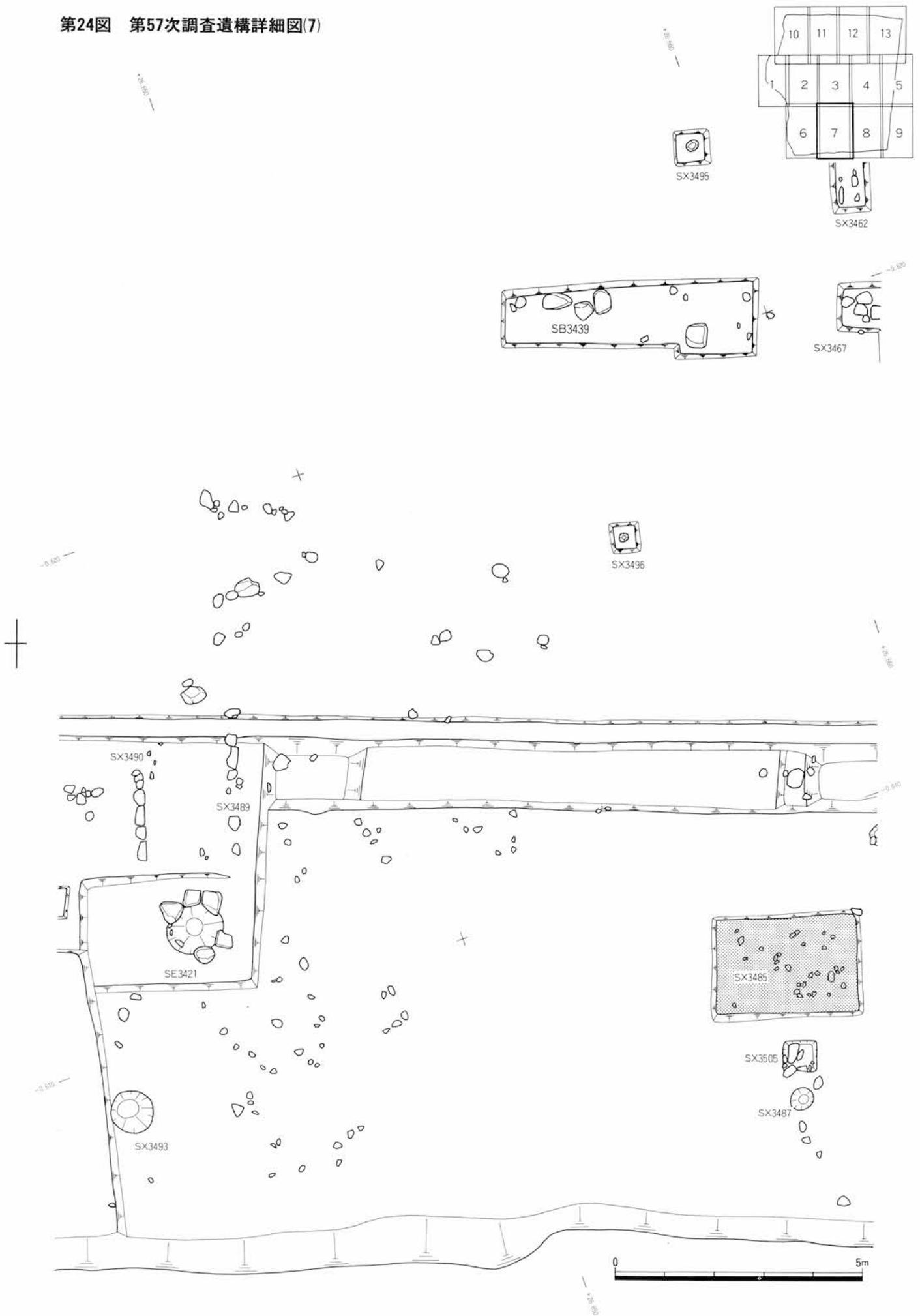
第22図 第57次調査遺構詳細図(5)



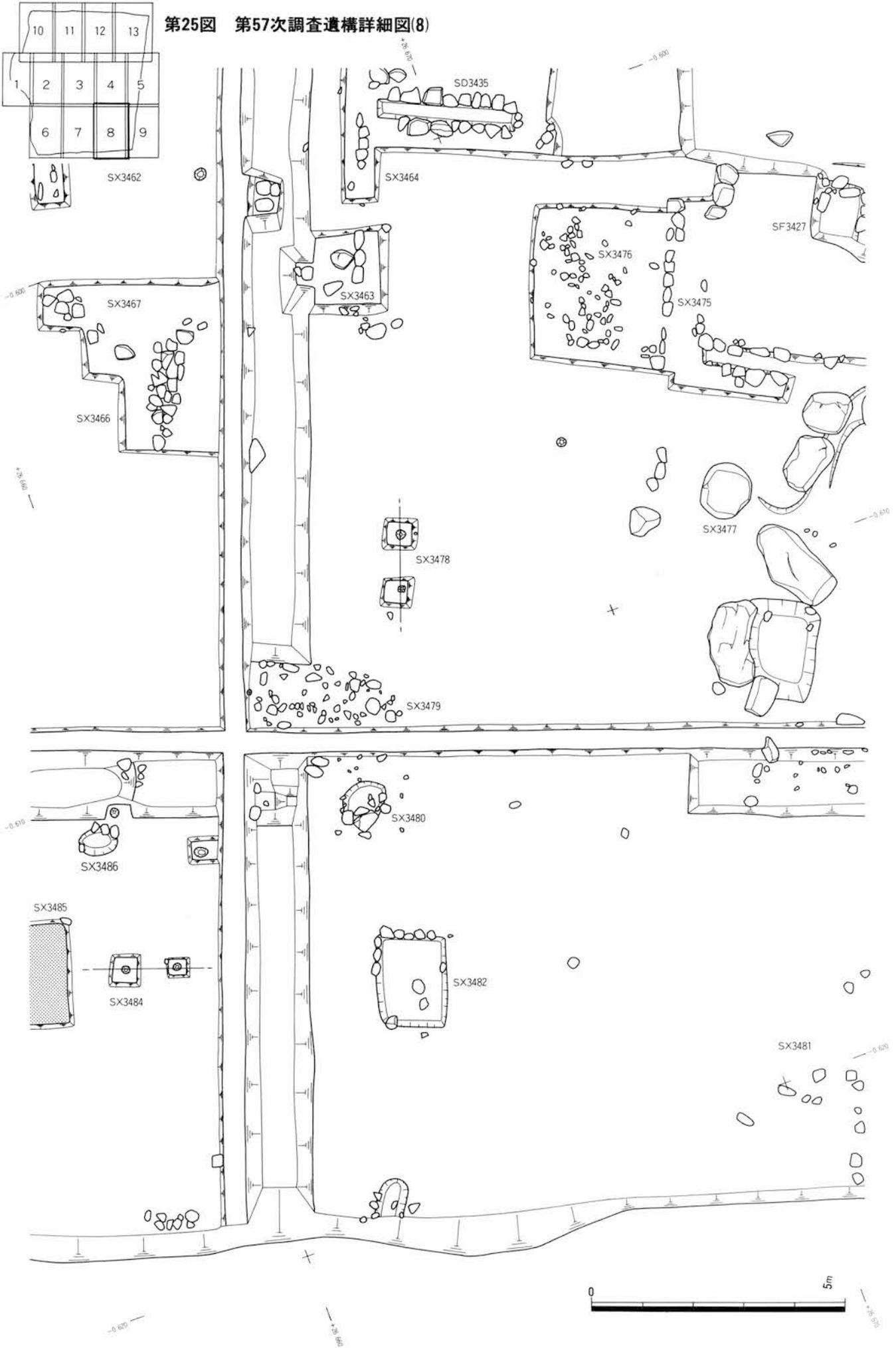
第23図 第57次調査遺構詳細図(6)



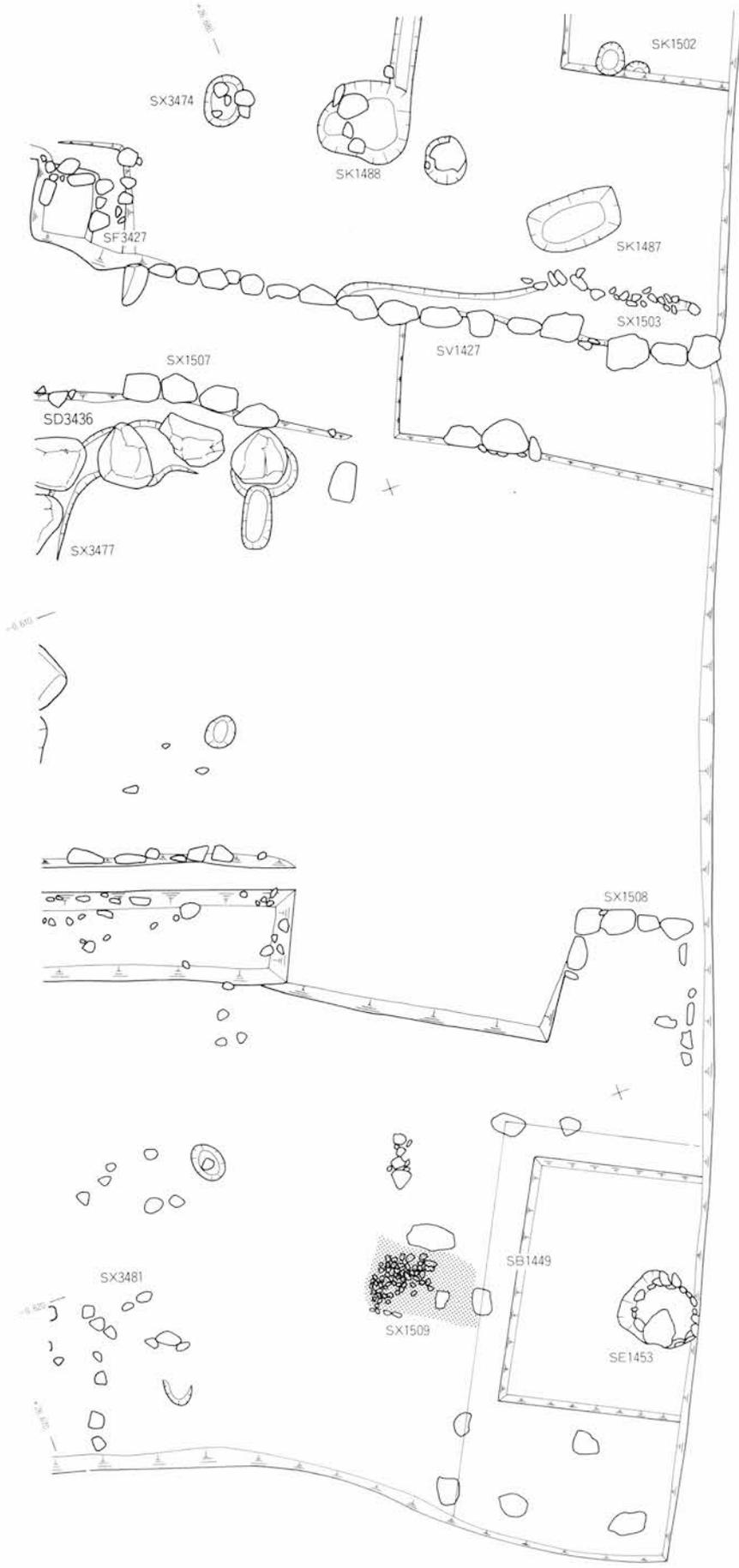
第24図 第57次調査遺構詳細図(7)



第25図 第57次調査遺構詳細図(8)



第26図 第57次調査遺構詳細図(9)



	10	11	12	13
1	2	3	4	5
6	7	8	9	





(北東から)



(北西から)



第57次調査・
調査区中景

(南西から)



(南から)



(南東から)

第57次調査・
調査区中景



調査区西半
(南から)



調査区中央
(南から)



調査区東半
(北から)



調査区西半
(北から)

第57次調査・
主要遺構



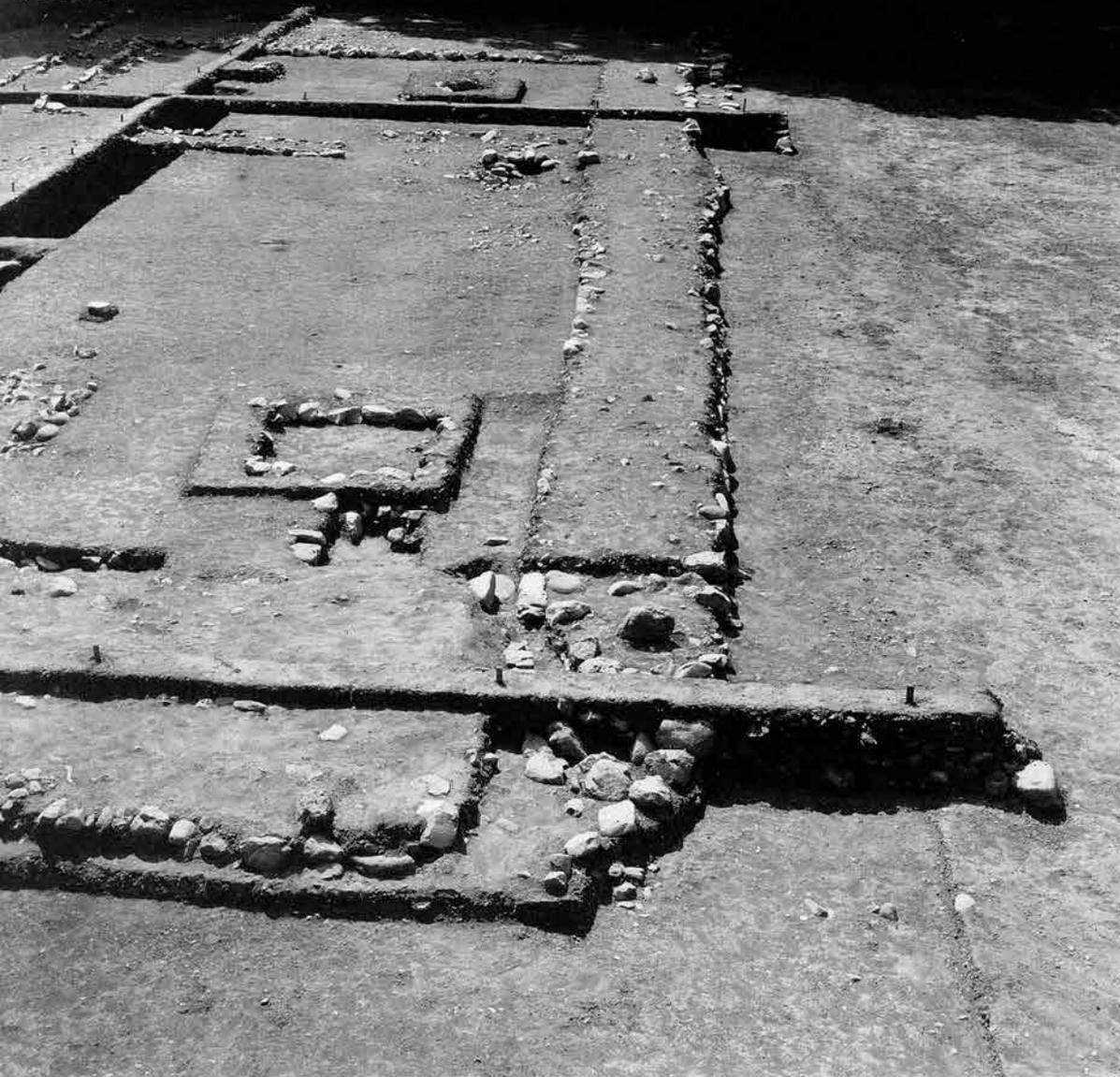
溝SD3432及び
SV3414
(東から)



SX3452及び
SX3459
(東から)



石列SV3412・
列SV3413及び
溝SD3432
(南から)



第57次調査・
主要遺構

土塁SA3411
(東から)



SX3476及び
SX3477
(北から)

第57次調査・
南西隅建物群

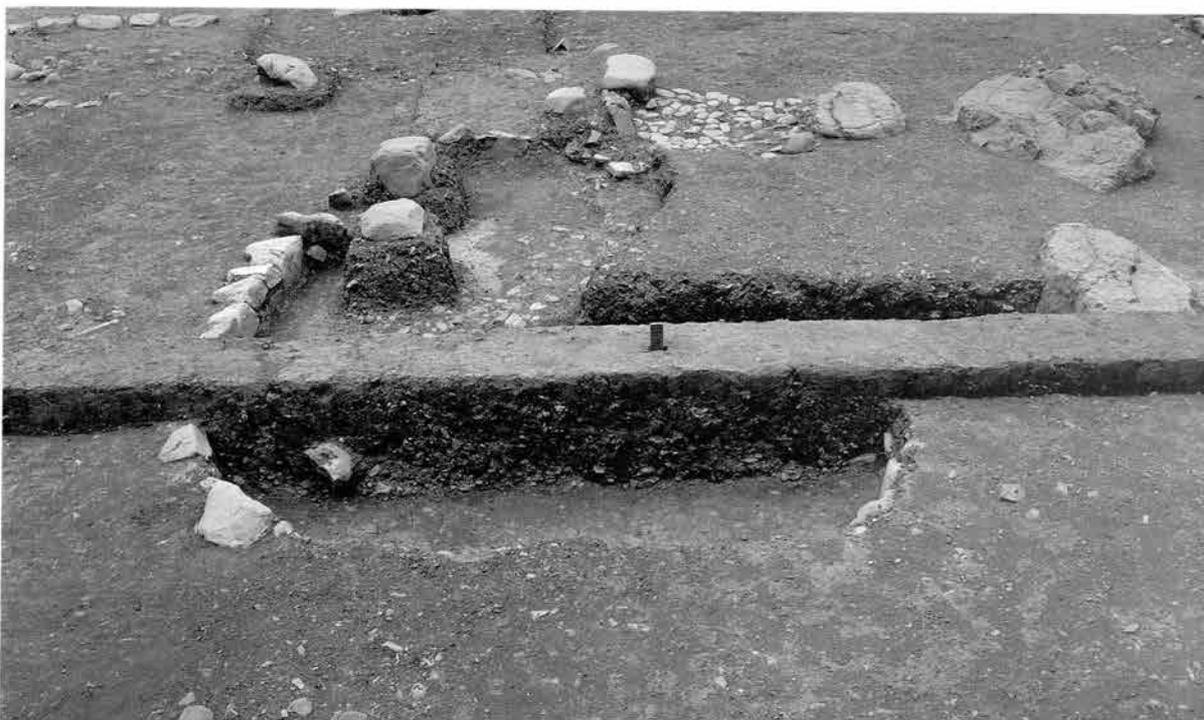
PL. 24



SB3440及び
SB3441
(南から)



庭園SG3443
(北から)



同上
(西から)



石列SV3415及び
石積施設SF3429
(東から)



◀ SF3428 (東から)
▶ SF3425 (南から)



◀ SF3426 (北から)
▶ SF3506 (西から)

第57次調査・
石積施設



◀ SF3427 (北から)
▶ SF3424 (東から)



◀ SF3423 (西から)
▶ F1467 (西から)



SF3430
(西から)



第57次調査・
井戸

- ◀ SE3417
- ▶ SF3422 (西から)



- ◀ SE3416 (南から)
- ▶ SE3418 (西から)

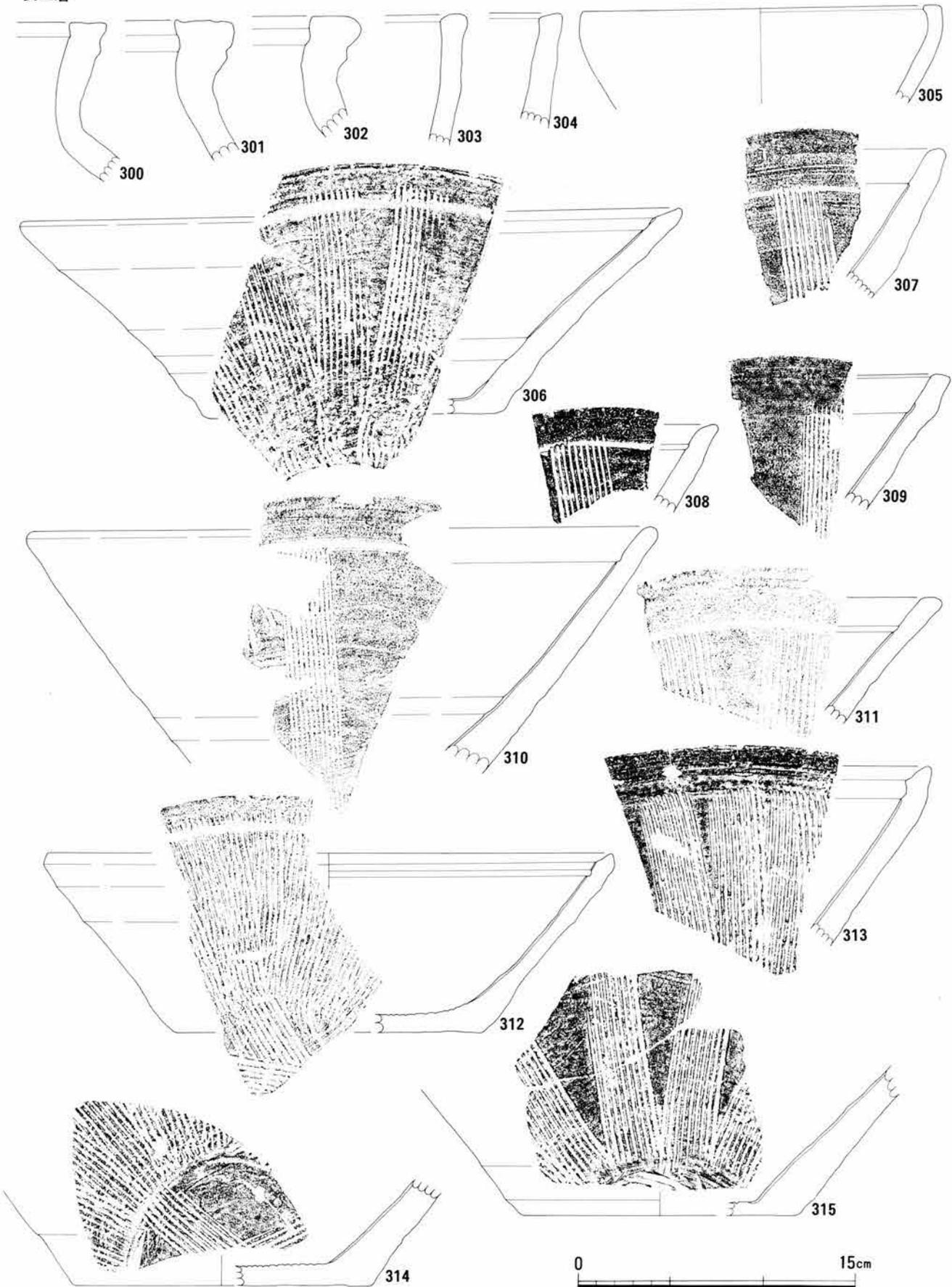


- ◀ SE3419 (南から)
- ▶ SE3421 (北から)

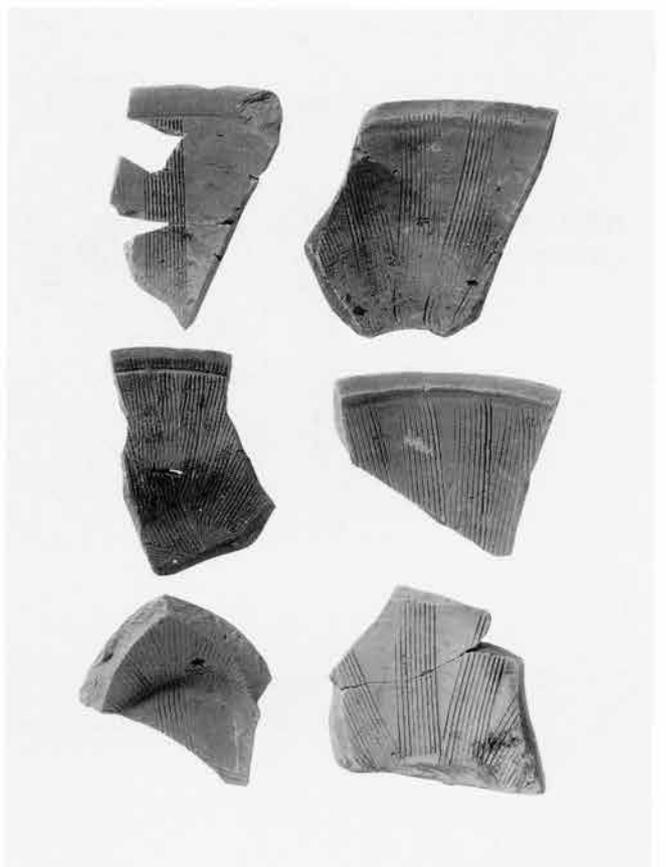
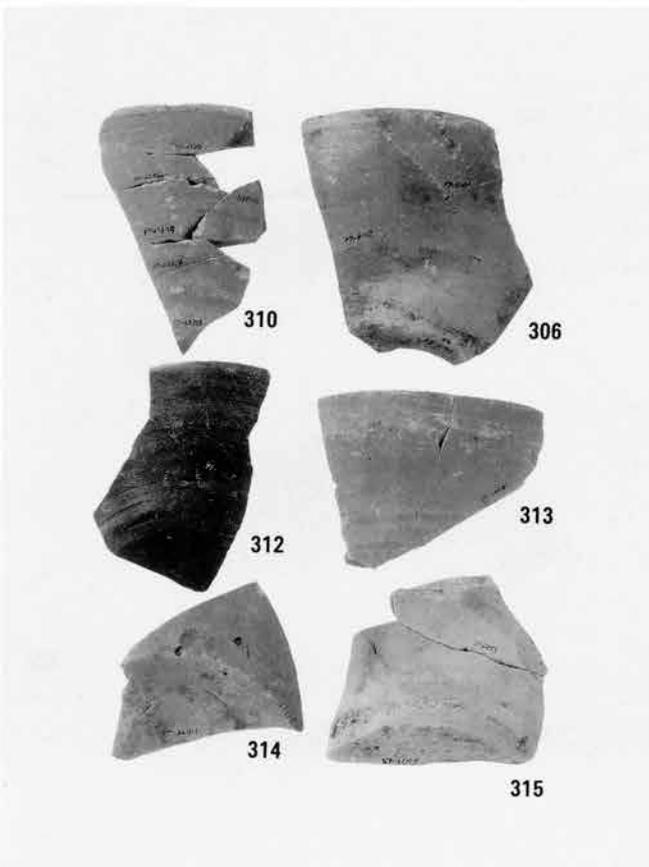
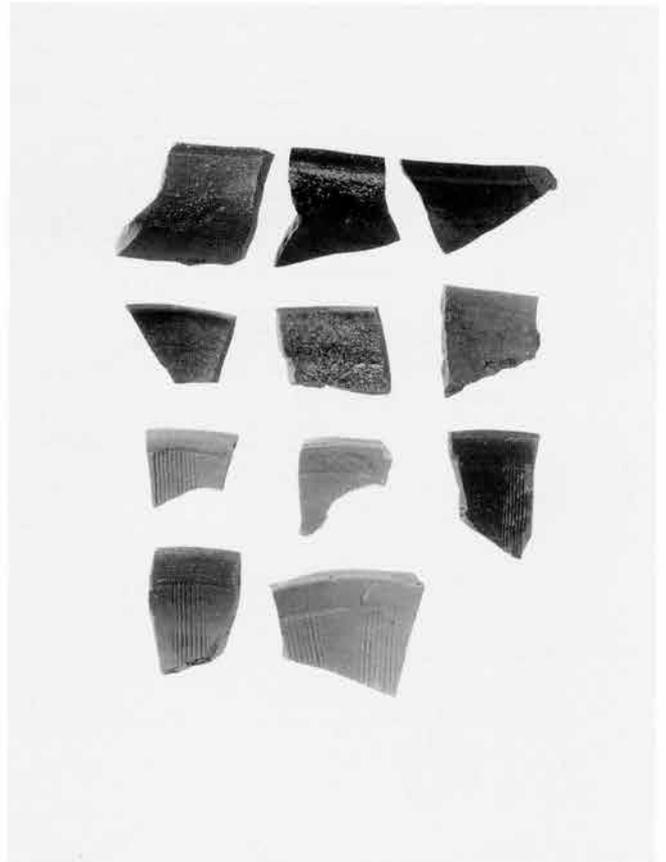
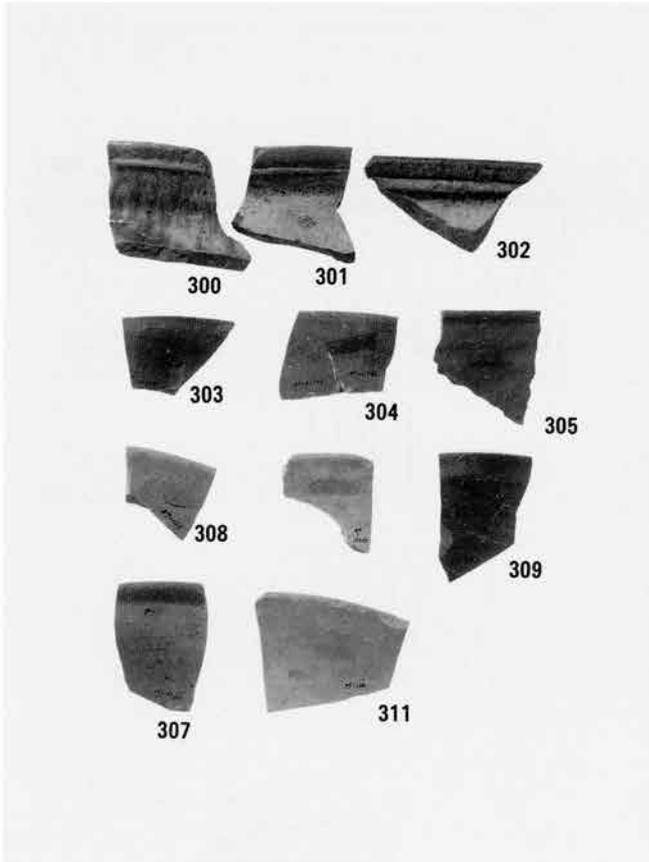


第27図 第57次調査出土遺物(1)

表土層

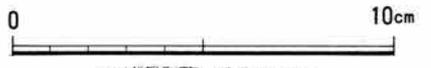
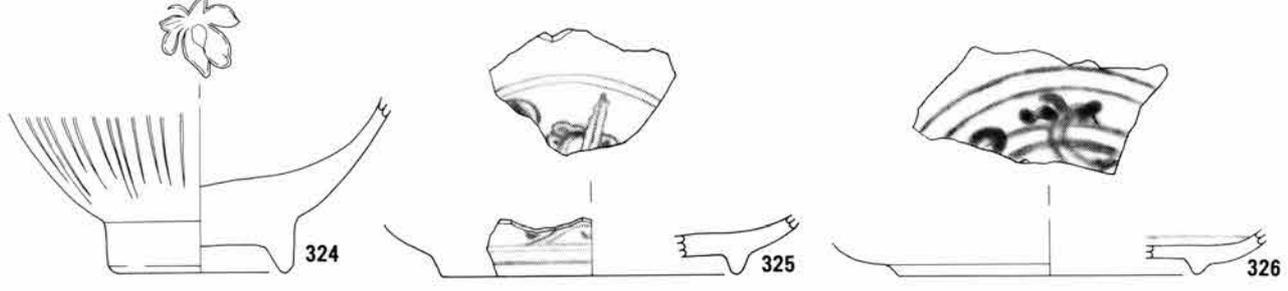
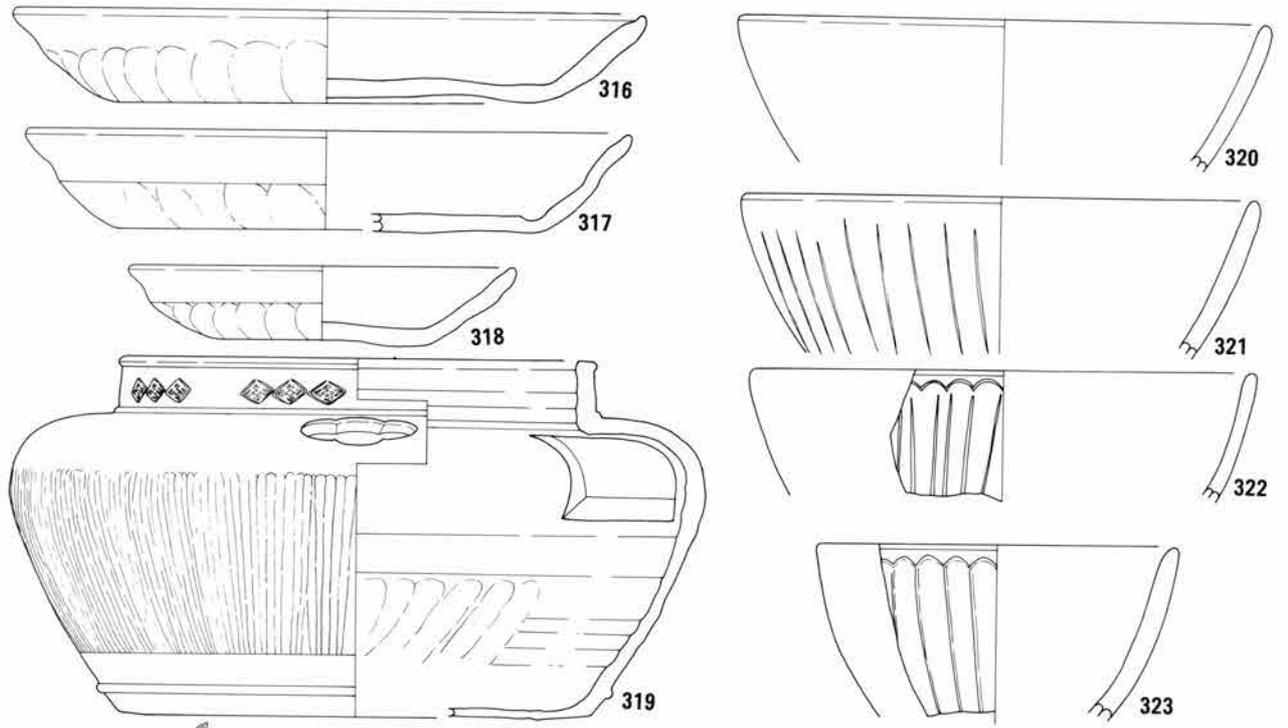


越前焼甕300~302 桶303・304 鉢305 插鉢306~315

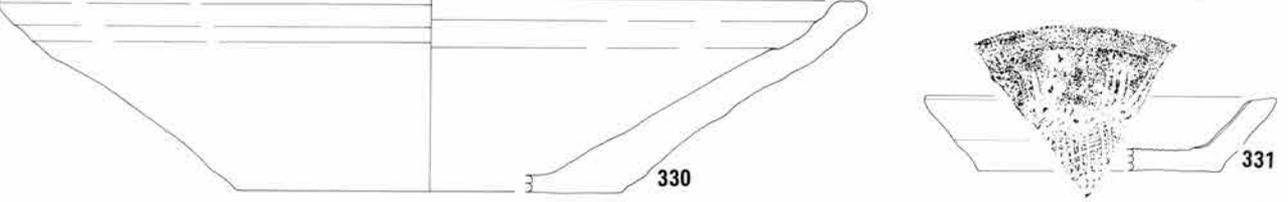
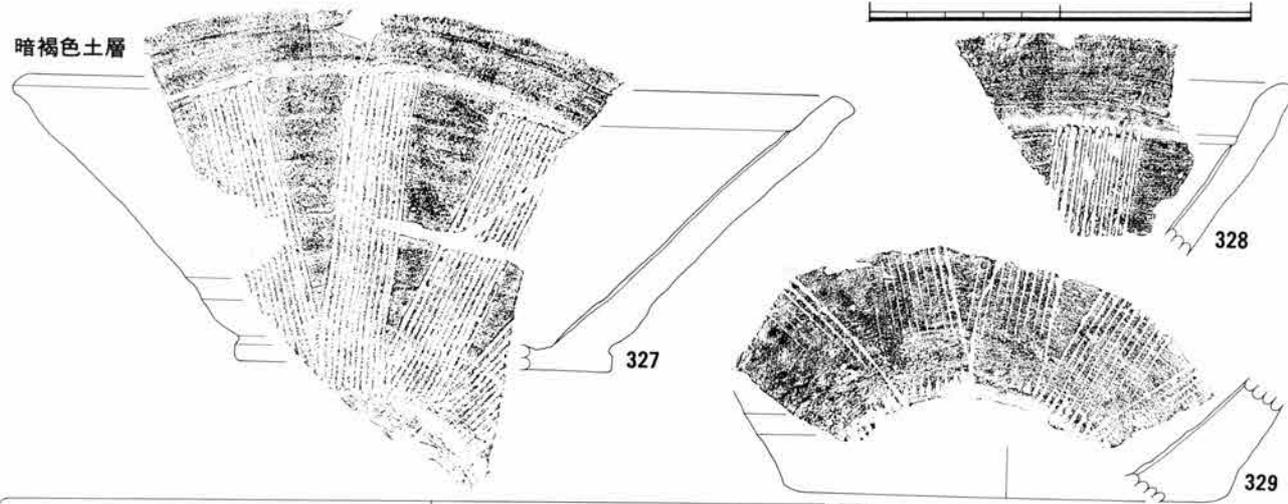


表土層 越前焼甕300~302 桶303・304 鉢305 插鉢306~315

第28図 第57次調査出土遺物(2)



暗褐色土層



土師質皿316~318 瓦質風炉319 青磁碗320~324 染付皿325・326 越前焼播鉢327~329 鉢330 卸皿331



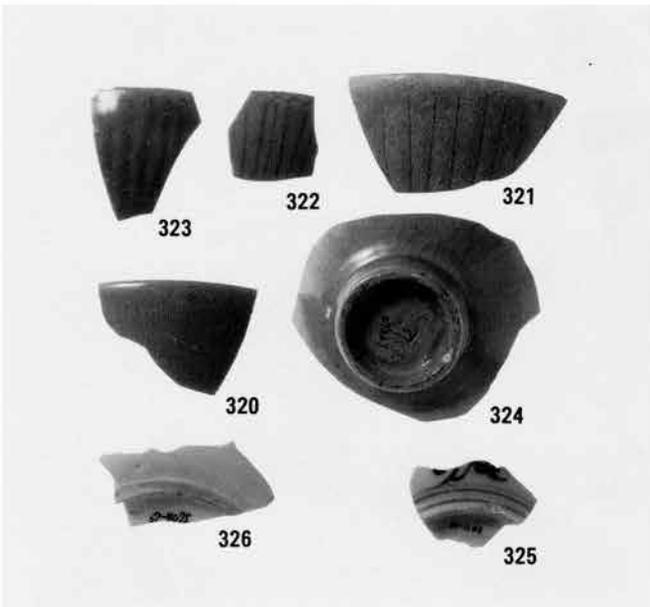
316



317



319



323

322

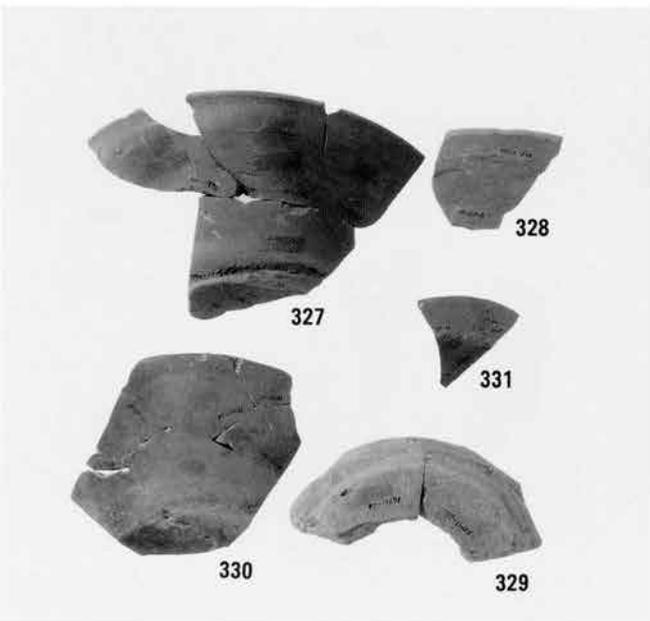
321

320

324

326

325



328

327

331

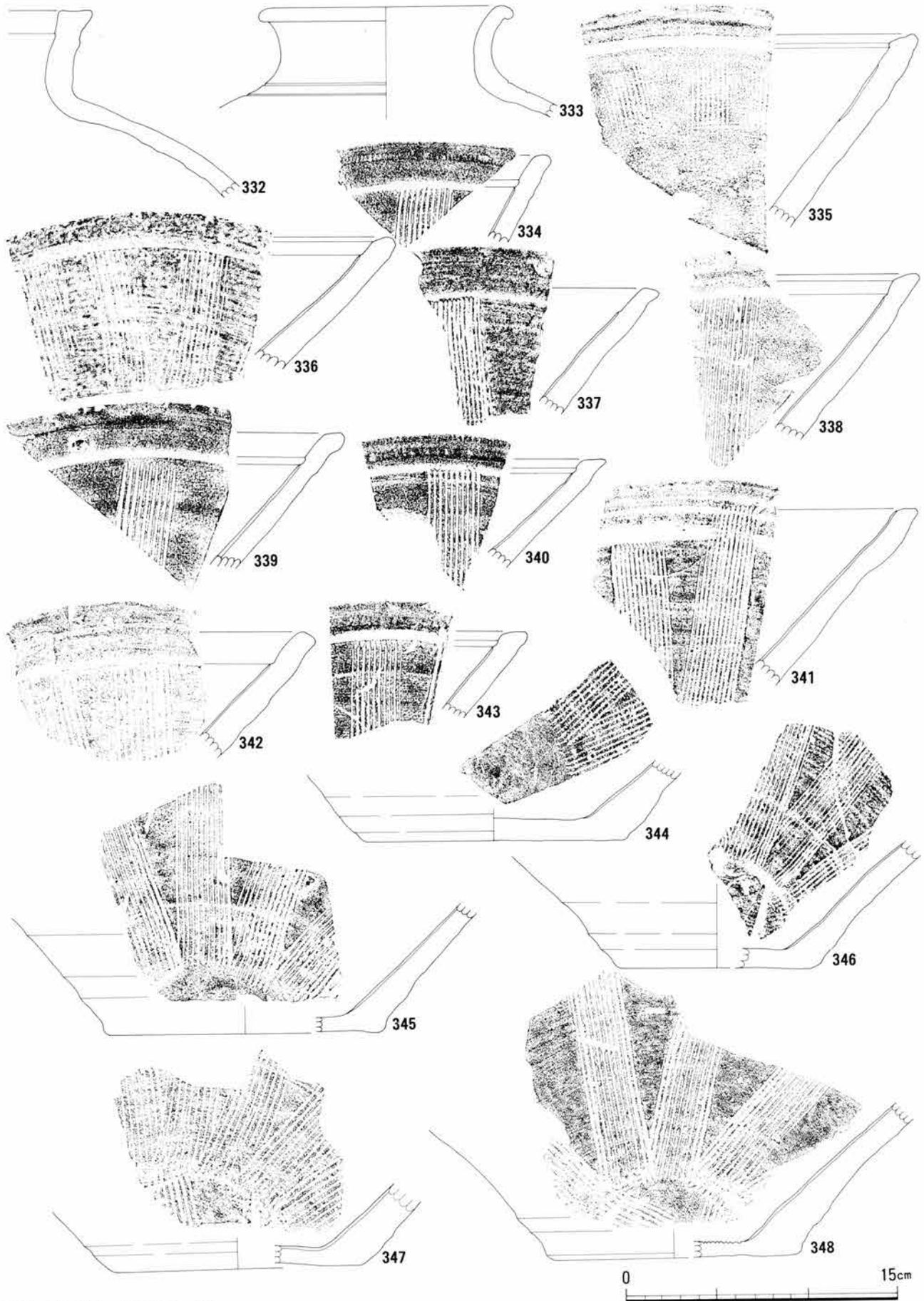
330

329

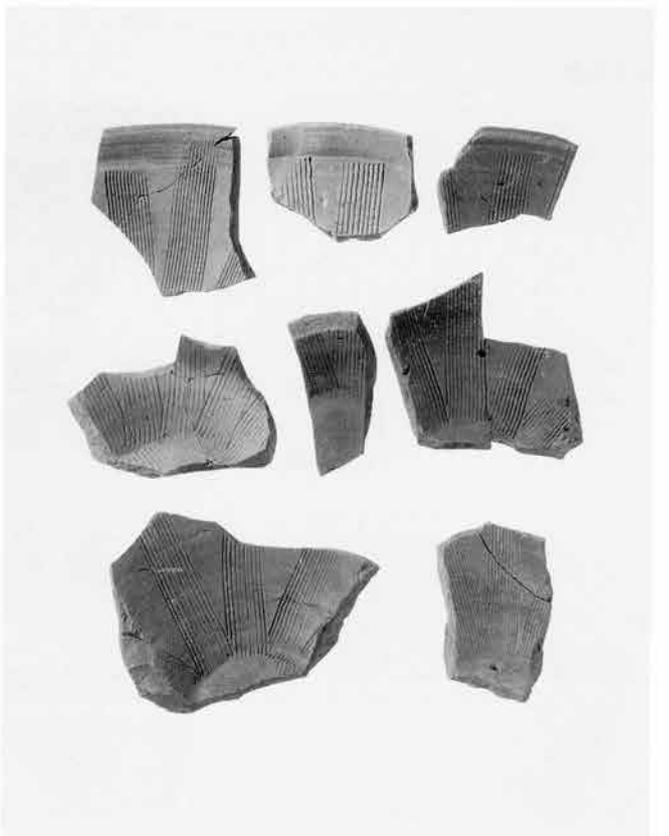
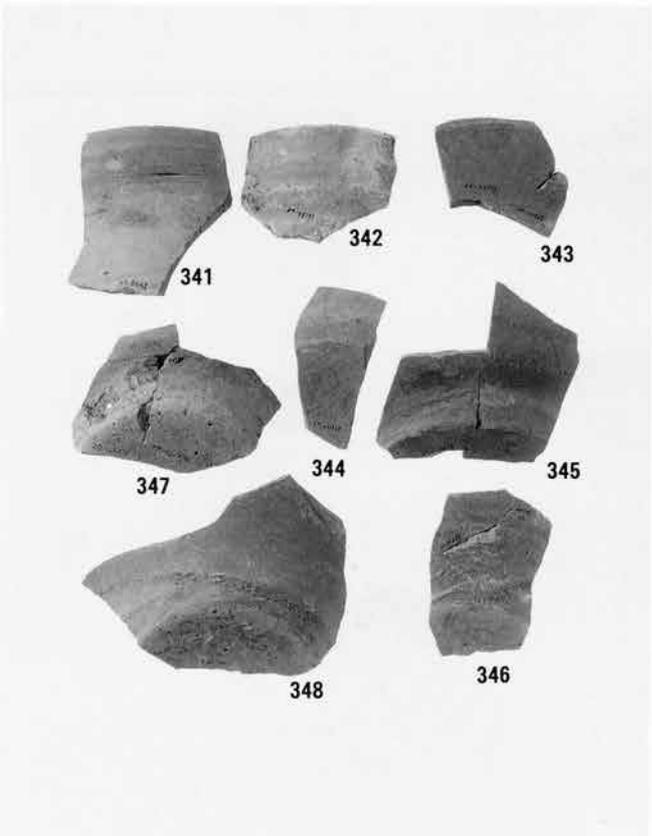
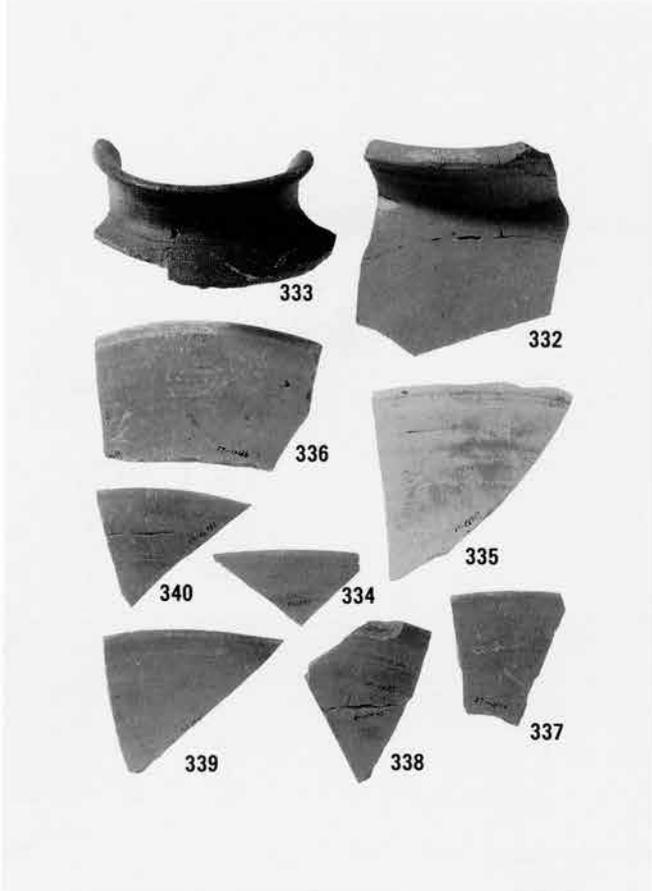


表土層 土師質皿316・317 瓦質風炉319 青磁碗320～324 染付皿325・326 暗褐色土層 越前焼播鉢327～329 鉢330 卸皿331

第29図 第57次調査出土遺物(3)

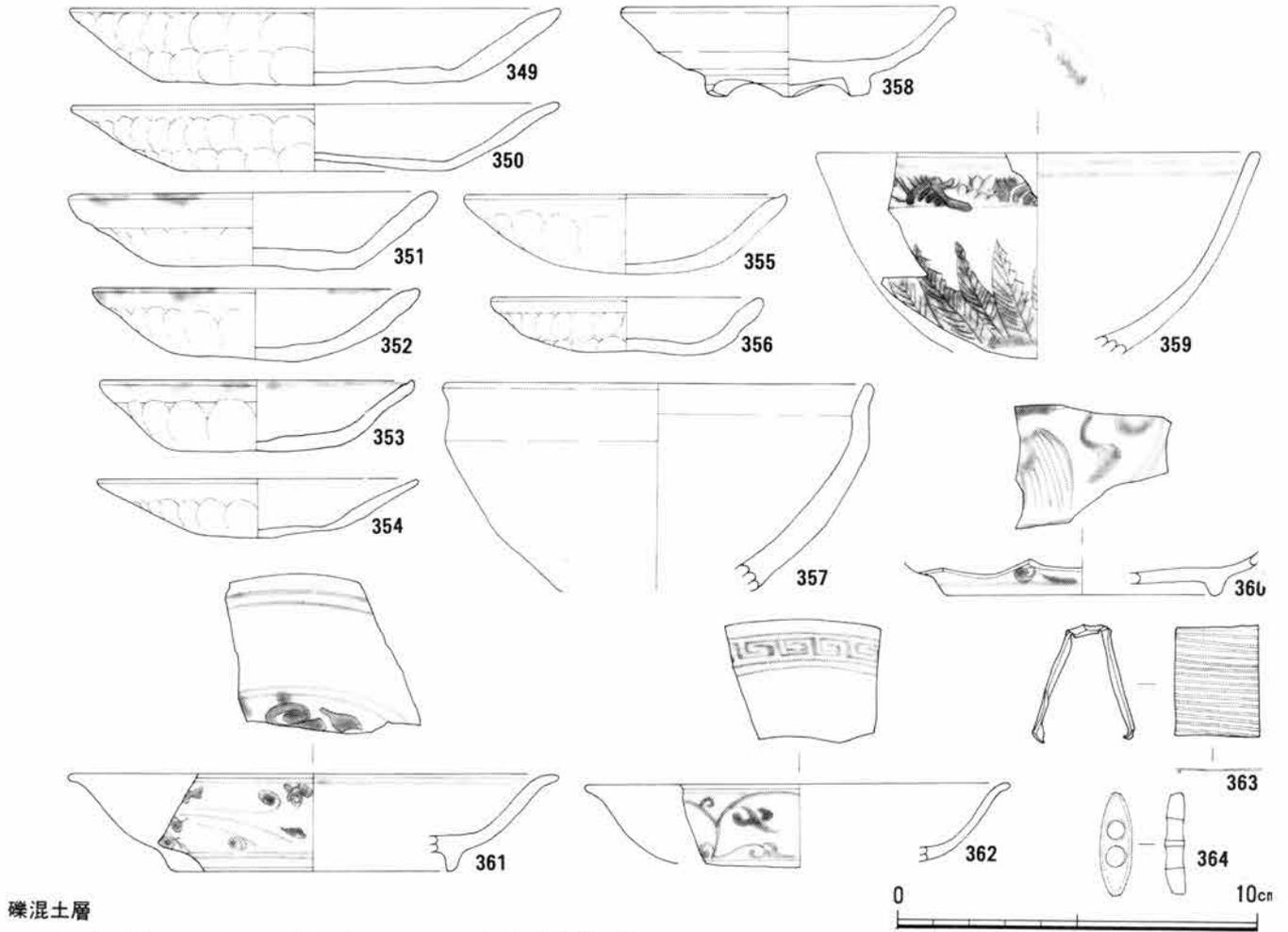


越前焼壺332・333 播鉢334～348

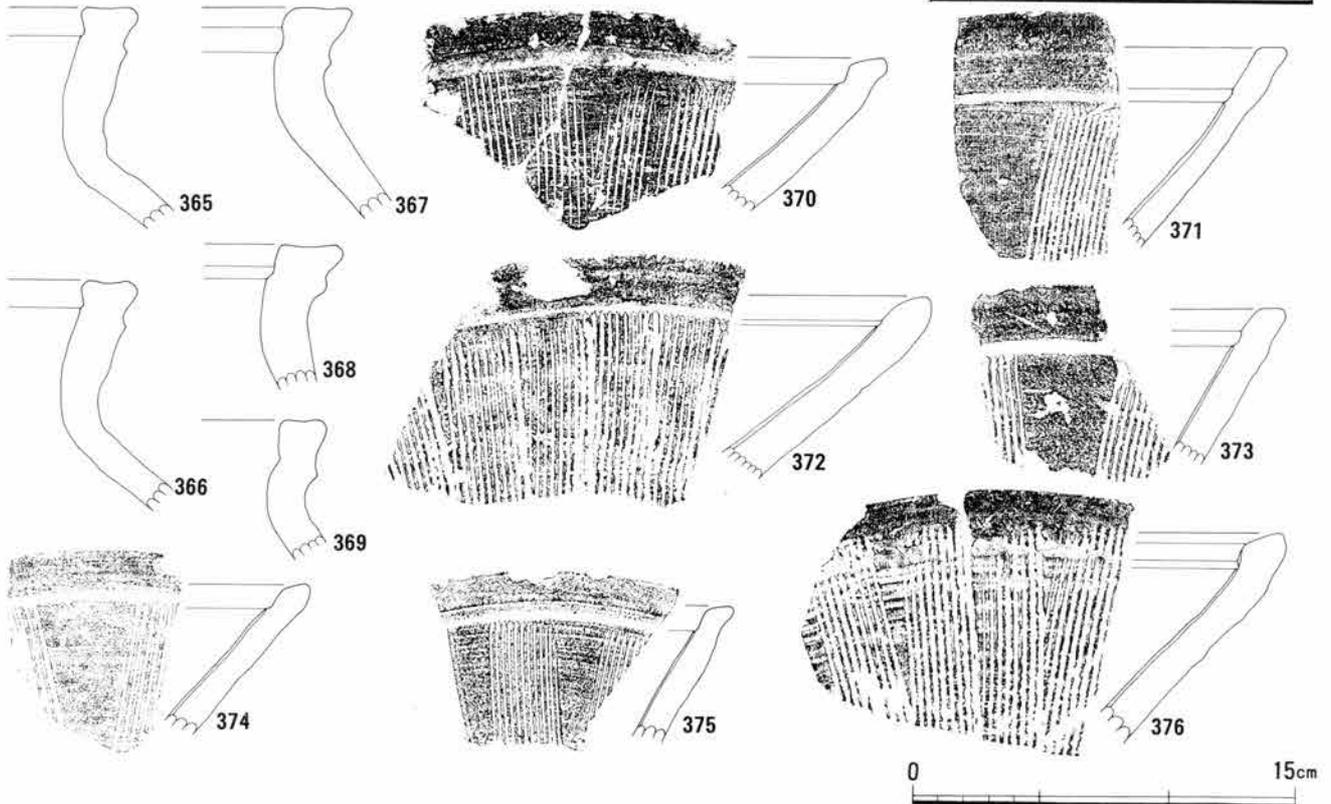


暗褐色土層 越前焼壺332・333 搦鉢334～348

第30図 第57次調査出土遺物(4)



礫混土層



土師質皿349~356 鉄釉碗357 白磁皿358 染付碗359 皿360~362 金属製品363・364 越前焼壺365・366 甕367~369 播鉢370~376



349



350



352



358

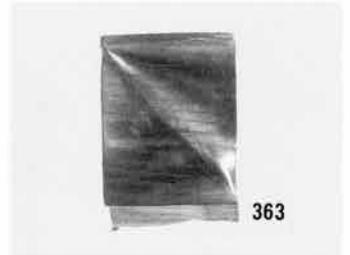
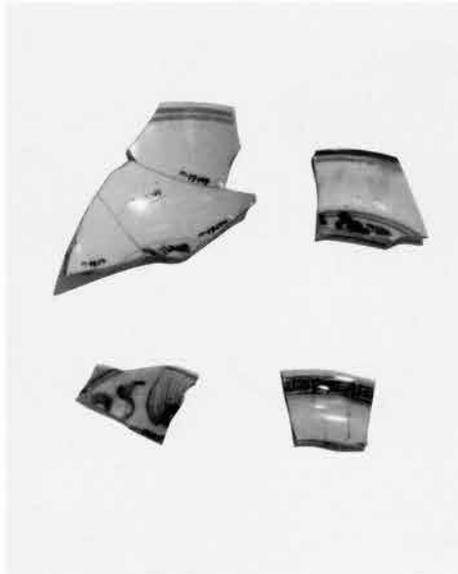


359

361

360

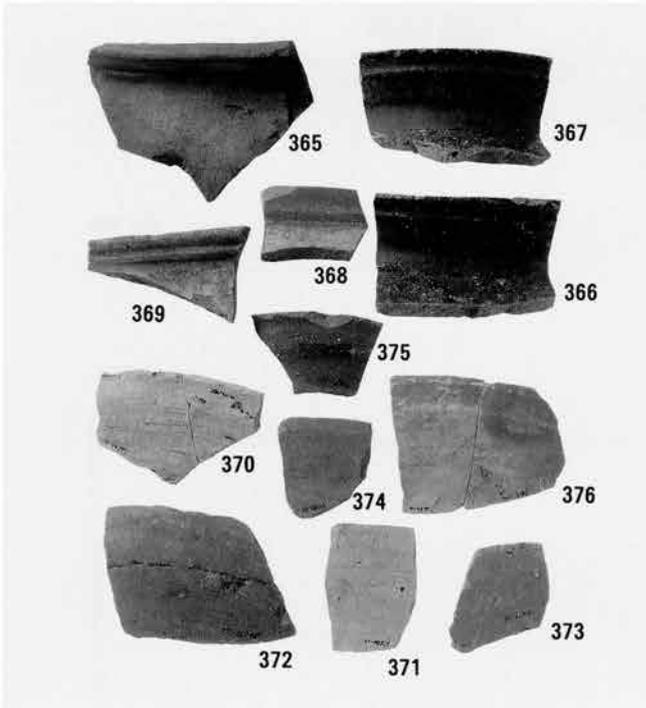
362



363



364



365

367

369

368

366

375

370

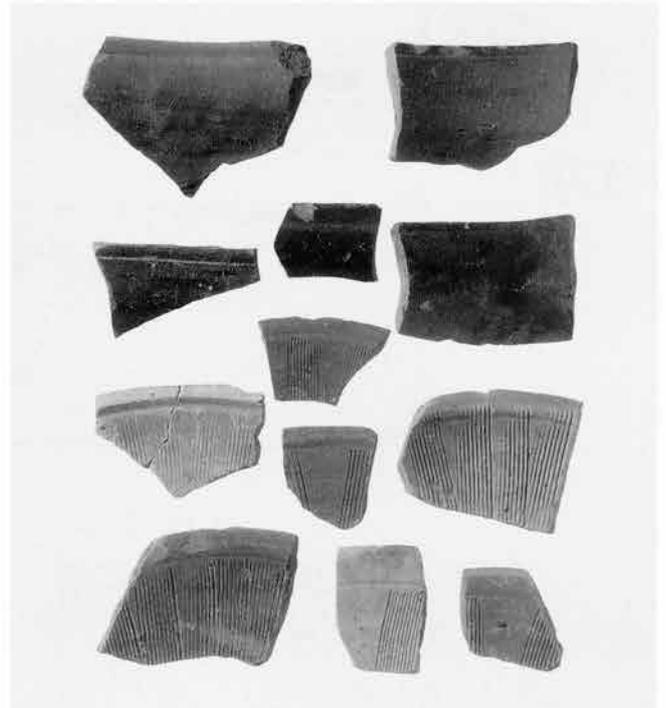
374

376

372

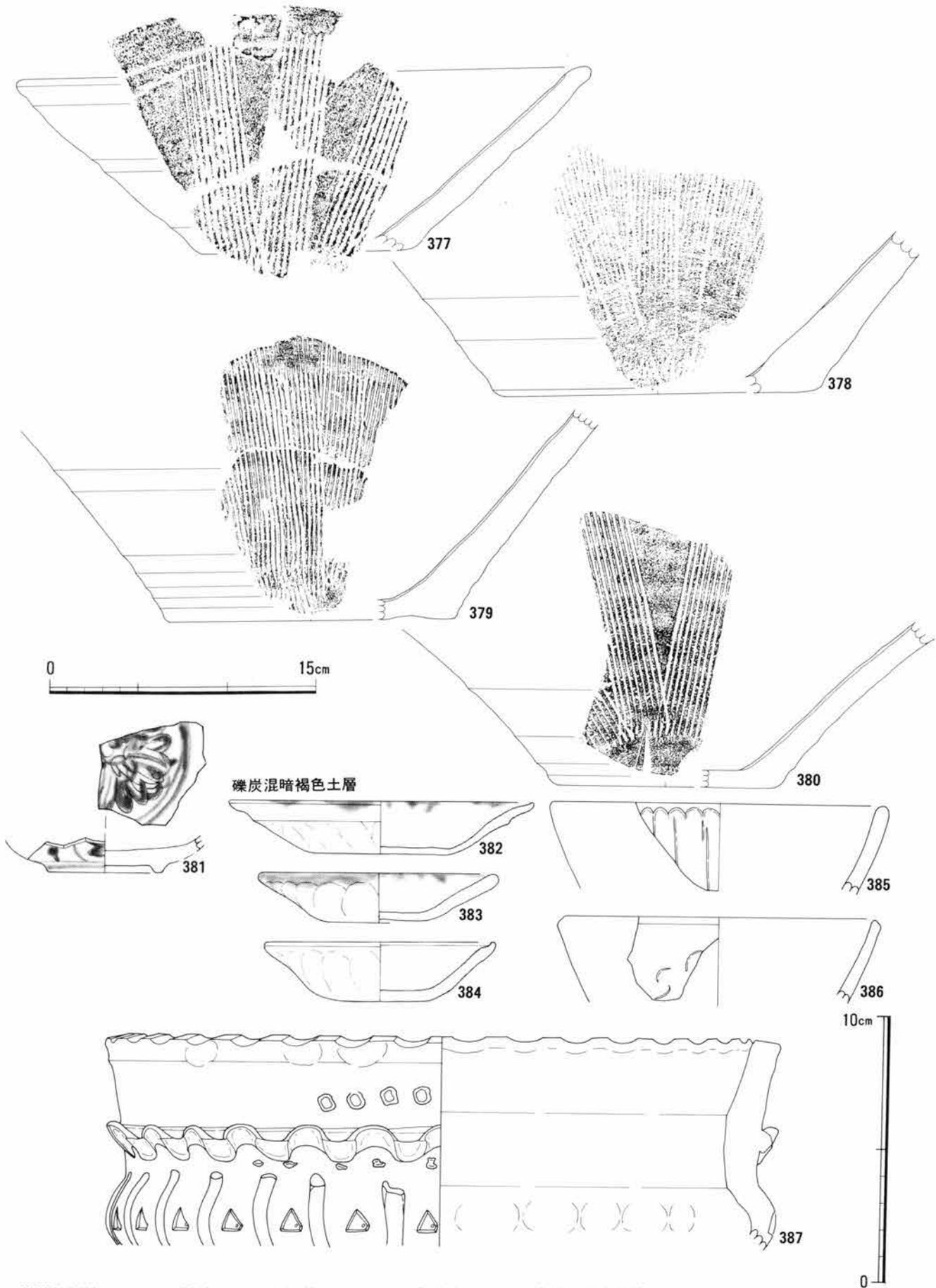
371

373

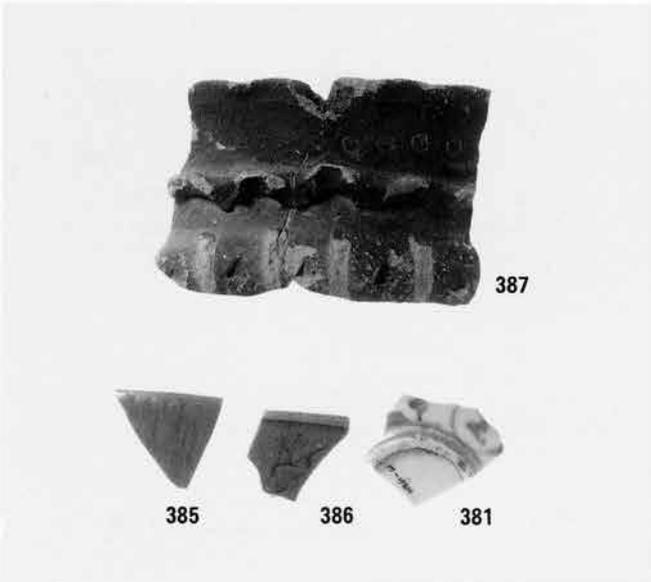


暗褐色土層 土師質皿349・350・352 白磁皿358 染付碗359 皿360～362 金属製品363・364 礫混土層 越前焼壺365・366 甕367～369 播鉢370～376

第31図 第57次調査出土遺物(5)



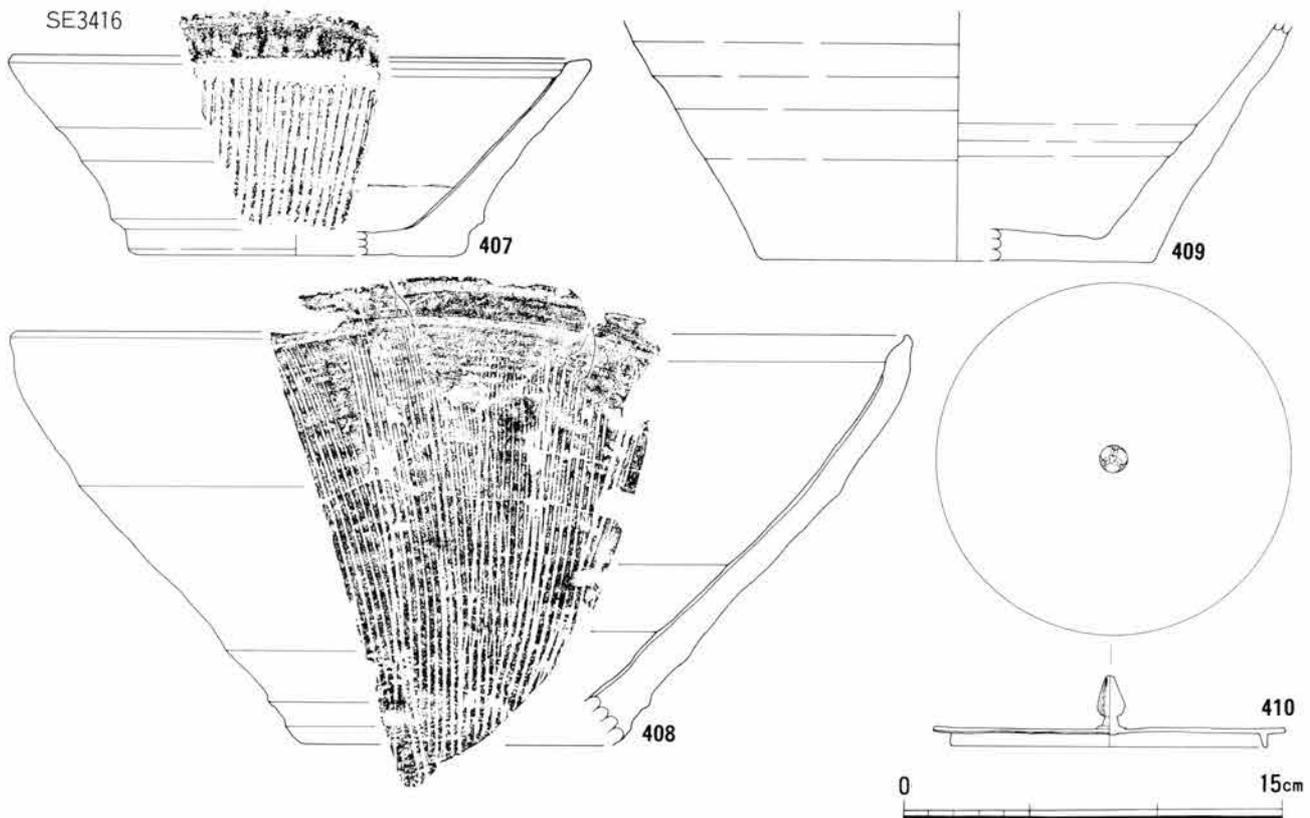
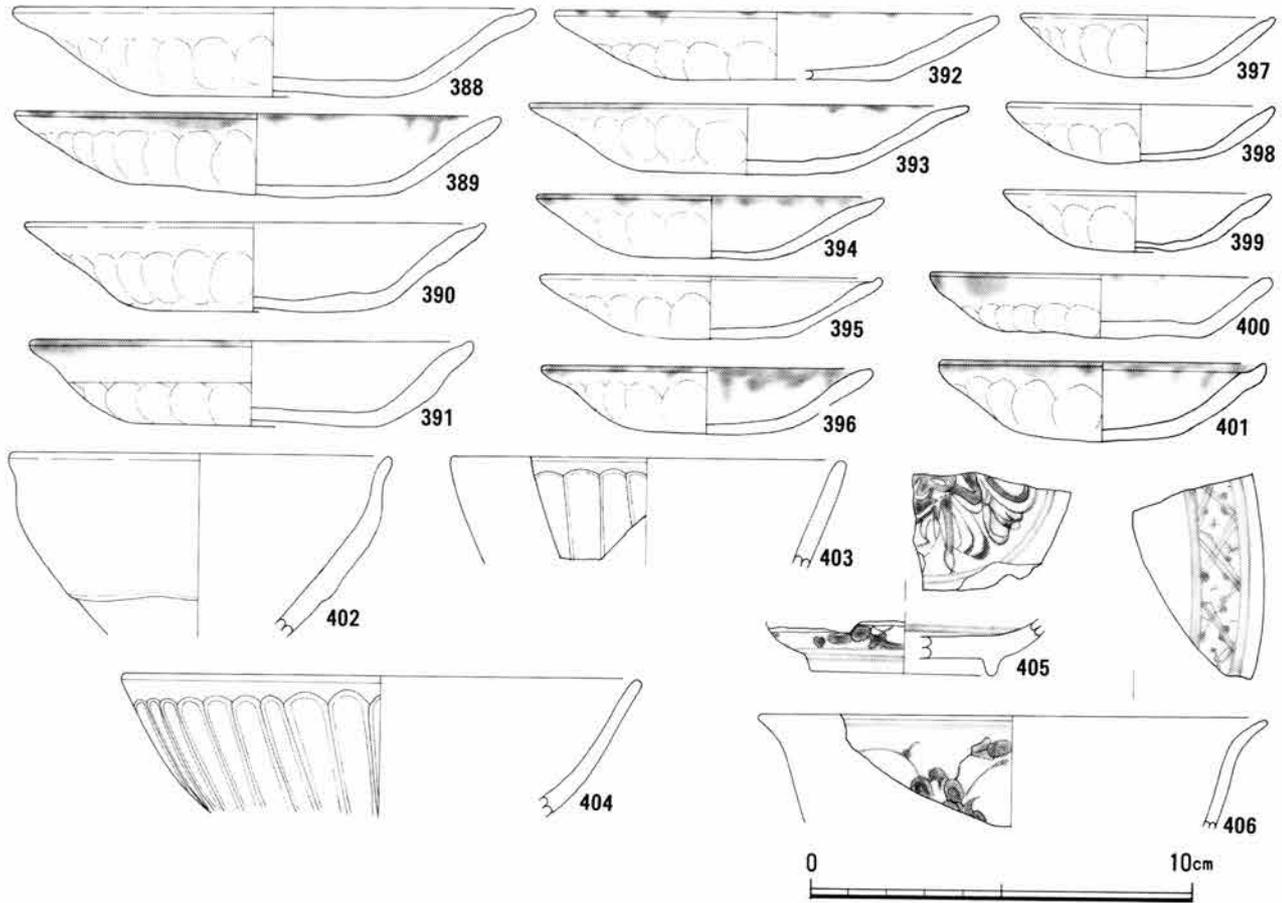
越前焼播鉢377~380 染付皿381 土師質皿382~384 青磁碗385・386 産地不明陶器鉢387



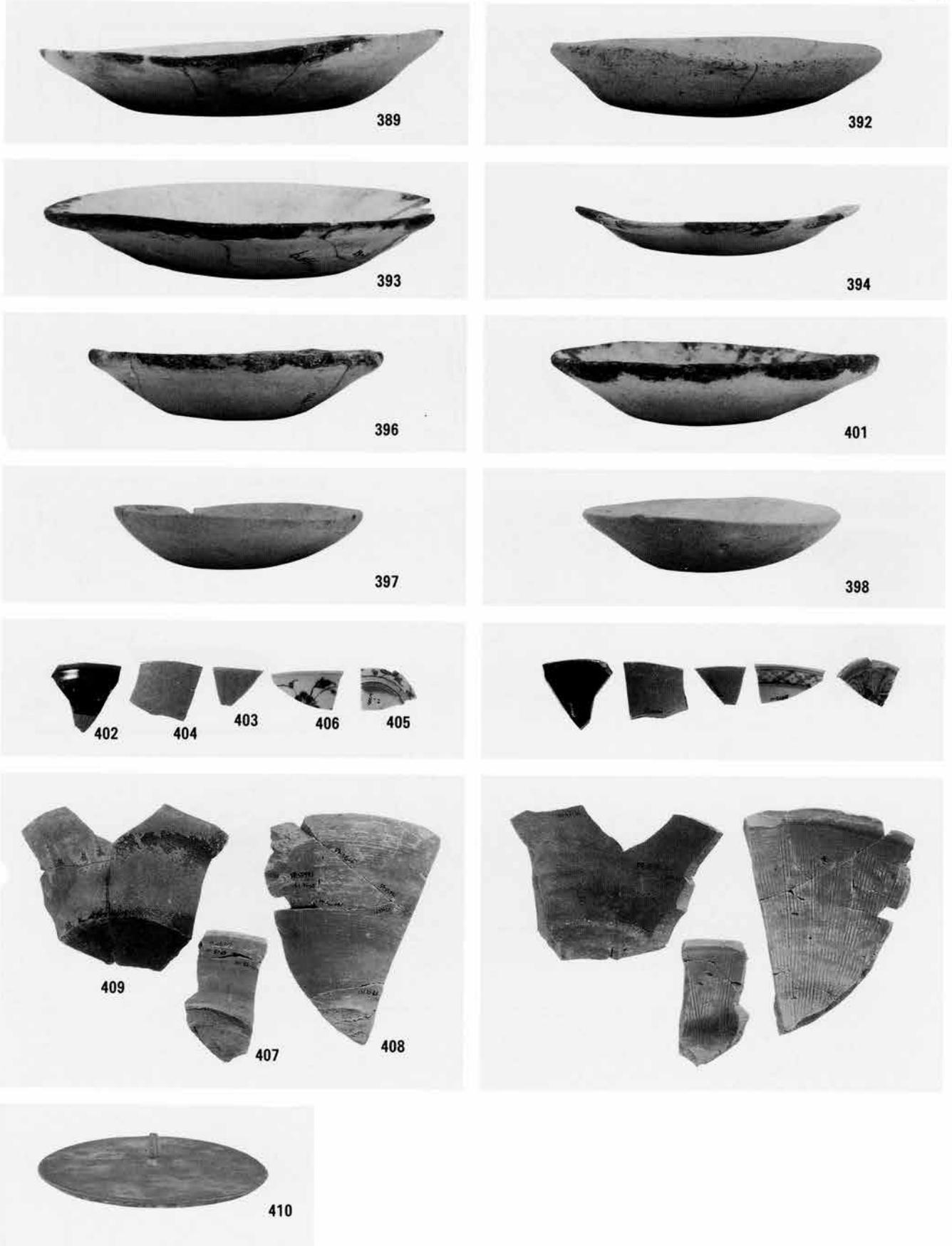
礫混土層 越前焼播鉢377~380 染付皿381 礫炭混暗褐色土層 土師質皿382~384 青磁碗385・386 産地不明陶器鉢387

第32図 第57次調査出土遺物(6)

炭混暗褐色土層

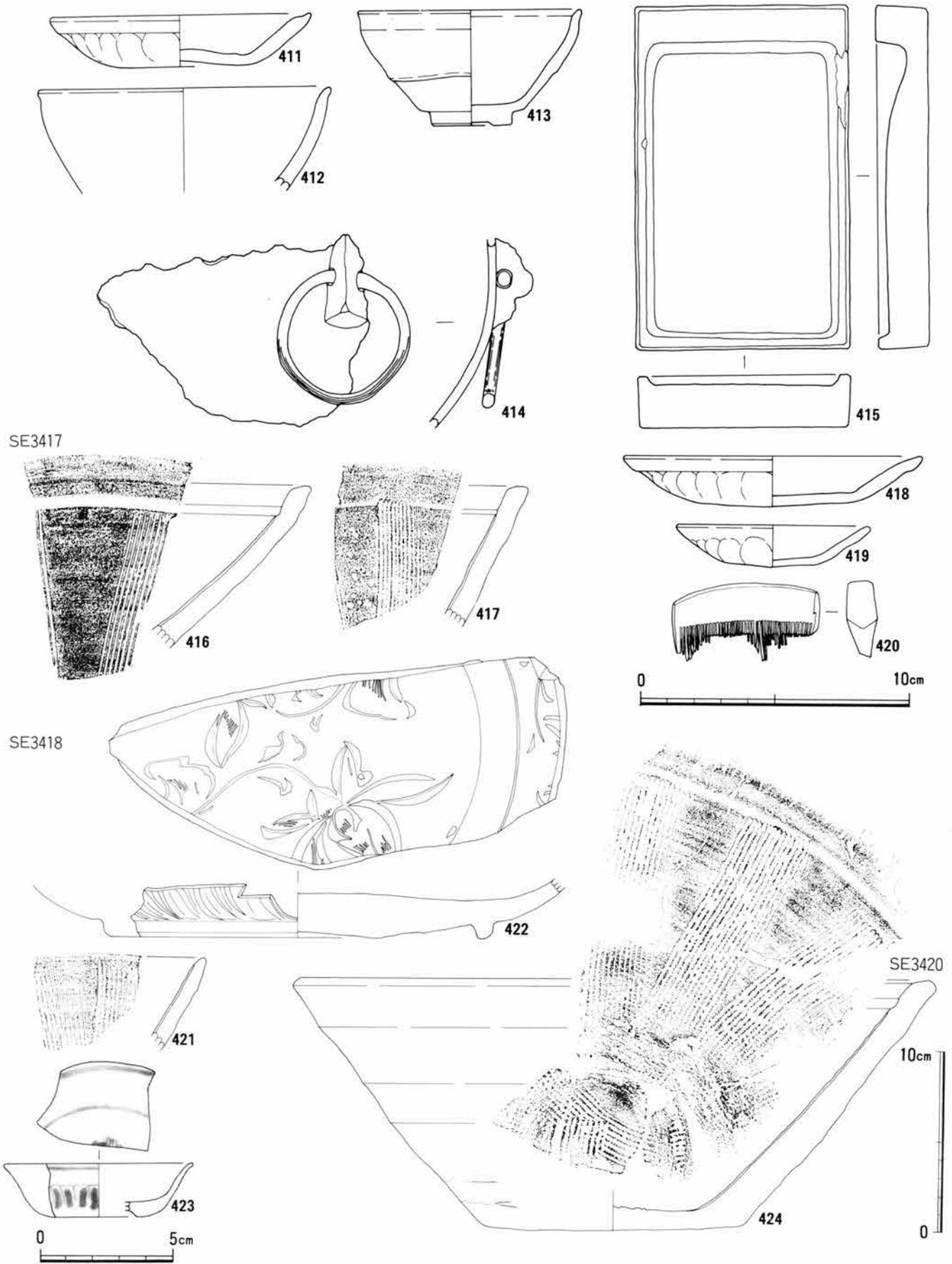


土師質皿388~401 鉄釉碗402 青磁碗403・404 染付皿405 碗406 越前焼擂鉢407・408 鉢409 金属製品蓋410



炭混暗褐色土層 土師質皿389、392～394、396～398、401 鉄釉碗402 青磁碗403・404 染付皿405 碗406
 SE3416 越前焼播鉢407・408 鉢409 金属製品蓋410

第33図 第57次調査出土遺物(7)



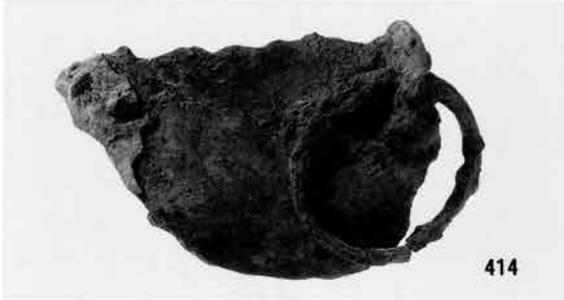
土師質皿411・418・419 鉄釉碗412・413 越前焼拵鉢416・417・421・424 金属製品茶釜414 石製品硯415 木製品櫛420
青磁盤422 染付皿423



411



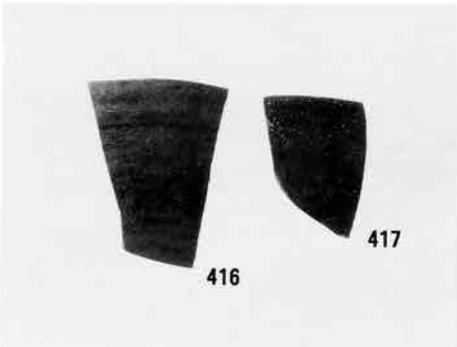
413



414



415



416

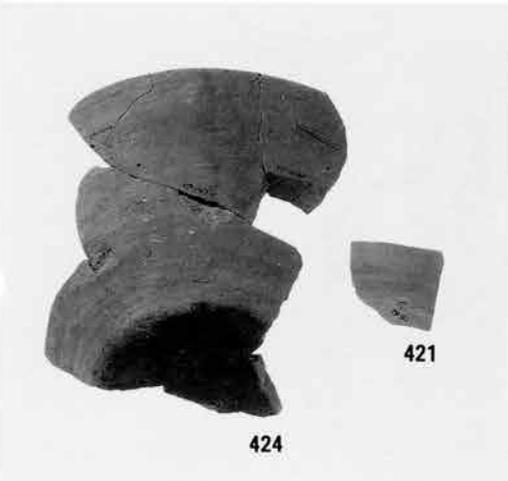
417



419

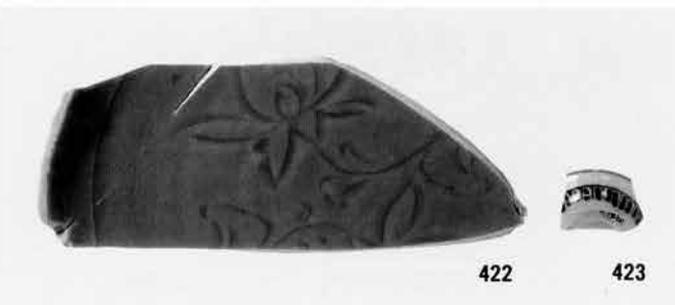


420



424

421



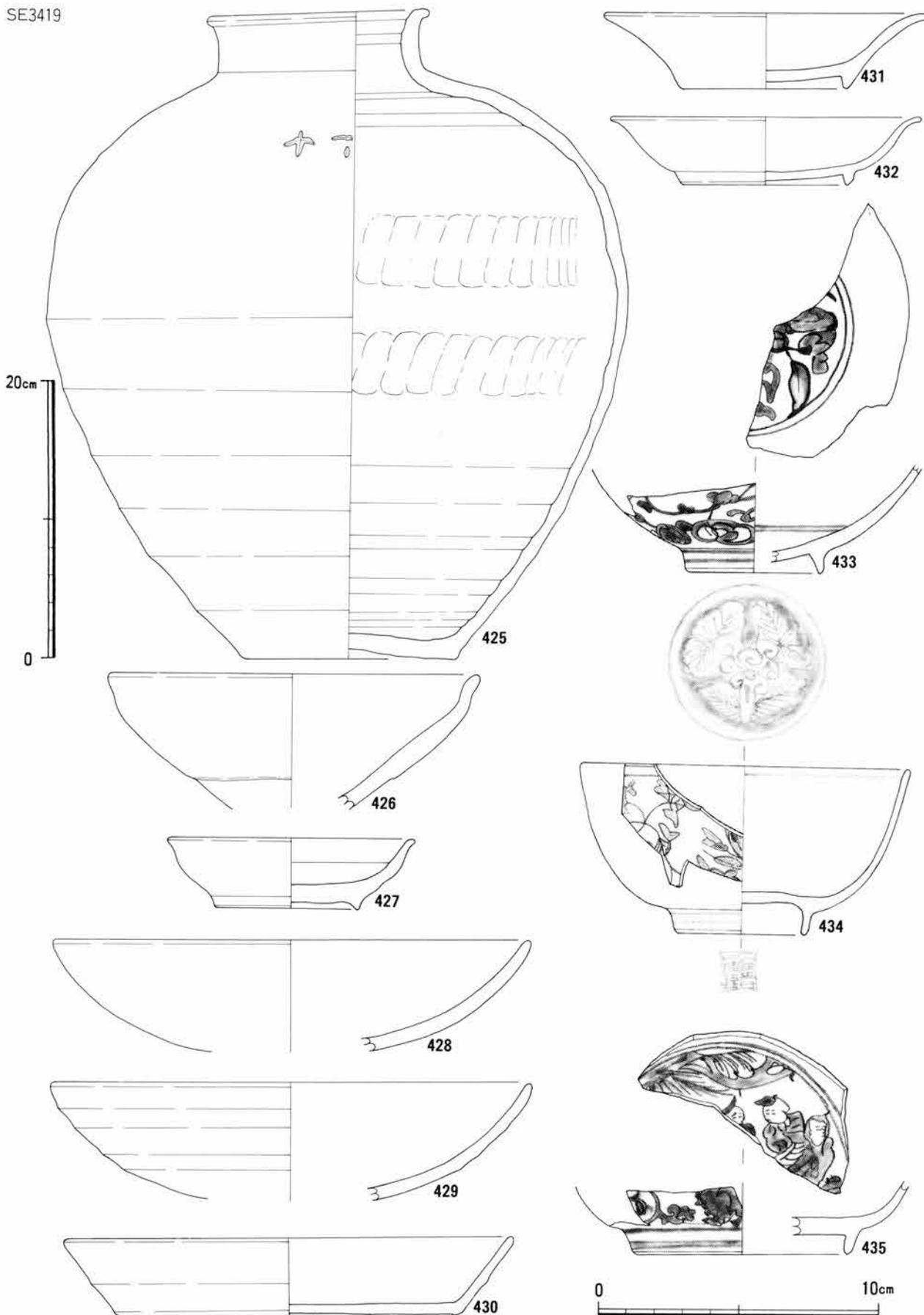
422

423

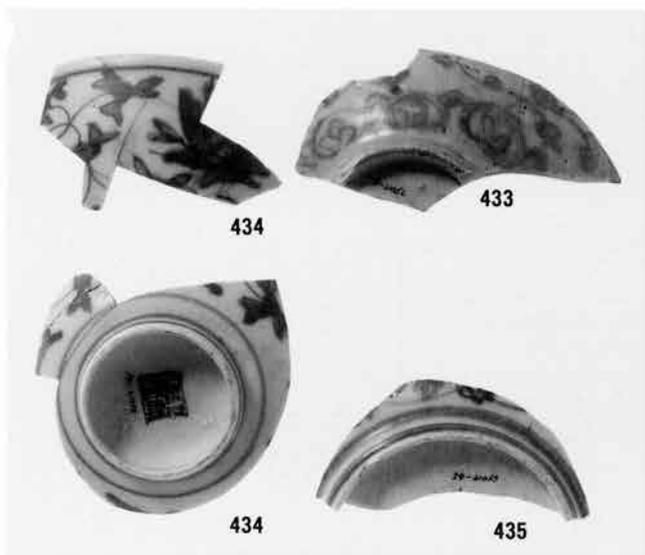
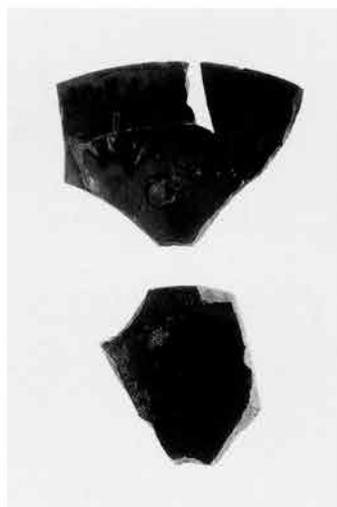
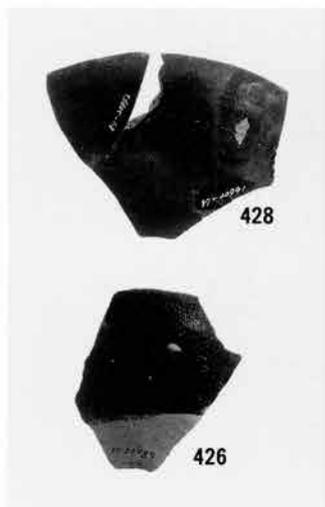
- SE3416 土師質皿411 鉄釉碗413 金属製品茶釜414
 石製品硯415 SE3417 越前焼播鉢416・417 土師質皿419
 木製品櫛420 SE3418 越前焼播鉢421 青磁盤422
 染付皿423

第34図 第57次調査出土遺物(8)

SE3419

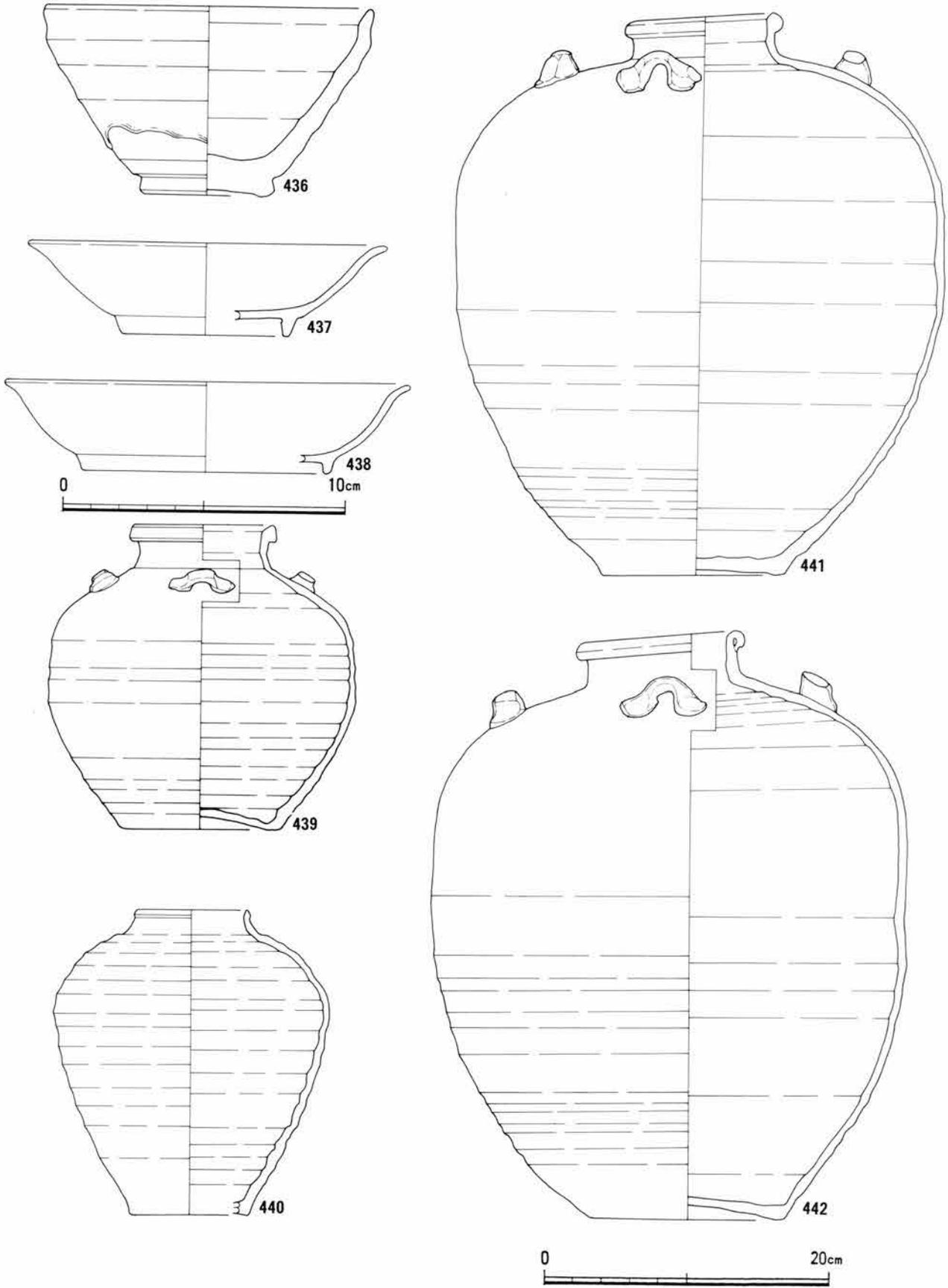


越前焼壺425 鉄釉碗426 灰釉皿427 碗428・429 白磁皿430~432 染付碗433~435

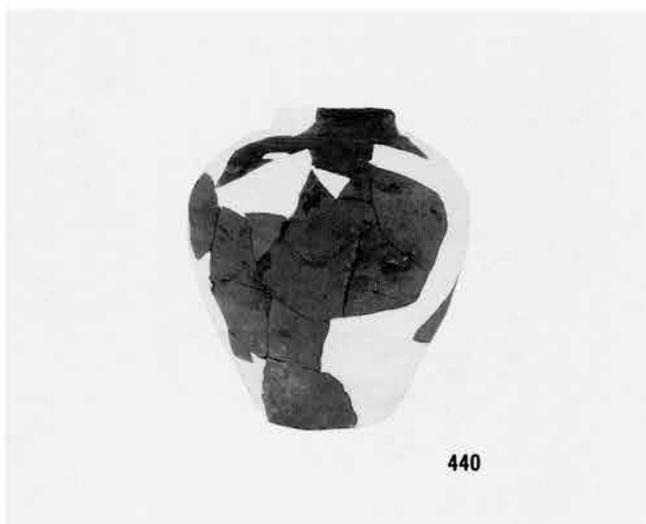
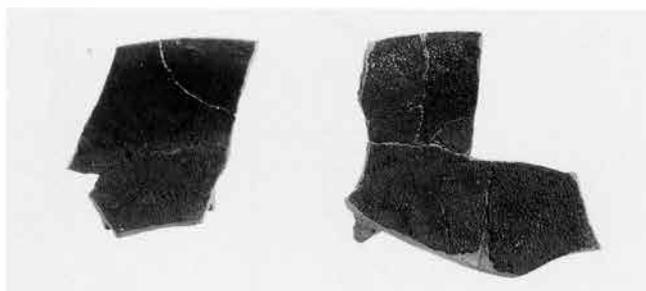
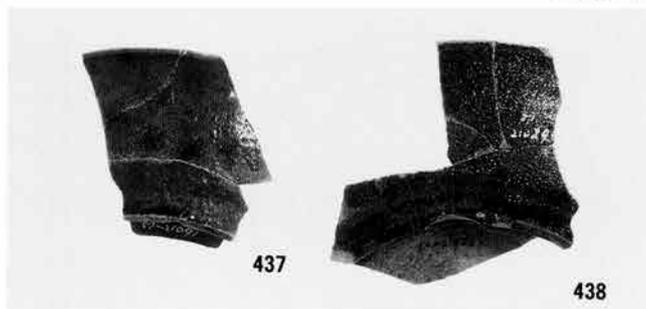


SE3419 越前焼壺425 鉄釉碗426 灰釉皿427 碗428 白磁皿430~432 染付碗433~435

第35図 第57次調査出土遺物(9)

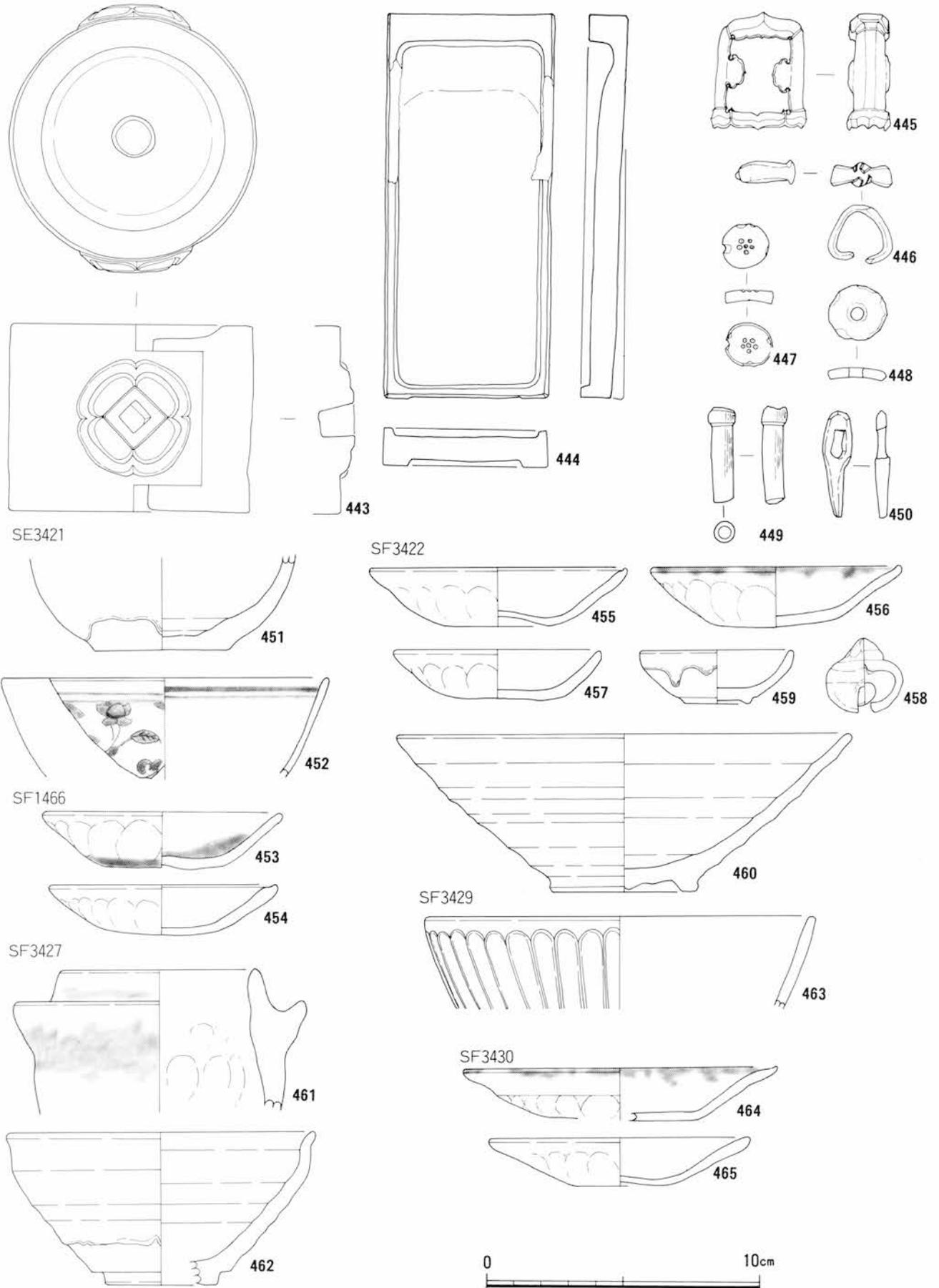


黒釉陶器碗436 華南彩釉陶器皿437・438 褐釉陶器壺439~442

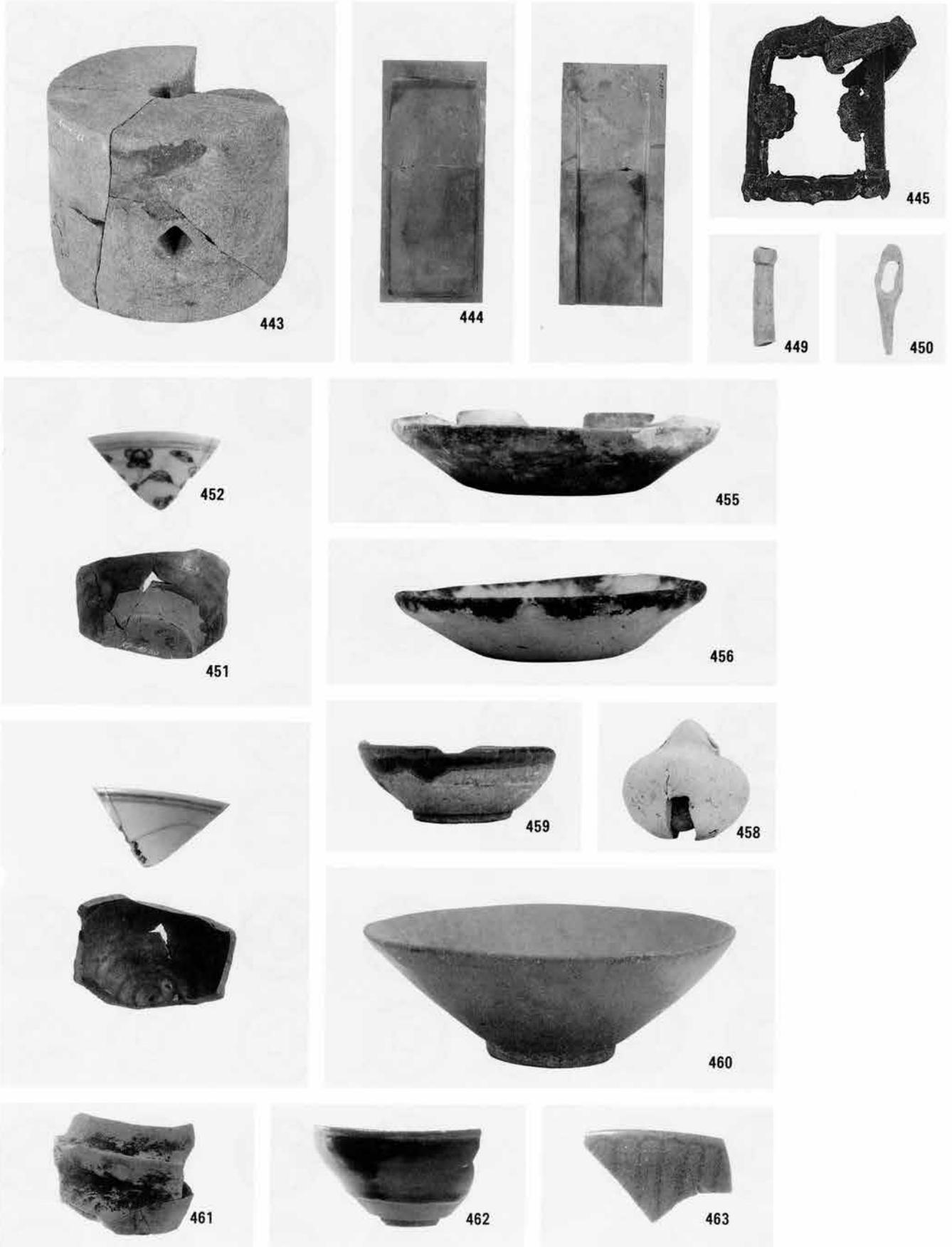


SE3419 黒釉陶器碗436 華南彩釉陶器皿437・438 褐釉陶器壺439～442

第36図 第57次調査出土遺物(10)

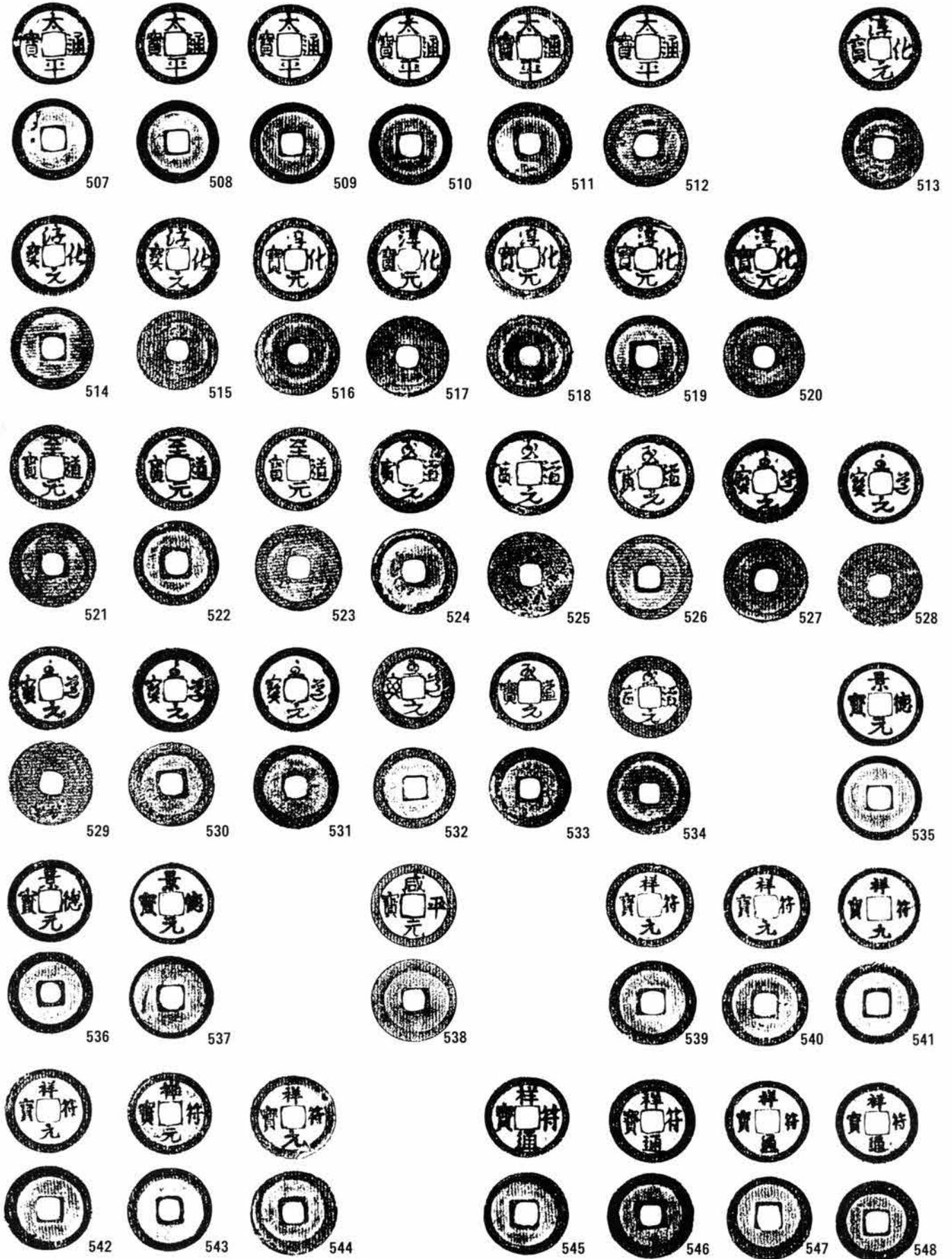


石製品白443 硯444 金属製品青金445 猿手446 骨製品駒447 不明製品449・450 土師質灯芯押え448 皿453~457、464・465 土鈴458 羽釜461 鉄釉壺451 皿459 碗462 染付碗452 朝鮮製碗460 青磁碗463

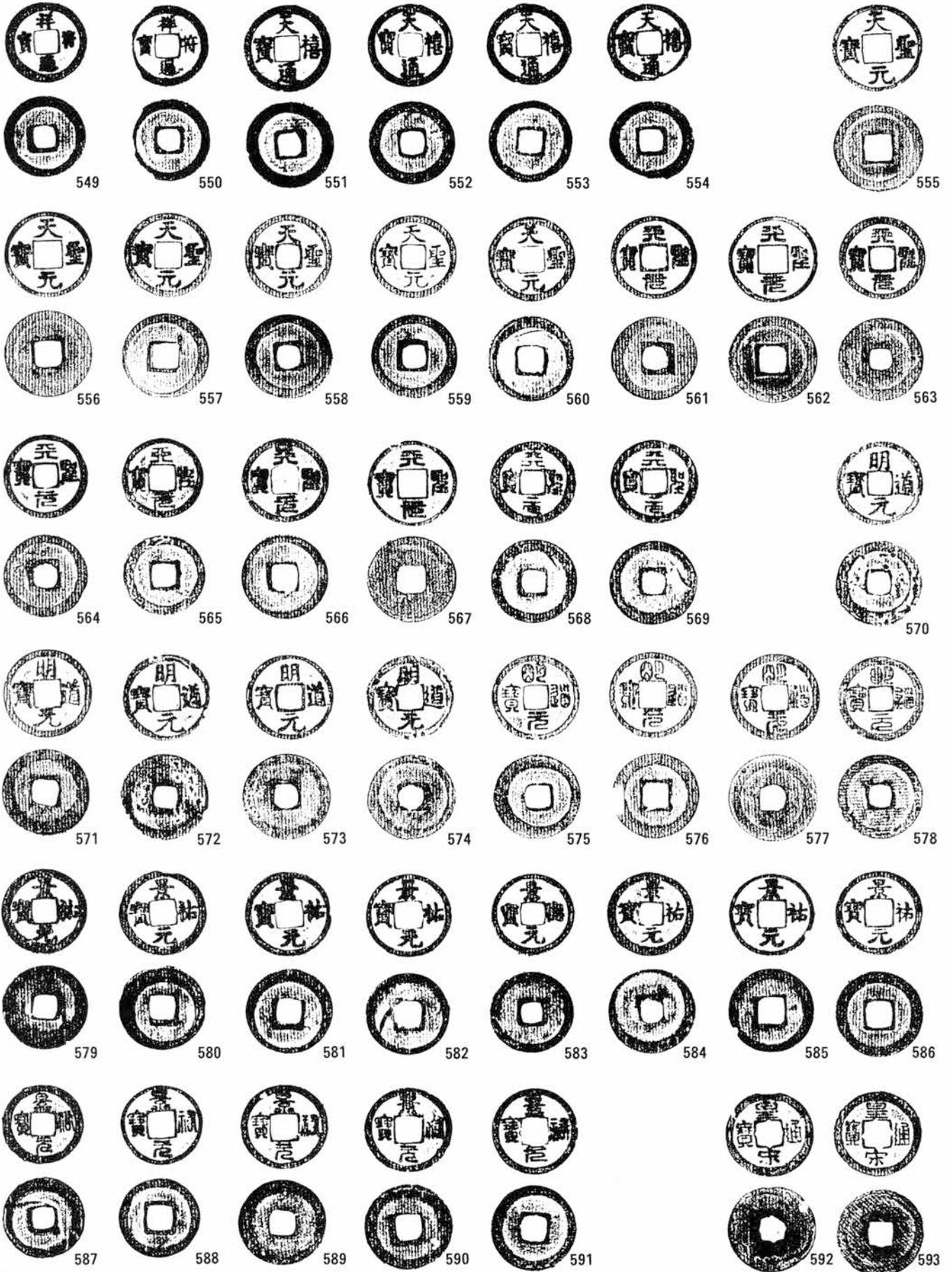


SE3419 石製品白443 硯444 金屬製品冑金445 骨製品不明製品449・450 SE3421 鉄釉壺451 染付碗452
 SE3422 土師質皿455・456 土鈴458 鉄釉皿459 朝鮮製碗460 SE3427 土師質土釜461 鉄釉碗462 SE3429 青磁碗463

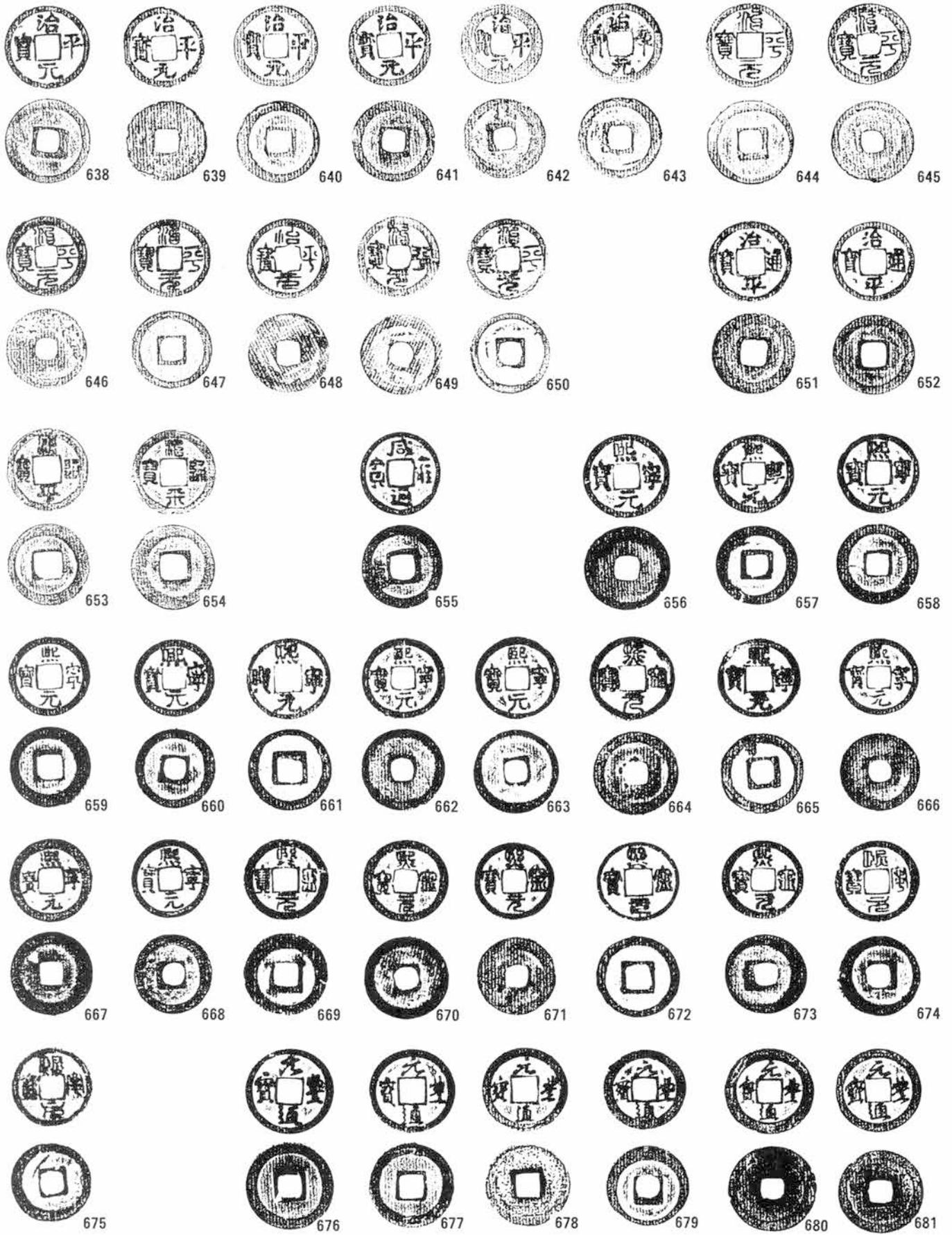
第38圖 第57次調査出土遺物(12)



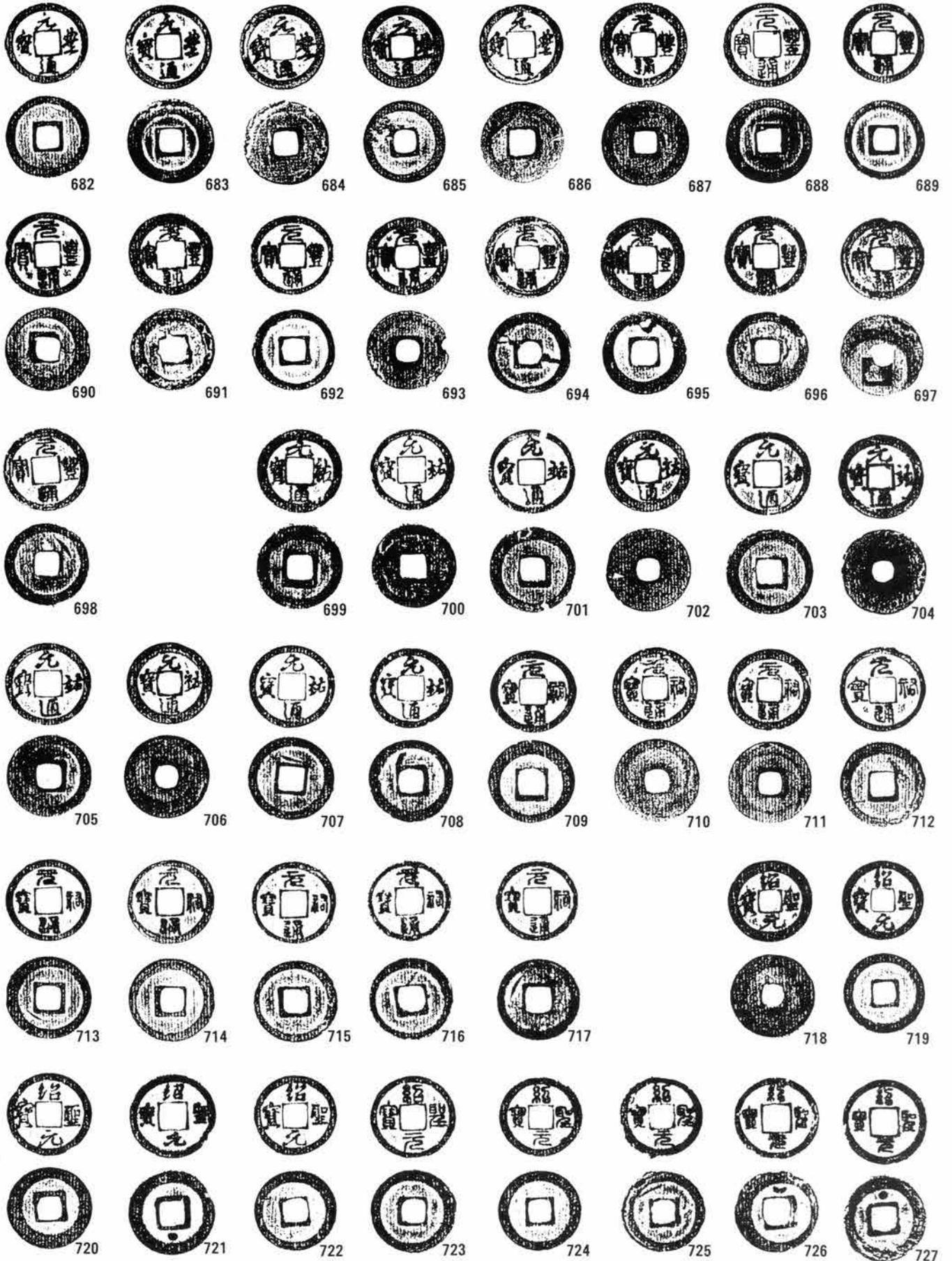
第39圖 第57次調査出土遺物(13)



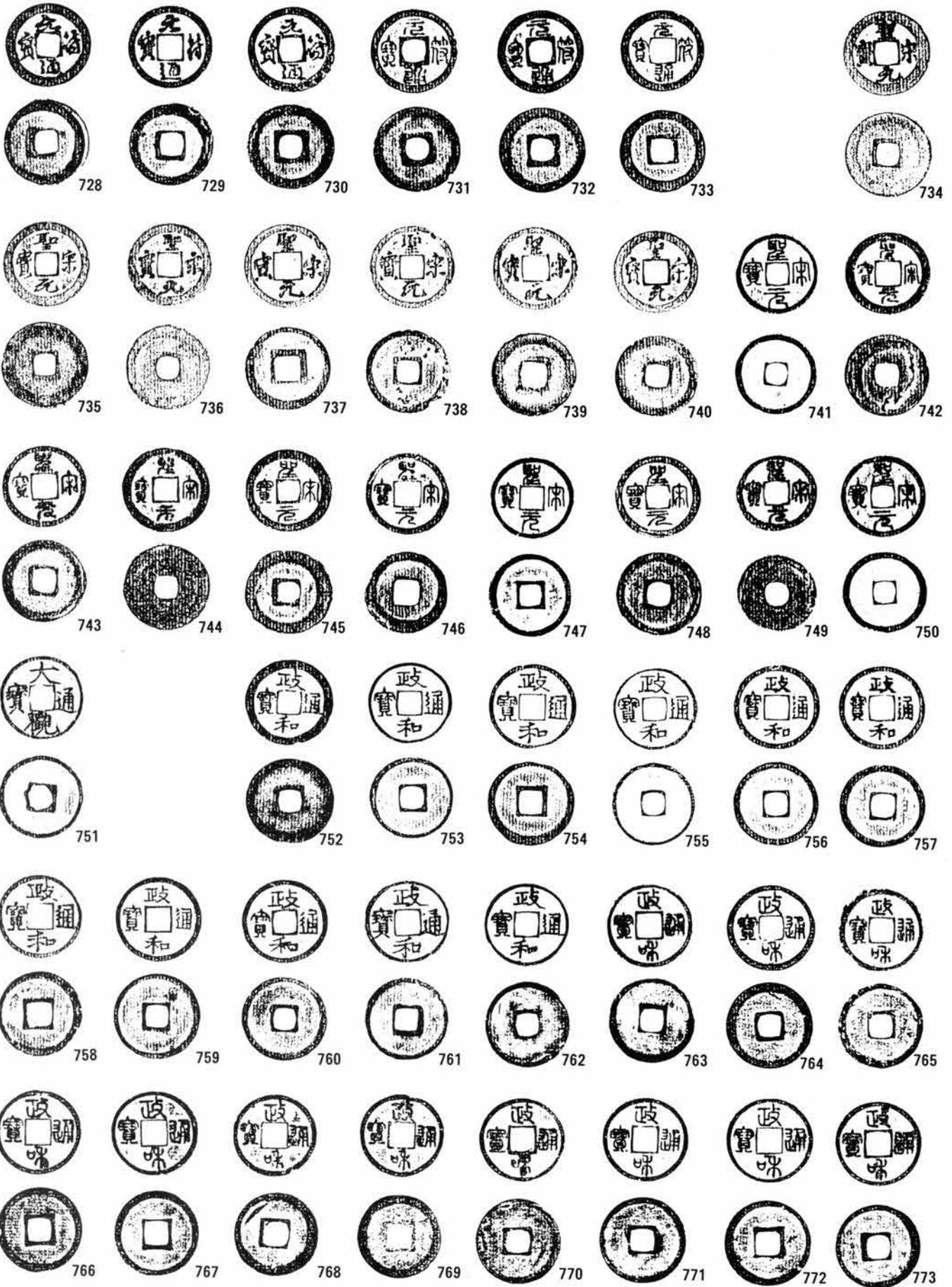
第41圖 第57次調査出土遺物(15)



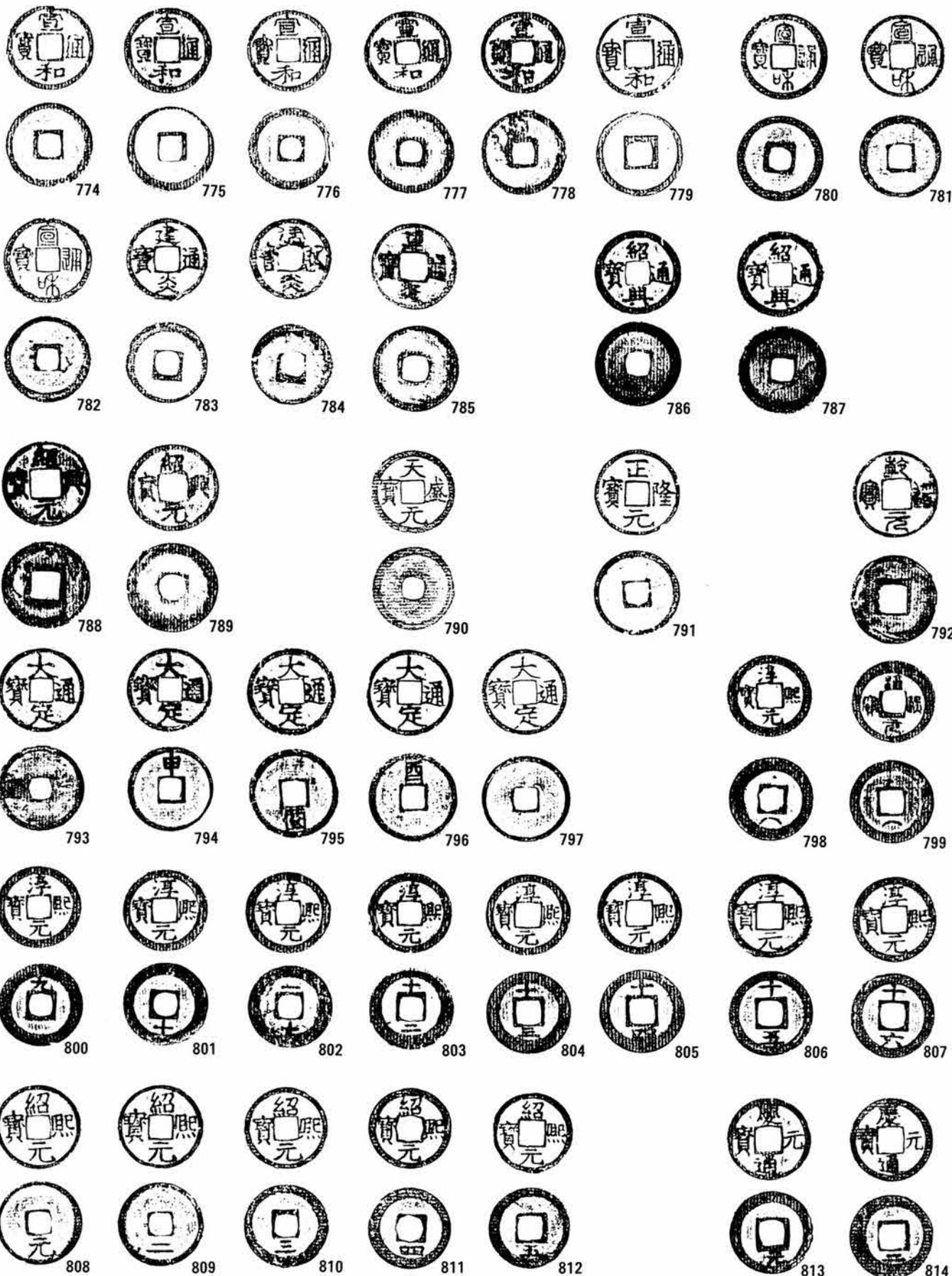
第42図 第57次調査出土遺物(16)



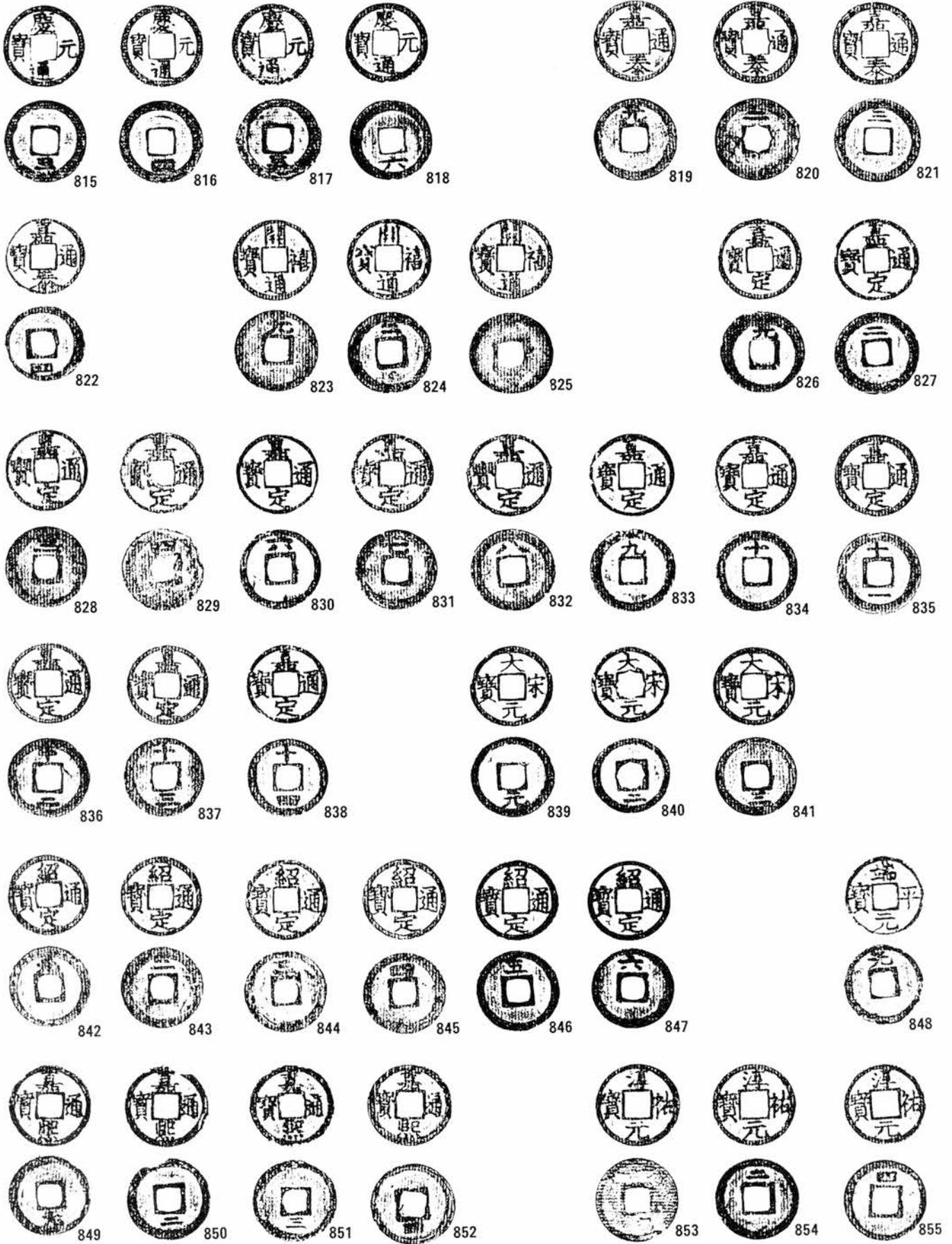
第43圖 第57次調査出土遺物(17)



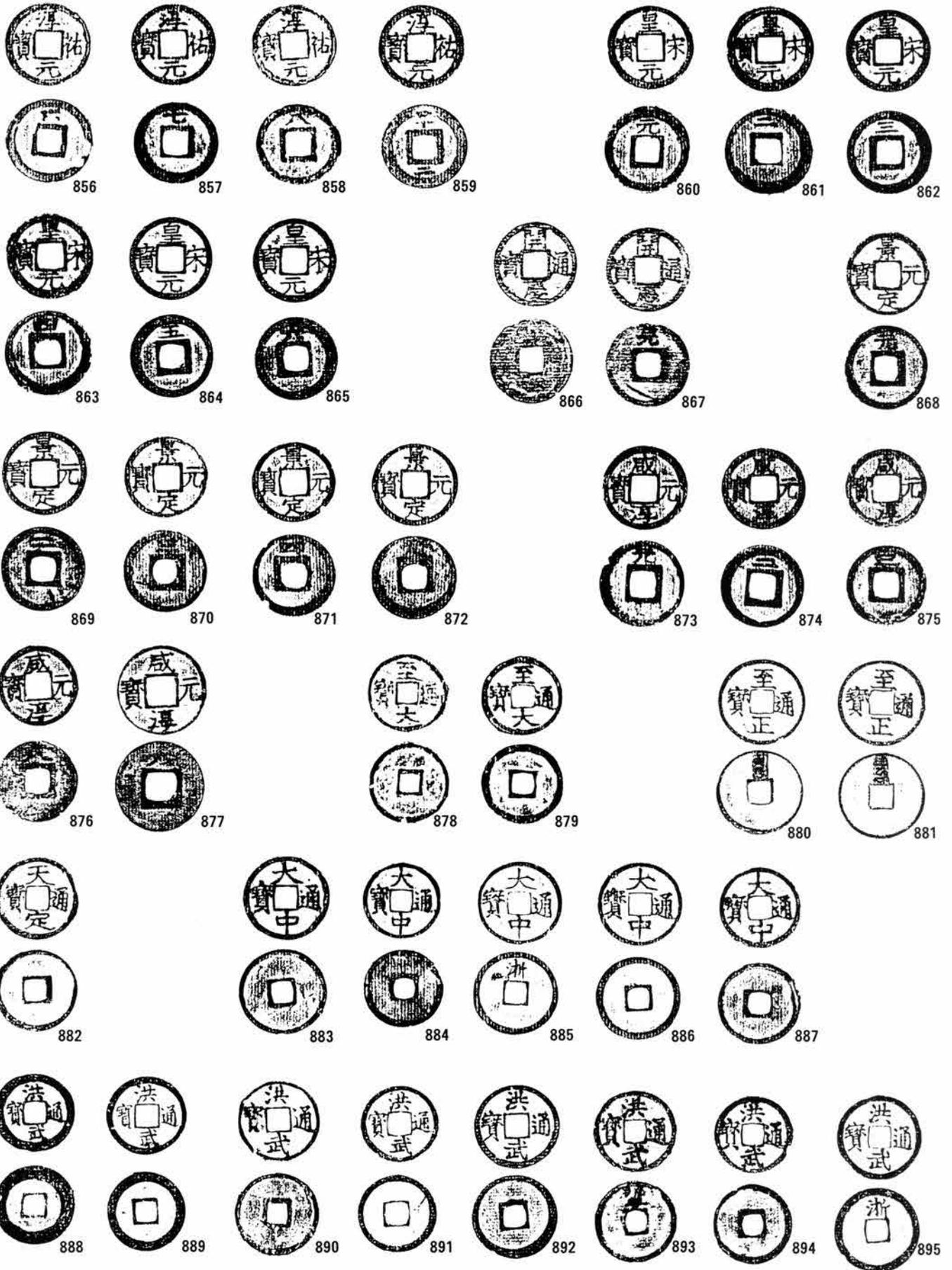
第44図 第57次調査出土遺物(18)



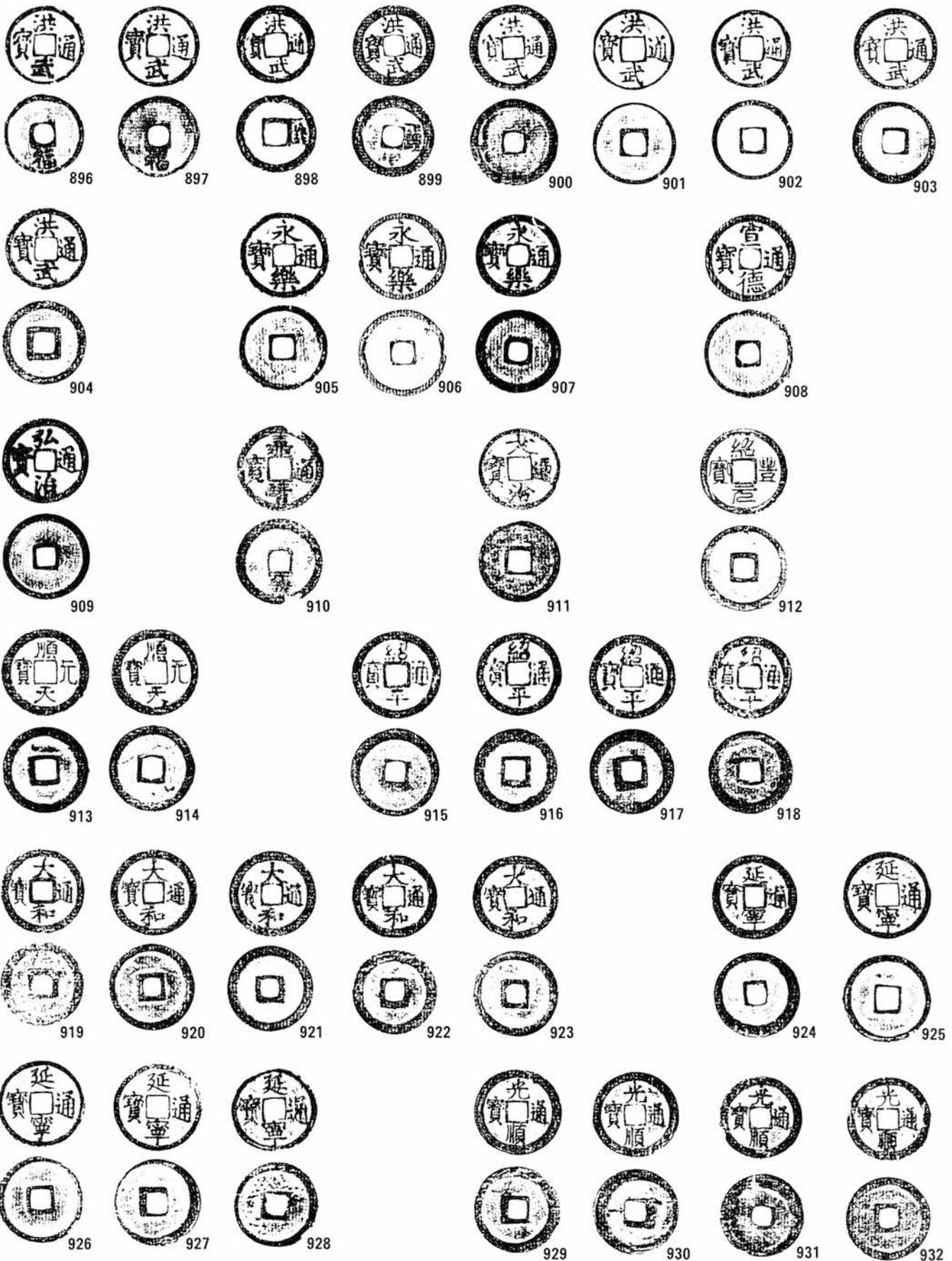
第45図 第57次調査出土遺物(19)



第46圖 第57次調査出土遺物(20)



第47図 第57次調査出土遺物(21)



第48図 第57次調査出土遺物(22)



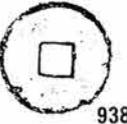
933

934

935

936

937



938

939

940

941

5. 第58次調査遺構 (第49～53図, PL.38～43)

ここで取り扱うのは、概要で述べた通り、第57次調査で検出された東西方向の土塁の北面石垣を南辺とし、この北に位置する南北21m、東西58mの範囲である。当然中心は第58次調査により検出した遺構であるが、東端部に昭和53年の道路改良工事に伴う事前調査として実施した第31次調査で検出した遺構を含むほか、この調査に先行して実施した第57次調査により検出した遺構のうち東西方向土塁北面石垣以北のものも含めて述べる。

主な遺構としては、道路1、石列及び石垣4、溝5、礎石建物2、井戸4、石積施設2等があげられる。遺構の残存状況は良好とはいえず、不明確な点も残されているが基本的には第57次調査区同様3時期に区分できるものと思われる。これを下層から順次Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ期とする。Ⅲ期は水田耕作土直下で検出された遺構群であり、朝倉氏滅亡時に存在したものと考えられる。土層等から、このⅢ期の整地に際しては広範囲に深さ0.5m程度に大きく掘り込み、礫石混じりの土砂で埋めたことがうかがわれ、これによって先行するⅠ・Ⅱ期の遺構の多くは削平されている。断片的に残された遺構で見ると、Ⅲ期とⅡ期のレベル差は0.2m前後、Ⅱ期とⅠ期のレベル差は0.4m前後と推定される。

なお、記述で用いる方位は、おおよそのものであって、谷の中ほどの一乗谷川を基準とするもので、これを南北方向軸、すなわち、南から北に流れるものとする。この調査区では一乗谷川側が東、山側が西となる。ちなみに国土座標第Ⅵ系方位に従えば、第57次調査区との境となる東西方向土塁の北面石垣の方位はE20°Sとなる。また遺構平面図等に記した数値は国土座標第Ⅵ系に基づく位置を示している。

SS3525 調査区東半部中ほどで検出された東西方向の道路。基本的にはⅡ期の遺構と考えられるが、Ⅲ期においても存在した可能性が強いものと思われる。この道路の南の路肩となるのが石列SV1426、北の路肩となるのが溝SD3519である。検出長は20mほどである。幅は西半で2.4mである。東半は少し狭まるようであるが、北の溝が失われているため明らかでない。この道路を横断する南北方向の溝がいくつか検出されている。また、道路面には砂利とともに礫石も敷き込まれている。道路面は第57次調査で検出されている南北方向の石垣SV3412の延長線上の西では不明確となる。また南の石列SV1426もここまでであり、そして前述した南北方向の石垣SV3412の延長線上には石の集まりSX3537も存在する。こうした点を合わせて考えると、この道路は南に折れ、第57次調査で検出されている大規模な屋敷の北東端に取り付いていた可能性が強いものと思われる。

SV1426 調査区東半部中ほどで検出された東西方向道路SS3525の南を限る石列で東半はすでに第31次調査において検出されていた。基本的にはⅡ期の遺構と考えられる。検出長は20mほど。径0.5m程度のやや大振りな石を北に面を持って1段並べるもので、これを境にして道路側が0.2～0.3m低くなる。

SV3510 調査区東半部北寄りで検出された南北方向の石列。基本的にはⅡ期の遺構と考えられる。北端は石積施設SF3517の東面とつながる。ここが水田畦畔となっていたこともあって乱れており、不明な点もあるが、東に面を持ち、これを境に東西に若干の段差があったものと思われる。

SV3511・3512 調査区の北端に位置する西半は南に振れるが基本的には東西方向の石列。1.5mほど離れてほぼ平行し、北に位置するのがSV3512、南に位置するのがSV3511。水田畦畔及び水路として

利用されていたこともあって、その際の改修部もあり、不明な点も残されているが、基本的にはともにⅢ期の遺構と考えられる。S V3512は、面は北にあったものと推定されるが、これが東西方向の水路の北側石として利用されたため、本来の裏込め土の大半が失われ、石垣の裏側が露出していた。この石列を境に南北の遺構面に0.3m程度のレベル差があったものと推定され、基本的には区画を定める境界遺構と考えられる。この石列と第57次調査区との境である東西方向土塁S A3411の間隔は平行する東半では21mである。用いられている石は径0.5m前後でやや大振りであり、東端近くでは一部2段に積まれている。南に位置するS V3511は大半の石が微妙にずれているようであって、南北どちらに面があったのか明確でない点も残る。南に面があったとすれば、この平行する2つの石列は、幅1.5mほどの塀の基礎部としての土塁と考えられよう。なお、この2つの石列S V3511・3512の基底面は南の石列S V3511が0.1mほど高いように見受けられる。

S D3519 調査区東半部中ほどで検出された東西方向の溝。道路S S3525の北側溝である。基本的にはⅡ期の遺構と考えられる。検出長は10mほどであって、幅0.2~0.3m、深さ0.2mの規模である。径0.2~0.3mの石を並べている。

S D3520 調査区東半部東端近くで検出された南北方向の溝。東西方向道路S S3525の上で断片的に検出されたもので、北は削平されており、検出長は0.7m、幅は0.2mほど。基本的にはⅡ期の遺構と考えられる。

S D3521 調査区東半部東端近くで検出された南北方向の溝。検出長は2.1m、幅は0.2m。基本的にはⅡ期の遺構と考えられる。北はS D3520同様削平されている。南は道路の南路肩の石列S V1426を越えて1mほど南へ延びている。S D3520との間隔は2.7m。

S D3522 調査区東半部中ほどで検出された南北方向の溝。検出長は5.5m、幅は0.2mで北端で道路側溝S D3519に合流する。基本的にはⅡ期の遺構と考えられる。道路の南路肩の石列S V1426を境にして0.2mほど段差があり、さらに南へ3.5mほど延びている。東のS D3521との間隔は3.3m。径0.3m程度の石を並べているが、石列S V1426を境にして道路面部が若干小振りである。

S D3523 調査区北端近くに位置する東西方向の溝。前述した石列S V3511とS V3512の間に存在するが、後世の水田化に伴う水路と考えられる。

S B3437 調査区南辺西寄りで検出された礎石建物。Ⅲ期の遺構。東西方向土塁S A3411の北面石垣裾から1mほど離れて建物南辺と考えられる礎石のみが東西に一直線検出されている。上面も扁平であり、径も0.3~0.5mと比較的しっかりとした石を用いている。基本となる礎石の間隔は西から2.7m、1.9m、1.9mほどであり、中間にもやや小振りの石が配されている。これは尺に直せば、ほぼ9尺、6.2尺、6.2尺に当たる。こうしたことから、基本寸法としての1間は6.2尺(1.88m)程度と推定されよう。また、西の2.7m部分には南に0.5m弱離れて平行する礎石があるが、縁の束を受けるものと推定される。

S B3524 調査区西半やや北寄りで検出された礎石建物。Ⅲ期の遺構。東南部を除き、比較的良く礎石が残り、その規模は東西、南北ともに3.6mである。礎石は径0.3~0.5mのものを用い、多くは0.6m間隔で配置されている。これまでの調査においてもこのように方形で密に礎石を配するという共通点を持つ建物の例も散見されており、多くが蔵と推定されている。この建物もこうした可能性が高い。なお、この建物の1.5m東及び0.3m西に南北方向に平行する石列が見られるが、それぞれ簡易な基壇状の遺構の一部と考えられ、東には庇が設けられていたものと考えられる。

S E3513 調査区東半部中ほどで検出された井戸。天端石を欠き、不明な点も残るが基本的にはⅡ期の

遺構と考えられる。内径は0.7mほどである。

S E 3514 調査区中ほどで検出された井戸。後世の削平を受け、礫石等で埋められた面で検出されており、上部を欠くため時期については明確でない。Ⅱ期ないしⅢ期の遺構と考えられる。内径は0.9mほどで、深さは1.9mと浅い。

S E 3515 調査区西半部やや北寄りで検出された井戸。天端石を欠くが、基本的にはⅢ期の遺構と考えられる。内径は0.8mほどで、深さは2.4mと比較的浅い。

S E 3516 調査区西半部中ほどで検出された井戸。天端石を欠き、また、上部2～3石は積み方が異なるように見受けられる。検出面から考えると基本的にはⅢ期の遺構であるが、Ⅱ期に存在したものを嵩上げし、Ⅲ期にも存続した可能性が考えられる。内径は0.8mほどで、深さは2.5mと比較的浅い。

S F 3517 調査区東半部北端近くで検出された石積施設。天端石を欠くがⅡ期の遺構と考えられる。東西、南北ともに1.5mほどの規模を持ち、比較的大きい。側面の石積みは2～3段で、深さは約0.6m。

S F 3518 調査区東半部南寄りで検出された石積施設。南北1.1m、東西1.2mの規模で、南面は石積を一部欠くが、深さは0.25mほどで、全体に比較的大きな石を1段を基本として並べている。Ⅱ期の遺構と考えられる。

S X 3526 調査区東半部北端で検出された石敷。全体は矩形で、東西3.8m、南北1.4mの範囲に径0.2～0.4mの扁平な自然石を敷き並べている。Ⅰ期の遺構と考えられる。

S X 3527・3528 いずれも調査区東半部北端の石積施設S F 3517の周囲に存在する石の集まり。性格等は明らかでない。

S X 3529・3530 ともに調査区東半部北端で検出された石敷S X 3526の南に存在する東西方向の石列状遺構。石敷S X 3526に接するように存在するのがS X 3529で、径0.2m程度の石を並べており、検出長は1.4mほど。北に面があるようにも見受けられる。この0.9m南に平行するように存在するのがS X 3530で、径0.3m程度の石を並べており、検出長は1mほど。北に面を持つ。Ⅰ期の遺構と考えられる。性格等は明らかでない。

S X 3531 調査区東半部中ほどやや北寄りで検出された石の集まり。基本的にはⅡ期の遺構と考えられるが不明な点も残されている。

S X 3532 調査区東半部中ほどやや北寄りで検出された方形の土壌。東西、南北とも約1.2m、深さは0.25mほど。Ⅱ期の遺構と考えられる。

S X 3533 調査区東半部中ほど、東西方向溝S D 3519に沿って北に存在する石列状遺構。Ⅱ期の遺構。

S X 3534 調査区東半部中ほど東寄り、東西方向道路S S 3525路面上に道路を横断する溝S D 3522を挟んで存在する石の集まり。面等はそろっておらず、性格等は明らかでない。

S X 3535・3536 ともに調査区東半部中ほど南寄りで検出された石列状遺構。Ⅱ期の遺構と考えられる。S X 3535は南北方向で、西に面を持って径0.3mほどの石を1.5mほど並べている。S X 3536は東西方向で、径0.2mほどの石を1.2mほど並べており、南に面があるように見受けられる。

S X 3537 調査区東半部中ほどで検出された石の集まり。東西方向道路S S 3525の西端近くで、南石列S V 1426を切るように南北に見られるが、詳細は不明。

S X 3538・3539 ともに調査区北辺中ほどで検出された遺構。石列S V 3512の東端に位置し、S X 3538は南に面を持つように東西に若干並ぶ石とこの東端から南に曲がる石から構成され、Ⅰ期の遺構と考えられる。S X 3539は石列S V 3512を切るように存在する南北方向の溝状の遺構。西側に並ぶ石は明確に

東に面を持つが、東側の石については明確でない。Ⅱ期の遺構と考えられるが不明な点もある。

S X 3540 調査区中ほど北寄りで見出された石の集まり。Ⅲ期の遺構と考えられるが詳細は明らかでない。

S X 3541 調査区北辺中ほどで見出された遺構。比較的大きく扁平な石が集中するが詳細は明らかでない。

S X 3542 調査区の中ほどで見出された遺構。扁平な石は礎石と推定される。この西北には列状に並ぶ石が見られる。Ⅲ期の遺構と考えられるが、いずれも断片的なもので詳細は明らかでない。

S X 3543～3547 いずれも調査区中ほどで見出された石が集中して見られる遺構。断片的なもので詳細は明らかでない。

S X 3548 調査区西半部北よりの建物 S B 3524 の西に断片的に残る石列。Ⅲ期の遺構。西に面を持ち、建物との距離も 0.3m ほどと狭いことから、この建物の簡易な基壇的な石列の一部と考えられる。

S X 3549～3551 調査区北西寄りで見出された石が集中して見られる遺構。断片的なもので詳細は明らかでない。

S X 3552・3553 調査区北西隅近くで見出された石が集中して見られる遺構。断片的なもので詳細は明らかでない。

S X 3554～3556 調査区西半部南寄りで見出された遺構。一部石が並ぶようにも見受けられるが断片的なものであって、詳細は明らかでない。

S X 3557～3559 調査区西半部中ほどで見出された礎石の一部と考えられる石群。断片的であるため、詳細については明らかでない。

3. 第58次調査遺物 (第54~57図, PL.44~47)

本調査で出土した遺物の総点数は表4に示すように16,707点を数え、これを調査面積1,310㎡に対する1㎡あたりの平均出土点数を求めると12.75点となる。これは隣接する調査区である57次調査の29.99点と比較すると著しく低い数値に見られるが、本遺跡全体で捉えたばあい平均的なものである。

本稿における遺物についての分類は、越前焼大甕・播鉢は『県道鯖江・美山線改良工事に伴う発掘調査報告書』1983、土師質皿は『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告Ⅰ』1979、染付は小野正敏「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究2』1982日本貿易陶磁研究会によった。

表土層出土遺物 (第54図, PL.44)

調査区全体を覆う表土層出土品であり、狭義の表土とその下に認められる旧水田面のいわゆる床土をも表土として扱っている。極めて移動性の高い遺物群である。これらの除去をおこなうとⅢ期の遺構面を確認することができる。

越前焼 越前焼には甕・播鉢・鉢が認められる。(1000~1003)は播鉢であり、(1000・1003)はⅢ群、(1001・1002)はⅣ群に分類される。(1004・1005)は鉢であり、(1004)は口径18.8cm、(1005)は口径22.6cmをそれぞれ測る。

土師質土器 (1006)は土師質皿でありC類に属する。(1007)は羽釜であり体部内面下半には指頭圧痕

器種			点数	%	器種			点数	%	器種			点数	%
日本製陶磁器	越前焼	甕	887		中国製陶磁器	青磁	碗	197		金属製品	銅銭	49		
		壺	716				皿	94			釘	136		
		鉢	85				香炉	14			鉄鍋	2		
		播鉢	436				鉢・盤	29			金具	5		
		他	36				壺・花生	11			他	24		
	計	2,160	13.0	他		3		計	216	1.3				
	土師質	皿	12,568			白磁	碗	12		石製品	バンドコ	64		
		羽釜	38				皿	334			風炉	41		
		土鈴	10				坏	12			硯	18		
		灯芯押え	2				香炉	5			盤	60		
	他	14		他		1		白磁石	13					
	計	12,632	75.6	計		364	2.2	他	14					
	鉄釉	碗	53			染付	碗	85		木製品	箱の底板	1		
		皿	6				皿	187			漆片	1		
		壺	37				坏	3			他	6		
他	8		他	2		計	8	0.05						
計	104	0.6	計	277	1.7	その他	雲母	16						
灰釉	碗	13		華南彩釉陶器	1			近世	68					
	皿	23		中国 他	5			他	9					
	鉢	34		計	995		計	93	0.6					
	壺	48		朝鮮磁器	碗	4		合計	16,707	100				
他	8		製器	壺	15									
計	126		他	1										
瓦質	香炉	7		計	20	0.1								
	火鉢	12		陶磁器計	16,093									
	風炉	18												
	他	13												
計	50	0.3												
信楽	1	0.01												
国産他	5													
計	15,078	90.2												

表4 第58次調査出土遺物一覧表

が認められる。

中国製陶磁器 (1008・1009)共に青磁線描蓮弁文碗であり、(1008)は口径9.5cmを測る。

暗褐色土層出土遺物 (第54・55図, PL44・45)

Ⅱ期遺構面を埋める層であり、Ⅲ期遺構面は本層の上に形成される。

越前焼 甕・播鉢・鉢・壺が認められる。(1010)は甕Ⅰ群に位置づけられ、本遺跡出土の越前焼でも古相に属する。(1011・1012)はⅣ群に属するものである。(1013)はⅣ群の播鉢であり、播目は縦方向のものと半円状のものを組み合わせている。(1014)は口径25.6cm、器高9.6cmを測る鉢である。(1015)は口径8.6cm、器高17cm、胴部最大径16.5cmを測る壺であり、体部外面下半には縦方向の削りをおこなっている。また、肩部にはヘラ記号を有する。

土師質土器 (1016～1021)はC類であるが、口径により11cmのもの(1016・1017)、9cmのもの(1018)、7cmのもの(1019～1021)の3種に分類される。(1022)は口径6.7cm、器高1.5cmを測り、底部が凹状を呈するA類である。また、(1016～1018)は灯明皿に使用されたものと想定され、口縁部にタール状の付着物が認められる。

瀬戸・美濃焼 (1023)は口径11.8cmを測る鉄釉碗であり、釉はやや厚めに施釉されている。(1024)は口径17.8cmを測る鉄釉皿であり、底部外面を露胎としている。(1025)は鉄釉茶入であり、削り出し高台を有している。

中国製陶磁器 中国製陶磁器には青磁と染付を図示することができた。(1026)は口径13.8cmを測る青磁線描蓮弁文碗である。(1027)は口径21cmを測る青磁無文碗である。(1028)は染付皿であり、底部内面には玉取獅子を描いている。(1029)は染付碗D群であり底部内面には十字花文、体部外面にはアラベスク文を描いている。(1030)は小型の染付皿B群であり口径8.3cmを測る。体部外面には牡丹唐草文を描いている。

朝鮮製陶磁器 (1031)は口径9.4cm、器高2.7cmを測る皿である。

I期遺構面出土遺物 (第55・56図, PL45・46)

I期の遺構が形成される面からの出土遺物群である。

越前焼 甕・播鉢・壺が出土している。(1032)はⅣ群cに分類される甕片である。(1033～1035)は播鉢であり、(1033・1034)共にⅣ群のものである。(1034)は口径32.5cm、器高9.5cmを測り、底部内面にも播目を有する。(1035)は口縁部を欠失しているものの、おそらくⅣ群のものと考えられる。割りと使い込まれており、播目の摩耗が進んでいる。(1036)は小型壺であり、口径5cm、器高10.3cm、胴部最大径11.8cmを測る。体部外面下半は縦方向のヘラ削りをおこなっている。

土師質土器 (1037～1040)は土師質皿であり、共にC類に分類される。体部には指頭圧痕をよく残している。(1037・1038)はタール状の付着物が認められることから、灯明皿として使用したものと考えられる。

瀬戸・美濃焼 (1041)は口径11.8cmを測る鉄釉碗である。釉はやや薄めに施されている。

中国製陶磁器 中国製陶磁器は白磁・青磁・染付が出土している。(1042・1043)は白磁の皿である。(1042)は口径8.3cm、器高2.9cmを測る。削り出し高台を有し、胎土はやや軟質で釉は乳白色を呈する。(1043)は口径9cm、器高2.2cmを測り、挟り高台を持つタイプである。このタイプは本遺跡出土の白磁皿の中では古相に属する。(1044～1049)は青磁である。(1044)は口径16cmを測る無文碗である。体部の立ち上がり角度は弱く、器厚はやや薄く、口唇部は先細りする。(1045)は口径13.2cmを測る無文碗であり、

口唇部は肥厚する。(1046)は口径15.2cmを測る雷文帯碗である。(1047)は口径13.1cmを測る線描蓮弁文碗であり、口唇部断面形態は角形を呈する。(1048)は口径11cmを測る線描蓮弁文碗である。(1049)は口径11cmを測る無文皿であり、内湾気味に立ち上がった体部は頸部で外方へ屈曲し口縁部へ至る。(1050～1052)は染付である。(1050)は口径11.5cmを測り、体部外面には草花文を描く。(1051)は口径12.8cmを測る端反りのB群であり、体部外面には牡丹唐草文、底部内面には玉取獅子を描いている。(1052)は口径10.4cm、器高3.2cmを測る碁笥底の皿C群であるが、端反りとなっている点が通有のC群と異なっている。体部外面には退化した唐草文を描き、底部内面には捻花文を描いている。

朝鮮製陶磁器 (1053)は口径6.8cmを測る壺であり、おそらく徳利形を呈するものと想定される。

S D 3519出土遺物 (第56図)

越前焼 (1054)はIV群に属する播鉢である。

S D 3523出土遺物 (第56・第57図, PL46・47)

越前焼 越前焼は壺・播鉢・鉢・桶が認められる。(1055)はなで肩タイプの壺である。播鉢はⅢ群のもの(1057)とIV群のもの(1056・1063)の2種が認められ、(1063)は口径42cm、器高15.9cmを測る。よく使い込まれており、播目は摩耗が進んでいる。(1058～1060)は鉢であり、(1058)は口径25.6cm、器高6.9cmを測る播鉢形態の鉢である。(1059)は口径14.4cm、器高6.8を測り、体部は内湾しながら口縁部へ至り口縁部には段を作る。(1060)は口径19.6を測り体部は球形を呈する鉢である。腰部には1条の凸帯を有する。(1061)は桶である。

S E 3514出土遺物 (第57図)

瀬戸・美濃焼 (1064)は鉄釉香炉であり、口径10cm、器高4.3cmを測る。口縁部内面から腰部外面にかけて施釉されている。

S E 3515出土遺物 (第56図, PL46)

越前焼 (1062)は播鉢であり、播目の間隔は密である。

S F 3517出土遺物 (第57図, PL47)

土師質土器 (1065)は口径9.6cm、器高2cmを測るC類であり、内面にはタール状の付着物が認められる。

金属製品 (1066)は口径11.1cm、器高2.9cmを測る銅製の燭台と想定される。器厚は薄く底部内面には突起を有する。

X 16地区ピット出土遺物 (第57図, PL47)

中国製陶磁器 (1067)は口径18.8cm、器高4cmを測る白磁皿である。(1068・1069)は染付皿であり、(1068)は口径9.2cm、器高2.3cmを測るE群である。(1069)は口径9cm、器高1.8cmを測るB群であり、体部外面には牡丹唐草文を描いている。

7. 第58次調査小結

遺 構

検出された各遺構について前項において主として若干の検討を含めた個別の解説を行った。遺構の残存状況が良好とはいえず、また多くが断片的なものであって、不明な点も多いが、ここではその全体を通した若干の考察を加え、まとめとする。

遺構の年代

各遺構は基本的にⅠ・Ⅱ・Ⅲの3期に区分できることは前述した通りで、水田直下に存在するⅢ期の遺構群が織田信長軍の攻撃を受けて朝倉氏の支配拠点としての一乗谷の町が滅亡した天正元年の時点において存在したと考えられるものである。これに先行するⅠ・Ⅱ期の遺構群については判断材料を欠くが、遺物、遺構とも大きな差は認められないことから、従来の調査で想定されているように、この一乗谷を支配拠点と定め、都市としての整備を進めることとなった文明3年以後に造られたものとして良いものと考えられる。

構 成

対象とした地区の構成を考える上でまず基本とすべき点は、境界となる遺構の有無であろう。南を限るのは先行する調査区でみられた大きく屋敷を区画する東西方向の土塁S A3411である。北については西半部のみを検出であるが、調査区北辺近くで検出されている二つの石列S V3511・3512を境界遺構として良いものとする。このほぼ平行する南北二つの境界遺構の間隔は約21m(70尺)である。しかしこの境界遺構は調査区の東半には延びていない。この東半部において最も重要な遺構は、東半部の中ほどを東西に横切る道路S S3525であろう。この道路は調査区の東端近くで若干明瞭さを欠くものの、南辺となる石列S V1426に明確に示されるように東へさらに延びている。これに対し、西は前項で述べた通り、南辺となる石列S V1426、北辺となる溝S D3517とも、先行する調査区でみられた大きく屋敷を区画すると考えられる南北方向の石垣S V3412の延長線を境としてこの西では道路面とともに検出されていない。削平されたこともあって明確な遺構は存在しないが、第57次調査で指摘したように南北方向の石垣S V3412の西上面が北に傾斜していること等から、これが通路の可能性もあり、この山裾に存在した大規模屋敷への通路と道路S S3525がつながっていた可能性は強いと考えられるが、さらに西へ延びることはないものと考えて良いものと思われる。こうしたことから、この調査区は道路S S3525の西端あたりで大きく東西に二分できるものと思われる。

こうした想定が許されるならば、調査区の主要部である西半部への基本となるアプローチは東西方向道路S S3525のみとなる。その敷地間口も70尺と比較的大きく、これをさらに分割すると考えられる遺構は検出されていない。また注目すべき遺構として調査区やや北西寄りで検出されている建物S B3524が存在する。この建物は礎石配列等から蔵の可能性が高いことを前項で指摘した。またこの建物の東南部にも断片的ではあるが建物礎石群S X3557～3559もみられる。こうした点から、この西半部は塀等の正面となる明確な境界設備は見られないものの、蔵を持ち、複数の建物から構成される比較的大きな屋敷と考えて良いものと思われる。

これに対し、東半部においては、この東西方向道路へのアプローチと、一乗谷川沿いに存在したと考

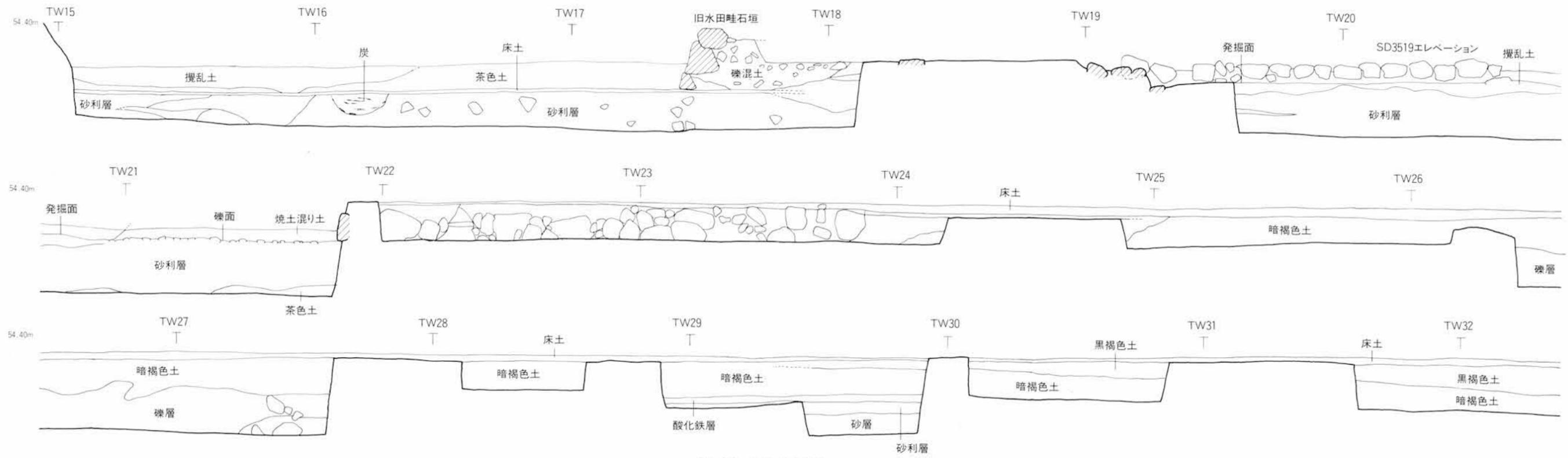
えられる南北方向の道路からのアプローチの二つのケースが想定される。いずれにしても東半部は中央の東西方向道路SS3525で南北に二分される。また、南北方向の溝SD3522や石列SV3510が存在することから、これらによって再分割されていたことも想定できる。なお、この場合は東西方向道路へのアプローチが基本と考えられる。このように西半部は調査区全体を1区画とするのに対し、東半部は小規模な区画に分割されている点で違いを見せている。

まとめ

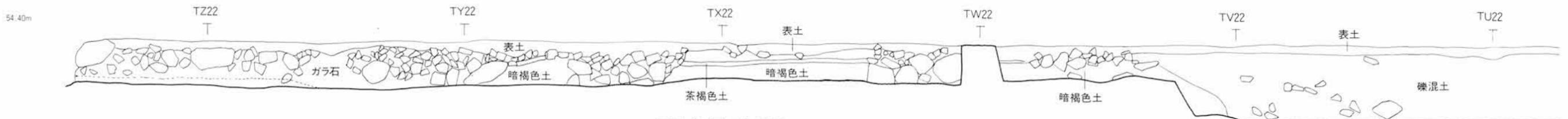
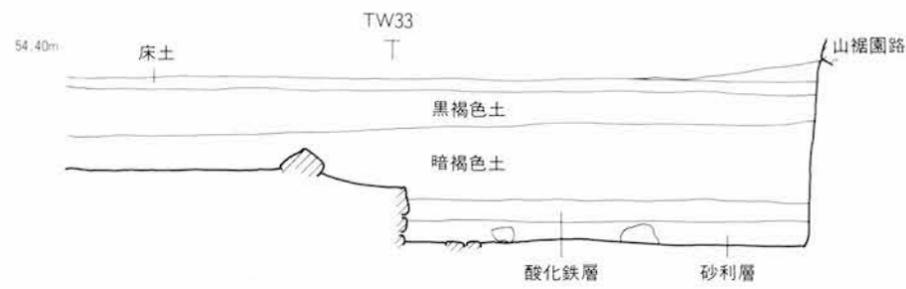
以上の諸点をふまえ、本調査で判明したことをまとめると、次のようになる。

遺構群は基本的に3時期に分けられ、その上層に位置する最終面を一乗谷の町が滅亡する天正元年とするものである。また、調査区は大きく東西に二分され、西山裾には東から延びる東西方向道路を導入路とした間口70尺の比較的大きな区画があり、ここには蔵と考えられる建物も存在する。これに対し、東半部にはこの中央に存在する道路に面した複数の小規模な区画が存在する。

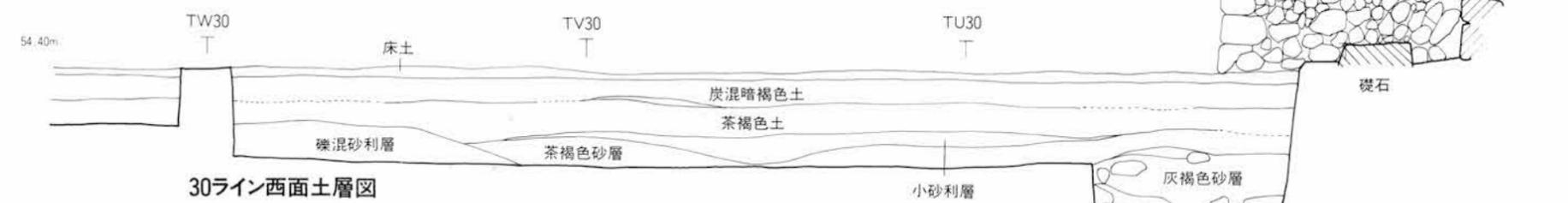
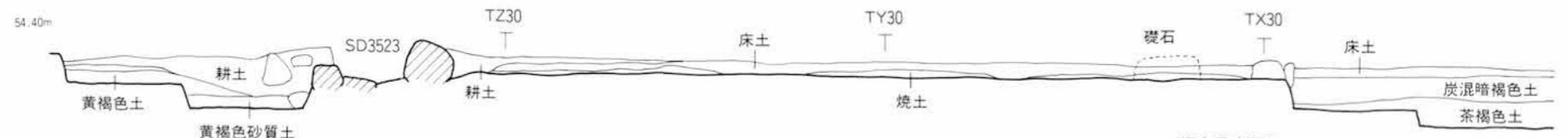
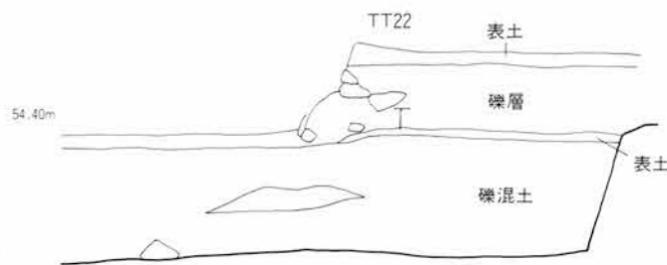
第49図 第58次調査土層図



Wライン北面土層図



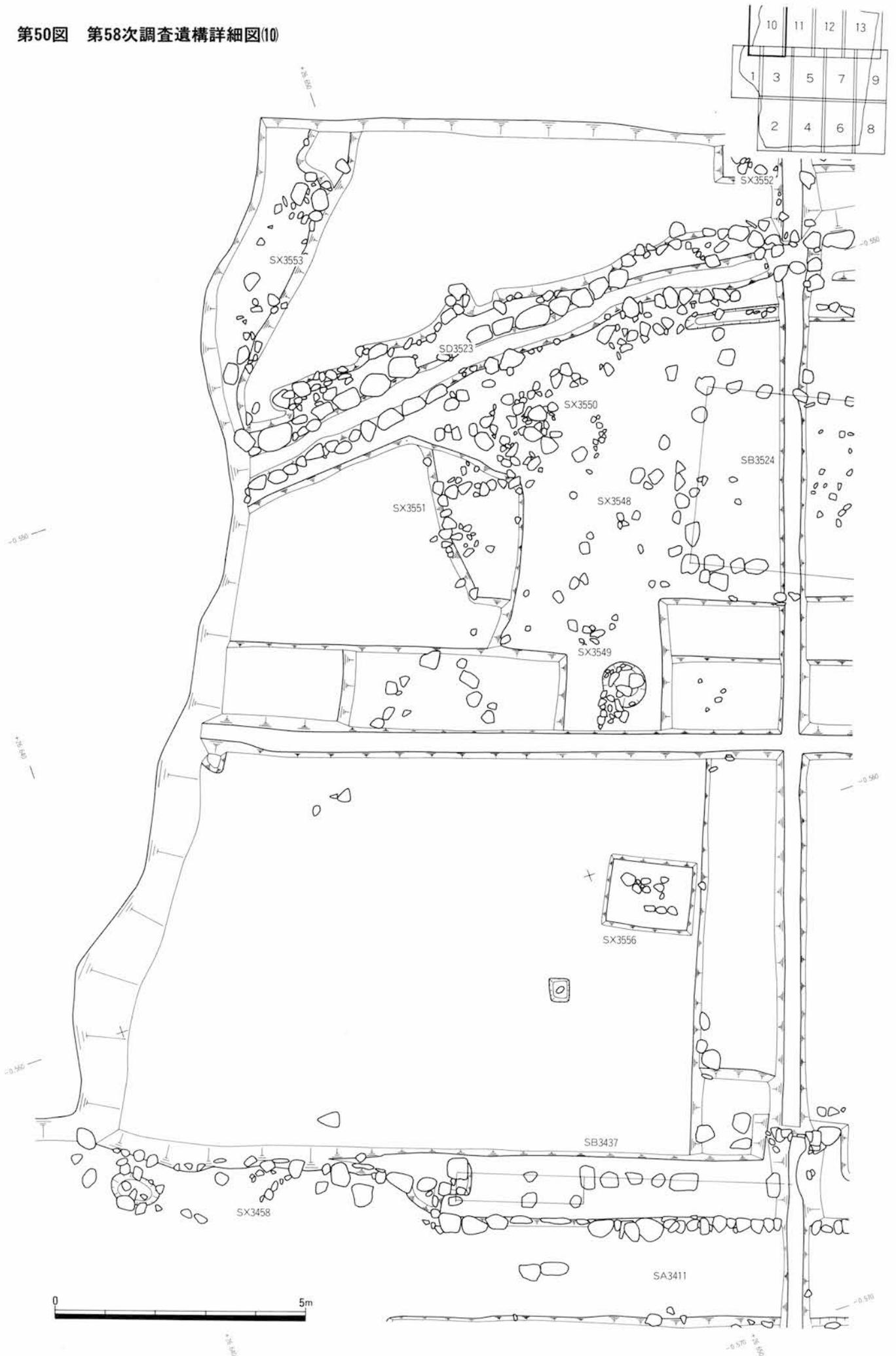
22ライン西面土層図



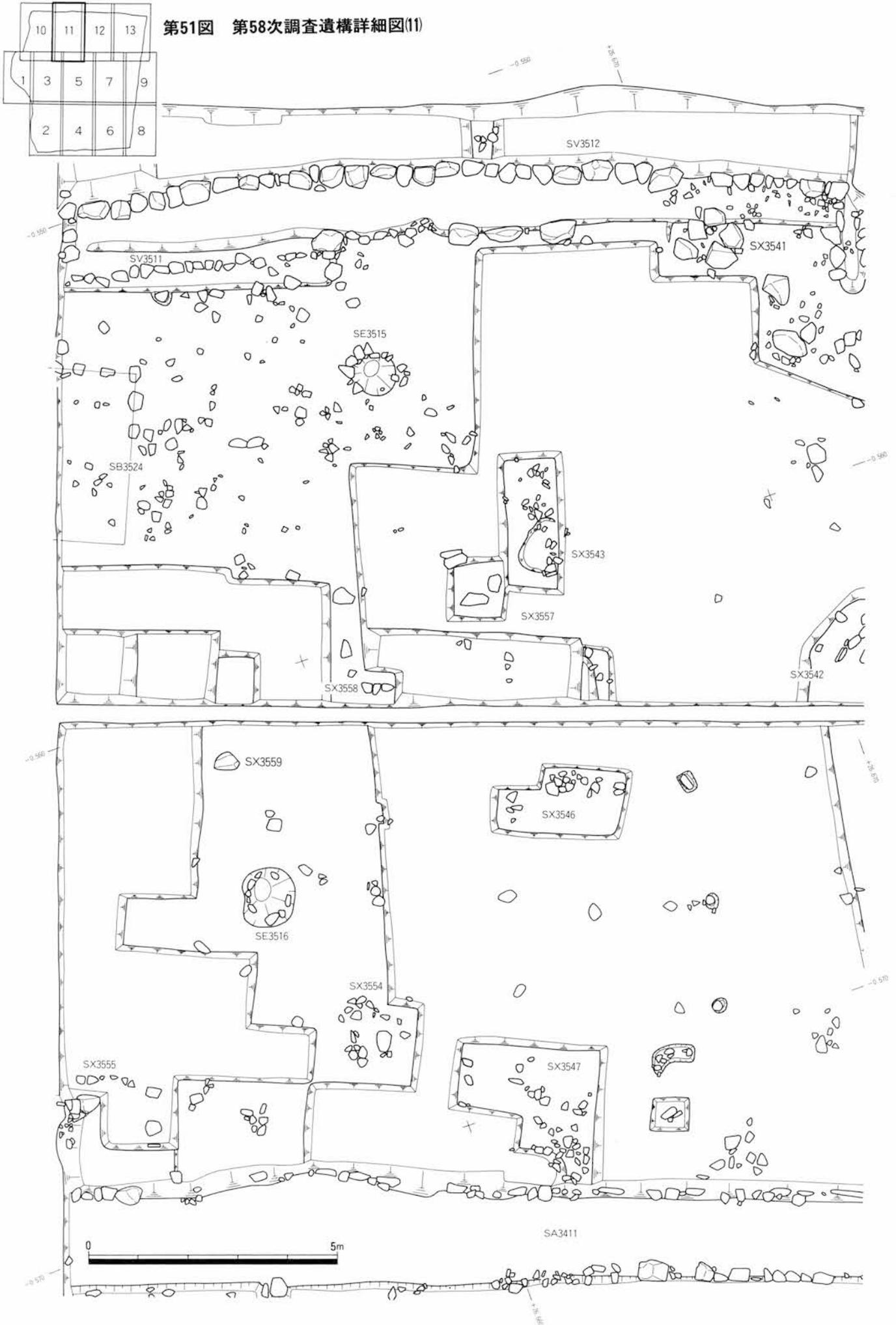
30ライン西面土層図



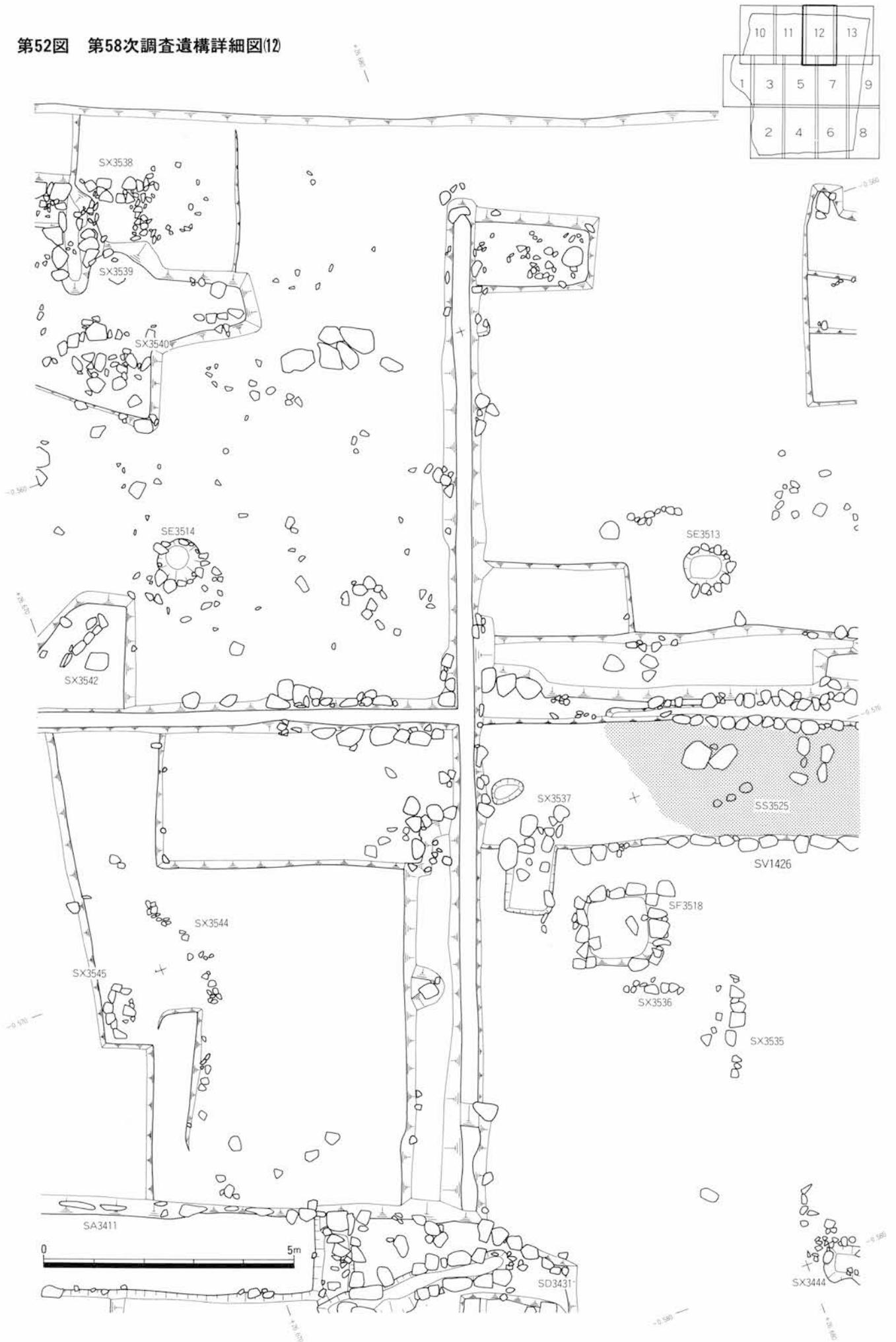
第50図 第58次調査遺構詳細図(10)



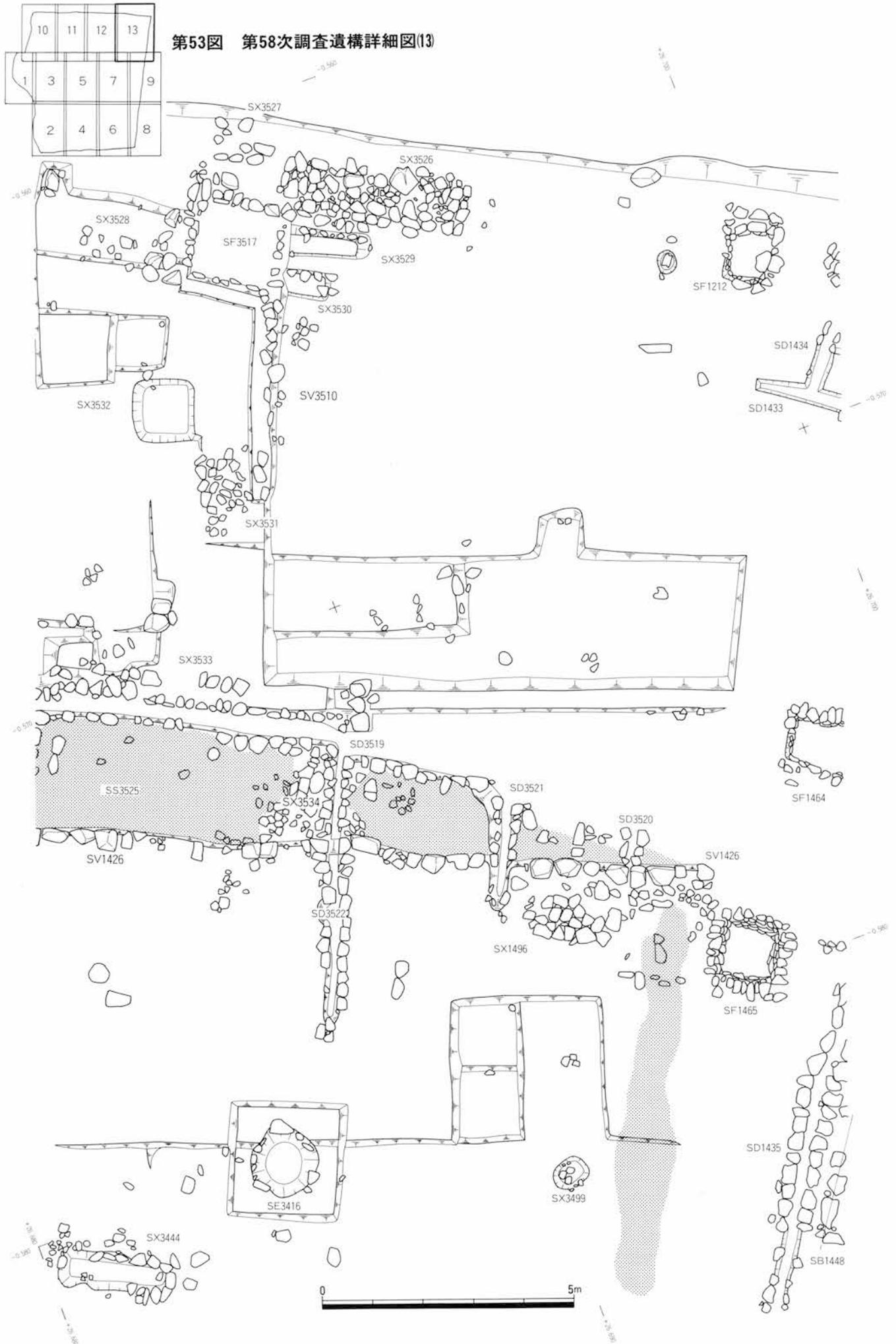
第51図 第58次調査遺構詳細図(11)



第52図 第58次調査遺構詳細図(12)



第53図 第58次調査遺構詳細図(13)





(北東から)



(東から)

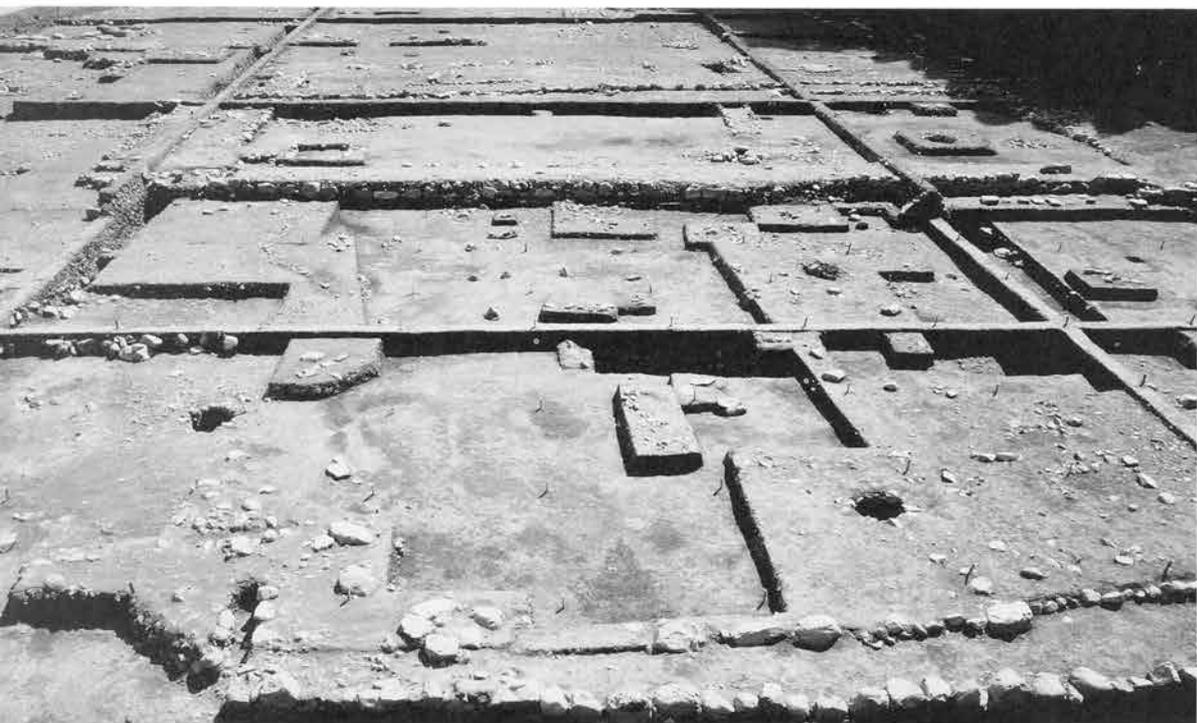


第58次調査・
調査区中景

調査区中央
(東から)

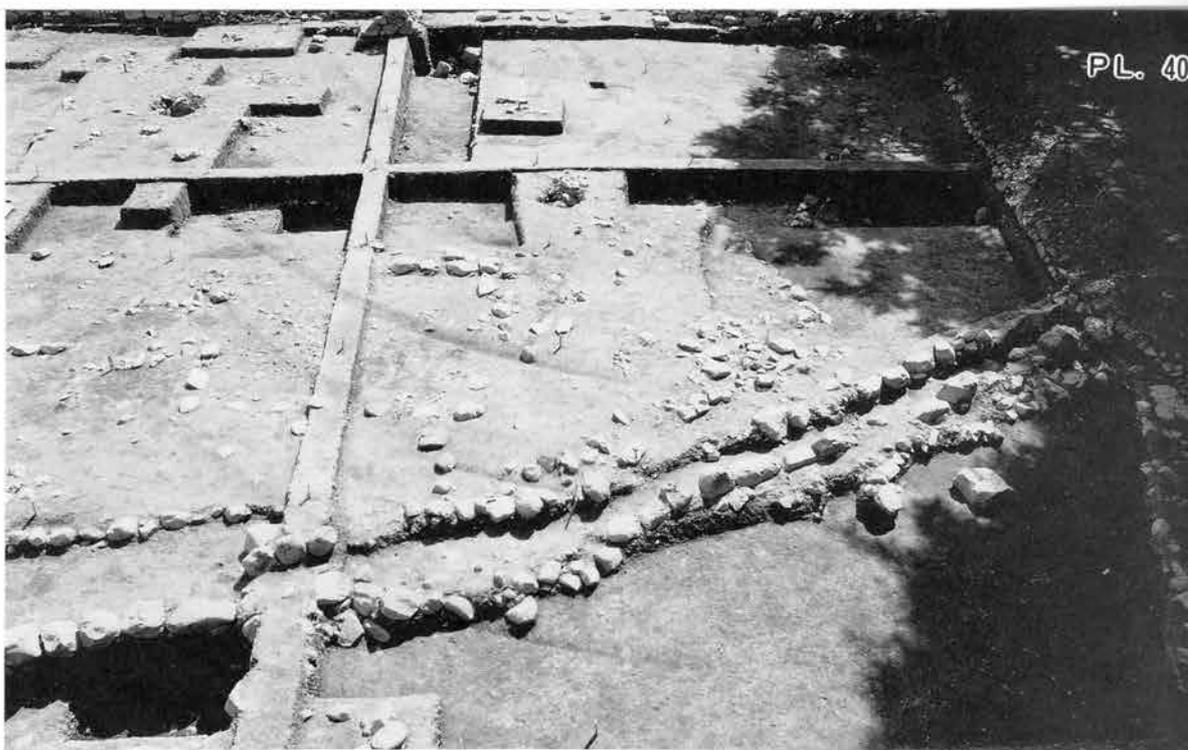


調査区東半
(北から)



調査区中央
(北から)

第58次調査・
調査区中景



調査区西半
(北から)



調査区中央
(南から)



調査区北西隅
(東から)



第58次調査・
主要遺構

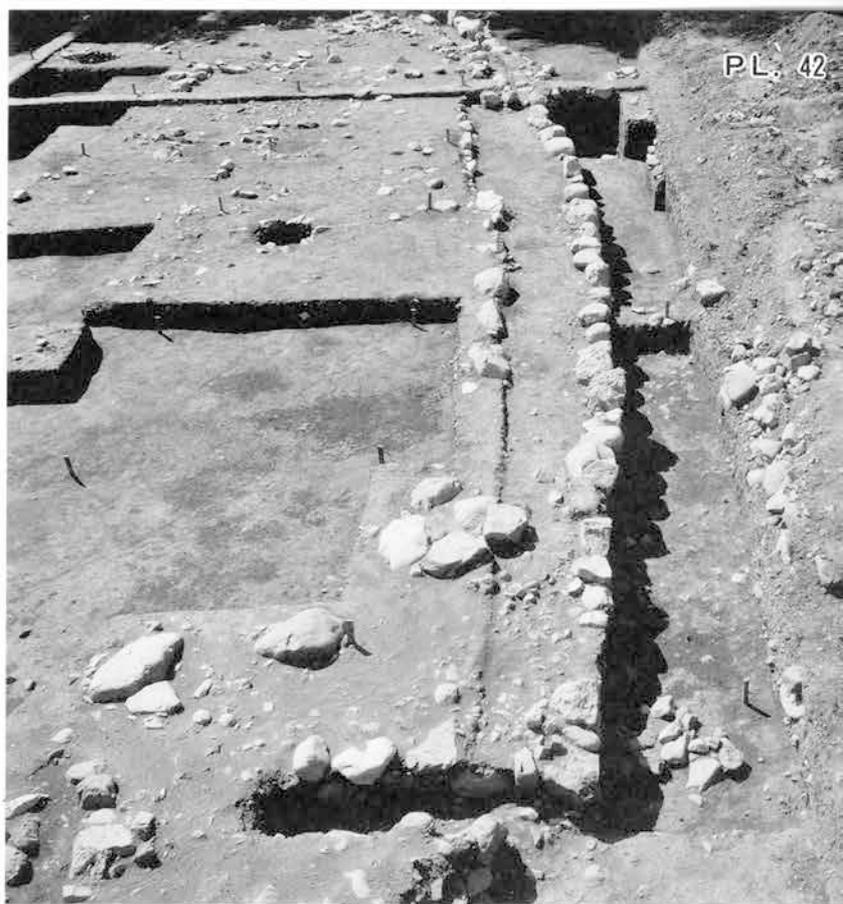
- ◀ 道路SS3525及び
石敷SX1496
(東から)
- ▶ 礎石建物SB3437
(東から)



礎石建物SB3437
(北から)



石敷SX3526及び
石積施設SF3517
(東から)



石列SV3512
(東から)



道路SS3525及び
溝SD3519(西から)



調査区北東隅
(西から)



PL. 43



第58次調査・
石積施設及び
井戸

- ▶ SF1465 (東から)
- ▲ SF1463 (北から)
- ◀ SF3518 (西から)
- ▶ SE3513 (西から)



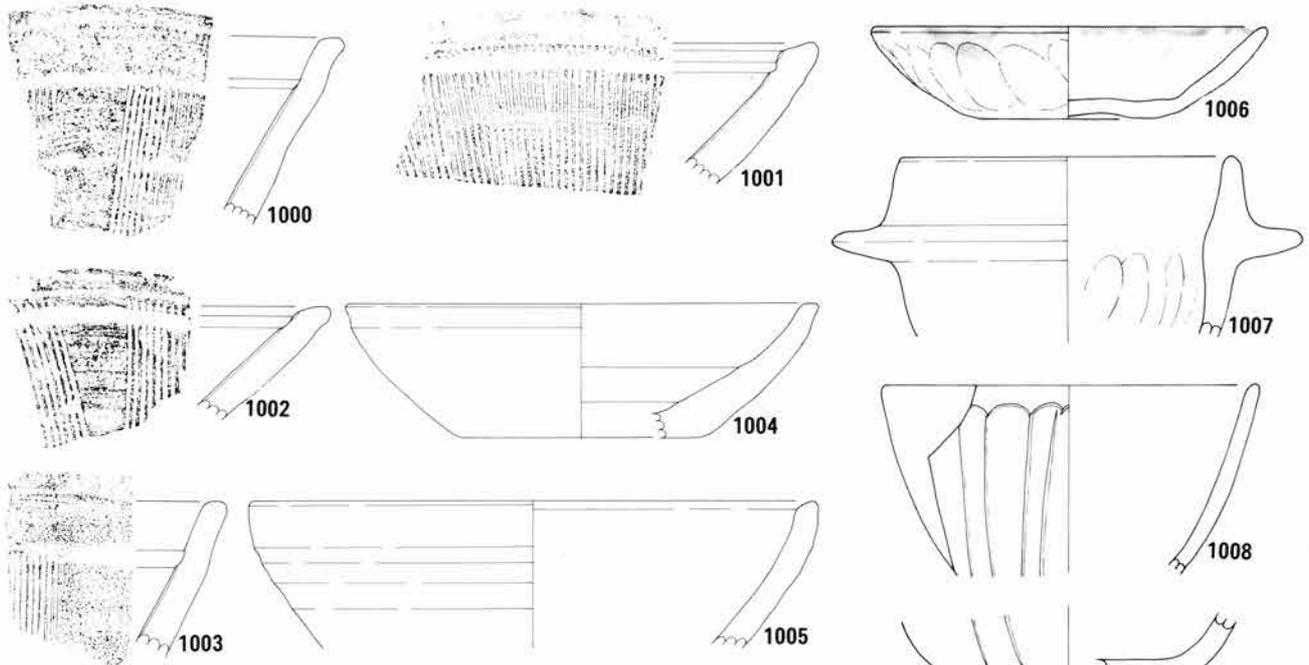
- ◀ SE3514 (西から)
- ▶ SE3515 (東から)



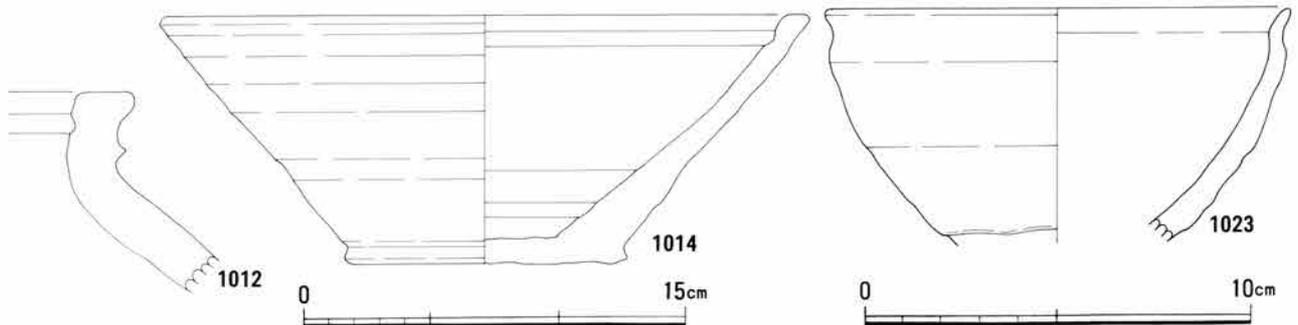
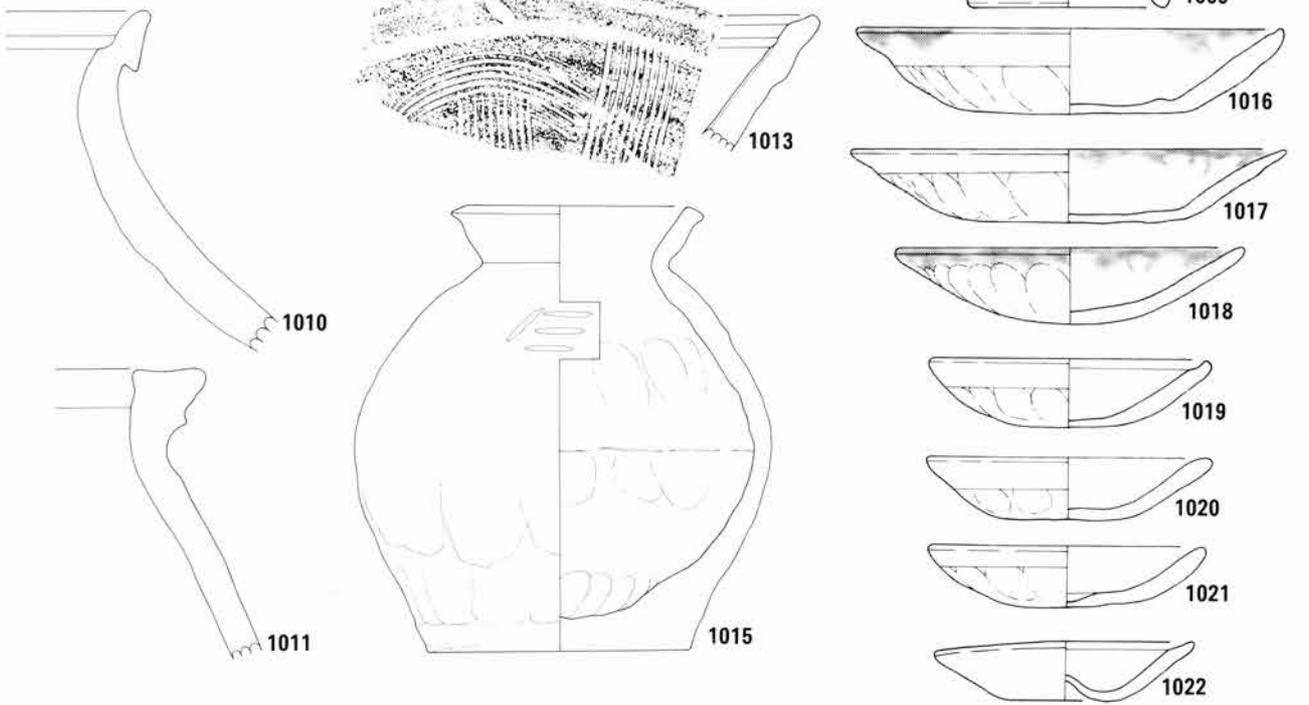
SE3516 (東から)

第54図 第58次調査出土遺物(1)

表土層

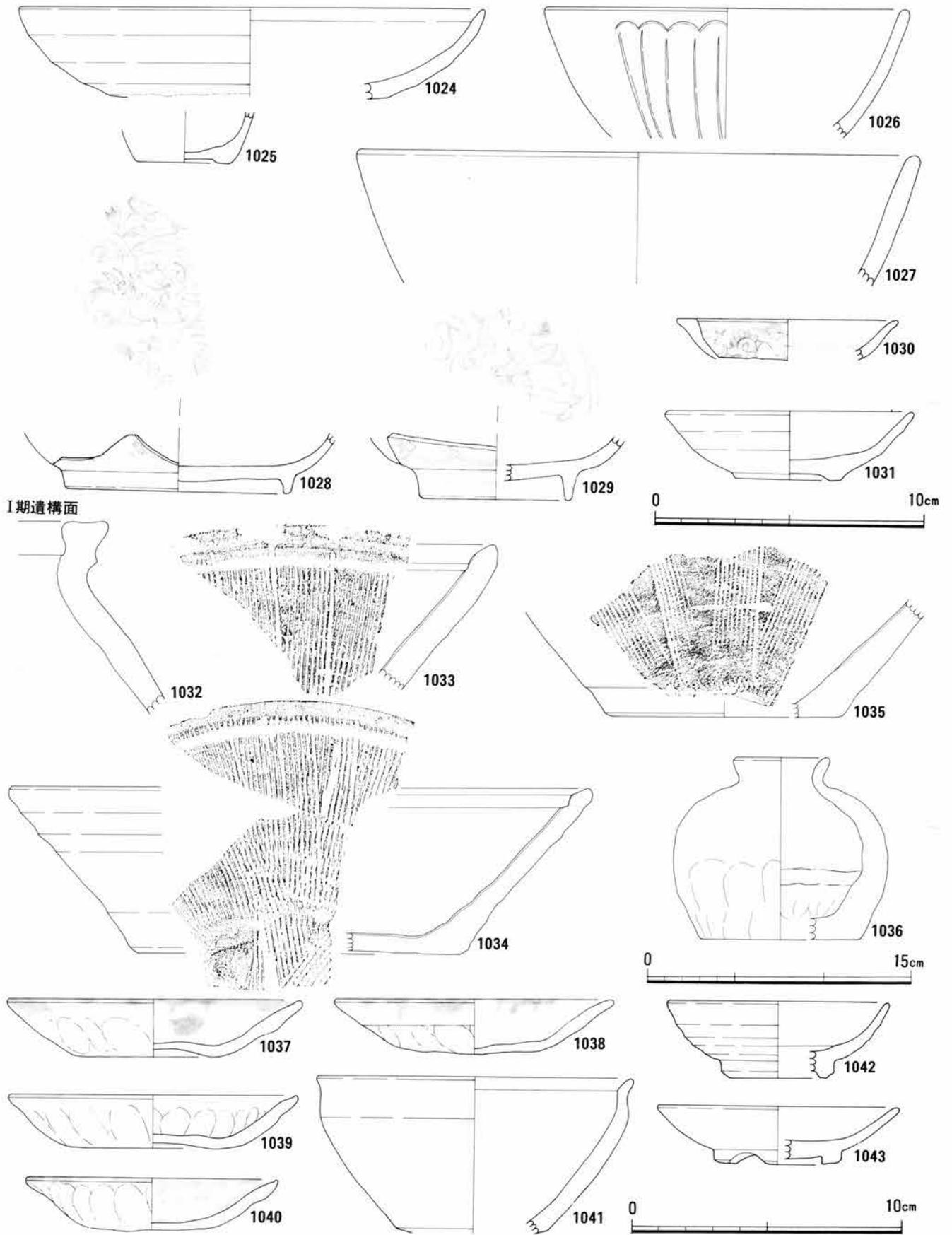


暗褐色土層

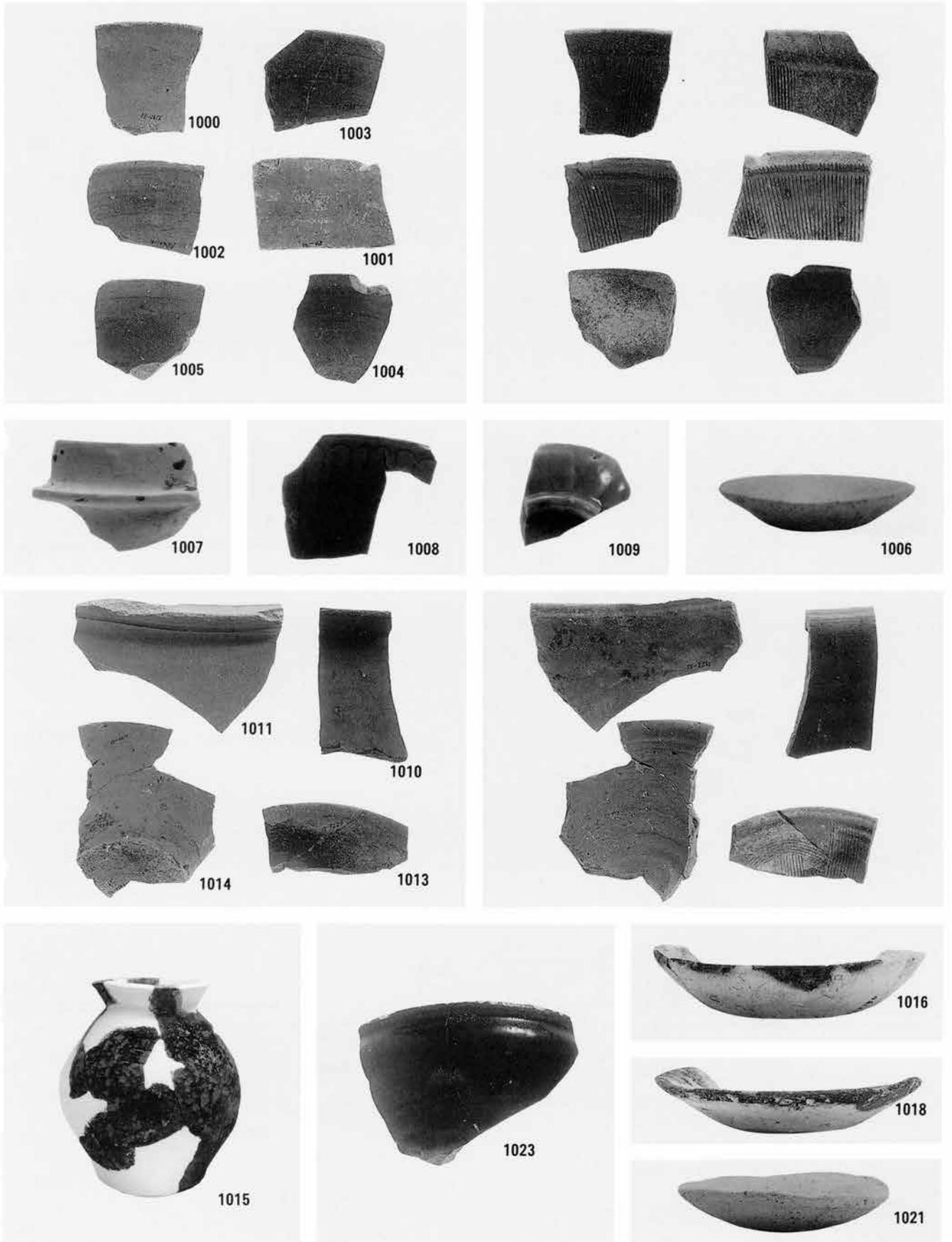


越前焼播鉢1000~1003、1013 鉢1004・1005、1014 甕1010~1012 壺1015 土師質皿1006、1016~1022 羽釜1007
 青磁碗1008・1009 鉄釉碗1023

第55図 第58次調査出土遺物(2)

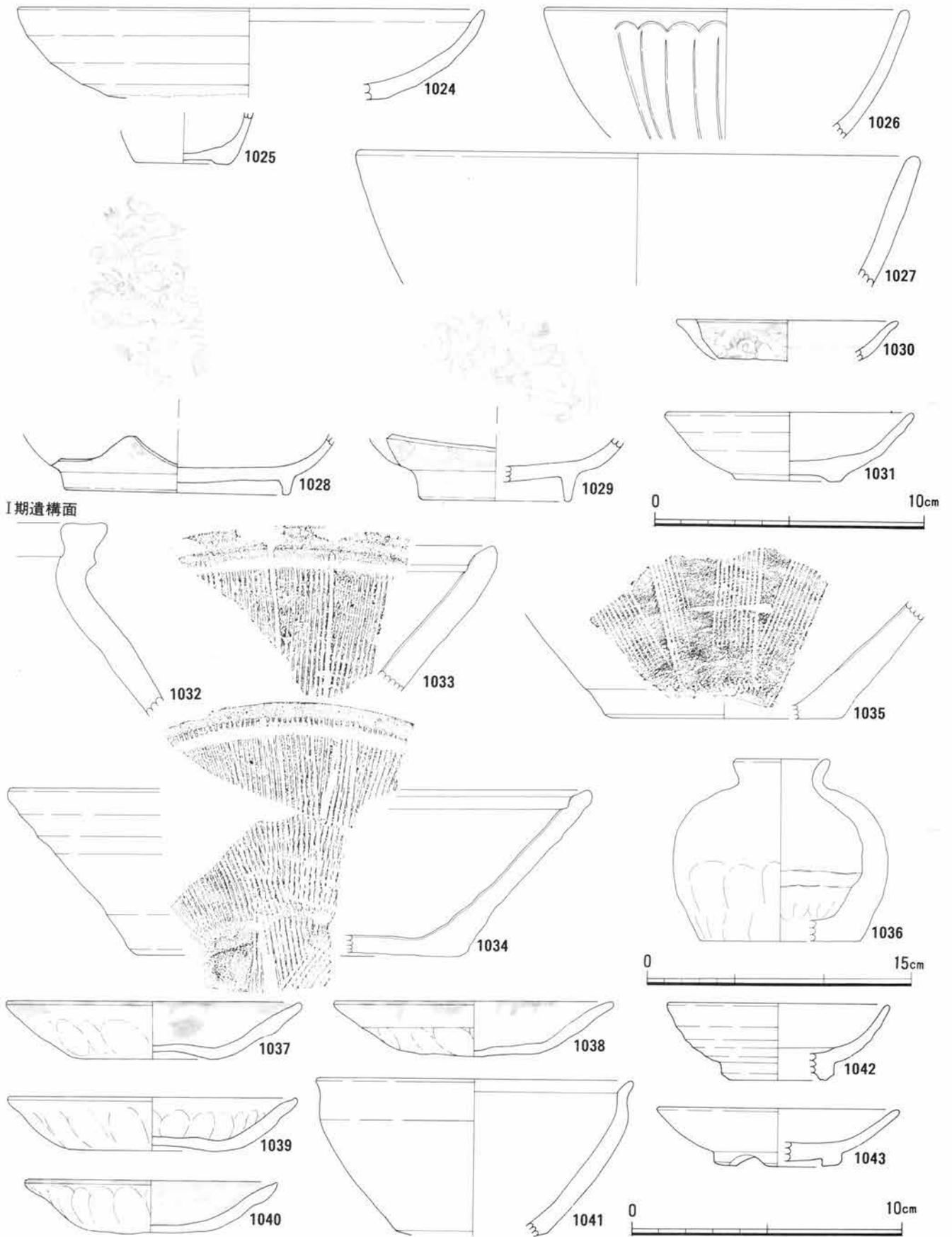


鉄釉皿1024 茶入1025 碗1041 青磁碗1026・1027 染付碗1028・1029 皿1030 朝鮮製皿1031 越前焼甕1032
 播鉢1033~1035 壺1036 土師質皿1037~1040 白磁皿1042・1043

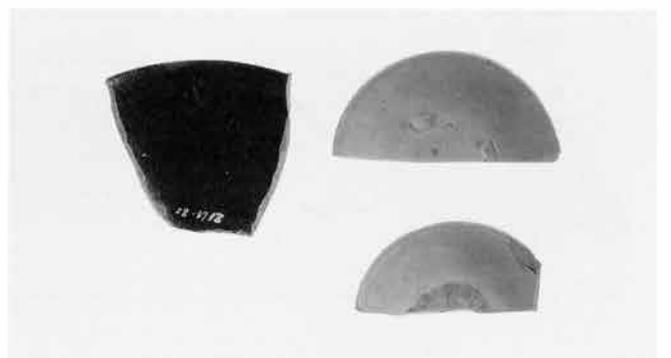
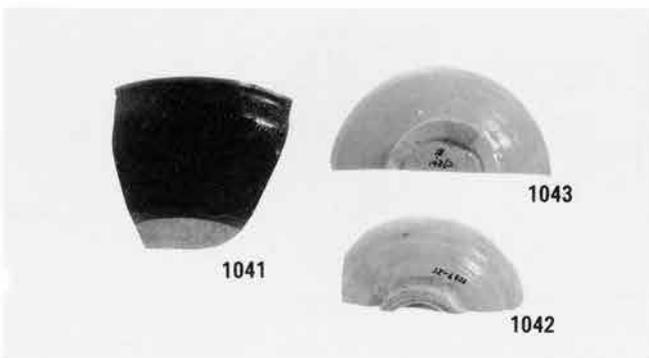
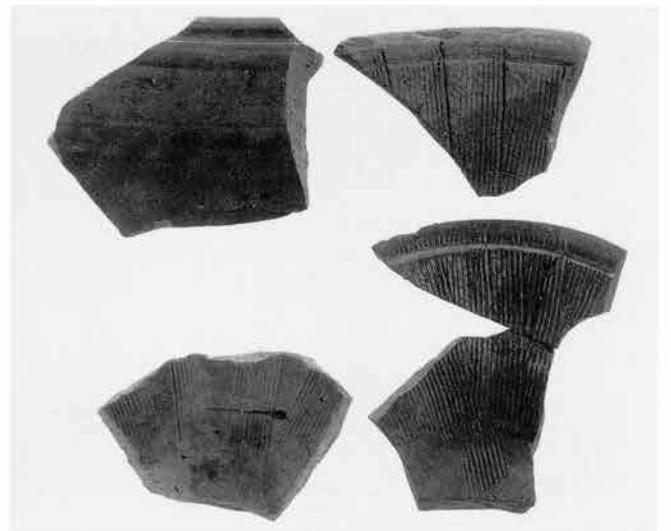
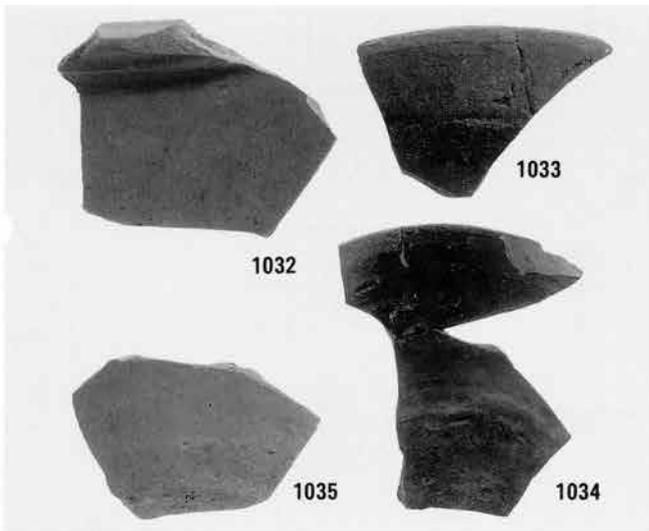
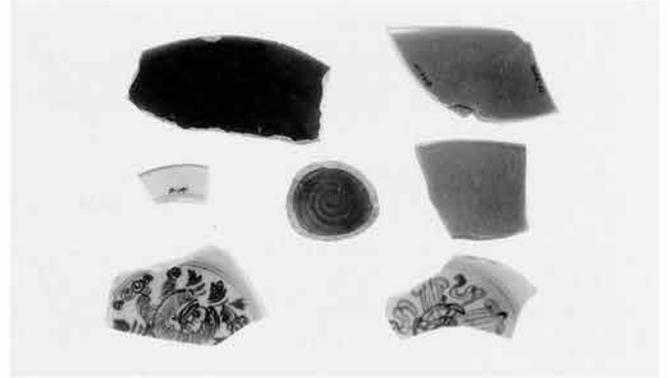


表土層 越前焼插鉢1000~1003 鉢1004・1005 土師質皿1006 羽釜1007 青磁碗1008・1009
 暗褐色土層 越前焼甕1010・1011 插鉢1013 鉢1014 壺1015 土師質皿1016・1018・1021 鉄釉碗1023

第55図 第58次調査出土遺物(2)

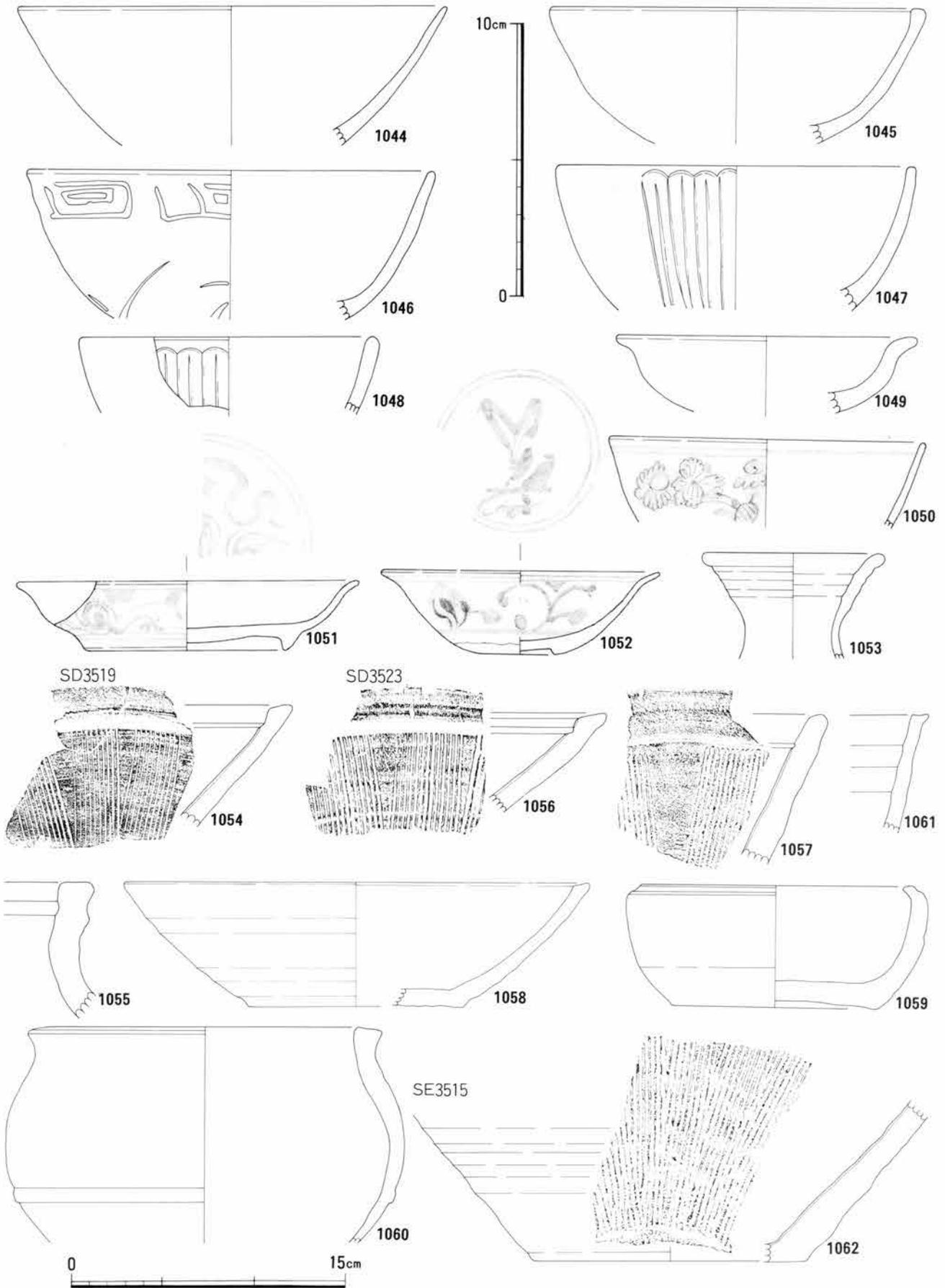


鉄釉皿1024 茶入1025 碗1041 青磁碗1026・1027 染付碗1028・1029 皿1030 朝鮮製皿1031 越前焼壺1032
 播鉢1033~1035 壺1036 土師質皿1037~1040 白磁皿1042・1043

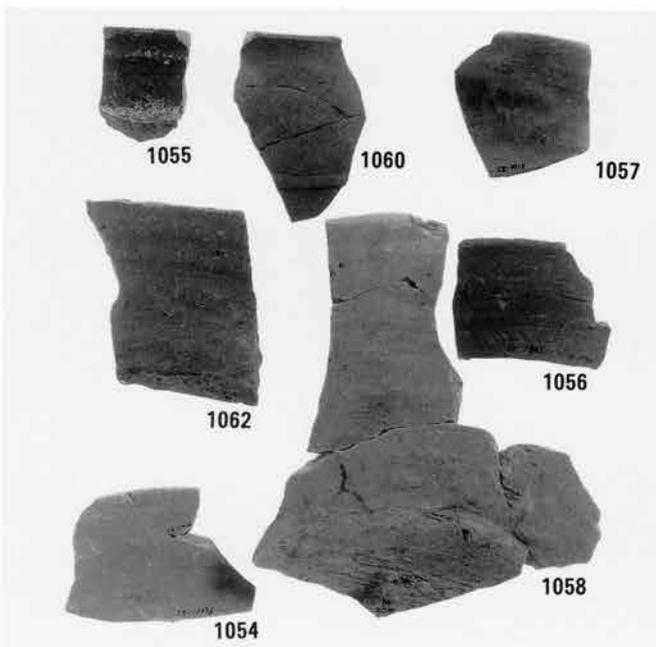
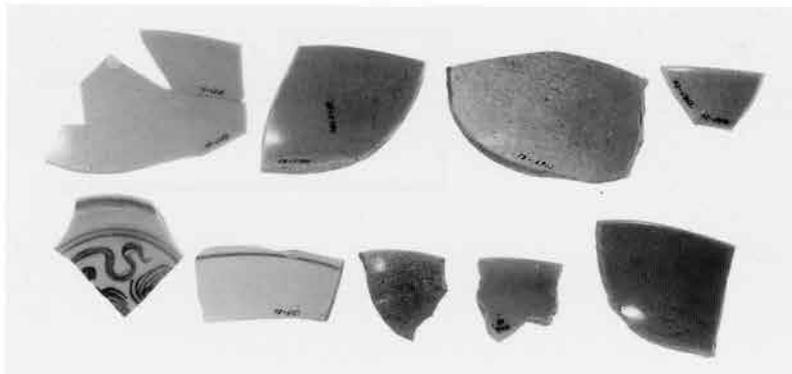
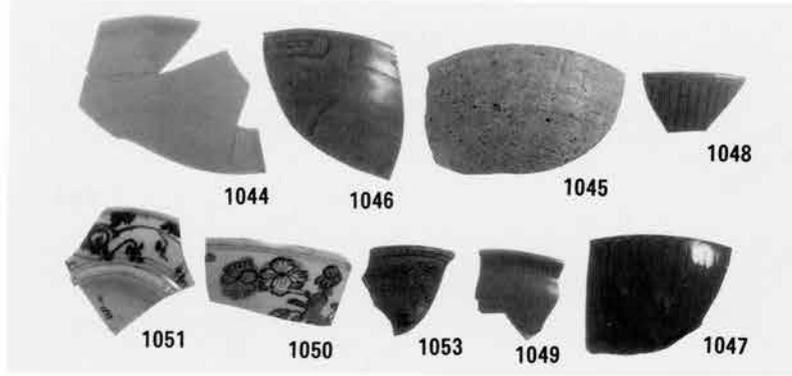


暗褐色土層 鉄釉皿1024 茶入1025 青磁碗1026・1027 染付皿1028・1030 碗1029 朝鮮製皿1031
 I期遺構面 越前焼甕1032 播鉢1033~1035 壺1036 土師質皿1037・1039・1040 鉄釉碗1041

第56図 第58次調査出土遺物(3)

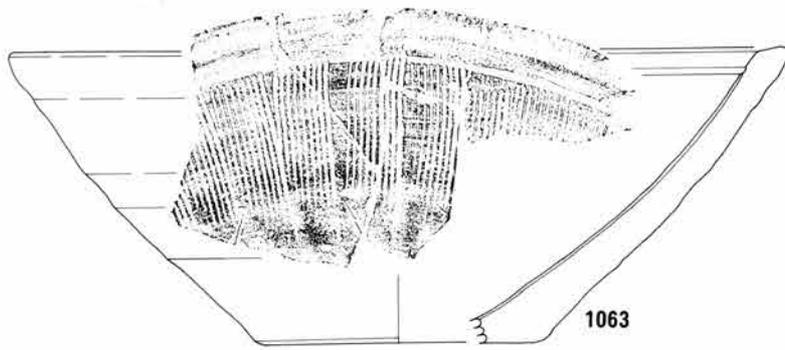


青磁碗1044~1048 III1049 染付碗1050 III1051・1052 朝鮮製壺1053 越前焼擂鉢1054・1056・1057・1062 壺1055
鉢1058~1060 桶1061

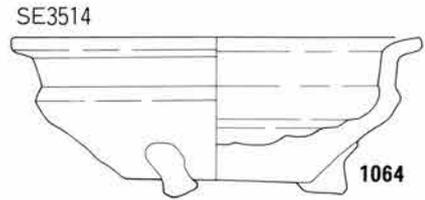


I 期遺構面 青磁碗1044~1048 III1049 染付碗1050
 III1051・1052 朝鮮製壺1053
 SD3523 越前焼壺1055 播鉢1056・1057・1062
 鉢1058・1059・1060
 SD3515 越前焼播鉢1062

第57図 第58次調査出土遺物(4)

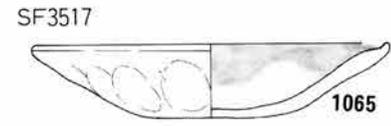


1063



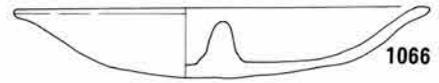
SE3514

1064



SF3517

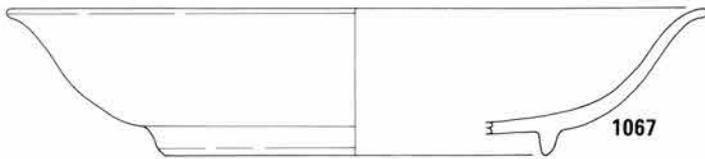
1065



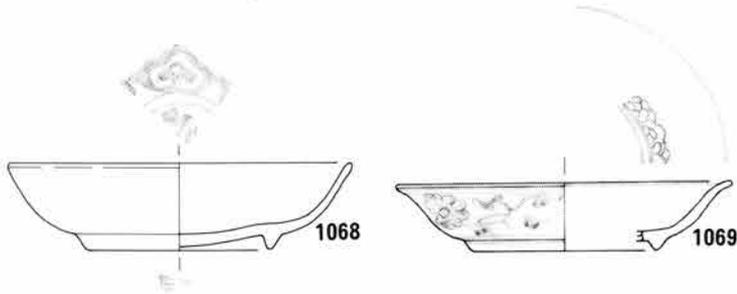
1066



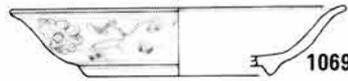
X16地区ピット



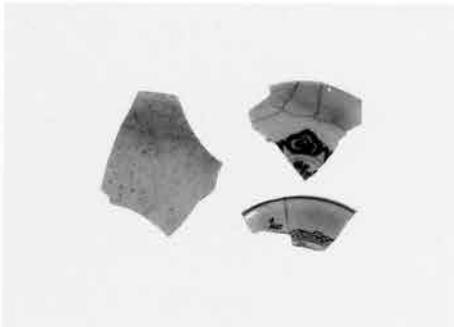
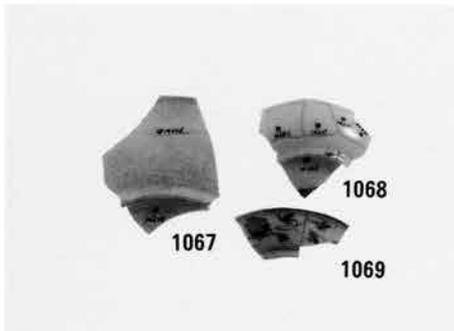
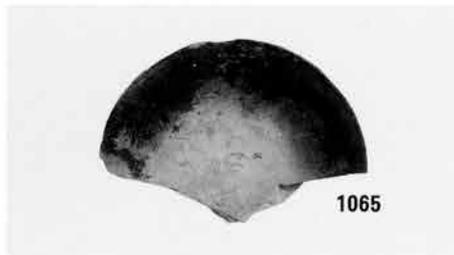
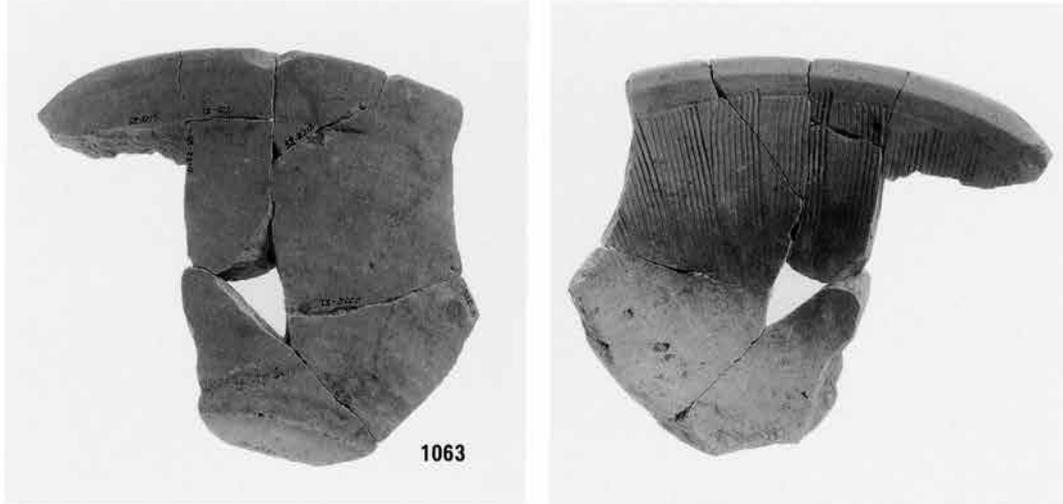
1067



1068



1069



SF3517 土師質Ⅲ1065 銅製燭台1066 X16区焼土ピット 白磁Ⅲ1067 染付Ⅲ1068・1069

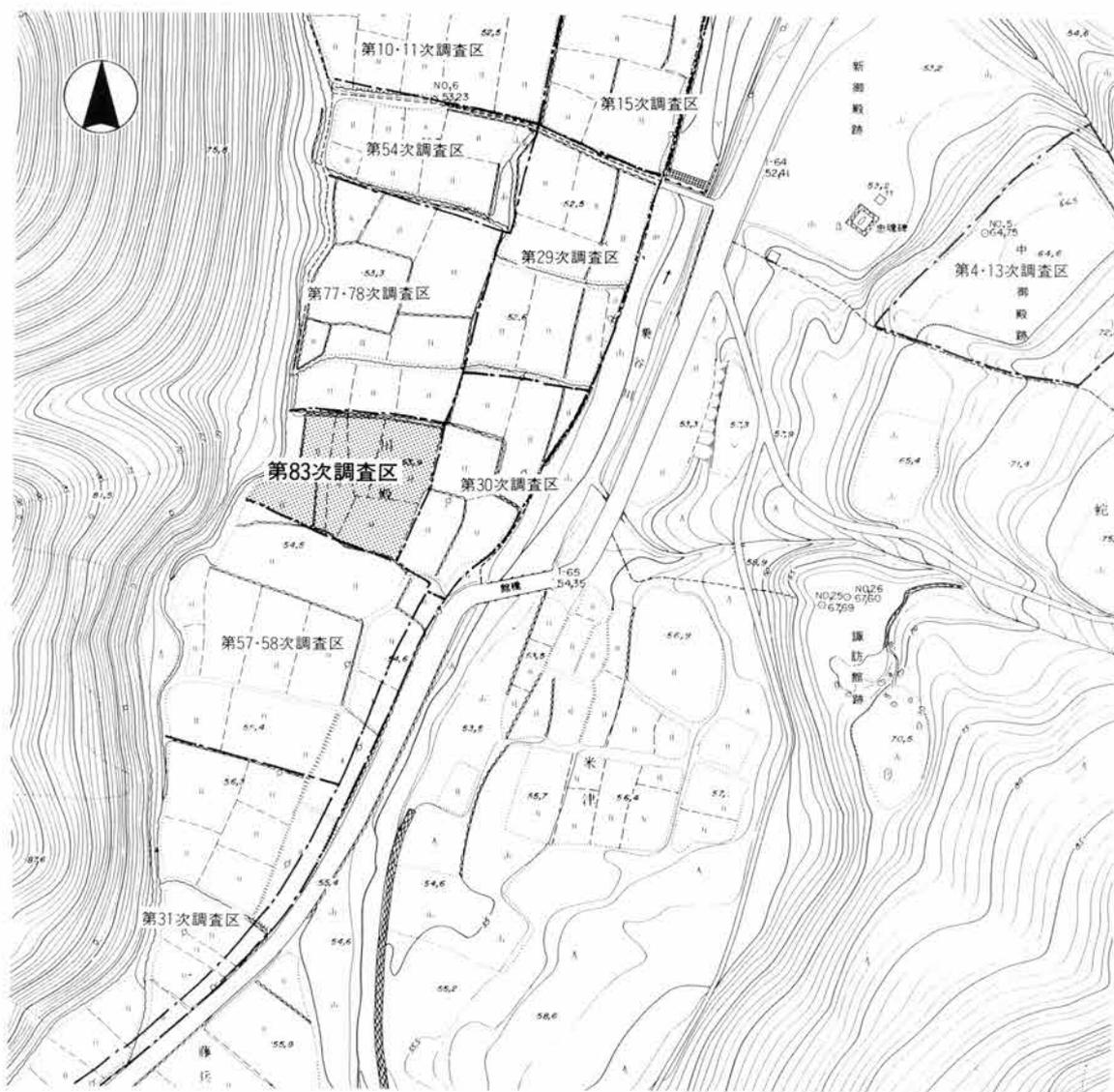
IV 第 83 次 調 査

IV 第83次調査

1. 調査の経過と概要

本調査の対象とした地区は、前項の第57・58次調査区と同様、特別史跡に指定された「城戸ノ内」の南寄りにあり、朝倉館や諏訪館のある地区とは、一乗谷川を挟んで西側の対岸にあたる。前項の第57・58次調査区の北隣に位置する。

一乗谷朝倉氏遺跡では「一乗谷古絵図」や字名等によって推測される重臣クラスの武家屋敷が連続している字「斎藤」地係から字「平井」地係にかけての一带について、史跡公園作りのひとつの拠点として又城下町の実態解明のために一連の発掘調査を実施してきている。即ち第10・11次を皮切りとして第15・24・25・29・30・54・57・58・77・78次の各調査である。これらの調査によって計画的な町造りの



挿図10 第83次調査区周辺地形図 (1/2000)

様子をうかがう良好な遺構を広範囲にわたって検出することができた（『報告書Ⅱ』1998、『報告書Ⅳ』1993、『報告書Ⅴ』1995）。

そうした成果に基づいて、骨格となる南北方向の道路を中心とした当時の町並を立体的に再現しようとする「町並立体復原事業」が計画され、平成3年にはこの事業がスタートした。こうした中で事業実施区域内にあって、未調査部を解消し総合的な活用をはかるために計画されたのが本調査である。

調査区は、福井市城戸ノ内町字川合殿地係、南北約36m、東西約38m、面積 1,300㎡として設定した。調査地周辺の地形をみると、谷の平地部は幅130mと最も狭い上城戸が設けられた地点から幅300mほどとなる中央部に向かって徐々に広がりを見せており、このあたりでは幅150mほどである。一乗谷川は平地部の東端近くを南からやや東に振りながら北へ流れている。東岸は山城近くに水源を発した沢によって発達した扇状地形が見られる。また、調査区的位置する西岸は100mほどの幅を持ち、西側のやや北寄りに小さな沢があって、土砂の押し出しがみられる。調査区は畦畔によって小規模な6区画の水田に分かれているが、基本的には山裾となる西が高い。海拔高は53.9～54.5mである。

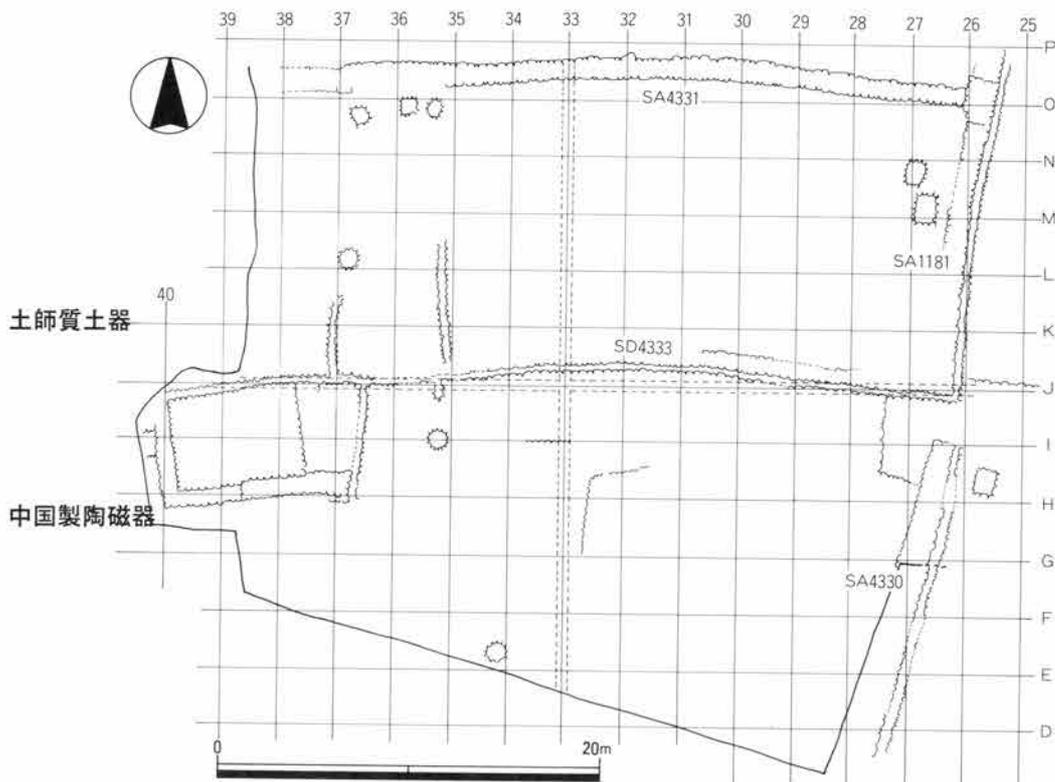
調査は、機械を用いて先行する調査の廃棄土を除去した後、第82次調査の終了を待って平成5年8月23日に開始し、ベルトコンベアーを用いて残された廃棄土と耕作土を除去することから始め、この作業に約1ヶ月を要した。引き続き東から順次遺構検出を進めた。大規模な建物跡や蔵と推定される建物跡等が良好に残されていることが判明した。11月7日に基本的な遺構検出作業を終え、11月11・12日には遺構の写真撮影を行った。そして同年11月17日に第82次調査区と併せて、遺構平面図作成のためのヘリコプターによる航空写真測量を実施した。引き続き若干の補足調査や土層図作成等の作業及び遺構保護のための埋め戻しを行い、12月25日に現場作業を終了した。

調査区全体の遺構の残存状況は良好で、正面となる南北方向の土塁の中ほどには東西方向の道路が引き込まれており、ここに屋敷内に入り込んで二つの門が設けられていたこと、その内部には大規模な建物（東西12.3m、南北13.2m）や蔵が配されていたこと等が判明し、大規模屋敷の構成を知る上で貴重な資料を得ることができた。

第83次調査日誌抄

中国製陶磁器 8月23日～11月17日

- | | |
|--|---|
| <p>8.23 調査開始。ベルトコンベアーを用いて耕作土及び先行する第77・78次調査廃土の除去作業。</p> <p>9.27 耕作土等の除去作業ほぼ終了。</p> <p>29 東の南北方向土塁から西へ向かって遺構検出作業開始。</p> <p>10. 1 床土下の焼土を除去し、小土塁 S A 433 2、建物 S B 4339・4340や北部で小砂利敷 S G 4366検出。</p> <p>5 建物 S B 4338の規模判明。井戸 S E 435 2検出。</p> <p>金属製品 溝 S D 4334、石積施設 S F 4350等検出。</p> <p>12 北境界の東西方向土塁 S A 4331の検出作業。</p> <p>13 西端で石敷 S X 4356を持つ建物 S B 434 1検出。</p> <p>18 建物 S B 4341の全体解明のため、休憩用テント、作業道具小屋等を移転し、越前焼 山裾の園路の一部も掘削することに決定。</p> | <p>20 建物 S B 4341の詳細が判明し、葺と推定される。また、越前焼大甕を埋めた遺構 S X 4358検出。</p> <p>21 建物 S B 4341の写真撮影。円形の石積施設 S F 4352検出。</p> <p>28 上層の遺構検出を終了し、下層の遺構検出に着手。</p> <p>11. 2 門 S I 4344・4345の詳細を確認する。また、この内側に通路と推定される砂利敷を検出。</p> <p>8～10 写真撮影のための清掃作業。</p> <p>11・12 写真撮影。</p> <p>17 遺構平面図作成のためのヘリコプターによる空中写真撮影実施。</p> <p>18 補足調査及び土層図作成。
上記作業終了後、遺構保護のための一部埋め戻し作業実施（12月25日まで）。</p> |
|--|---|



S D 4333出土遺物

挿図11 第83次調査区グリッド設定図

2. 遺 構 (第58～62図, PL.48～53)

ここで取り扱うのは、昭和53年に実施した第30次調査で一部を検出している南北方向の土塁の西に位置し、南は昭和62年実施の第58次調査区、北は平成4年実施の第78次調査区に挟まれた東西幅約37m、南北幅は東で約38m西で約28m、一部西山裾部に拡張部を持つ調査区で検出された遺構である。主な遺構としては土塁4、溝5、庭園1、門2、建物7、井戸2、石積施設6等があげられる。これらの遺構は検出面によって3期に分類できるが、そのレベル差はいずれも0.1m程度と少ない。上層遺構は大半が削平されたと考えられ、断片的である。これに対し、その下層の遺構は良好にのこされている。このため、保存を前提とするこの調査の性格上最下層に属する遺構は部分的な検出に止まる。これを下から順次Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ期とする。耕作土の下には一部に遺構は見られるものの全面に焼土が検出された。これがⅢ期の遺構を造るにあたっての整地と考えられ、Ⅱ期の遺構群は基本的にはこの焼土の下から検出されたものである。

なお、この記述で用いる方位は、谷の中ほどを流れる一乗谷川を基準とし、南から北へ向かうものとするおおよそのものであって、国土座標第Ⅵ系に従えば、屋敷正面となる北半の土塁東石垣ラインはN10°Eとなる。また遺構平面図等に記した数値は国土座標第Ⅵ系に基づく位置を示すものである。

SA1181 調査区の東端北半に位置する南北方向の土塁。本調査区とした屋敷の前面、中ほどに設けられた門から北の部分で、土塀の基礎部と考えられる。Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ期を通じて存在したと考えられる。外側となる東面の石垣は第30次調査で検出されており、下部の1～2石が高さ0.3mほど残されている。そして石垣に沿って溝SD1184が存在する。これに対し、内側は一部に石列が見られるのみである。こうした石列から幅は1.2mと考えられる。この土塁の南端から後述する屋敷の北境界となる東西方向土塁SA4331の内までの長さは約15mである。

SA4330 調査区の東端南半に位置する南北方向の土塁。本調査区とした屋敷の前面、中ほどに設けられた門から南の部分である。北の土塁SA1181同様土塀の基礎部で、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ期を通じて存在したと考えられる。外側となる東面の石垣は第30次調査で検出されていたが、今回の調査で東から延びてきた道路SS1180に開く門が屋敷内に入り込み、前面土塁は南北に分離されることとなった。その方向も内に約9°折れている。幅は1.2mと考えられるが東面の石垣は北の土塁SA1181ほど良好ではない。また東面には溝SD1185が存在する。

SA4331 調査区の北端に位置する東西方向の土塁。本調査区とした屋敷の北を限る遺構で、土塀の基礎部と考えられる。Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ期を通じて存在したと考えられる。前面北半土塁SA1181とはほぼ90°でつながる。15m西で約9°内に折れ、西へ延びる。幅は1mほど。南北両面とも下部の1～2石が高さ0.3mほど残されているが、その基底面は若干北が低い。屋敷内側である南面の石垣の基底面は、Ⅱ期の整地面から約0.15m下である。なお、当時の整地面は山裾の西から東へ1/100ほどの勾配を持つため、西の山裾付近では石垣は失われている。

SA4332 調査区中央東半で検出された東西方向の土塁。基本的にはⅡ期の遺構であるが、Ⅲ期にも存在した可能性が残されている。後述する門SI4345と建物SB4338の間9m程に設けられている。南には溝SD4333が存在し、この土塁南面は溝側石を兼ねる。残存する石は1段で、幅は約1m。屋敷内の

目隠しを兼ねた仕切り土塀の基礎部と考えられる。

SA4362 調査区南半西寄りで検出された南北に並ぶピット列。Ⅱ期の遺構と考えられる。ピットの径は0.5m、深さは0.15m程度であって、9mにわたって7個検出されており、その間隔は一定しないが1m程度が基本である。掘立柱の掘り方と考えられ、目隠しの塀と推定される。

SS4381 調査区中ほどで検出された東西方向の通路。焼土で覆われており、基本的にはⅡ期の遺構と考えられる。屋敷の中央に存在する東西方向の溝SD4333の南にあり、門の内側から20mほどにわたり砂利敷面がみられる。南辺を明確に示す遺構はないが、幅は2～3mと考えられる。

SD4333 調査区を南北に二分してほぼ中央を西から東へ流れる東西方向の溝。南の通路SS4381同様焼土で覆われており、基本的にはⅡ期の遺構と考えられる。調査区の西端から前面土塁SA1181の東面に沿う溝SD1184までの41mを検出した。土塁SA4332の西端、東端から13mほどの所で約7°南に折れる。内法幅は0.2m、深さは0.15mほどである。西部を除く中央部及び東部の側石は径0.3～0.5mと比較的大振りな石を用いている。

SD4334 調査区北半西寄りで検出された南北方向の溝。基本的にはⅡ期の遺構と考えられる。検出長は6m、内法幅0.25m、深さ0.1mほど。東の建物SB4338の雨落ち溝と考えられる。

SD4335 調査区北半西端近くで検出された南北方向の溝。基本的にはⅡ期の遺構と考えられる。検出長は6m、内法幅0.2m、深さ0.1mほど。南端で東西方向の溝SD4333とつながる。北に存在する井戸SE4347に伴う排水のための溝と考えられる。

SD4336 調査区南半西寄りで検出された南北方向の溝。基本的にはⅡ期の遺構と考えられる。検出長は6m、内法幅0.25m、深さ0.1mほど。北端で東西方向の溝SD4333とつながる。この溝との合流部を除き西側の側石を欠く。

SD4337 調査区南半やや西寄りで検出された南北方向の溝。基本的にはⅡ期の遺構と考えられる。検出長は1mで短く、内法幅0.3m、深さ0.1mほど。北端で東西方向の溝SD4333とつながる。南に存在する井戸SE4346に伴う排水のための溝と考えられる。

SI4344・4345、SB4342・4343 調査区東端中ほどで検出された門とその建物。いずれも基本的には改造されながらⅠ・Ⅱ・Ⅲ期を通じて存在したと考えられる。東から延びてきた道路SS1180が南北二つに分けられた屋敷の前面土塁(SA1181・4330、間隔は2.4m)の内に約3m引き込まれ、この小さな場を囲むように北と西に2つ門が設けられている。北に南面して設けられているのが門SI4345とその建物SB4343、西に東面して設けられているのが門SI4344とその建物SB4342である。北の門SI4345は、正面向かって右手(東)には土塁SA1181の端部が、左手(西)には土塁SA4332が存在し、正面の東西袖石から間口は2.4m(8尺)であることが判明する。また踏石として笏谷石製の板石(1枚は1.5m×0.3m)を敷く。この面は門前小広場から0.1m高い。この板石の周囲に焼土面が見られることからⅡ期においては板石が存在しなかった可能性が強い。また溝にはなんらかの踏板が架けられていたものと思われる。門建物SB4343はこの溝から0.9m内に設けられている。東の支柱を受けたと考えられる礎石と蹴放し下の狭間石が残されている。この礎石は径0.5mほどのしっかりしたものである。また狭間石は径0.2m程の石で1.2mほどが残存する。他には礎石等は残されていないためこの建物の詳細は明らかでないが、控え柱を持たない間口7尺程度の棟門ではなかろうか。西の門SI4344は、道路と中心を南にずらして相対し、門前小広場から0.1m高い。残存する門正面の蹴上石及び後述する門建物から、間口は7尺と推定される。また、この門の南端から東へ延びる石列の一部SX4383が見られ、この小広

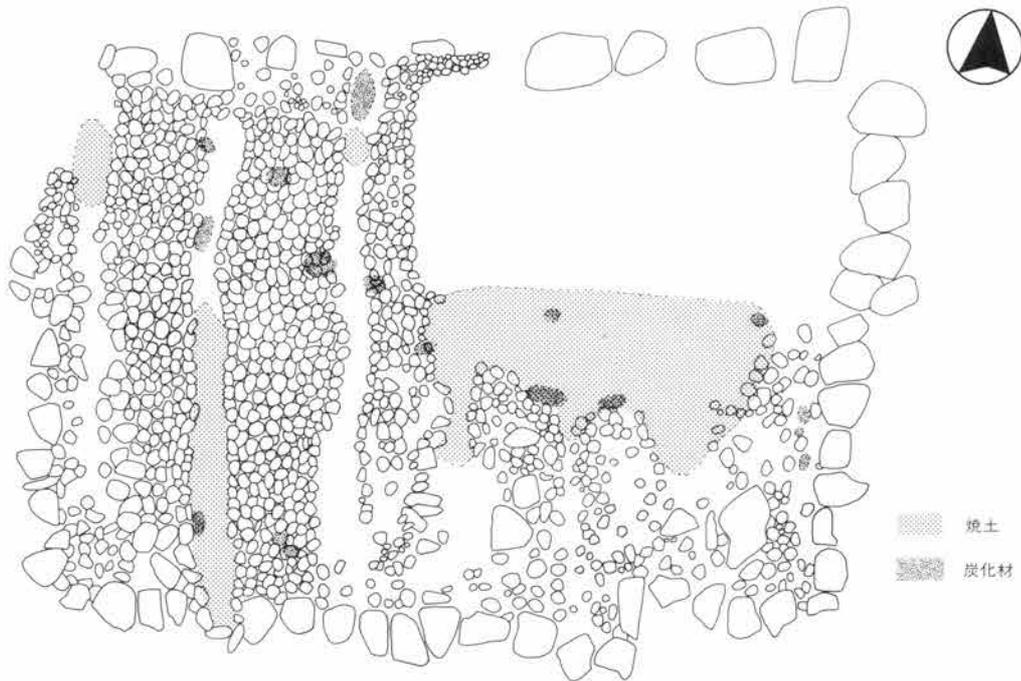
場の南にも東の前面土塁 S A 4330 との間をふさぐ土塁があったものと推定される。門建物 S B 4342 は正面の蹴上石前面から 0.7m ほど内に設けられている。約 2 m の間隔で南北二つの礎石が残されている。径は 0.4m 程度で北の門建物 S B 4343 に比べて間口、用いる礎石ともにやや小振りである。控え柱を持たない間口 6.5 尺程度の棟門と推定される。

S B 4338 調査区北半中央部で検出された礎石建物。礎石の多くは焼土で覆われており、基本的にはⅡ期の遺構と考えられる。東西 12.2m、南北 13.2m と大規模なものである。ほぼ礎石は残されているものと考えられる。この礎石配列から想定される建物平面を見てみよう。まずその間隔から基本となる柱間寸法は 1 間 6.2 尺 (1.88m) と考えられる。次に目に付くのが南北の中ほどの東西に通る礎石列である。この礎石列によって建物は 4 間と 3 間に大きく南北に 2 分されると考えられる。そして、中ほどの 1.5 尺と狭い間隔の南北の礎石列が見られる所でさらに東西に 2 分されるものと考えられる。また、この北半の部分は東西端の間がそれぞれ 3.5 尺、4 尺幅と変則で、これは入側の広縁と考えられよう。建物の東面北に後述する平庭 S G 4366 が存在しており、この東側は屋敷の正面側であることを考慮すれば、東半の東西 2 間×南北 3.5 間の部屋が主座敷と考えられ、西の 1.5 尺間は押板部、また建物の中央東半の幅 0.5 間は西半部への連絡部と考えられる。とすれば西半は屋敷の主人の常の間となろう。これに対し南半は、中ほど東半の幅 1 間を除き大きく区分する礎石配置は見られない。そして南辺やや西寄りに囲炉裏跡と考えられる東西 1.5m×南北 1 m の遺構 S X 4373 が、この西にも石の並ぶ遺構 S X 4374 が存在している。こうしたことからこの南半は台所的な場であった可能性が強いものと考えられる。こうした想定が許されるならば、中ほど東半の幅 1 間は広い内縁となり、ここを除いて土間ないし転ばし根太等を用いた低い床が基本と考えられる。また、南辺西端近くに入出口も想定される。

S B 4339 調査区北半東寄りで検出された礎石建物。西の大規模な建物 S B 4338 と方位をそろえており、基本的にはⅡ期の遺構と考えられる。礎石とその抜取り跡から構成され、東の建物 S B 4340 とをつなぐ廊状の建物、あるいは西の大規模な建物 S B 4338 の突出部であったことも考えられる。

S B 4340 調査区北東部で検出された礎石建物。基本的にはⅡ期の遺構と考えられるが、西の大規模な建物 S B 4338 と方位が異なり、北の境界土塁 S A 4331 の東部と平行している。礎石は断片的で詳細は明らかでない。

S B 4341 (S X 4356・S V 4354)、S V 4355・S X 4357 調査区西端南寄りで検出し、拡張トレンチにより全体像が判明した建物とこれに伴う遺構。Ⅱ期に造られ、改修を経てⅢ期にも存在したと考えられる。全体が厚い焼土で覆われ極めて良好に遺構が残されていた。屋敷を南北に分ける中央の東西方向溝 S D 4333 の西端、南に位置する。中心となる建物が S B 4341、この建物内に存在する石敷遺構が S X 4356、周囲を取り巻く一回り大きい基壇部が S V 4355、さらに外側、西と南に存在する石列が S V 4354、建物への通路状の石敷遺構が S X 4357 である。建物 S B 4341 は東西 5.7m、南北 3.8m の規模である。基準となる柱間寸法は 1 間が 1.91m (6.3 尺) 程度とする 3 間×2 間と考えられ、ほぼ半間毎に柱が配置されている。南面中ほどやや東寄りに踏石と推定される大振りな石が据えられていることからここに出入り口が設けられていたものと考えられる。この内部は当初、中央部を除く周囲に石敷遺構 S X 4356 が存在した。後に小礫が敷かれ、ここには南北方向に 0.6~0.7m の間隔をもって幅 0.15m ほどの小礫を欠く部分が見られたことから、転ばし根太を置き、その間に小礫を入れ、床を張る入念な構造が想定される。こうした構造からこの建物の機能として蔵が想定される。また建物礎石の外側、基壇部 S V 4355 との間に石を木端立て、外に面を持って並べた石列が存在する。これは想定される柱中心から 0.3m の間隔であ



挿図12 礎石建物(蔵)SB4341平面図 (1/50)

り、土壁の裾を受けるものと考えられ、この建物は厚さ0.3m(1尺)の土壁を塗った土蔵であると考えられる。なお周囲から炭化した茅材がかなり検出されており、屋根は茅葺と推定される。想定される柱中心から基壇部S V 4355までの間隔は0.5mほど、礎石との高低差は0.05mである。西と南に存在する石列S X 4354と基壇部S V 4355の間隔は0.8m、高低差は0.05mである。なお、ここには後に緩やかな傾斜を持つ亀腹状の叩きが施されている。この石列S X 4354の南部東半に設けられたのが通路状石敷遺構S X 4357で、前述した踏石から東へ約5.6m、幅0.8mほどにわたって見られる。この石敷と踏石の高低差は0.05mである。

SG 4366 調査区中ほど北端近くで検出された小規模の平庭。Ⅱ期の遺構と考えられる。屋敷中心建物S B 4338の東に位置し、1.2×0.8mと少し大きな石を据えその西を中心に周囲約3m四方に5mm程度の粗い白砂が敷かれている。また、北西に蹲踞跡の可能性も考えられる石の集まりや、東には仕切り塀の柱跡と考えられる南北に並ぶ二つのピットS X 4371が見られる。ピットは径0.2m、間隔1.2mである。

SE 4346・4347 調査区西寄り検出された井戸。東西方向通路S S 4381の西に位置するのがS E 4346、この北、建物S B 4338の西に位置するのがS E 4347。ともにⅡ期の遺構と考えられる。径は0.8mほどで石を積み上げる構造である。完掘していないため深さは不明である。

SF 4348 調査区東北部、土塁S A 1181の脇で検出された方形の石積施設。Ⅲ期の遺構と考えられる。東西1.0m、南北1.3m、深さ0.45mの規模で、一部天端石を欠くが2～3段に石を積み上げている。

SF 4349 調査区東北部、土塁S A 1181の脇で検出された石積施設。Ⅰ期の遺構と考えられる。東北に突出部を有する径0.8m程度の円形と考えられ、2～3段に石を積み上げており、深さは0.3m。S F 4348と隣接する。

SF 4350・4379 調査区北西、土塁S A 4331の脇、建物S B 4338に隣接して検出された方形と円形の石積施設。ともに基本的にはⅡ期の遺構と考えられるが、Ⅲ期の可能性も残されている。方形のS F 4350は東西、南北ともに0.7m、深さ0.25m、2～3段に石を積み上げる。円形のS F 4379は径0.75m、深さは1mほどで若干深い。建物S B 4338に付属する便所ではなかろうか。

S F 4351 調査区北西、土塁S A 4331の脇で検出された方形の石積施設。Ⅱ期もしくはⅢ期の遺構と考えられる。一部天端石を欠き、また若干いびつではあるが東西、南北ともに0.8m、深さ0.35mの規模である。

S F 4352 調査区南端中ほどで検出された円形の石積施設。Ⅱ期の遺構と考えられる。径は1m、深さ0.5mほどである。2～3段に石を積み上げる。

S F 4353 西に拡張したトレンチ部で一部が検出された方形の石積遺構。Ⅱ期の遺構と考えられる。前述した土蔵と推定される建物S B 4341の外側の石列S V 4354の西に接する。南北は1.2m。全容は明らかでない。

S X 4358 調査区中ほど南寄り検出された越前焼大甕を据え付けた遺構。Ⅲ期の遺構と考えられる。焼土がつまる4個のピットが検出され、北西のピットには越前焼大甕の下部が残されていたが、他はピットのみである。なお、南の2個のピットは若干小振りである。

S X 4359 調査区中ほどで検出された天端をそろえて石を並べる遺構。Ⅱ期の遺構と考えられる。建物の一部の可能性が考えられる。

S X 4360 調査区中ほどで検出された天端をそろえて鍵形に石を並べる遺構。Ⅲ期の遺構と考えられる。南北方向の石列部は東に面を持ち、西に1.9mほどの間隔で礎石と考えられる石が存在する。方位は門とその建物S I 4344・S B 4342と一致する。建物とその周囲の基壇の一部と考えられる。東西方向の石列部は南に面を持つように見受けられる。

S X 4361 調査区西半南寄り検出された石の並び。Ⅱ期の遺構と考えられるが、性格等は明らかでない。

S X 4363～4365、4367・4368 いずれも調査区南半西で検出されたピット群。Ⅱ期の遺構と考えられるが、性格等は明確でない。

S X 4370 調査区東端中ほどの門S I 4344の南に接して検出された南北の石の並び。西に面を持つ。門に関連する遺構と考えられるが、詳細は不明。

S X 4375 調査区中ほど北寄り検出された東西に並ぶ石。建物S B 4338の上層に位置し、Ⅲ期の遺構と考えられる。礎石の一部と考えられる。方位は建物S B 4340と同じと考えられる。

S X 4376 調査区北半西寄り検出された南北に石を敷き並べた遺構。Ⅱ期の遺構と考えられる。建物S B 4338に関連するものと考えられる。

S X 4377 調査区北半西寄り検出された石群。Ⅲ期の遺構と考えられるが、詳細は不明。

3. 遺物 (第63～67図, PL.54～58)

ここで取り扱う遺物は、第83次調査区より出土した遺物群である。総点数は7,059点であり、調査面積約1,300㎡に対する1㎡あたりの平均出土点数は5.4点となる。これは本遺跡における出土傾向のうち最低に近い密度に属する。遺構は3期に分類されるが、レベル差はわずかで断片的であり、また遺物の点数自体も多くないことから、遺構内出土遺物を除いては表土層と遺構確認面の2区分で図示する。出土遺物の内訳については表5を参照していただきたい。

本稿における遺物についての分類は、越前焼大甕・播鉢は『県道鯖江・美山線改良工事に伴う発掘調査報告』1983、土師質皿は『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告Ⅰ』1979、染付は小野正敏「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究2』1982日本貿易陶磁研究会によった。

表土・床土層出土遺物 (第63図, PL.54)

耕作土および床土の除去作業中に出土した遺物には、越前焼・土師質土器・瀬戸美濃焼・瓦質土器・中国製陶磁器等が認められた。

越前焼 (1100)の壺は口径12.4cmを測る。(1101)の壺は口径10.8cmを測る。(1102)の壺は口径11.6cmを測る。(1103)は口縁が三角形に肥大した壺で、胎土は白っぽく粗い。口径14.2cmを測る。(1104)は口縁が

器種				器種				器種					
		破片数	%			破片数	%			破片数	%		
日本製陶器	越前焼	甕	1,375	30.3	中国製陶磁器	青磁	碗	90	金	銅銭	24		
		壺	424				皿	72			銅製品	3	
		鉢	114				鉢	13			飾り金具	1	
		播鉢	222				盤	15			釘	69	
		その他	1				香炉	15			小柄	1	
	計	2,136	その他	4		鉄鍋	1						
	鉄釉	碗	57	1.4		白磁	皿	540		石製品	バンドコ	74	
		茶入	5				坏	10				火打ち石	8
		卸皿	1				その他	11				白	6
	壺	33	計	561		砥石	9						
その他	4	計	7.9	硯	7								
計	100	計	3.1	染付	碗	65	碁石	19					
灰釉	碗	7	皿		150	坏	6	盤	14				
	皿	30	その他		1	計	222	その他	17				
	鉢	35	計	992	計	14.0	計	154					
壺	3	1.1	朝鮮製陶磁器	碗	13	木製品	加工木	4					
その他	3				皿			3	計	4			
計	78				鉢		3	その他	壁土	17			
土師質	皿	3,301	その他	13	骨		6						
	羽釜	8	計	32	その他		2						
	その他	1	計	0.4	計								
計	3,301	46.9	輸入陶磁器計		1,024		14.5	合計		7,059	100		
瓦質	火鉢	2	0.5										
	瓦燈	1											
	風炉	9											
	香炉	3											
その他	18												
計	33												
その他	信楽	49	0.8										
	須恵器	2											
	不明	6											
計	57												
小計	5,714	80.9											

表5 第83次調査出土遺物一覧表

内傾する鉢である。(1105)の鉢は口径37.4cmを測り、体部内面上部に8条を1単位とする扇形の櫛目を有する。(1106～1110)はIV群に属する挿鉢である。(1106)の挿鉢は挿目が沈線の上から密に入っている。(1108)の挿鉢は口径24.2cmで、挿目は摩耗が激しい。(1109)の挿鉢は口径22.5cm、8条を1単位とする挿目を有する。(1111)は桶の口縁部である。口径17.5cmで、内面に指頭圧痕を残し、外面はナデ調整する。(1112)は桶の底部で底径10.6cmで、外面はナデ調整されている。

土師質土器 (1113・1114)はC類に属する。(1113)は口径5.8cm、器高1.4cmを測る。底部は丸く、口縁部はナデによる摘み上げがされている。(1114)は口径8.7cm、器高2.2cmを測る。

瀬戸・美濃焼 (1115)は灰釉の壺である。口径10.2cmを測り、釉が内面にもかかる。(1116)は厚く釉のかけられた灰釉の皿である。

中国製陶磁器 (1117～1119)は青磁である。(1117)は口径9.4cmの碗で、体部外面に鎬蓮弁文を有する。(1118)は口径11.0cmで、口縁が波形になった輪花皿である。(1119)は口径9.2cmの香炉で、口縁部と体部中央に2本の沈線がめぐる。(1120～1122)は白磁の皿である。(1120)は口径14.7cmを測る端反りタイプである。(1121)も端反りタイプで口径14.6cmを測る。(1122)は口径16.0cm、器高3.7cmを測る。端反りタイプで、豊付は釉を削り露胎となっている。

遺構確認面出土遺物 (第64・65図, PL.55・56)

遺構確認面出土遺物は表土除去後の遺構確認作業中に出土した遺物である。金属・石製品・木製品は数が少なく、また小破片であるため図示できるものが少なかった。

越前焼 (1123)はIV群bに属する大甕の破片である。(1124)の甕は口縁部の断面が三角で頸部がほとんどない。内面は粘土帯の継ぎ目がよく残っている。(1125)の甕は口径20.8cm、最大径32.2cmを測る。体部は斜上方に伸び肩部で内湾し頸部から外上方に短く立ち上がる。肩部内面に指頭圧痕が残り、外面はナデ調整する。また肩に貼付突帯がつく。(1126)は、口径16.8cmを測る壺で、肩にヘラ記号Tを持つ。壺(1127)は器高21.0cmで、口径4.8cm、最大径17.5cmと徳利の形をしている。体部下半にヘラ記号がある。(1128)の壺は口径13.2cmを測る。(1129)の壺は口径14.4cmを測る。(1130)の壺は口径9.0cmを測る。(1131)は口径25.5cm、器高11.5cmを測る片口の鉢である。鉢(1132)は口径31.6cm、器高7.0cmを測る。(1133)は体部は斜上方に伸び肩部で屈曲する鉢である。口径35.8cmを測る。(1134)の鉢は口径31.4cmを測り、体部内面上部には7条を1単位とする半同心円文を有する。(1135)の鉢は口径44.0cmを測る。(1136)は口径24.6cm、器高3.9cmを測る卸皿である。挿鉢(1137)はⅢ群aに属し、口径32.4cm、12条を1単位とする挿目を有する。(1138)の挿鉢はIV群に属し、口径21.4cm、10条を1単位とする挿目を有する。(1139)の挿鉢は底径13.6cm、8条1単位の挿目を有する。

土師質土器 皿および羽釜が認められるが、羽釜は小破片のため図示されていない。(1140～1145)はC類の皿である。(1140)は口径6.2cm、器高1.9cmを測る。底部は丸く、口縁部はナデ調整されている。(1141)は口径6.6cm、器高1.4cmを測る。(1142)は口径7.6cm、器高1.8cmを測る。(1143)は口径8.4cm、器高1.6cmを測る。器壁は薄く、底部は広く成形され、口縁部は摘み上げながらナデ調整している。(1144)は口径8.7cm、器高1.9cmを測る。胎土は白く細かい。(1145)はD類であり、口径11.8cm、器高2.0cmを測る。底部は広く平坦に成形されている。口縁部にタールが付着している。

瓦質土器 (1146)は口径12.0cmを測る香炉である。体部上方にS字を描く波状文がめぐる。

瀬戸・美濃焼 (1147～1150)は鉄釉の碗である。(1147)は口径12.5cm、器高6.5cmを測り、高台内のヘラグリが丸く、口縁部は外反する。(1148)は口径13.4cm、器高7.2cmを測り、ヘラグリは平らで、口縁部

の外反は弱い。(1149)と(1150)は高台内のヘラグリが平らである。(1151)は鉄釉の小壺で、内部全体と外面下半までに釉がかかる。外面の体部下半から底部はシブ鉄が施されている。(1152)は灰釉の皿で、口径9.2cm、器高2.3cmを測る。断面三角形の付高台を有し、内面底部には印花文が押印されている。

中国製陶磁器 (1153)は青磁の碗で、口径12.0cm、器高6.3cmを測る。体部外面には鎬蓮弁文を有し、畳付は釉を削りとり露胎となっている。(1154・1155)は青磁の輪花皿で、口縁はゆるく内湾し、高台は内傾して、畳付の釉を削ってある。(1154)は口径9.4cm、器高2.6cmを測る。(1155)は口径11.8cm、器高3.2cmである。(1156)は青磁の香炉で、口径9.0cm、器高6.5cmを測り、2条の沈線が口縁と体部中央と腰にめぐり、3足貼りつけられている。(1157)は白磁の碗で、口径11.8cm、器高5.9cmを測り、畳付は釉が削られ砂高台になっている。(1158)は口縁が端反りタイプの白磁の皿で、口径10.9cm、器高2.5cmを測る。(1159～1161)は染付である。(1159)はE群に分類される饅頭心の碗である。見込には折菊が描かれ、高台内には「大□年造」の銘がある。畳付は釉を削りとっている。(1160)はB群の皿である。口径13.8cm、器高3.1cmを測る。文様は外面に牡丹唐草、見込に花が描かれている。(1161)は見込に玉取獅子を描く。

金属製品 (1164)は小柄で、銅製である。なかごが残存しているが腐食が激しい。小柄は残存長9.6cm、幅1.4cmを測る。(1165)は口径4.6cmを測る銅製の蓋である。身とのセット関係は不明である。銅銭は24枚出土したが腐食が激しく、種別が不明のものが多かった。熙寧元宝1枚、紹聖元宝1枚、元祐通宝1枚を確認できた。

S X 4358 出土遺物 (第66図, PL.57)

越前焼 S X 4358には越前焼甕が4基埋められていたが、北側2基のうち1基は底部が残っていた。付近には埋設されていたと思われる大甕の破片が散乱していた。(1166)は埋められていた甕でIV群bに属し、口径85.7cm、器高92.0cm、最大径95.0cmを測る。容量は首部までで376.2769ℓ、口縁部までで396.0978ℓを量ることから2石用の甕であったと想定される(荻野繁春氏の計測、教示による)。内面には工具の圧痕が残り、(1167)と(1168)は同じくIV群bに属し、(1167)は口径72.4cmを測る。(1168)は口径32.3cmを測る甕で、肩部に本のヘラ記号を持ち、三角に肥大した口縁に工具で押さえた痕が放射線状にめぐり、(1170)は口径27.0cmを測る甕である。口縁は三角に肥大し内面には指頭圧痕が残る。(1171)と(1172)はIV群に属する挿鉢で、ともに口縁は内傾する。(1171)は口径40.6cmで、9条1単位の挿目が密に引かれる。(1172)は口径45.0cmで、9条1単位の挿目を持つ。

土師質土器 (1173～1175)は土師質皿である。(1173)はC類に分類され、口径8.6cm、器高2.1cmを測る。器壁は厚く、口縁部をナデ調整したあと外面を指で押さえて成形している。(1174)はD類に分類され、口径10.8cm、器高1.8cmを測る。同じく(1175)はD類で、口径11.2cm、器高2.0cmを測る。器壁は薄く、内面はタール痕が付着する。

中国製陶磁器 (1176～1178)は白磁の皿である。(1176)は口径12.0cm、器高2.6cmを測る。口縁は端反りタイプで、畳付は釉を削り露胎となっている。(1177)は口径14.4cm、器高3.4cmで、端反りタイプで畳付は露胎となっている。(1178)は口縁部が内湾するタイプで、口径12.0cm、器高2.6cmを測る。畳付は露胎となっている。(1179)は白磁の坏である。内面底部外周と畳付は釉が削りとられ露胎となっている。(1180)はB群の染付皿で、口径12.0cm、器高2.5cmを測る。文様は外面に牡丹唐草、内面には玉取獅子が描かれる。端反りタイプで、畳付は露胎となっている。

S D 4333 出土遺物 (第67図, PL.58)

調査区のほぼ中央を西から東に走る溝S D4333の中から出土した遺物について述べる。

越前焼 (1181)は口径34.0cm、器高7.0cmを測る鉢である。体部内面上部には10条を1単位とする半同心円文を有する。(1182)はIV群に属する播鉢で、口径37.4cm、器高15.0cmを測る。播目は口縁部の際から密に入っている。

土師質土器 (1183～1186)はC類に分類される土師質皿である。いずれも口縁部にタールが付着している。(1183)は口径9.0cm、器高1.9cmを測る。(1184)は口径9.2cm、器高2.0cmを測る。器壁は厚く、口縁部は摘み上げながらナデ調整している。(1185)は口径9.1cm、器高2.0cmを測る。(1186)は口径9.2cm、器高2.0cmを測る。

中国製陶磁器 (1187)はC群に属する染付の皿で、碁笥底で外面下部に波濤文帯が描かれる。

S F 4348出土遺物 (第67図, PL.58)

土師質土器 (1188～1191)はC類の土師質皿である。(1188)は口径9.5cm、器高1.8cmを測る。(1189)は口径10.0cm、器高2.3cmを測る。(1190)は口径9.5cm、器高1.9cmを測る。(1191)は口径9.7cm、器高1.8cmを測る。

中国製陶磁器 (1192)はB群の染付皿で、内面に玉取獅子が描かれ、畳付は釉が削られ露胎となっている。

S F 4350出土遺物 (第67図, PL.58)

土師質土器 (1193～1197)は土師質皿である。(1193～1196)はC類に分類される。(1193)は口径6.0cm、器高2.0cmを測る。器壁は薄く、底部は丸い。(1194)は口径8.9cm、器高1.8cmを測る。(1195)は口径9.0cm、器高1.8cmを測る。口縁部は摘み上げながらナデ調整されている。また口縁部にタールが付着している。(1196)は口径9.2cm、器高1.9cmを測る。(1197)はA類に分類される。底部は突き上げられ器壁は厚く成形されている。口径11.4cm、器高2.3cmを測る。

焼土層出土遺物 (第67図, PL.58)

発掘区北西端の焼土層から4枚のかわらけが重なって一括で出土した。

土師質土器 (1198～1201)はD₂類に分類される。いずれも口径20cm前後の大型の皿で、胎土は白く細かい。器壁は厚く作られ、口縁部は摘み上げながらナデ調整で成形されている。(1198)は口径17.2cm、器高2.4cmを測る。(1199)は口径20.6cm、器高2.8cmを測る。(1200)は口径20.0cm、器高3.1cmを測る。(1201)は口径21.8cm、器高3.3cmを測る。

4. 小 結

遺 構

検出された各遺構について前項において個別の解説と若干の検討を行った。ここではそれを受けて全体的な検討を加え、まとめとする。

遺構の年代

前述したように各遺構は層位により下層から順次Ⅰ・Ⅱ・Ⅲの3期に区分した。その中で主となるのはⅡ期とした遺構群であって、水田耕作土下で広く検出された焼土で覆われており、良好に遺存している。これに対し、Ⅲ期とした遺構群は焼土層上に位置し、断片的に残されているものであり、またⅠ期は深掘トレンチ等で一部を検出したにすぎない。そしてこれら各遺構群の間のレベル差も0.1m程度であって、他の調査区と比べて小さい。検出した遺構は、屋敷を区画する遺構等から考えて、基本的には朝倉氏が越前の支配者となって拠点としての町造りを開始したとされる文明3年(1471)以降、織田信長軍との戦いに敗れて滅亡する天正元年(1573)までの約100年間に位置することは確実なこととして良い。これら各遺構群がこの間のどの時期に位置付けられるのか、また各遺構群の年代差がどの程度なのかといった点を明確に示す指標は見当たらないが、周辺の調査区の所見等から本調査区の主となるⅡ期の遺構群を、基本的にはその後半期すなわち16世紀の遺構として良いものとする。

屋敷の構成

この屋敷内で極めて良好に建物礎石等が検出された。前項の個別平面等の考察を受けて屋敷の全体構成について若干の検討を行う。

まず屋敷の規模を見てみよう。本調査においては南北二つの東土塁S A 1181・4330、北土塁S A 4331が検出された。これらは基本的には屋敷の東と北を限る土堀の基礎部と考えて良からう。また、西は山裾が境界と考えられる。南は若干不明な点もあるが第58次調査で検出されている石列S V 3511・3512が境界と考えられる。この石列S V 3511・3512は水田化に伴う改変もあって本来の方位等不明な点も多いが、おおよその推定は可能である。これと北土塁S A 4331とは若干方向が振れるようであって、間隔は東西で異なるものの30mを少し上まわる程度と考えられよう。奥行きは山裾部が未調査であるため明確ではないが地形から50～60mと考えられる。屋敷面積を想定すれば、1,500～2,000㎡程度となり、北方の山裾部で検出されている屋敷と大きな差は見られない。

次に空間構成を見てみると、この屋敷は従来の調査により北方の山裾部で検出されている屋敷と異なり、前面が道路に面しておらず、東から引き込まれた東西方向の道路S S 1180の突き当たりに位置している。加えて、他の屋敷では門は基本的に正面土塁に1か所設けられているのに対して、ここでは屋敷内に3mほど入り込み北と西に2つ設けられている。また、この門から西山裾に向かって溝S D 4333や通路S S 4381、土堀と考えられるS A 4332が存在し、屋敷内はここを境にして大きく南北に二分され、北には大規模で良く整った建物S B 4338とこれに付属する平庭S G 4366が、南には越前焼大甕埋設遺構S X 4358に象徴される日常生活を支える台所等の建築群が、そして奥には土蔵S B 4341が想定される。これまでの調査例ではこうした場合はこの時期の上層住居を秩序づける「ハレ」と「ケ」の考え方にのっとり、南にハレすなわち屋敷の中心となる建物群を、北にケすなわち日常生活を支える台所等の建築群を

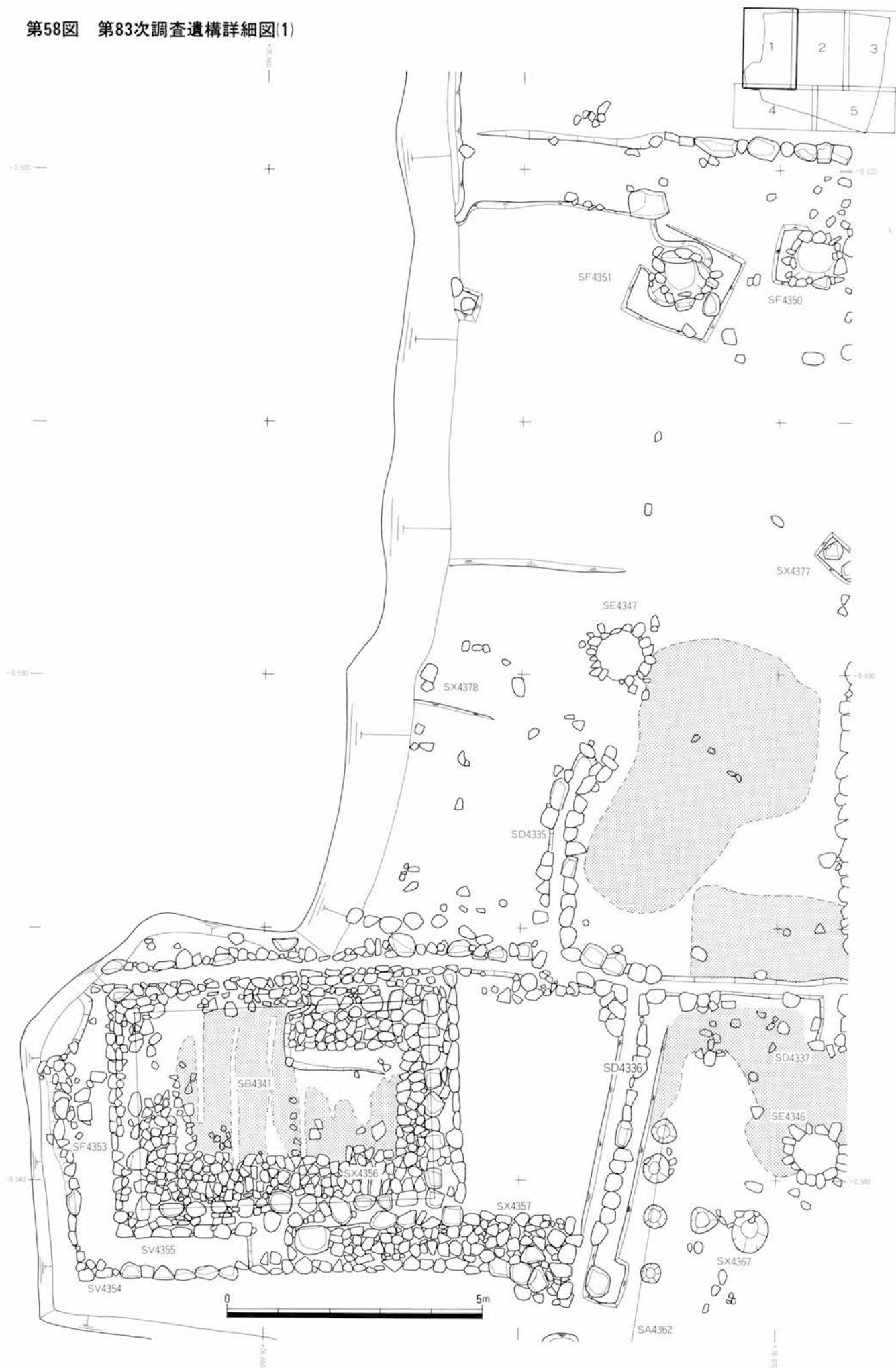
配置するのが通例であった。しかし、この屋敷においては逆である。その理由を考える上で南半の空間のあり方を含む周辺の状況が注目される。まず、正面南半の土塁S A 4330や南境界と想定した石列S V 3511・3512が他の境界土塁に比べて少し明確さを欠くことが指摘できる。そして削平もあって不明な点も残されているが、ここには中心となるような整然とした建物は存在せず、石積施設等に代表される雑多な遺構が点在している。こうした点からこの南及び東の区画には区分する溝等の遺構は顕著ではないものの多くの小規模な建物が存在したものと考えられよう。

まとめ

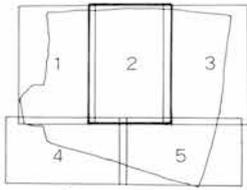
以上の諸点をふまえ、本調査で判明したことをまとめると、次のようになる。

Ⅱ期とした主な遺構群は基本的に16世紀と判断されるものである。屋敷は従来の調査で判明している大規模な屋敷と同様であって、基本的に土塀で囲まれ、30m強の間口を持ち、奥行き50～60m、面積1,500～2,000㎡程度の規模と推定される。この屋敷は東から延びてきた道路の西端に、少し入り込んで二つの門を設けており、内部は南北に大きく二分され、北は中心となる大規模な建物や平庭が配置されておりハレの空間、南は台所等の建物が想定されるケの空間、そして奥には土蔵が設けられている。従来の調査例では南をハレの空間、北をケの空間とするのが通例であって、これと逆である。その理由として屋敷の南及び東の境界が明瞭さを欠くこと、そこには多くの小規模な建物が存在したものと推定されること等があげられ、こうした区域を一括して考える視点も必要である。

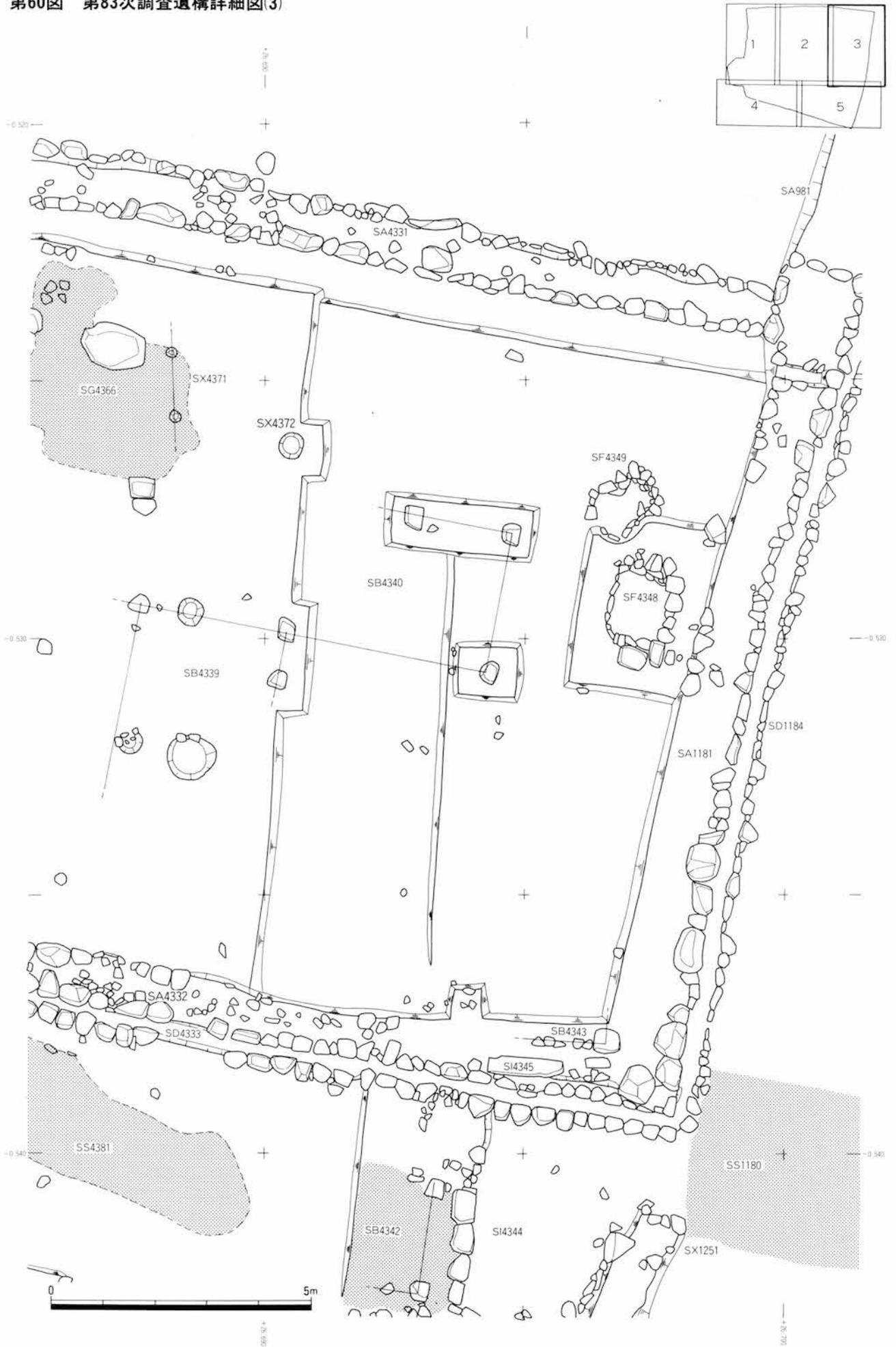
第58図 第83次調査遺構詳細図(1)



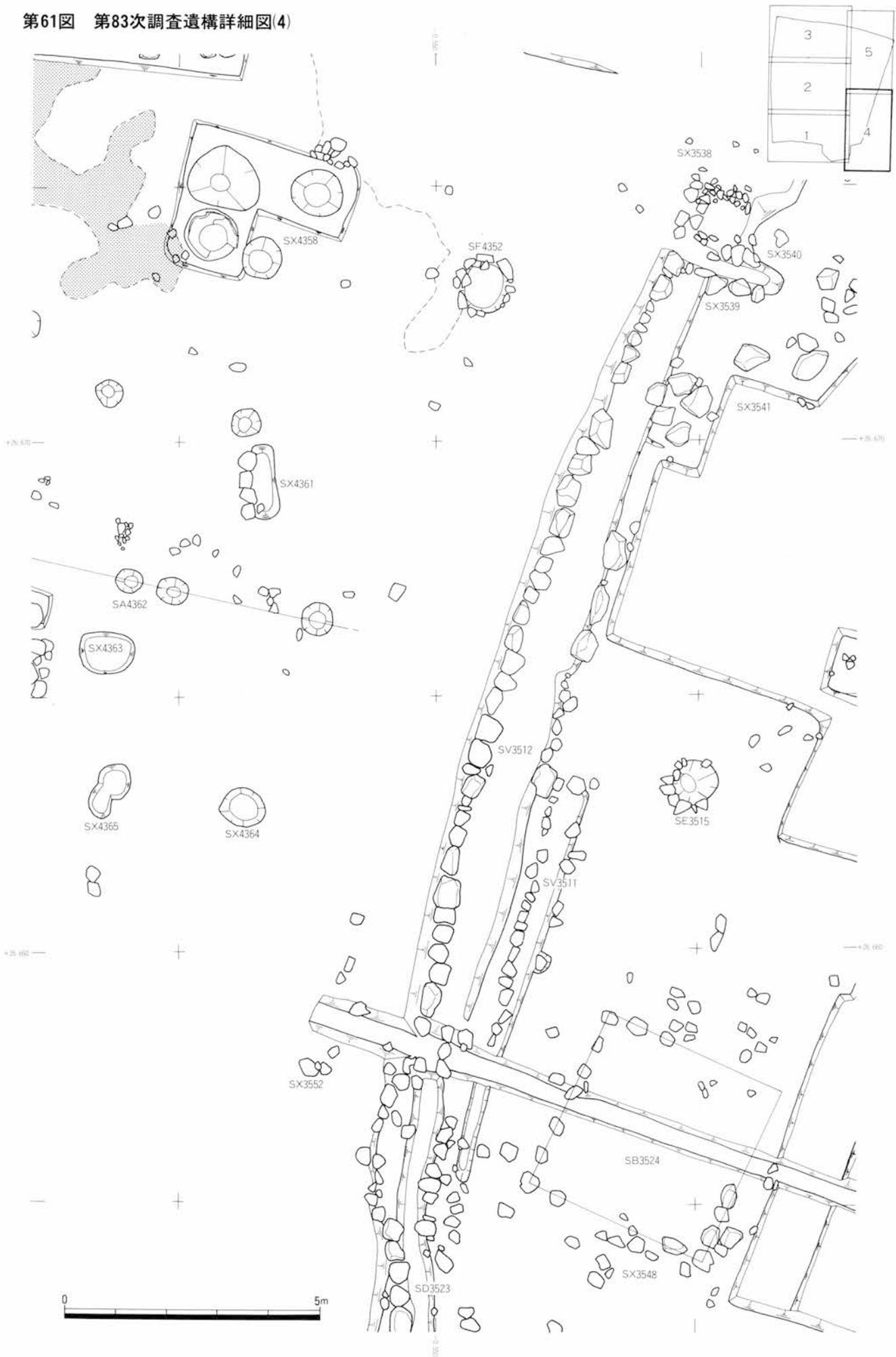
第59図 第83次調査遺構詳細図(2)



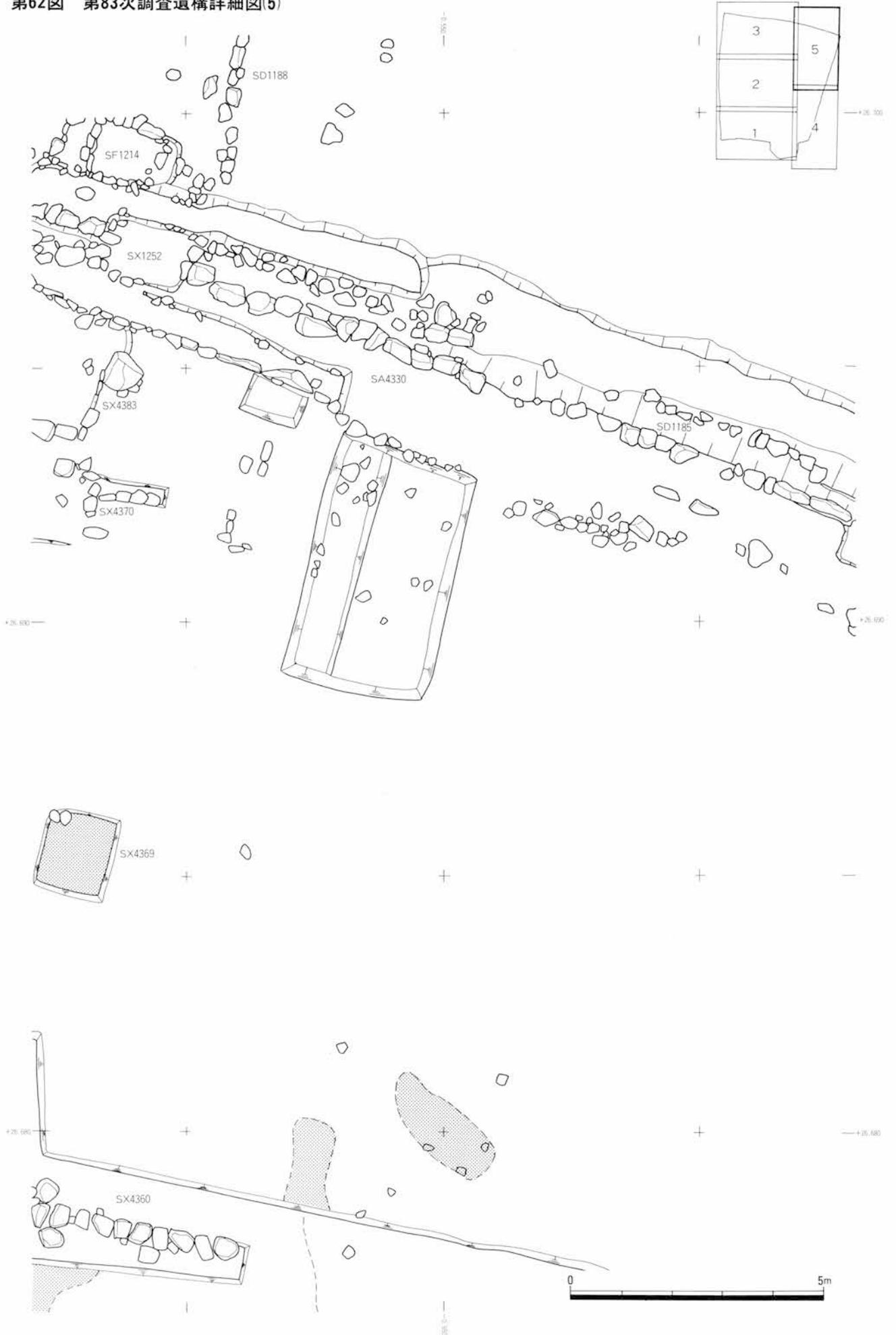
第60図 第83次調査遺構詳細図(3)



第61図 第83次調査遺構詳細図(4)

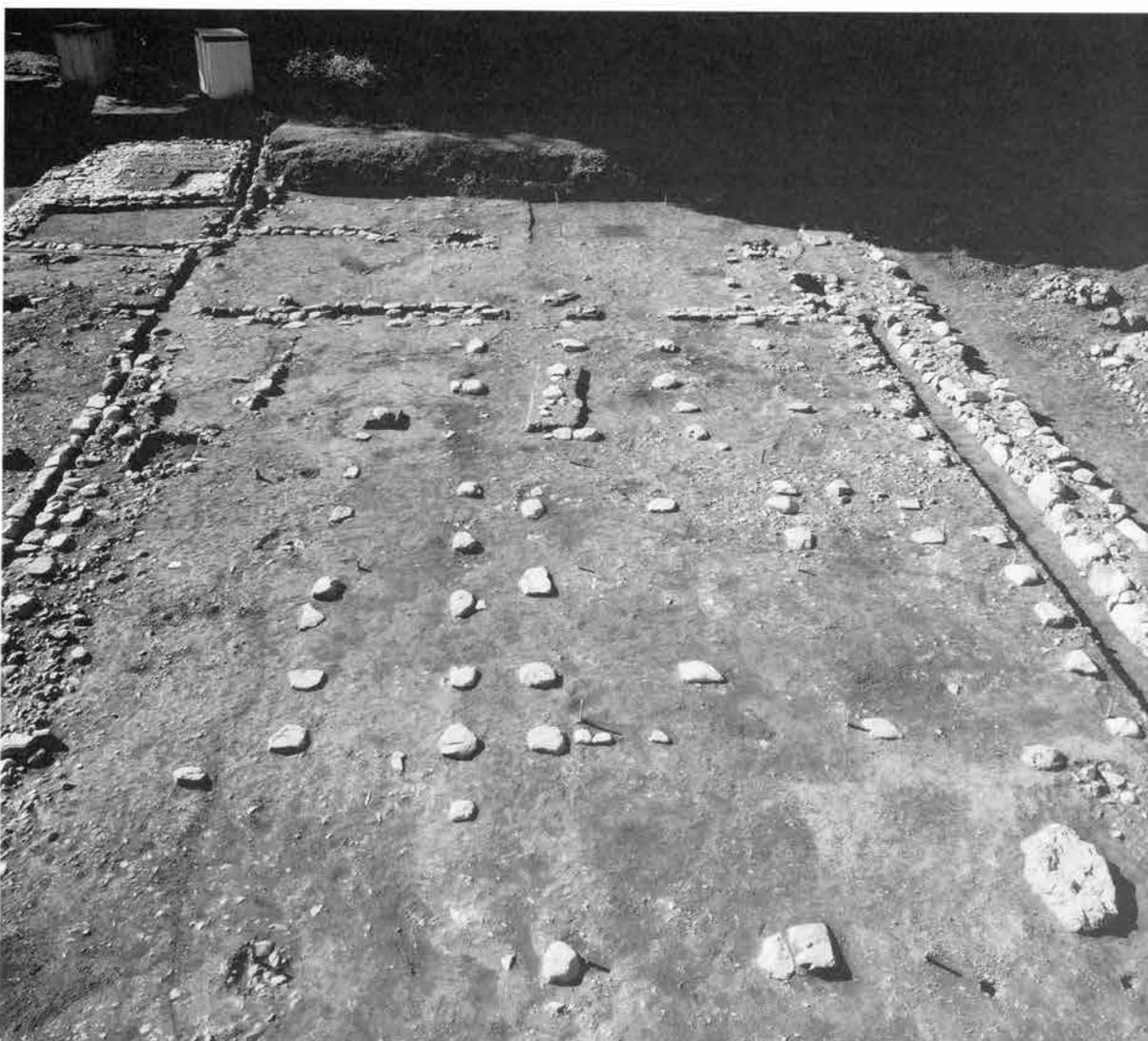


第62図 第83次調査遺構詳細図(5)





(東から)



同中央部
(東から)

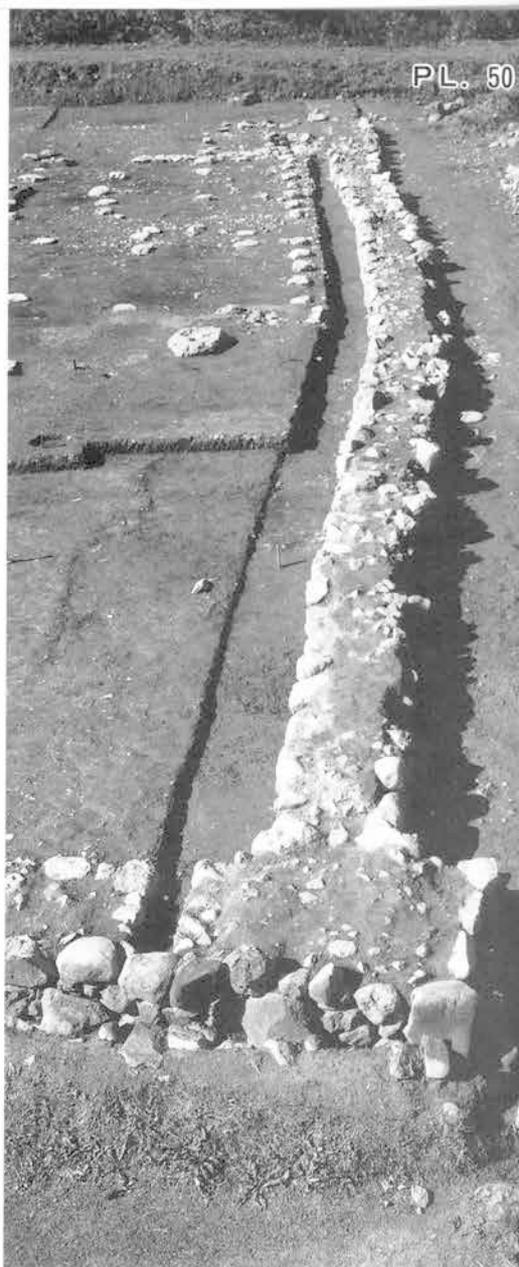


(西から)



同中央部
土塁、門
(東から)

第83次調査・
主要遺構



◀ 土塁SA4331及び
建物SB4338

(西から)

▶ 同 (東から)

▼ 建物SB4338

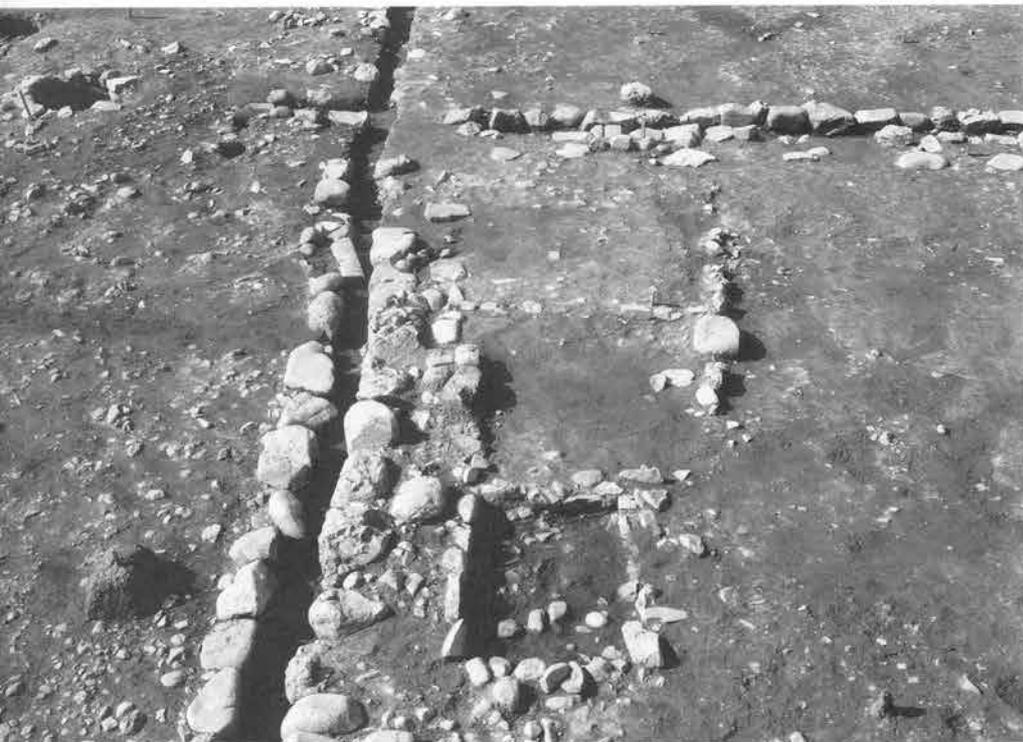
(北から)





第83次調査・主要遺構

調査区北東部
(北から)



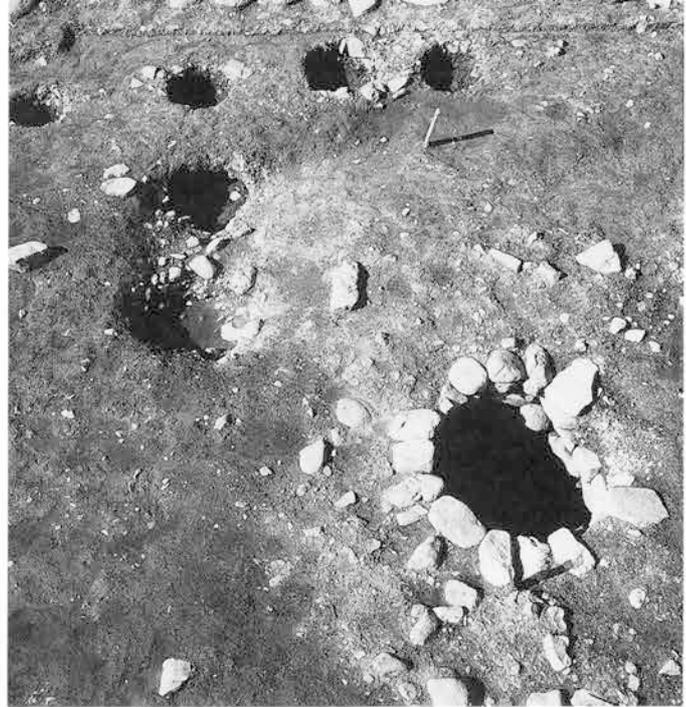
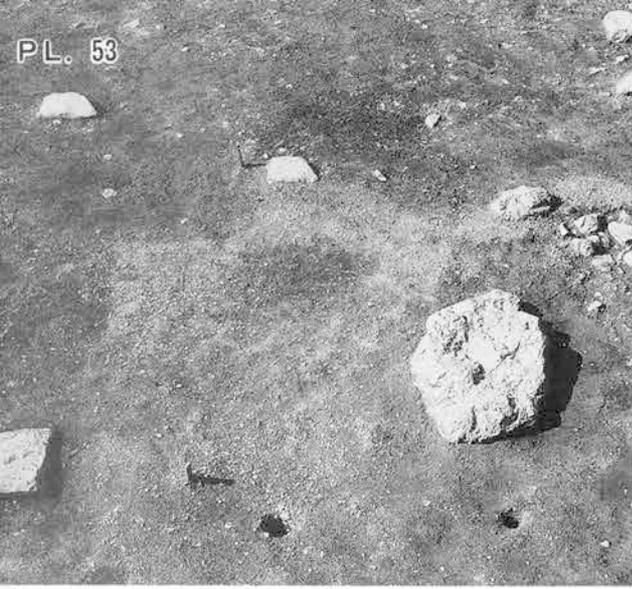
調査区中央部
溝SD4333及び
道路SS4381
(東から)



調査区西半部
蔵SB4341及び
塀SA4362
(東から)

第83次調査・主要遺構

蔵SA4341
(東から)門S14345
(南から)井戸SE4346、
塀SA4362他
(北から)



第83次調査・
石積施設、井戸
その他

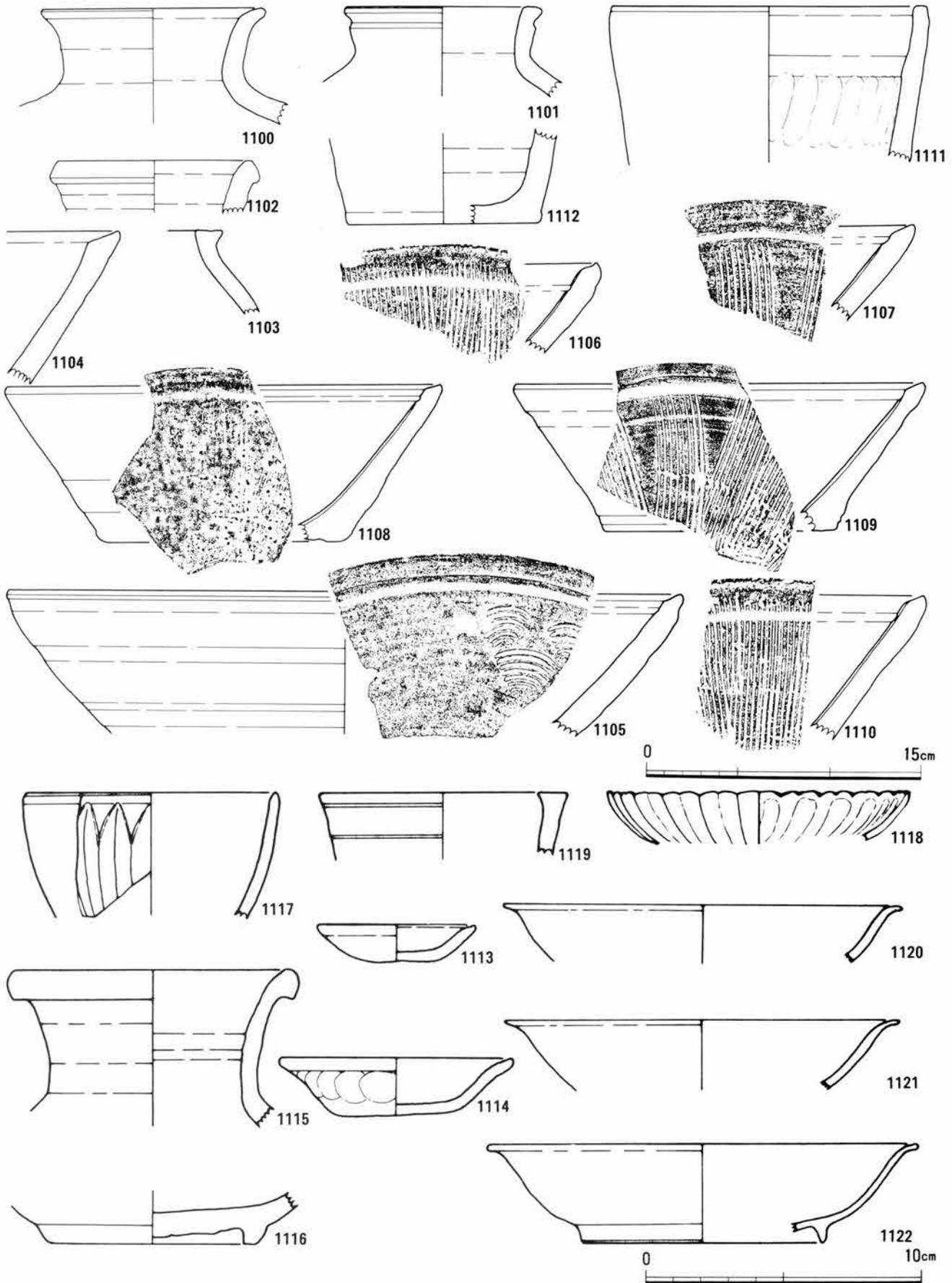
- ▼ SG4366 (東から)
- ▼ SE4346 (東から)
- ▼ SX4358 (東から)
- ▼ SF4348 (東から)

▲ SF4352 (東から)

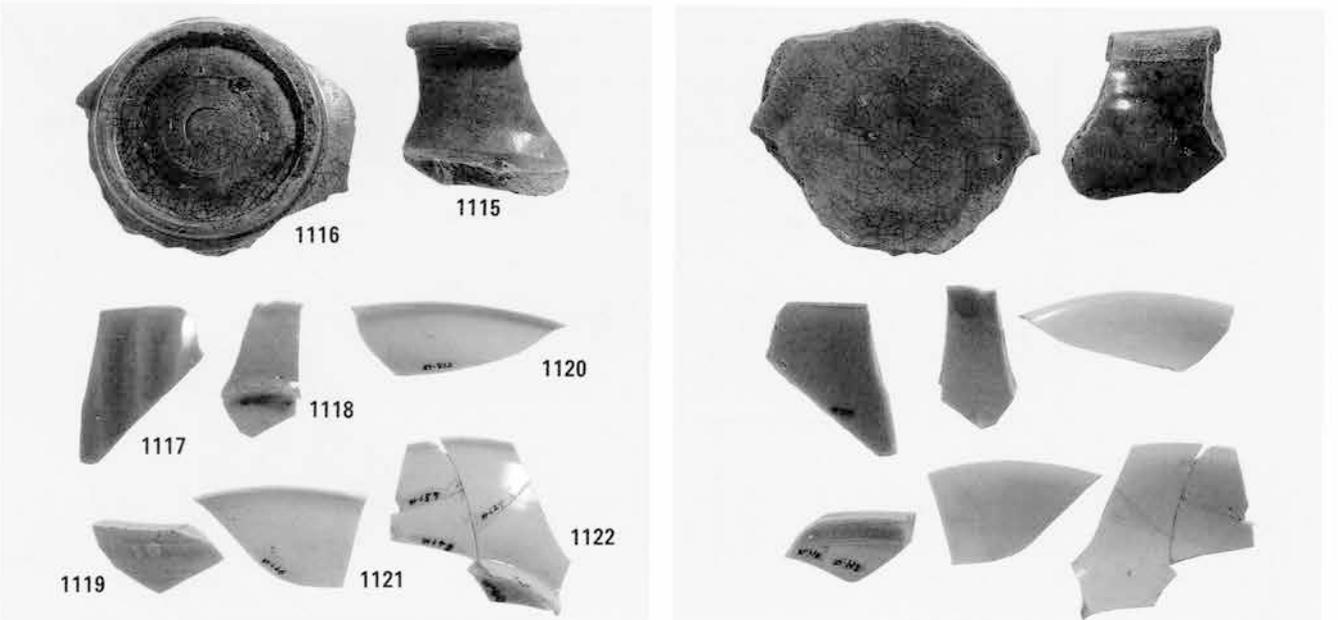
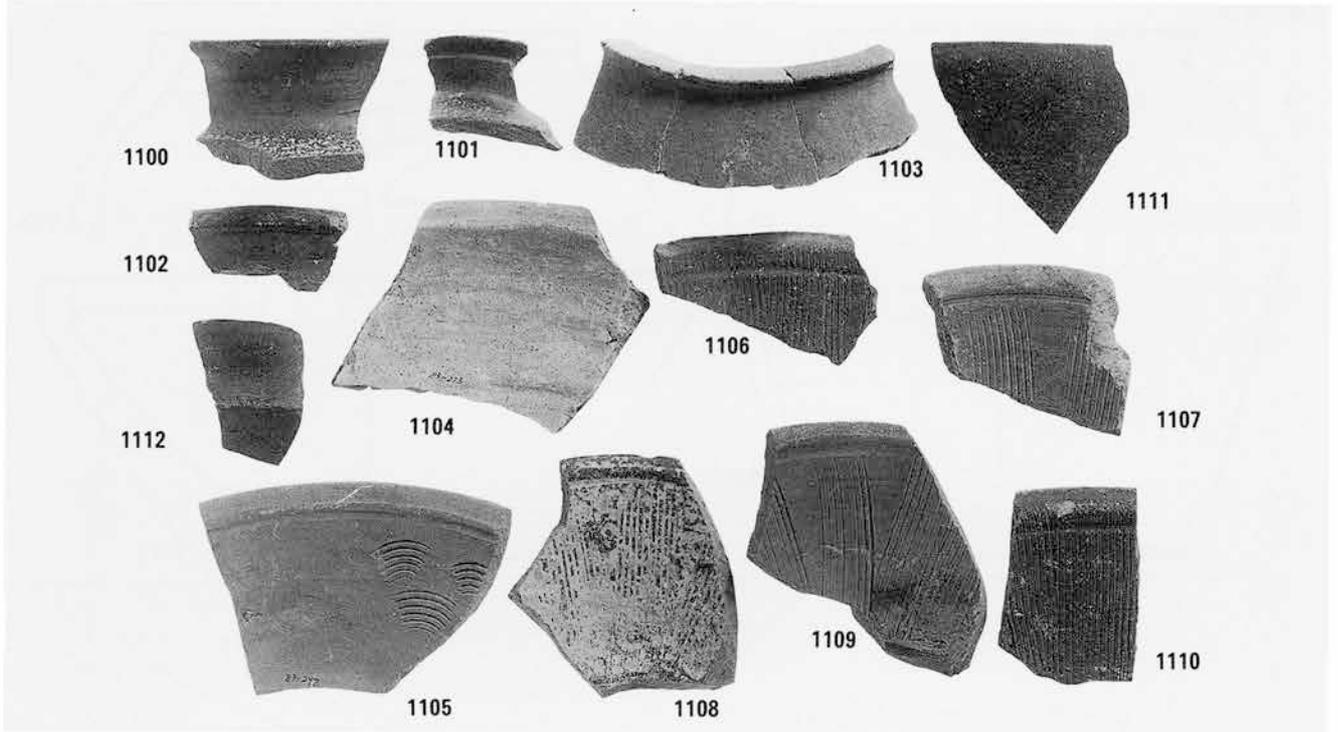
◀ SF4350・4351・4379 (東から)

第63図 第83次調査出土遺物(1)

表土・床土層



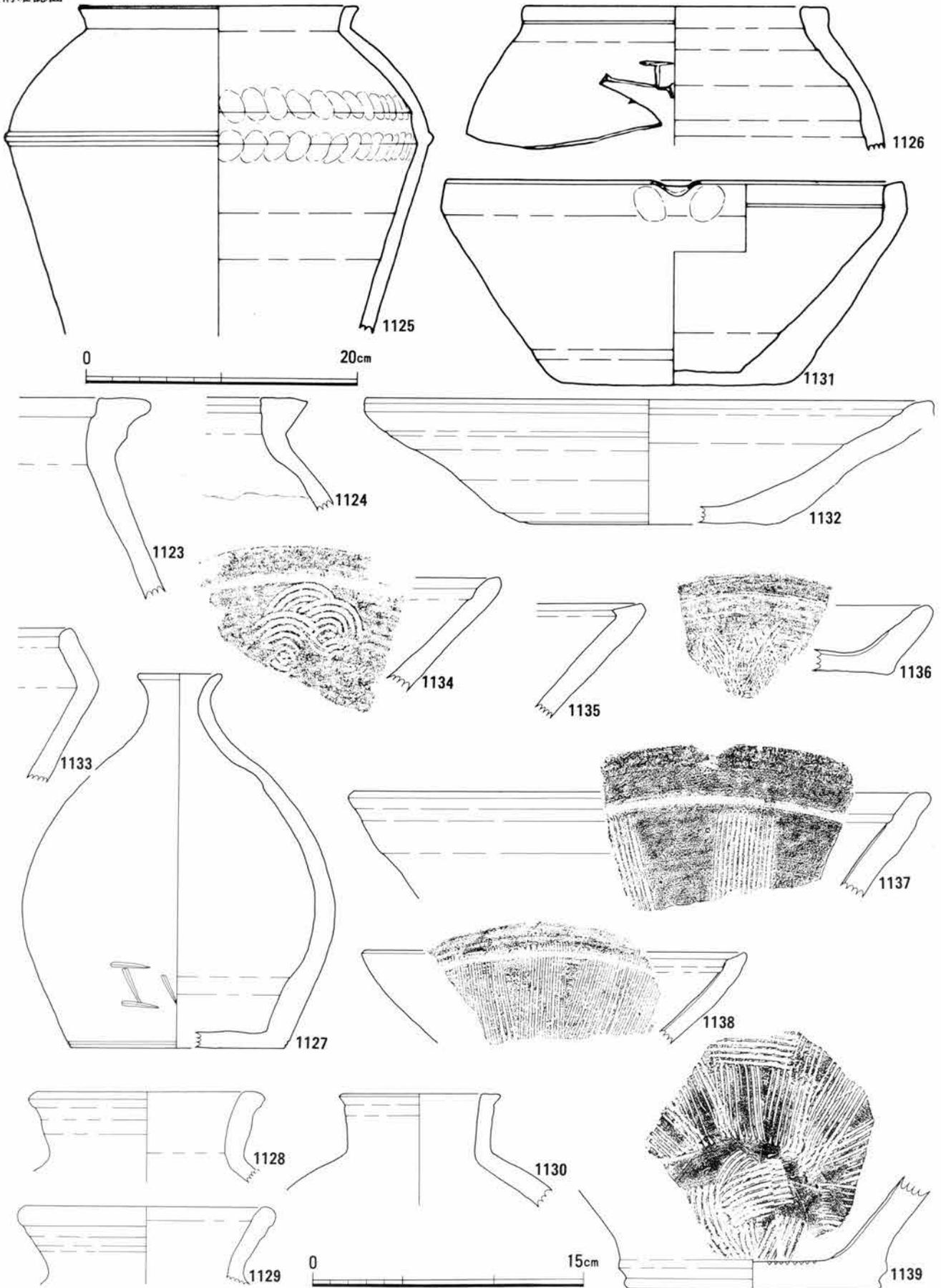
越前焼壺1100~1103 鉢1104・1105 搦鉢1106~1110 桶1111・1112 土師質皿1113・1114 灰釉壺1115 皿1116
 青磁碗1117 皿1118 香炉1119 白磁皿1120~1122



表土・床土層 越前焼壺1100~1103 鉢1104・1105 播鉢1106~1110 桶1111・1112 土師質皿1113・1114 灰釉壺1115 皿1116
 青磁碗1117 皿1118 香炉1119 白磁皿1120~1122

第64図 第83次調査出土遺物(2)

遺構確認面



越前焼壺1123~1125 壺1126~1130 鉢1131~1135 卸皿1136 播鉢1137~1139



1125

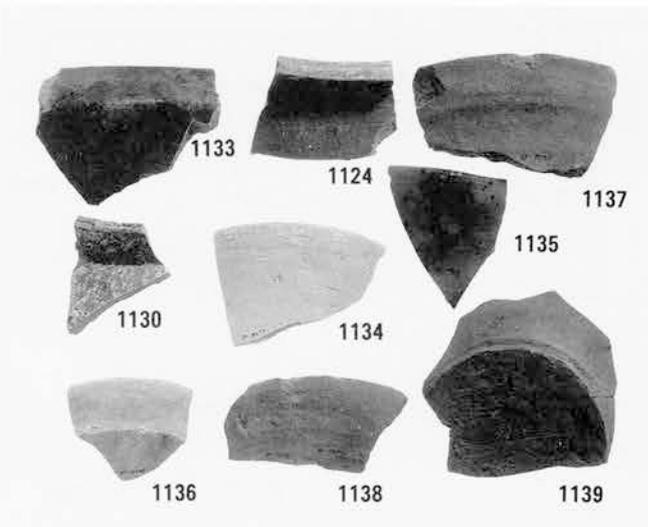


1127



1126

1131



1133

1124

1137

1135

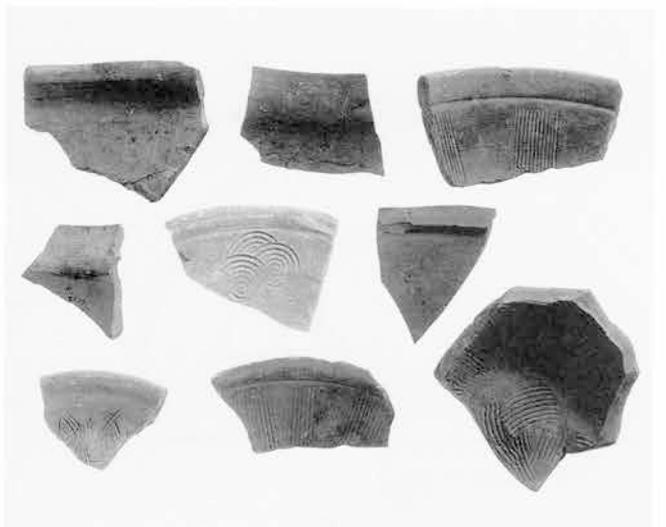
1130

1134

1136

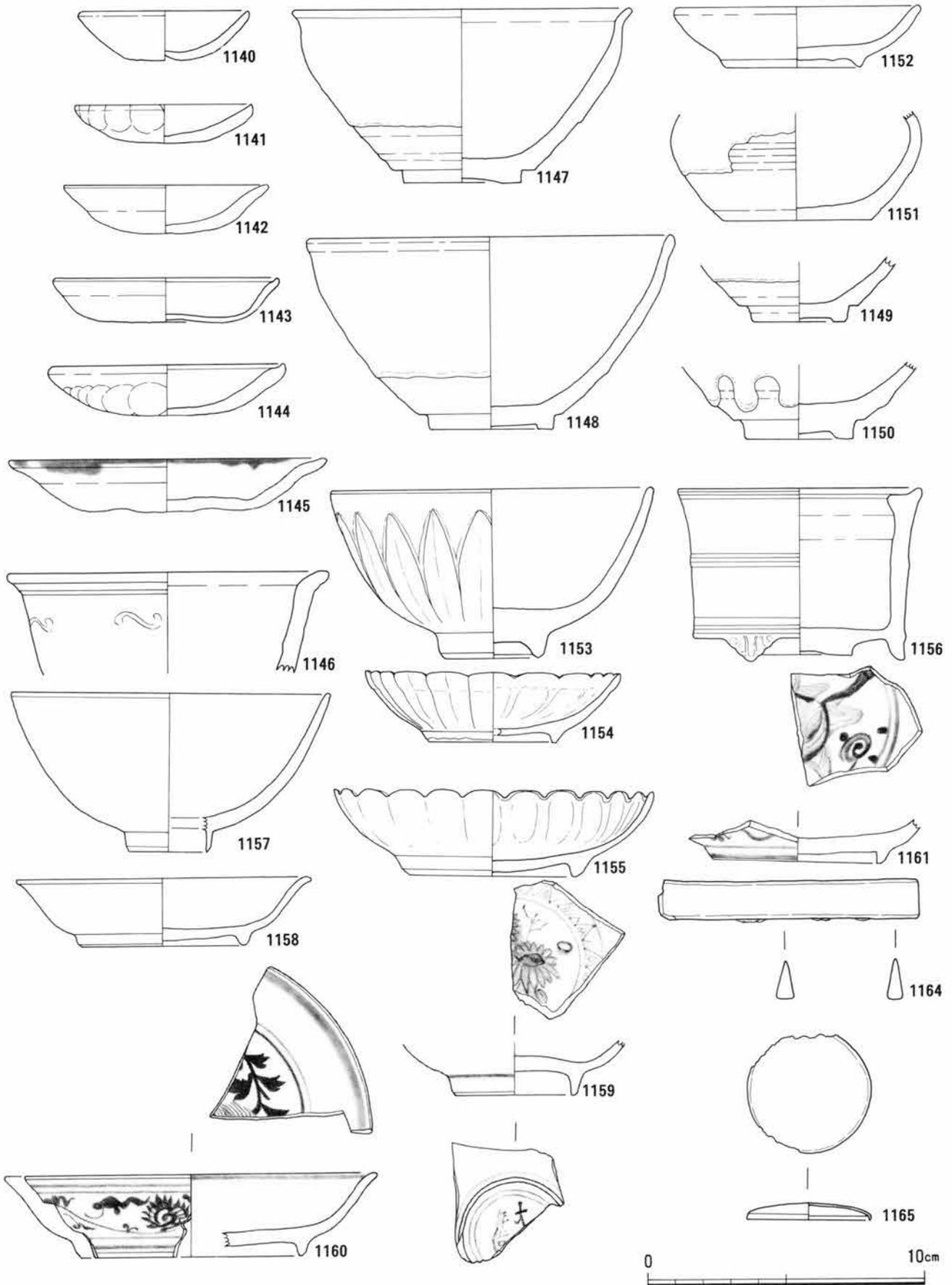
1138

1139

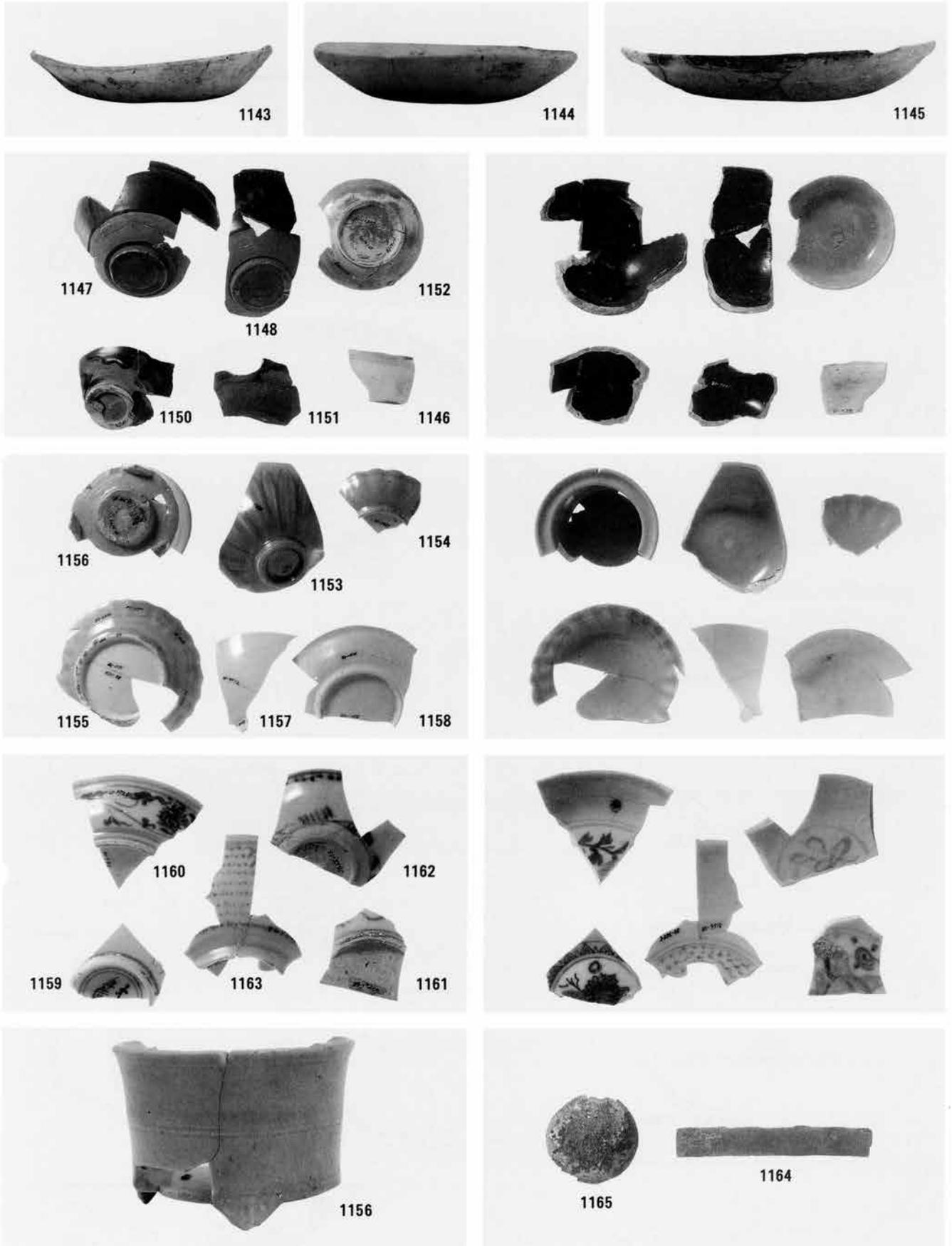


遺構確認面 越前焼甕1124・1125 壺1126・1127・1130 鉢1131、1133～1135 卸皿1136 播鉢1137～1139

第65図 第83次調査出土遺物(3)

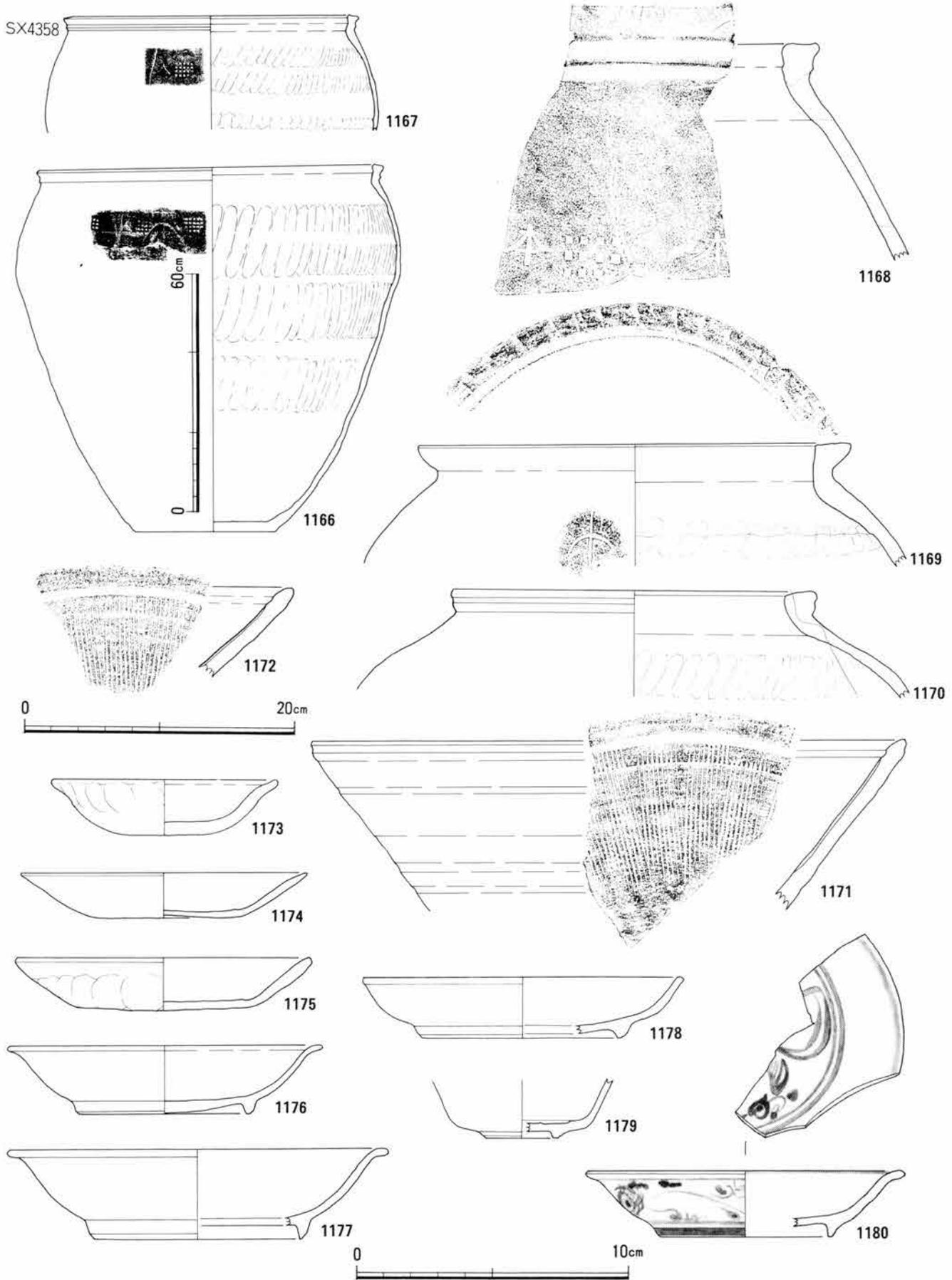


土師質皿1140~1145 瓦質香炉1146 鉄釉碗1147~1150 茶入1151 灰釉皿1152 青磁碗1153 皿1154・1155 香炉1156
 白磁碗1157 皿1158 染付碗1159 皿1160・1161 金属製品小柄1164 蓋1165

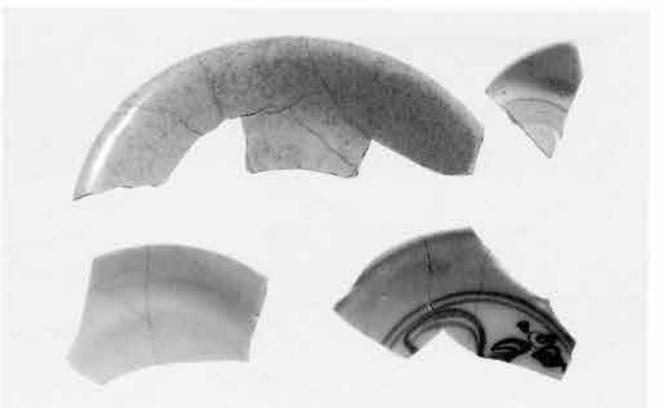
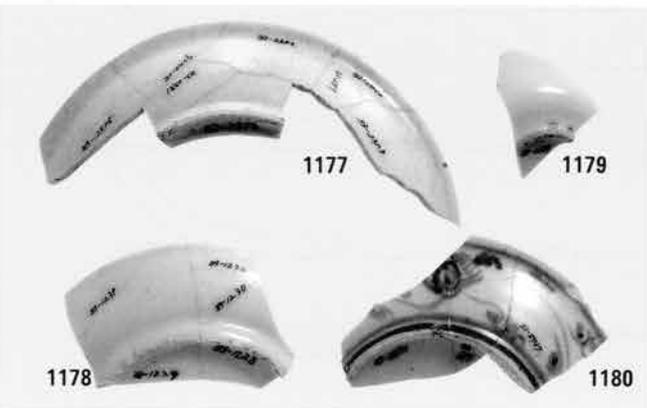
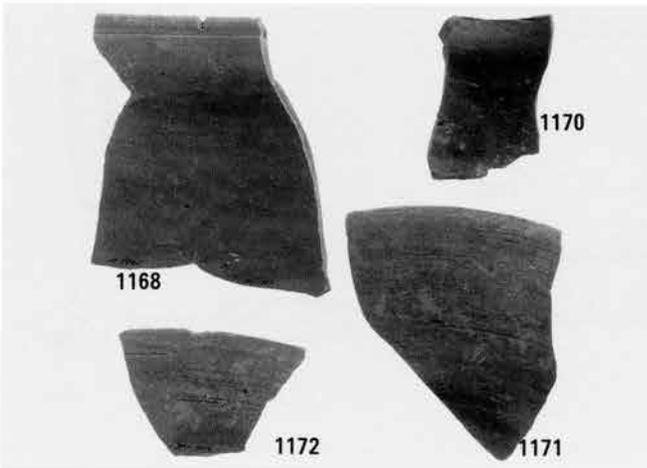


遺構確認面 土師質皿1143~1145 瓦質香炉1146 鉄釉碗1147・1148・1150 茶入1151 灰釉皿1152 青磁碗1153 皿1154・1155 香炉1156 白磁碗1157 皿1158 染付碗1159・1163 皿1160~1162 金属製品小柄1164 蓋1165

第66図 第83次調査出土遺物(4)



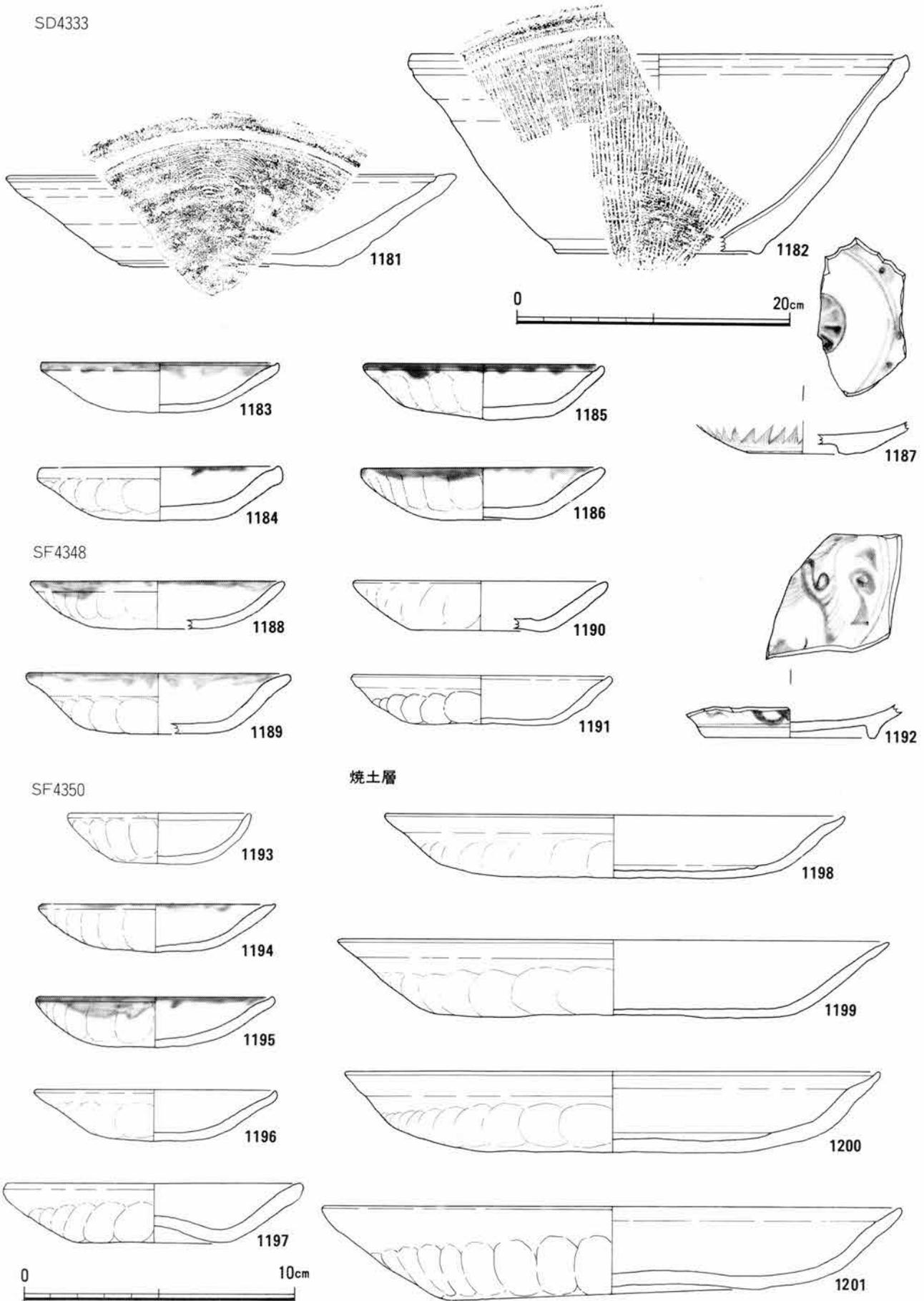
越前焼甕1166~1170 播鉢1171・1172 土師質皿1173~1175 白磁皿1176~1178 环1179 染付皿1180



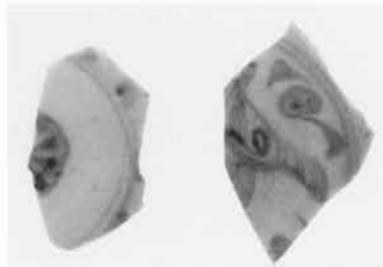
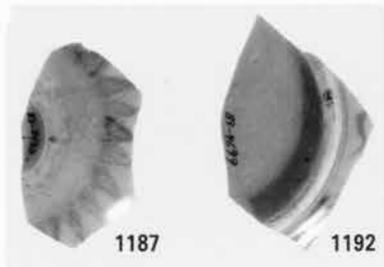
SX4358 越前焼甕1166~1170 播鉢1171・1172 土師質皿1173~1175 白磁皿1177・1178 坏1179 染付皿1180

第67図 第83次調査出土遺物(5)

SD4333



越前焼播鉢1181・1182 土師質皿1183～1186、1188～1191、1193～1201 染付皿1187・1192



SD4333 越前焼播鉢1181・1182 土師質皿1183～1185 染付皿1187

SF4350 土師質皿1193～1197 焼土層 土師質皿1199～1201

SF4348 土師質皿1191 染付皿1192

V 考 察

V 考 察

平井地区の空間構造

はじめに

一乗谷川を隔てて朝倉館と相対する地区は、「城戸ノ内」の中でも特に水田に比較的整然とした地割りが認められる所であって、「一乗谷古絵図」にも「斎藤兵部大輔」・「新馬場」・「平井」・「鰐淵将監」・「河合安芸守」等の有力武将に関係する記載も見られる。こうしたことから、重要な場所であることが予想されるこの地区の解明を目指した調査を計画的に実施してきた。現在その調査範囲は南北約300m、東西約100m、面積30,000㎡に及んでいる。なお、この地区全体を、中ほどにあって一連の調査の発端となった昭和48年の第10次調査区等を包括する字名「平井」にちなんで、通常平井地区と呼んでいる。

各調査区については、『報告書Ⅱ』1988(第10・11・54次調査)・『報告書Ⅳ』1993(第15・24・25次調査)・『報告書Ⅴ』1995(第29・77・78次調査)として個別に順次詳細を報告してきており、本書が取り扱った第29・30・57・58・83次調査区をもって地区全体の報告も完了することとなる。加えて、遺構が良好に残るこの地区を、当時の建物を立体的に復元することによって遺跡見学者に判りやすく親しまれる場を提供することを目的とする立体復元地区に定め、まず昭和57・58年度には30m四方の武家屋敷の復元を実施し(『環境整備報告Ⅱ』1992)、平成4～7年度にはさらにこれをふくめた200mにおよぶ町並みを再現する「町並立体復元事業」(『環境整備報告Ⅲ』1996)も実施した。

これらの各報告書において、個別に若干の考察も加えてきたが、ここでは相互の関係や地区全体についての考察を行ってみたいと思う。なお、その前提となる各調査区の個別遺構の詳細については各報告書を参照されたい。

1. 地区の計画

まずこの地区で検出された道路や屋敷を区画する土塁等骨組みとなる遺構から、屋敷割りを中心として、地区の計画のあり方を検討する。

地区全体の構成を概観すれば、以下の通りである。

前述したようにこの地区は狭い谷地形を造る一乗谷川の西岸に位置し、多くの屋敷が検出された平地部の幅は概略100mほどである。全体的には遺構は比較的良く残されているが、一乗谷川は当時から大きな流路の変化は少ないものの、若干の氾濫もあったことが判明しており(『一乗谷朝倉氏遺跡——一乗谷川水辺空間整備計画に伴う事前調査報告』1991)、川沿いの10～15m幅部では当時の遺構はほとんど失われている。屋敷割りの骨格となる遺構として重要な道路は、南北方向3(S S 260・976・945)、東西方向5(S S 944・975・977・1180・3525)が検出されている。この地区の中ほどやや東寄りに存在する南北方向道路S S 260・976は約200mを検出している。この道路は、南は行き止まりになるが、北に矩折部が設けられ、更に続いている。この道路によって中ほどから北にかけての地区は大きく東西に二分される。西側には山裾となる西面を除く3方に土塁を廻らした大規模な屋敷が整然と配され、これに対し東側には規模は小さいものの同様の土塁を廻らす屋敷も存在するが、溝で区画された小規模な屋敷も多く認められ、違いを見せている。また、この南北方向道路のとぎれた南には、西半山裾に北中部同様の大規模

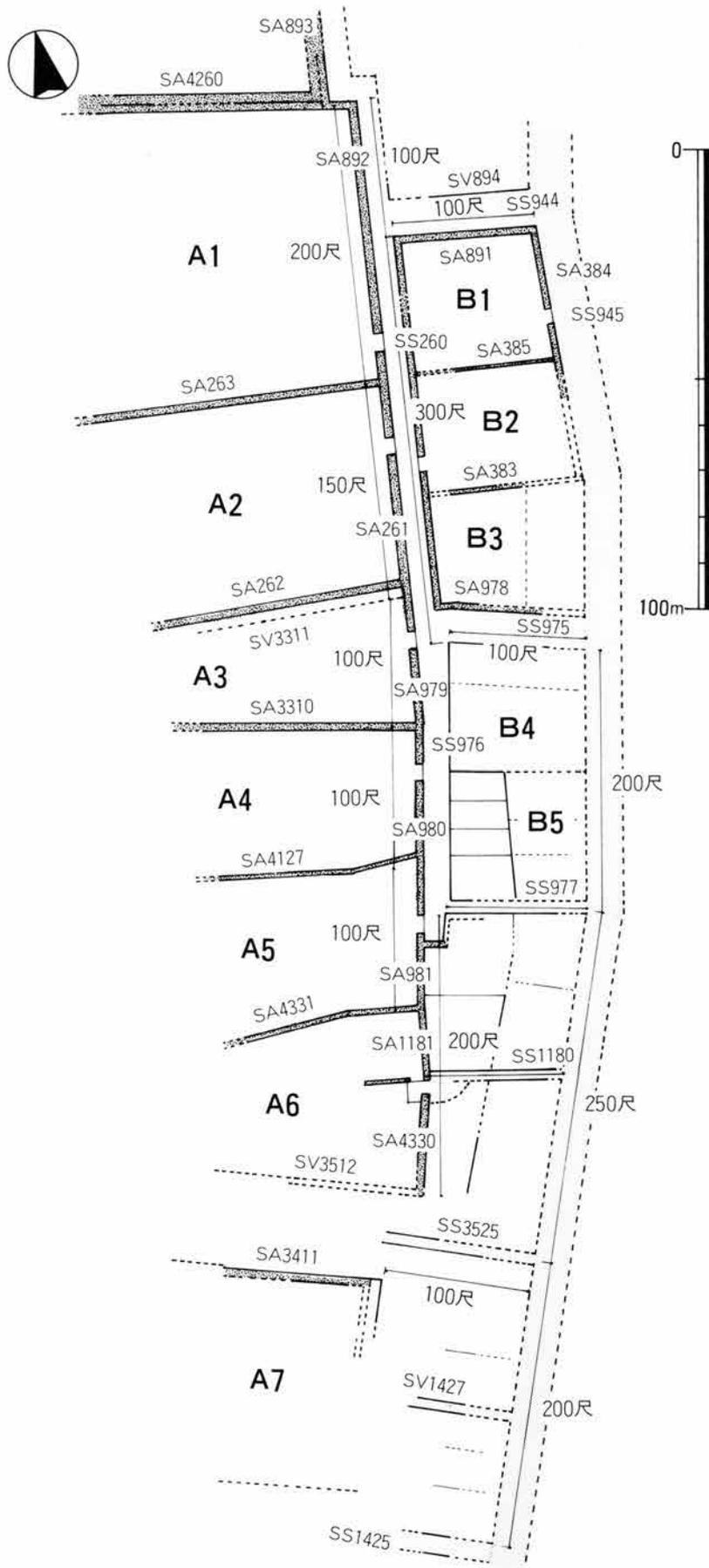
な屋敷が存在するが、東半には明確な区画は認められない。なお留意すべき道路遺構として、第25次調査において一部ではあるが川に沿って検出されている南北方向道路S S 945があげられる。この地区には大小いくつかの東西方向の道路が検出されており、当然これらをつなぐ南北方向の道路が必要とされるが、地区の中ほどで検出された南北方向道路S S 260・976は前述したように南では行き止まりとなっており、以南の東西方向道路とはつながりを持たない。こうしたことから、一部の検出にとどまるが、もう一本の川に沿う南北方向の道路S S 945が注目される。これが谷を通り抜ける幹線道路と考えられるのではなかろうか。

では、こうした遺構に基づいて、町割りの方位を検討する。

これらの道路や土塁を見ると、全体を貫く一つの方位は見当らない。そこで、南北方向道路S S 260を基準として検討する。南に続くS S 976は南で5°ほど西に振れている。東西方向道路S S 944はほぼ直交しており、東で2°ほど南へ振れるのみである。その南のS S 975・977・1180は5°とその振れも増し、S S 3525では10°ほどに広がる。同様に山裾に配された大規模屋敷の東西方向の境界土塁を見てみると、S S 260の中ほどに存在するS A 263は誤差も1°程度であってほぼ直交しており、北のS A 4260は西で7°北に振れ、逆に南のS A 262は西で2°南に振れている。また南のS A 3310は正面の道路S S 976にほぼ直交するため西で6°北に振れることとなる。そのためS A 262とS A 3310に挟まれた屋敷は奥に行くにしたがってかなり幅を狭めることとなる。S A 4127・4331は折れ曲がりがあって一方向とはなっていない。そしてS A 3411では10°ほどの振れとなる。また川に沿って存在したと考えられる南北方向道路S S 945の西の土塁S A 384では南で7°東に開いている。こうした変化は、基本的には緩やかに東へ張って湾曲する一乗谷川に代表される地形に合っており、こうした地形に制約され、軸線を変化させたものと考えられよう。

次に、その寸法について検討する。

道路幅をみると、南北方向道路S S 260は東の側溝を含め4.5m、S S 976は北端では6.1m、南端では4.5m、S S 944・S S 975は7.6m、S S 977は3.0m、S S 1180・S S 3525は2.1mないし2.4mであって、これらはそれぞれ0.303m = 1尺として、15尺、20尺、15尺、25尺、10尺、7尺、8尺に換算されよう。また、S S 944とS S 975の間は91m、S S 975とS S 977の間は60m、S S 944と北の矩折部までは30mであり、同様に300尺、200尺、100尺と考えて良いものと思われる。西山裾の大規模屋敷の間口となる東西方向土塁の間隔を見てみると、北から60m、45m、30mであり、同様に200尺、150尺、100尺と考えられよう。少し折れているS A 4127以南についても30m、30m、39m、21mが基本と推定され、100尺、100尺、130尺、70尺と考えられよう。一方、土塁の幅は2.4m、2.1m、1.8m、1.2mと様々であるが、これは、それぞれ8尺、7尺、6尺、4尺に当たるものと考えられる。従来、こうした地割り寸法の基準として「間(けん)」を想定する考え方が示されてきた。その代表的なものは1間=6.5尺(1.97m、いわゆる京間)を基準とする小野氏の考え方(小野1981等)である。小野氏はこの考え方に基づいて、計測ポイントが異なるが、S S 944とS S 975の間を90.6m、S S 975とS S 977の間を61.0m、S S 944と北の矩折部までは29.5mとし、それぞれ46間、31間、15間とする。しかし、大きな寸法であるところに「46」・「31」という数値は不自然ではなかろうか。また、道路や土塁幅そして門等の基準寸法は尺でなければ解釈は困難であろう。また、この一乗谷において建築の基準柱間は1間=6.2尺(1.88m、いわゆる越前間)に近いものであって(吉岡1977)、二つの「間(けん)」が生じることとなる。こうした点から、尺もしくはその10倍の丈を基準寸法とし、その整数倍で道路や土塁の幅を定め、屋敷割りは100尺(10



挿図13 平井・川合殿地区町割寸法図

丈)を基本として割り付けた計画を想定しておきたい。

2. 空間構成

この地区は、南北方向道路S S260・976によって、この東西、そして南に、大きく3分されることは前述した通りである。その空間構成を各ブロック毎に屋敷を中心として検討する。

西ブロック まず各屋敷について検討する。北から敷地間口を200尺、150尺、100尺、100尺、100尺とする奥行き60m(200尺)を越す大規模な屋敷が整然と配置されている。この屋敷をA1、A2、A3、A4、A5と呼ぶこととする。これらの各屋敷は山裾を除く3方に、石垣等の状況から土塀の基底部と推定される土塁が廻らされ、道路に面する東にそれぞれ1か所ずつ門を開いている。山裾部については未調査であり、正確な奥行きは不明であるが、60mを越しており、A1では80m程度と考えられる。門の幅を見ると、土塁の開口部の幅はA1は3.9m、A2は3m、A3は3.8m、A4は3.3m、A5は3.6mとバラツキがあ

る。しかし良く見ると門建物の設けられる内側はほぼ 3.0m(10尺)となっている。門建物は検出された 3 例を見るとすべて礎石 4 個で構成され、正面は 8 尺 2 例(A 3, A 5)、7 尺 1 例(A 4)であり、奥行きは 3 例とも 5 尺である。薬医門形式の建物と推定されよう。次にこの門の位置を見てみると、A 1 は屋敷の南端から南袖石までが約 6 m で南端に近い。A 2 の中心は屋敷の北端から約 15 m で正面を 3 等分した位置と考えられる。A 3 の中心は屋敷の北端から約 12 m でやや北に寄る。A 4 は屋敷の北端から北袖石までが約 6 m と北に寄っている。A 5 は屋敷の北端から北袖石までが約 12 m であって中心に近い。このように一定の法則は見られない。屋敷内は削平もあり建物規模等不明な点も多いが、多くの建物が存在し、また塀等で仕切られる場合も多い。基本的には、主人の居座敷や接客の場となる表向空間(ハレ)とこれを支える台所や使用人の内向空間(ケ)に区分され、表向空間は屋敷の前方・南寄りに、内向空間は後方・北寄りに配置されることは明確に指摘できる。また最も大きな規模を持つ A 1 では、北西部で鍛冶炉を備えた作業空間も検出されており、注目される。

東ブロック 中ほどの道路 S S 975 によって南北に大きく 2 分される。

北半は周囲に道路が存在し、土塀の基底部と考えられる土塁で囲まれており、南北 91 m (300 尺)、東西 30 m (100 尺)の区画である。門は西面の中ほどと東面北寄りの 2 か所で検出されている。こうした点から、これを一つの屋敷と考える見方もある。しかし、これを 1 屋敷と考えると屋敷規模は西の大規模屋敷と同等もしくはそれ以上であることとなるが、内部に整った通路等もあって、正門と考えられる西面の中ほどの門は掘立柱 2 本で構成されており、棟門形式の建物と推定される。この形式は格式において西の屋敷に比べ劣ることとなり、矛盾が生じる。そして一方で、この区画を正確に 3 等分する位置に二つの東西方向の土塀 S A 383・385 が存在しており、また、西の土塁 S A 266 もその中央部のみ二重となっており、南・北とは明確に幅や構造が異なる。こうした点等から、基本的にはそれぞれ独立した 100 尺四方の屋敷であったものと考えたい。これを北から B 1、B 2、B 3 と呼ぶこととする。なお、南の土塀 S A 383 は改変が想定されており、またこれを越える通路も設けられている。そして、B 3 の東半には方形の石積施設が南北に列をなして検出されている。こうしたことから、後半には B 2 と B 3 の西半は一体的に使われ、B 3 の東半は後述する南半に見られるように小規模な屋敷が連続していたものと考えられよう。B 1 では南に庭園と離れ座敷を伴った 6 間×4 間の建物や蔵と考えられる石敷を伴う建物等が存在する。前述した山裾の屋敷に比べれば規模は格段に小さくなることもあって建物数等も少ないが、周囲に土塁を廻らし機能の異なる複数の建物を配置すること等から、基本的には西の大規模屋敷に準じたハレとケによる空間秩序に基づく構成と推定されよう。

南半は南北 60 m (200 尺)、東の川寄りの一部を欠くため不明な点も残るが、東西 30 m (100 尺)程度の区画と推定され、これはさらに中央の石列 S X 1176 で南北に正確に二分される。北半部は、北の道路 S S 975 に面して明確な境界は認められないものの小規模な建物が連続し、この建物に対応して南に石積施設が東西に列をなして配置されている部分と、他の部分に分けて考えることができる。南半部は、東西の中ほどに南北に 2 列の石積施設等が見られ、これらによって東西に二分され、西半には道路 S 976 に沿って溝等で区画された建物や井戸、石積施設を伴う間口 6 m (20 尺)を基本とした小規模な屋敷が存在する。ここで見られる小規模な屋敷は、溝ではっきりと区画されかつ各屋敷に井戸と石積施設を伴っており独立性が高い点で、北の道路 S S 975 に面する小規模な建物群とは若干異なる。また、北の道路 S S 975 に面する小規模な建物群はその建物の隣棟間隔から、屋根は「平入り」形式と考えられるが、道路 S S 976 に面する屋敷の建物の一つは、礎石配置から屋根は明確に棟持柱を有した「妻入り」形式と

なることも異なる。東半もいくつかの井戸や多数の石積施設が認められることから、ほぼ同様と考えられるが、ここを西半のように細分化する溝は認められない。いずれにしても、このように道路に面して小規模な屋敷や建物が連続して存在した高密度の土地利用が特徴的である。なお、こうした状況は後半期のことであって、土塁S A982等が一部に残されていることから、当初は100尺を基準とする二つの屋敷であったものと考えられる。これをB4、B5と呼ぶこととする。

南ブロック 南北方向道路SS260・976がとぎれたこのブロックにおいては、幅2.1～2.4mの東西方向道路が36m(120尺)ほどの間隔をもって東半に設けられており、西半山裾には南北二つの土塁を有する大規模な屋敷が存在する。これをA6、A7と呼ぶこととする。A6においては良好に残されていた遺構から、北には東西6.5間×南北7間と大規模な建物と平庭等を、南には台所等を、奥西には土蔵等を配していたことが知られる。A7は削平部も多いが、逆に南に庭園や中心建物が配置されていたものと考えられる。いずれにしても基本的には屋敷内は大きく主人の居座敷や接客の場となる表向空間とこれを支える台所や使用人の内向空間に区分される点は前述した北の大規模屋敷と共通している。しかしこのブロックの山裾部の大規模屋敷は、後世に削平された可能性も残されているが、明確な境界土塁を欠く面も見られ、この境界を越えて屋敷が広がっていたことも想定される点では大きく異なる。東半部は多くの石積施設が南北に列状に存在するあたりで分けて考えられるようで、一乗谷川に沿って存在したと考えられる東の道路に面しては溝等の明確な境界遺構は検出されていないものの、石積施設や井戸の配置からは小規模な建物が連続して存在する高密度の土地利用があったものと考えられる。これに対し西の大規模屋敷に接する部分においては高密度の利用を可能とする道路跡は見られず、A6の東で典型的に示されるように、一部の検出であるが小規模な土塁も設けられる比較的整った中規模の屋敷の存在が認められる。こうした状況から、西の大規模屋敷を核として、その門前に中小の屋敷を配したブロック構成が想定できるのではなかろうか。

まとめ

以上、広範囲にわたる面的な調査によって解明された平井地区の空間構造について検討を加えたが、これをまとめると以下のようなよう。

この地区には一乗谷川に沿って設けられた南北方向の道路を骨格とした計画的な町造りが認められる。その計画の基準となる町割りの軸線は所々で変化しており、地形の制約を受けたものと考えられる。また、規則的に配置された大小の道路や屋敷境の土塁等の間隔には100尺の倍数が認められ、道路や門の幅、そして小規模屋敷の間口等は尺の整数倍の数値で解釈されることから、町割りの基準寸法としては、尺もしくは丈といった単位が妥当と考えられる。そして地区内は、道路等によって大きく西、東、南の3ブロックに区分して考えることが可能である。西ブロックには、地区中ほどに設けられた南北方向の道路に面して配置された敷地間口を100尺を基本とした大規模な屋敷が見られる。これらは山裾の西を除いた3方を土塁で囲み、屋敷内には多くの建物が存在し、また、塀等で仕切られる場合も多い。そして基本的には主人の居座敷や接客の場となる表向空間(ハレ)とこれを支える台所や使用人の内向空間(ケ)に区分され、表向空間は屋敷の前方・南寄りに、内向空間は後方・北寄りに配置される。また、最も大きな規模を持つA1では、北西部で鍛冶炉を備えた作業空間も検出されている。東ブロックには、当初は基本的に100尺四方と山裾の大規模な屋敷に比べ規模が小さい屋敷が配置されおり、この屋敷は建物数も少なく、門も山裾の大規模屋敷が礎石4個を用いた薬医門形式と考えられるのに対し、掘立柱2本の棟門形式とする等格式の違いが認められるが、周囲に土塁を廻らしており、山裾の大規模屋敷に

準じた空間構成と推定される。そしてこのブロックの周囲に道路が存在することもあって、後半には道路に面して小規模な建物が連続する高密度な土地利用へと変化する傾向が顕著に認められる。南ブロックには、区画を分ける明確な遺構を欠く点もあるが、西半の山裾部からは庭等も検出されており、基本的にはハレとケに区分される大規模な屋敷が存在したものと考えられる。そして東半には、西半の屋敷を核として、東に存在したと考えられる南北方向道路と進入路として設けられた東西方向道路を利用した、高密度の土地利用が認められる。大胆に推測が許されるならば、こうした状況は、主人とその主従関係を持った人々の区画が展開したことを示すものと考えられることのできるのではなかろうか。

附 地区の復元考察と立体復元及び模型

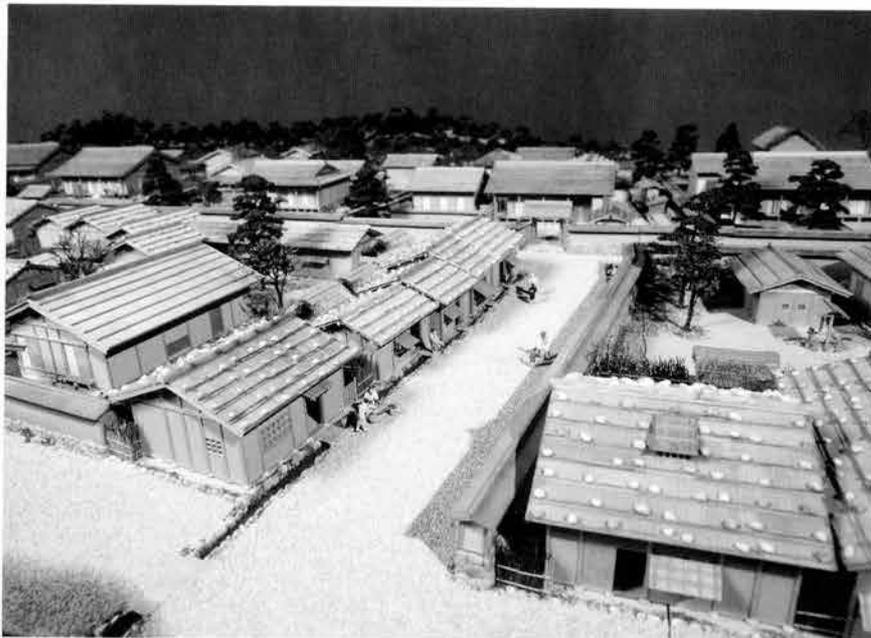
こうした考え方に基づいて実施したのが町並立体復元及び地区全体復元模型である。その基礎となる復元的考察について、概要を述べる。

道路及び屋敷配置 検出された遺構が明確に町割りを示しており、これが最優先となることはいうまでもない。削平された一乗谷川沿いの地域の復元の考え方について述べる。まず、この地区を貫いて川に沿って存在したと推定される南北方向の道路であるが、その幅は発掘調査では確認されていない。しかし、赤淵・奥間野地区において一乗谷川に沿って谷を貫く南北方向の道路が検出されており、これは基本的には25尺幅である。またこの平井地区の東西方向道路 S S 944・975も25尺である。他にもいくつか25尺幅の道路が検出されており、谷内の幹線道路は25尺幅と考えてよいものと思われる。このことから、想定した川沿いの道路幅も25尺とした。その位置、方向であるが、これは北部においては西端となる土塁 S A 384が存在する。町割りの軸線が徐々に変化していることは前述した通りであり、B 3とした区画で連続して検出された石積施設の方向は土塁 S A 384と異なり、西の南北方向道路 S S 260等とほぼ同じである。また土塁 S A 384の方向をそのまま次の東西方向道路 S S 975まで延長すると、B 3とした区画の東西幅は130尺程度となってB 1の100尺とは大きな差が生じる。そこで、B 2とB 3の境で S S 260の方向に変更することとした。これによって、連続して検出された石積施設の西に想定した境界線から道路までは45尺となる。東西方向道路 S S 975以南については手がかりとなるものが少ない。B 4、B 5としたブロックは、北辺をB 3の東端の延長線と合わせれば東西幅は100尺となるのでこれを採用した。地形等から川は徐々に西へ寄ると考えられることから、東西方向道路 S S 977の存在する南辺は10尺減少させれば、小規模屋敷に分割された後半期の背割り線を基準にして東半は50尺となることから、これを採用した。東西方向道路 S S 977以南については、A 6の屋敷の東前方で検出されている南北の土塁ラインがA 7屋敷の東前方部の遺構方位とほぼ合致するので、川や南北方向の道路もこれに準じることとした。この時、東西方向道路 S S 1180の所では、A 6屋敷から東の南北方向道路までがほぼ90尺となる。

次にこの想定した南北方向道路に沿う屋敷割りについて考える。B 1については良好に遺構がのこるため問題は生じない。B 2も東の土塁の検出は北端部に限られるが、小規模屋敷の連続を想定させる石積施設等の遺構は検出されていないことから、分割は無いものと考えられよう。B 3は連続する石積施設から、南北方向道路に面する東半は小規模屋敷に細分化されていたものと考え、石積施設等の配列に従って敷地間口を北から30、20、20、30尺に分割することとした。B 4は北の道路 S S 975に面した25尺分のみ小規模な建物が連続するものと考え、残る部分は当初からの道路に面しては土塁を設け、門を



挿図14 復元模型全景



挿図15 復元模型（部分）

構える屋敷と想定した。B5は西半は明確に細分化されており、石積施設等から、東半も同様と考えられ、溝等の遺構から3分割し、間口30尺と考える。東西方向道路SS977以南については石積施設等の配列から、南北方向道路に面しては基本的に小規模な屋敷が連続するものと考えられるが、その間口を明確に示す遺構は存在しないので、北部に準じて20ないし30尺と想定した。

建物とその構造 多くの建物遺構が検出されているが、その平面規模や構成を明確にうかがうことが可能なものは限られている。そこで以下に示す順序によって推定復元した。複数の建物によって構成される大規模屋敷においては、まず発掘調査によって確認された建物や井戸や庭園等からハレとケ等の全体の構成を想定する。次に断片的な建物等の遺構も含めてそれぞれの建物の機能を屋敷構成に従って仮定する。なおこの時、これまでの例から石敷や周囲に連続して石を並べる特殊な建物を蔵と定めた。従来の調査例や周囲の遺構との関係から、検出した礎石を中心に建物規模等を想定する。そしてこうした大

規模屋敷の建物の基本構成として、ハレ部の中心建物となる主殿、ケの代表建物台所、そして蔵等は欠くことのできない建物であって、これらについては屋敷の全体構成を考えながら配置することとした。小規模屋敷については、道路に面する建物と井戸そして石積施設がこれにあたる便所を基本要素として想定した。こうした小規模屋敷の建物には平入りと妻入りが存在したことは前述した通りである。この地区においては平入りは小規模な独立性の低い屋敷に存在しているが、赤淵・奥間野地区等においては幹線道路に面した敷地間口30尺の屋敷にほぼ間口一杯の規模を持つ平入りの建物が明確に認められることから、これに従った。

建物の外観を大きく印象付ける屋根は、従来の調査研究によって板葺が基本であると考えられている。そして、大規模な屋敷の中心建物と付属屋や庶民の住居と考えられる小規模屋敷の建物には当然格式等の差が想定される。また、視覚的にも明確に違いを示す必要もあることから、葺板の押さえ方に若干の変化を持たせることとした。そこで、上質と考えられる大規模屋敷の中心建物等は整形された角材を用い、付属屋や庶民の住居は要所を石で押さえる丸太や割り材とした。またA 6 屋敷の蔵は土壁を塗り込めた茅葺であることが確認されており、こうした屋根形式が存在することは確実である。模型としての変化をつけることもあって、こうした蔵や付属屋や便所等の一部にも茅葺を用いた。なお、建物の構造等の詳細については復元工事の報告書（『環境整備報告Ⅱ』1992、『環境整備報告Ⅲ』1996）を参照されたい。

参考文献

- 小野正敏「越前一乗谷の町割りと若干の問題」『日本海地域史研究第3輯』1981 文献出版
吉岡泰英「発掘遺構にみる柱間寸法」『日本建築学会北陸支部研究報告集20』1977

報 告 書 抄 録

ふりがな	とくべつしせきいちじょうだにあさくらしいせきはつかつちょうさほうこく
書名	特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡 発掘調査報告VI
副書名	第29・30次 第57・58次 第83次調査
シリーズ番号	6
編著者名	岩田隆 吉岡泰英 佐藤圭 水村伸行 宮永一美
編集機関	福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館
所在地	〒910-2152 福井市安波賀4-10 ☎0776-41-2301
発行年月日	平成9年3月31日

調査地区	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
第29・30次調査	福井市城戸ノ内町 字川合殿	18210	史-31	35°59′35″	136°17′48″	780511 ~1015	1,740㎡	環境整備 に伴う 事前調査
第57・58次調査	福井市城戸ノ内町 字川合殿	18210	史-31	35°59′33″	136°17′46″	870401 ~0928	3,870㎡	同上
第83次調査	福井市城戸ノ内町 字川合殿	18210	史-31	35°59′35″	136°17′47″	930823 ~1225	1,300㎡	同上

調査地区	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
第29・30次調査	武家屋敷 町屋	15・16 世紀	土堀基礎5、礎石建物 2、溝5、石積施設15、 井戸4、大甕埋設遺構 2など	越前焼、土師質皿、鉄釉 壺、灰釉皿、青磁碗皿、 白磁皿、染付碗皿、金属 製品、石製品	大甕29個体埋設遺構検 出、錠前、仏餉器など完 形の金属製品出土、越 前焼花入れなど
第57・58次調査	武家屋敷 町屋	15・16 世紀	道路1、土塁1、石列及 び石垣8、溝11、庭園 1、礎石建物7、井戸 10、石積施設13	越前焼甕、壺、播鉢、土 師質皿、羽釜、土鈴、小 壺、鉄釉、灰釉陶器、瓦 質、青磁・白磁・染付、 金属器、石製品	井戸SE3419から大量の 銅銭が出土、金属の蓋 が出土、褐釉の茶壺等 が出土、バンドコ各数 出土
第83次 調査	武家屋敷	15・16 世紀	土塁4、溝5、庭園1、 門2、建物7、井戸2、 石積施設6	越前焼甕、壺、播鉢、鉄 釉碗、壺、灰釉皿、鉢、 土師質皿、信楽焼、青磁・ 白磁・染付、釘、バンド コ、基石、砥石、壁土	石敷礎石建物(蔵)を検 出。越前焼大甕の計測。

平成9年3月20日 印刷
平成9年3月31日 発行

特別史跡

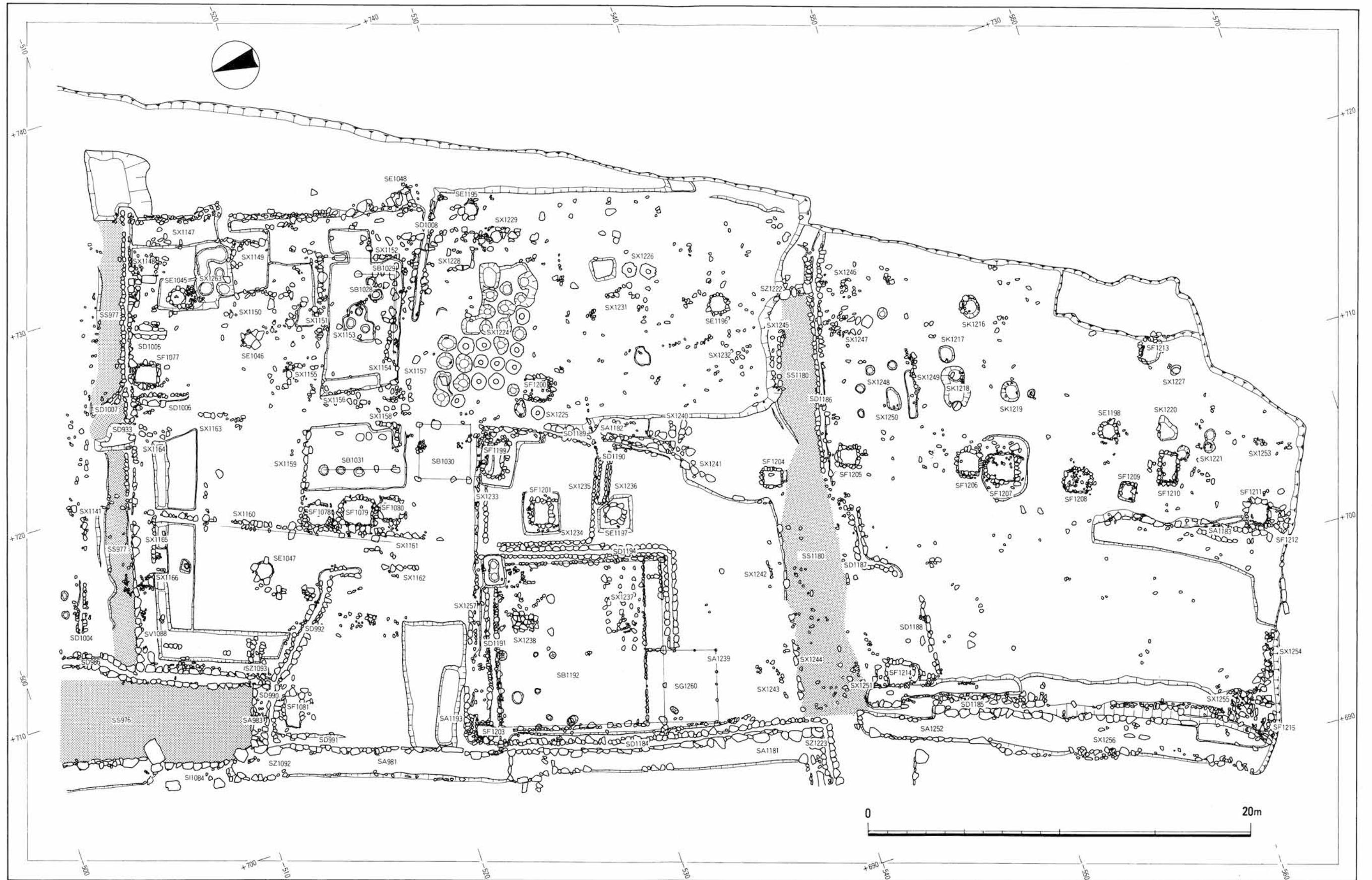
一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告VI

第29・30次 第57・58次 第83次調査

執筆・編集 福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館
発行 福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館
福井市安波賀町4-10
印刷 河和田屋印刷株式会社



付図2 第29・30次調査全測図



付図3 第57・58次調査全測図



付図4 第83次調査全測図

